

堀内明博（財古代学協会、考古学）	
モリス・マーティン（千葉大学工学部講師、日本住宅史）	
吉田光男（東京大学大学院人文社会系研究科教授、朝鮮史）	
●研究発表	
1997年 5月 9日	入間田宣夫「武家儀礼（宴会）の席次にみる権力編成原理」
1997年 5月 10日	佐々木利和「19世紀のアイヌの酒宴」 志田原重人「中世の年中行事と宴」
1997年 9月 25日	長岡京発掘現場にて見学
1997年 9月 26日	飯村均「東国の宴会の実像」 川本重雄「『年中行事絵巻』・『類聚雑要抄』に見る正月大饗」 小泉和子「『類聚雑要抄』にみる平安時代貴族の宴会における飲食器と供膳具」 玉井哲雄「宴会における民家のつかわれ方」

048 画像資料が物語る身体の文化史

●研究域
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）
●共同研究期間
1997（平成9）年4月～2000（平成12）年3月
●研究の概要
日文研が所蔵する生活風俗に関する高精細画像資料が、身体（病の身体、性の身体）の本質を見事に再現してくれる。こうした画像には、実に豊富で、かつ複雑に集約された文化情報を提供してくれる。
本研究は、こうした画像資料の集成的、多角的分析を通して、新しい、より立体的な身体の文化史を築き上げようとする試みであった。
ここで要求される多角的分析は、とうてい1人の研究者が単独でなしうるものではない。たとえば、ある図の背景には幕末に起きた麻疹の流行という医学史の事実があるが、これらの絵に潜む意味を完全に解明するためには、疫鬼信仰の変遷、食生活の歴史、日本美術史における擬人化の意義、それに病の社会学と経済学などの多様なテーマを検討しなければならない。画像資料とは、そうした意味で、まさに学際的、総合的な研究方法を求めているのであった。
●研究代表者
栗山茂久（日文研助教授、比較医学史）
●幹事
早川聞多（日文研助教授、美術史）
●班員
浅野秀剛（千葉市美術館学芸課学芸係長、美術史）
石田秀実（九州国際大学経済学部教授、哲学）
ミヒェル・ヴォルフガング（九州大学言語文化部教授、医学史）
川部裕幸（成城大学民俗学研究所研究員、民俗学）
酒井シヅ（順天堂大学医学部教授、医学史）
桜井謙介（元塩野義製薬㈱油日ラボラトリーブ主任研究員、本草学）
白杉悦雄（東北芸術工科大学教養部助教授、東洋思想史）
シワニ・ナンディ（元日文研中核の研究機関研究員、技術論）
タイモン・スクリーチ（ロンドン大学助教授／学習院大学訪問研究員、美術史・文化史）
鈴木晃仁（慶應義塾大学経済学部助教授、医学史）
鄭金生（中国中医研究院中国医史文献研究所研究員／茨城大学人文学部外国人研究者、医学史）
中村るい（トキワ松学園横浜美術短期大学非常勤講師、美術史）

畠山豊（町田市立博物館主査・学芸員、日本民俗学）	
昼田源四郎（福島大学教育学部教授、精神医療史・精神病理学）	
パトリシア・フィスター（白鳳女子短期大学国際人間学科助教授、美術史）	
福田真人（名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授、医学史）	
カール・ベッカー（京都大学総合人間学部教授、比較思想史）	
真柳誠（茨城大学人文学部教授、医学史）	
山田慶兒（日文研名誉教授、科学史）	
山田洋子（京都大学大学院教育学研究科教授、発達・言語・文化心理学）	
横田則子（甲南女子大学文学部非常勤講師、日本近世史）	
吉田忠（東北大学東北アジア研究センター教授、科学史）	
梁永宣（北京中医薬大学医史文献教研室講師／茨城大学人文学部外国人研究者、日中の比較・医学史）	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
稲賀繁美（日文研助教授、比較文学・比較文化）	
ジョン・ウォレス（日文研客員助教授／ウィスコンシン大学助教授、日本文学）	
落合恵美子（日文研助教授、家族社会学・歴史人口学）	
姜信杓（日文研客員教授／仁済大学校人文社会学研究所教授、人類学）	
黒須里美（日文研助手、比較家族人口学）	
ヒュー・シャピーロ（日文研客員助教授／ネヴァダ州立大学助教授、東洋史）	
スミエ・ジョーンズ（日文研客員教授／インディアナ大学教授、文学）	
ジョン・タダオ・テラモト（日文研客員助教授／カンザス大学助教授、日本美術史・日本画）	
原正一郎（日文研客員助教授／国文学研究資料館研究情報部助教授、情報工学）	
梁峰（日文研客員教授／北京中医薬大学基礎医学院中医診断教研室教授、漢方医学史）	
●研究発表	
1997年 5月 16日	栗山茂久「共同研究の趣旨について」 畠山豊「疱瘡絵と麻疹絵のことなど」
1997年 5月 17日	浅野秀剛「近世浮世絵春画の流れ」 早川聞多「初期浮世絵春画の特質」
1997年 7月 11日	中村るい「理想的身体比率の追求：ギリシャのカノンと現代の身体美」 落合恵美子「『品のいい主婦』と『官能的な白人女性』—戦後日本雑誌における女性の表象—」 酒井シヅ「麻疹絵にかんするいくつかの問題」
1997年 7月 12日	白杉悦雄「『飲食養生鑑』『房事養生鑑』にかんするいくつかの問題」 早川聞多「初期浮世絵春画・その2A」 浅野秀剛「初期浮世絵春画・その2B」
1997年 11月 21日	全員討論「幕末の麻疹絵に見える諸問題」
1997年 11月 22日	浅野秀剛「初期浮世絵春画・その2A」 早川聞多「初期浮世絵春画・その2B」
1998年 1月 16日	中谷一「顔貌・筆法：17～18世紀中国肖像画における顔部描写の変貌にかんする一考察」 鈴木則子「麻疹絵と麻疹の医学」 川部裕幸「疱瘡絵にかんするいくつかの問題」
1998年 1月 17日	浅野秀剛「初期浮世絵春画・その3A」 早川聞多「初期浮世絵春画・その3B」
1998年 3月 14日	ティモシー・クラーク「歌麿展における春画の反響」 ウィリアム・ジョンストン「江戸の梅毒」
1998年 3月 15日	ジョシュア・モストウ「国貞の春画における男色といき」 延広真治「落語の中の性」 芳賀徹「徳川文化における性の魅力」
1998年 5月 15日	栗山茂久「身体観と身体感（その1）：筋肉質の肉体に現れる魂」 シワニ・ナンディ「インターネットで探る身体の文化史・歴史的画像資料を中心に」 ヒュー・シャピーロ「中国における神経衰弱の前史：画

像資料が提起する問題」	
1998年 5月 16日	早川聞多「溪斎英泉『枕文庫』・その1」
1998年 7月 17日	小松和彦「鯰絵について・その1」 白杉悦雄「『飲食養生鑑』『房事養生鑑』・その2」
1998年 7月 18日	早川聞多、浅野秀剛「溪斎英泉『枕文庫』・その2」
1998年 9月 25日	真柳誠「日中の医薬画像資料（中世以前）」
1998年 9月 26日	早川聞多「仏像における身体表現」 早川聞多「溪斎英泉『枕文庫』・その3」
1998年 11月 20日	鈴木則子「江戸後期の入浴と美女」 山田奨治／コメント：原正一郎「コンピューターを通して見る浮世絵の顔」
1998年 11月 21日	早川聞多「溪斎英泉『枕文庫』・その3」 宗田文庫資料の検討
1999年 1月 22日	高島文一「人体内景図（特に脂膏・脂膜・脂膜）について」 館野之男「X線写真読影レポート—言語で記述する欧米とスケッチ重視の日本—」
1999年 1月 23日	吉田忠「胎児の図像」 福田真人「美しく透明になる身体」
1999年 3月 19日	ヴァンサン・バラス「ガレノスが見た理想的身体」 頼富本宏「仏教タントラの身体観—とくにチャクラとナーディーについて—」
1999年 3月 20日	ウィリアム・ラフレール「日本中世時代のパラダイムにおける科学と医学と宗教—六道思想に関する絵巻のデータから学ぶ—」 栗山茂久「身体観と身体感・そのⅡ：解剖図と春画の関連について」
1999年 5月 21日	内藤くすり博物館見学
1999年 5月 22日	昼田源四郎「反逆する身体—江戸時代の神経症—」 北川央「江戸時代の引札」
1999年 7月 30日	山田洋子「日仏大学生のイメージ画にみる『たましい』の形と死生観」 石田秀実「『修真九転丹道図』について—日本に渡来した内丹書—」
1999年 7月 31日	戸矢理衣奈「ヴィクトリア朝の女性の肌、下着意識の変容」 尾鍋智子「西洋透視画法に対する江戸後期日本の二つの反応—絵師北斎と蘭学者遠藤の場合—」
1999年 9月 17日	ジョン・タダオ・テラモト「『病草紙』をどう解釈すべきか」 梁峰「舌を診る歴史について」
1999年 9月 18日	稲賀繁美「岩明均『寄生獣』における身体の画像表現」 早川聞多「江戸時代における性愛観—鈴木春信を中心に—」
1999年 11月 19日	鄭金生「中国歴代の本草図とそのイラストレーターの関係」 総括討論：画像資料が何を物語るか
1999年 11月 20日	パトリシア・フィスター「近代美術における身片」
2000年 1月 18日	第15回国際研究集会 ～21日「『身体観』と身体感の歴史」

049 日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
1997（平成9）年10月～2001（平成13）年3月
●研究の概要
怪異・怪談、あるいは怨霊・妖怪変化をめぐる文化は、日本の文化史の形成と展開に重要な役割を果たしてきたことが認められながらも、その否定的な意味あいが強かったために、関連学問諸分野において、これまで周辺的な位置づけしかなされず、学問的に真正面から取り組まれることがなかった。
本研究は、こうした従来の消極的な「慣行」から脱却し、あくまでも文化史的観点に立ちつつ、諸外国における研究成果も取り入れつつ、各時代について、歴史・信仰・文学・美術・芸能・地理（空間論）・建築物・ジェンダーなど、多面的・学際的に分析することを通じて、その総合的・立体的な把握をめざした。また、豊富な資料の存在の確認や、それらの研究利用法の開拓も試みた。
●研究代表者
小松和彦（日文研教授、文化人類学）
●幹事
長田俊樹（日文研助手、言語学）
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）
●班員
青木淳（高知女子大学文化学部助教授、仏教美術史・宗教文化史）
阿部泰郎（名古屋大学大学院文学研究科、宗教学）
板橋作美（東京医科歯科大学教養部教授、文化人類学）
アダム・カバット（武蔵大学人文学部教授、近世文学）
京極夏彦（作家、近世・近代文化論）
スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学教授／立教大学客員研究員、近世文学）
諏訪春雄（学習院大学文学部教授、近世文学）
高田衛（東京都立大学名誉教授、近世文学）
高橋明彦（金沢美術工芸大学美術工芸学部助教授、近世文学）
武田雅哉（北海道大学大学院文学研究科助教授、中国文学）
武光誠（明治学院大学一般教育部助教授、古代史）
田中貴子（京都精華大学人文学部助教授、古代文学）
辻惟雄（多摩美術大学長、美術史）
常光徹（国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授、口承文芸論）
徳田和夫（学習院女子大学国際文化交流学部教授、中世文学）
西山克（京都教育大学教育学部教授、中世史）
橋爪紳也（大阪市立大学文学部助教授、建築史）
服部幸雄（日本女子大学人間社会学部教授、芸能史）
兵藤裕己（成城大学文芸学部教授、中世文学）
宮田登（神奈川大学経済学部教授、民俗学）
安井真奈美（天理大学文学部講師、民俗学）
山口昌男（札幌大学長、文化人類学）
横山泰子（法政大学工学部助教授、演劇史）
赤坂憲雄（日文研客員教授／東北芸術工科大学教養部教授、日本思想史）
井波律子（日文研教授、中国文学）
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）
内田忠賢（日文研客員助教授／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授、人文地理学）

上垣外憲一（日文研教授、比較文化）	
金貞禮（日文研客員助教授／国立全南大学校人文科学大学副教授、日本近世俳文芸）	
關一敏（日文研客員助教授／九州大学大学院人間環境学研究所助教、宗教学）	
メアリ・ジョーンズ・ピコネ（日文研客員助教授／フランス社会科学高等研究院助教授、文化人類学）	
光田和伸（日文研助教授、日本文学）	
安田喜憲（日文研教授、環境考古学）	
●成果物	
小松和彦編『日本妖怪学大全』（小学館、2003年4月）	
●研究発表	
1997年 11月 14日	内田忠賢「怪異空間の諸相と研究視角」
1998年 3月 13日	常光徹「異界（妖怪の本性）をのぞく呪術的なしぐさ」 今枝久美子「お化け屋敷に見る恐怖の娯楽化」
1998年 5月 29日	スミエ・ジョーンズ「江戸の怪異と性のファンタジー」 田中貴子「百鬼夜行絵巻について―新出『百鬼夜行図』を中心に―」
1998年 7月 3日	姜竣「街頭紙芝居における怪談の流布と変容過程に関する民俗学的研究―昭和20～30年代の東京、大阪の事例を中心に―」 山田奨治「鳴弦と藝目について」 西山克「室町殿と怪異―室町日記の世界から―」
1998年 10月 2日	横山泰子「歌舞伎におけるしっぺい太郎」 光田和伸「俳諧と妖怪」
1998年 10月 30日	アダム・カバット「化物と見世物―江戸の黄表紙から―」 宮田登「江戸の妖怪フォークロア」
1998年 12月 4日	徳田和夫「もの言う動物の怪異―中世の聞きなし説話、風聞巷説から―」 板橋作美「俗信における怪異について―真ん中で不思議が起きる―」
1999年 2月 27日	小松和彦「いざなぎ流の祭儀―高知県立歴史民俗資料館制作のビデオ上映と解説―」 武光誠「日本古代の怪談」 香川雅信「遊びの中の百鬼夜行―近世の娯楽文化と妖怪―」
1999年 5月 14日	井波律子「中国の器物の妖怪をめぐって」 武田雅哉「近代中国における怪物図像としての画報」
1999年 6月 25日	關一敏「妖教・邪教・外教―日本近代キリスト教受容史の一断面―」 鈴木貞美「ビルが化ける―1920年代～30年代怪奇小説の変種―」
1999年 10月 29日	石井明「落語に描かれた幽霊」 高橋明彦「古賀侗庵と漢文奇談集『今齊諧』をめぐって―昌平黉の怪談仲間―」
1999年 12月 11日	大高洋司「巷説的怪異小説叢画について」 高田衛「稲生物怪録について」
2000年 3月 4日	徳田和夫「狐と狸の化けくらべ―お伽草子『変化あらそひ』絵巻をめぐって―」 安村敏信「百鬼夜行図模本の謎」
2000年 3月 30日	諏訪春雄「変化物語論」 堤邦彦「江戸時代人のオソレ感覚―怪談の位相―」
2000年 7月 22日	岩城紀子「『化物双六』をめぐる一考察」 共同研究の報告についての打ち合わせ
2000年 7月 23日	橋爪紳也「『地獄の観光論』に向けてのメモ」
2000年 10月 6日	兵藤裕己「語られる怪異 ―ラフカディオ・ハーンの『耳なし芳一』をめぐって―」 国立歴史民俗博物館が所蔵する妖怪関係資料の調査・見学

一柳廣孝「1920年代、〈心靈〉は増殖する」	
2000年 11月 27日	今枝久美子「近代特殊風俗雑誌からみる怪異への関心の一状況」 メアリ・ジョーンズ・ピコネ「メディア時代の視覚文化における妖怪変化」 マイケル・フォスター「恐怖とリアリティーの関係をめぐって：ナマハゲとトシドンを事例として」
2000年 12月 15日	京極夏彦「通俗的『妖怪』概念の展開」
2001年 1月 20日	湯本豪一「化物尽くし絵巻について」 辻惟雄「菱川師宣およびその一派による『変化巻物』について」
2001年 2月 27日	土居浩「怪異の分節―『京羽二重織留』の「妖怪」をめぐって―」 内藤正敏「三遊亭円朝の怪談に隠された江戸の都市構造」 服部幸雄「幽霊を演ずる役者の技芸と身体」
2001年 3月 16日	高原豊明「怪暦論―誰も知らない清明伝説を端緒として―」 安井眞奈美「出産をめぐる怪異現象」 多田克己「烏山石燕が創作した妖怪―狂歌絵本としての『画図百鬼夜行』シリーズ―」
2001年 3月 17日	山口昌男「アフォーダンスと恐怖心」 阿部泰郎「『天狗草紙』を読みなおす―13世紀末世界の分裂と対立―」 小松和彦「さらなる怪異（怪談・妖怪）研究に向けて―共同研究のとりあえずの終了にあたって―」

050 通婚圏、配偶者選択および性淘汰によるヒトの進化	
●研究域	
第4研究域 文化関係（新交圏）	
●共同研究期間	
1997（平成9）年10月～2001（平成13）年3月	
●研究の概要	
ヒトの集団の大きさや分布、その行動様式が食糧資源の種類や分布のみで決定され、進化してきたとは考えられない。初期人類の時代にあっても、食糧の探索のみに夢中になっている集団がいたとは考えられない。	
ヒトはその生存戦略において、日々の食糧獲得を主に行う生業集団の維持とともに、それぞれの生業集団は子孫を絶やさないために自らを一定の通婚圏に組み込んできた。それを確実にするために彼らが編み出したシステムもまた、重要であった。そして、この過程で、さまざまな配偶者選択の基準が遺伝的、および文化的にプログラムされ、さらに一部の身体形質は性淘汰によって進化することになった。	
先史人類学の世界で、具体的にほぼほとんど認知されていない上述のさまざまな概念、およびプロセスを、人類学、考古学、民族学、社会学、言語学の諸分野の視点から総合的に研究した。	
●研究代表者	
赤澤威（日文研教授、先史人類学）	
●幹事	
北川浩之（日文研助手、地球化学）	
栗山茂久（日文研助教授、医学史）	
宇野隆夫（日文研教授、日本考古学）	
●班員	
井原泰雄（東京大学大学院理学系研究科博士課程、集団生物学）	

今村薫（名古屋学院大学経済学部助教授、生態人類学）	
榎本知郎（東海大学医学部助教授、霊長類学）	
大林太良（東京大学名誉教授、民族学）	
小田亮（名古屋工業大学工学部講師、集団生物学）	
片山一道（京都大学霊長類研究所教授、自然人類学）	
小林正史（北陸学院短期大学教授、民族考古学）	
杉藤重信（椋山女学園大学人間関係学部教授、文化人類学）	
須藤健一（神戸大学国際文化学部教授、文化人類学）	
棚橋調（慶應義塾大学文学部助教授、文化人類学）	
徳永勝士（東京大学大学院医学系研究科教授、人類遺伝学）	
長谷川真理子（早稲田大学政治経済学部教授、動物行動学）	
東元春夫（京都女子大学現代社会学部教授、社会学）	
松下孝幸（土井ッ浜遺跡人類学ミュージアム館長、骨格人類学）	
吉川左紀子（京都大学大学院教育学研究科助教授、人類学）	
米田穰（環境庁国立環境研究所研究員、先史人類学）	
青木健一（日文研客員教授／東京大学大学院理学系研究科教授、集団生物学）	
デヴィッド・チャールズ・ウェインフォース（日文研客員助教授／ニューメキシコ大学人類学部助教授、生態学）	
太田博樹（日文研中核の研究機関研究員、分子人類学）	
野口淳（日文研中核の研究機関研究員、先史考古学）	
早川閑多（日文研助教授、美術史）	
橋本裕子（総合研究大学院大学博士後期課程、人類学）	
●研究発表	
1998年 1月 23日	井原泰雄「一夫一妻集団における女性の身体形質と男性の選好性の共進化」 東海林薫「乳房は性淘汰によって進化したのか」 松下孝幸「縄文人の顔、弥生人の顔」
1998年 1月 24日	榎本知郎「霊長類の性行動」 落合恵美子「徳川時代の婚姻」 青木健一「近親相姦の回避と忌避」 杉藤重信「オーストラリア・アボリジニの婚姻規制と地域社会」
1998年 3月 4日	徳永勝士「HLA遺伝子について」 井原泰雄「HLA遺伝子と配偶者選択について」 赤澤威「アイトープ食性解析と通婚圏について」
1998年 3月 5日	総合討論
1998年 6月 12日	石井紫郎「法の起源について」 井原泰雄「HLA遺伝子と配偶者選択について」
1998年 6月 13日	米田穰「骨の化学成分から見た人の移動について」 太田博樹「骨のDNAから見た人の移動について」
1998年 10月 23日	長谷川真理子「対称性のゆらぎと性淘汰：批判的レビュー」 尾本恵市「ヒトの行動上の性差の起源」
1998年 10月 24日	今村薫「セントラル・カラハリ・ブッシュマンの婚姻と婚外性関係」 柄本田康之「ミクロネシア連邦ヤップ州離島の階層的島嶼関係と通婚圏」 橋本裕子「抜歯から縄文社会の婚姻システムを考える」 須藤健一「総合コメント」
1999年 1月 22日	棚橋調「島嶼世界の通婚圏―中部・西部ポリネシアの事例検討―」 青木健一「皮膚色の進化に関するダーウィンの仮説を見直す」
1999年 1月 23日	須藤健一「サンゴ礁島の通婚圏と資源利用―ミクロネシアを中心に―」
1999年 2月 26日	片山一道「日本人の通婚圏：明治・大正時代を中心として」

榎本知郎「類人猿の配偶システムについて」	
1999年 2月 27日	赤澤威「旧石器時代人の生殖ネットワーク、どのように調べるか」 総合討論：1. 国際シンポジウム、目的・プログラム等の検討/2. 平成11年度プログラムの策定
1999年 5月 21日	赤澤威「旧石器時代の埋葬事例から考える」 井原泰雄「身体形質に基づく配偶者選択」
1999年 7月 2日	赤澤威「ネアンデルタール人と現代型サビエンスの共存について」
1999年 7月 3日	野口淳「旧石器時代におけるMating networkとSocial alliance」 小林正史「フリビン・カリングの民族考古学調査」 総合討論：国際シンポジウムのプログラムについて
1999年 10月 29日	吉川左紀子「平均顔を用いたfacial attractivenessに関する研究」 小田亮「配偶者の好みにみられる性差：結婚相手募集広告の分析」
1999年 10月 30日	青木健一「量的形質への性的刷込：配偶者選択による皮膚色進化のシナリオ」 総合討論：国際シンポジウムのプログラムについて
1999年 12月 10日	2000年国際シンポジウム・プログラム案の検討
1999年 12月 11日	矢原徹一「植物の交配システム研究における最近の進歩と、それがヒトの進化学的研究に意味するもの」 安田徳一「配偶者間距離について」
2000年 5月 12日	井上章一「容姿と婚姻」 国際シンポジウムの具体案策定
2000年 7月 8日	大林太良「配偶者選択、通婚圏と文化、社会の進化」 デヴィッド・チャールズ・ウェインフォース“Alternative male mating tactics in humans”
2000年 10月 6日	長谷川真理子「氏の最新の研究内容について」

051 危機管理と予防外交	
●研究域	
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅱ）	
●共同研究期間	
1997（平成9）年10月～2001（平成13）年3月	
●研究の概要	
阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、ペルー日本大使館公邸人質事件などによって、近年、日本人の間でも、「危機管理」についての関心が高まりつつある。併せて、危機はいったん発生してしまってからでは十分な対応をなしえないとの認識から、事前の「危機防止」が要請されるようになった。しかし、「危機管理」や「危機防止」（あるいは「予防外交」）という同一の用語を用いながら、日本人と非日本人との間には、その基本的な対処法に関して、若干の差異が存在するように思われる。	
本研究は、国民性、文化的背景などの差異に由来する用語、概念、態度に留意しつつ、これまでは主として欧米諸国で発展してきた「危機管理」や「危機外交」の理論から学びとりうる点を明らかにすると同時に、わが国の捉え方や実践のなかにも、世界各国にとって有益かつ参考となるものが存在するか否かを検討した。	
●研究代表者	
木村汎（日文研教授、政治学）	
●幹事	
園田英弘（日文研教授、社会史）	

●班員	
石田淳（東京都立大学法学部助教授、国際政治）	
大芝亮（一橋大学大学院法学研究科教授、国際経済）	
太田宏（青山学院大学国際政治経済学部教授、国際関係論）	
岡本浩一（東洋英和女学院大学人間科学部教授、社会心理学・リスク心理学）	
河野康子（法政大学法学部教授、政治学）	
久米郁男（神戸大学法学部教授、行政学）	
酒井哲哉（東京大学大学院総合文化研究科教授、外交史）	
坂元一哉（大阪大学大学院法学研究科教授、安全保障）	
柴宜弘（東京大学大学院総合文化研究科教授、国際関係）	
田所昌幸（防衛大学校社会科学教室教授、国際経済）	
土山實男（青山学院大学国際政治経済学部教授、国際関係論）	
堂之脇光朗（外務省参与／東海銀行顧問、軍縮管理）	
戸部良一（防衛大学校社会科学教室教授、外交史）	
中西寛（京都大学大学院法学研究科助教授、国際関係論）	
納家政嗣（一橋大学大学院法学研究科教授、安全保障）	
原彬久（東京国際大学国際関係学部教授、政治学）	
福島安紀子（総合研究開発機構国際研究交流部主任研究員、予防外交）	
星野俊也（大阪大学大学院国際公共政策研究科助教授、国際関係論）	
増田弘（東洋英和女学院大学社会科学部教授、近代日本外交史）	
山本吉宣（東京大学大学院総合文化研究科教授、政治学）	
横田洋三（東京大学大学院法学政治学研究科教授、国際法）	
吉野準（財日本道路交通情報センター理事長、危機管理）	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
尾本恵市（日文研教授、自然人類学・人類遺伝学）	
笠谷和比古（日文研教授、歴史学・古文書学）	
柏岡富英（日文研助教授、社会学）	
御厨貴（日文研客員教授／政策研究大学院大学政策研究科教授、政治史）	
村松岐夫（日文研教授／京都大学大学院法学研究科教授、行政学・日本政治）	
山室信一（日文研客員教授／京都市大学人文科学研究所教授、近代法制思想史）	
●成果物	
木村汎編『国際危機学—危機管理と予防外交—』（世界思想社、2002年6月）	
●研究発表	
1998年 1月15日	土山實男「国際政治学における危機管理」 山本吉宣「予防外交と予防レジューム」
1998年 3月 6日	小比木政夫「朝鮮半島をめぐる危機管理」
1998年 3月 7日	御厨貴「後藤田正晴の危機認識」 田所昌幸「国際金融危機の政治経済学」 納家政嗣「予防外交論の2つの系譜」
1998年 4月 3日	大芝亮「開発援助と予防外交」
1998年 4月 4日	酒井哲哉「1930年代日本外交における危機認識」 増田弘「朝鮮戦争と軍人の追放解除」
1998年 5月 8日	太田宏「環境問題と危機管理」
1998年 5月 9日	久米郁男「震災と行政組織管理」 坂元一哉「安保改定とアメリカ—危機への対応—」
1998年 6月12日	戸部良一「危機管理としての盧溝橋事件」
1998年 6月13日	横田洋三「国連と予防外交」 河野康子「沖繩問題と危機管理—1950年代の日米関係を中心として—」
1998年 7月 3日	木村汎「ソ連の崩壊—共産主義システムの改革は不可能だったのか—」
1998年 7月 4日	青木盛久「日本外交と危機管理」 星野俊也「米国外交と危機管理」
1999年 6月 5日	石田淳「冷戦期の国政政治理論と冷戦後の国際政治—国際政治学におけるアイデンティティーの問題—」

シーラ・スミス「沖繩危機と日米関係」	
1999年 6月 6日	中西寛「石油危機と日本外交」 原彬久「日本社会党の安保・外交政策」 堂之脇光朗「日本国際フォーラム『予防外交グループ』の研究成果」
1999年 9月 4日	木村汎「冷戦以後、最悪の米ロ関係—とくにコンボ危機管理の失敗をめぐって—」 田所昌幸「ニクソン・ショック（1971年）」
1999年 9月 5日	吉野準「情報について」 御厨貴「阪神・淡路復興委員会同時進行オールプロジェクト1995—」 福島安紀子「NIRA（総合研究開発機構）における予防外交プロジェクト」
1999年12月 3日	納家政嗣「大量破壊兵器不拡散体制の強化と問題点」 土山實男「危機管理からみた新日米防衛協力のガイドライン」
1999年12月 4日	紫宜弘「危機管理の失敗?—コンボ紛争のcase study—」 星野俊也「内戦に対する国連の危機管理—コンボと東ティモールの比較—」
2000年 3月24日	大芝亮「世界銀行と地域紛争」
2000年 3月25日	横田洋三「『NATO軍』によるユーゴ空爆の国際法的評価—予防外交との関連で—」 岡本浩一「JCOの事故の原因と背景から科学技術問題を考える」 伊豆見元「朝鮮半島における危機管理と予防」
2000年 6月 2日	戸部良一「1927年の南京事件と漢口事件」
2000年 6月 3日	増田弘「日米安保危機と日米二国間組織」 ダニエル・オキモト「日米同盟の展望—2000～2004年—」 太田宏「包括的安全保障と環境問題」
2000年 9月 1日	原彬久「『非武装中立』の理論—日本社会党の場合一」
2000年 9月 2日	山本吉宣「信頼醸成と予防外交—理論的分析とアジア太平洋の現実—」 吉野準「大震災対策の考え方—発想の転換を求めて—」 中西寛「朝鮮戦争と危機管理」
2000年12月 1日	坂元一哉「安保密約について」
2000年12月 2日	石田淳「国内紛争への国際介入」 岡本浩一「リスク認知—困難な理由—」 福島安紀子「変容する欧州の安全保障とアジアへのインプリケーション—OSCE（欧州安保協力機構）を中心—to—」
2001年 3月25日	土山實男、山本吉宣、石田淳、納家政嗣、戸部良一、田所昌幸「出版についての報告」
2001年 3月26日	増田弘、岡本浩一、中西寛、福島安紀子、横田洋三「出版についての報告」

052 高精度分解能の気候変動と文明の盛衰

●研究域
第2研究域 構造研究（自然）
●共同研究期間
1998（平成10）年4月～2000（平成12）年3月

●研究の概要
近年、過去の気候を復元する手法がめざましく発展し、過去の気候を数年単位で復元できるようになった。本研究は、こうした近年の古気候復元の精度向上を背景にして、気候変動と人類の歴史との対応関係について再考察を試みたものである。 こうしたアプローチは、地球温暖化に直面している現代人が、未来を予測するうえでも必要不可欠の事柄である。 気候が変動したとき、人類の歴史に何が起こったか——このことを、学際的・総合的に追究しようとした。
●研究代表者
安田喜憲（日文研教授、環境考古学）
●幹事
北川浩之（日文研助手、地球化学）
笠谷和比古（日文研教授、古文書学）
●班員
荒川紘（静岡大学人文学部教授）
伊藤清司（慶應義塾大学名誉教授）
岡村眞（高知大学理学部教授、環境地質学）
奥田昌明（千葉県立中央博物館環境科学研究科研究員、第四紀地質学）
笠井恵二（京都産業大学一般教育研究センター教授）
鹿島薫（九州大学大学院理学系研究科助教授、自然地理学）
金田久璋（福井県文化財保護審議委員／美浜町誌編さん委員長、民俗学）
君島久子（国立民族学博物館名誉教授、中国文学・民族学）
多田隆治（東京大学大学院理学系研究科助教授、環境地質学）
田中英道（東北大学文学部教授）
寺澤薫（奈良県立橿原考古学研究所調査第一課長、考古学）
豊田和弘（北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授、地球化学）
成瀬敏郎（兵庫教育大学学校教育学部教授、自然地理学）
萩原秀三郎（写真家／著述業、民俗学）
福澤仁之（東京都立大学大学院理学研究科教授、自然地理学）
百田弥栄子（早稲田大学非常勤講師、神話伝承学（中国））
森勇一（愛知県立明和高等学校教諭）
守田益宗（岡山理科大学自然科学研究所講師、古生態学）
李国棟（広島大学文学部外国人教諭）
デハルマ・パル・アグラワル（日文研客員教授／インド国立科学アカデミープロジェクト研究員、環境考古学）
石弘之（日文研客員教授／東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、国際環境学）
霍巍（日文研客員教授／四川大学歴史学部教授、考古学）
スニル・グプタ（日文研外来研究員／日本学術振興会外国人特別研究員、考古学）
黄曉芬（日文研外来研究員／日本学術振興会外国人特別研究員、考古学）
巖文明（日文研客員教授／北京大学考古学系教授、考古学）
竹村恵二（日文研客員助教授／京都大学大学院理学研究科助教授、第四紀学）
中川毅（日文研外来研究員／日本学術振興会特別研究員、古環境学）
藤木利之（日文研中核的研究機関研究員、古生態学）
●成果物
安田喜憲編『龍の文明史』（八坂書房、2006年2月）
●研究発表
1998年 7月28日 安田喜憲「趣旨説明」 北川浩之「気候の不安定度と文明の盛衰」 岡村眞、福澤仁之「平成10年度中国およびその周辺地域の調査についての総合討論」
1998年 7月29日 豊田和弘、福澤仁之、中川毅、北川浩之「水月湖年縞堆積物からの高分解能気候変動復元（総合討論）」 デハルマ・パル・アグラワル「ガンジス文明の発見」 多田隆治「日本海海底コアから復元された高精度気候変動」

1998年 7月30日	総合討論
1998年 9月 2日	霍巍「長江文明と日本文化」 森川昌「長江文明と日本文化」 高橋学「1998年度湖南省洪水の実態と気候変動」 中川毅「高精度分解能の気候変動を復元するための新しい花粉分析法」 藤木利之「韓国における高精度分解能の気候変動と植生変遷」 百原新「四川省のメタセコイアの絶滅と気候変動」
1998年 9月 3日	総合討論
1999年 3月 7日	福岡浩司「遼寧省・内モンゴル地域の堆積物の古地磁気分析結果」 篠塚良嗣「遼寧省・内モンゴル地域の堆積物の地球化学分析結果」
1999年 3月 8日	佐藤洋一郎「龍南遺跡のDNA分析」 総合討論「総括および来年度の研究計画について」
1999年11月 5日	安田喜憲「龍は森の中で生まれた？」
1999年11月 6日	荒川紘「龍の起源と自然環境」 金田久璋「龍蛇と宇宙樹の神話」
1999年12月 4日	田中英道「レオナルド・ダ・ヴィンチの龍と中国」 笠井恵二「キリスト教と龍と気候の関係」
1999年12月 5日	伊藤清司「操蛇擾龍の事」 萩原秀三郎「シャーマニズムからみた龍蛇と鳥と柱」
2000年 1月30日	豊田和弘「安定同位体分析からみた長江文明の環境」 成瀬敏郎「風成塵分析からみた長江流域の環境変遷」 福澤仁之「機器分析からみた長江中流域の気候変動」
2000年 2月12日	ジャン＝ノエル・アレキサンドル・ロベール「龍の語源と形について」 百田弥栄子「龍の研究」
2000年 2月13日	李国棟「龍と鯉・馬・羊・犬との関係」

053 日本における情報化とジャーナリズム機能の変容—日米国際比較を軸として—

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
1998（平成10）年4月～1999（平成11）年3月
●研究の概要
グローバルな情報化社会が進展する現代社会にあって、ジャーナリズムは「第四の権力」と言われるほど多大な影響力をもつにいたった。 本研究は、こうした日本のジャーナリズム—とくに新聞、ときにテレビ—の機能と役割を、「歴史的考察＝タテ」と「国際比較＝ヨコ」とによって、構造とシステムを解明し、今後のジャーナリズム研究のための新たな方法論とモデル開発をめざした。 また、欧米を起源とするジャーナリズムが、日本の歴史的条件と日本文化の影響によって欧米とは異なる自立的システム＝日本型モデルを構築したが、それを欧米型ジャーナリズムの構造と比較することにより、その特質を明らかにした。（公募研究）
●研究代表者
柴山哲也（日文研客員助教授／文筆業／朝日新聞社客員、情報社会論・メディア論）

●幹事	
園田英弘（日文研教授、社会史）	
●班員	
浅見雅男（文藝春秋社編集部長、雑誌ジャーナリズム論）	
石田佐恵子（大阪市立大学文学部講師、社会学）	
上山春平（京都大学名誉教授、哲学）	
小川和久（軍事アナリスト、現代ジャーナリズム研究）	
小田川興（朝日新聞社外報部編集委員、朝鮮・韓国問題）	
柏岡富英（京都女子大学宗教・文化研究所教授、社会学）	
木原正博（日本新聞協会編集部広報担当副主管、新聞販売広告調査）	
栗木千恵子（文筆業／フリーランス・ジャーナリスト、ジャーナリズムと人権）	
古関彰一（獨協大学法学部教授、憲法史）	
後藤邦夫（桃山学院大学文学部教授、情報科学）	
阪上孝（京都大学人文科学研究所教授、経済思想史）	
澤田聡（日本新聞協会「新聞研究」編集者、新聞学）	
筒井清忠（京都大学大学院文学研究科教授、社会学）	
花田達朗（東京大学社会情報研究所教授、情報社会論）	
日置弘一郎（京都大学大学院経済学研究科教授、経営学）	
藤田博司（上智大学文学部新聞学科教授、新聞学）	
保阪正康（ノンフィクション作家、現代史）	
マーク・ホルスティン（琉球大学法文学部外国人客員研究員、ジャーナリズム論）	
村上直之（神戸女学院大学文学部教授、社会学・メディア論）	
門奈直樹（立教大学社会学部教授、新聞学・マスコミ論）	
柳父章（桃山学院大学文学部教授、比較文化論）	
山田厚史（ジャーナリスト／朝日新聞社、経済ジャーナリズム論・国際経済論）	
吉見俊哉（東京大学社会情報研究所助教授、メディア論）	
吉田和男（京都大学大学院経済学研究科教授、経済学）	
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）	
アイリーン・ガッテン（日文研客員教授／ミシガン大学日本研究センター研究員、日本古典文学）	
黒須里美（日文研助手、社会学・人口学）	
白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）	
杜勤（日文研客員助教授／華東師範大学外国語学院第二学部副学部長・助教授、言語文化学）	
東元春夫（日文研客員教授／京都文化短期大学教授、社会学）	
李晓（日文研客員助教授／山東大学二一世紀山東発展研究センター副主任・助教授、歴史学）	
●成果物	
柴山哲也編著『日本のジャーナリズムとは何か―情報革命下で漂流する第四の権力―』（ミネルヴァ書房、2004年3月）	
●研究発表	
1998年 5月 15日	柴山哲也「研究目的とテーマ」
1998年 5月 16日	保阪正康「戦後日本の言論イデオロギーについて、その『密教化』と『顕教化』の構造」
マーク・ホルスティン「沖縄報道から見た日米ジャーナリズムの比較」	
1998年 7月 3日	日置弘一郎、工藤秀幸「日本の経営ジャーナリズム」
1998年 7月 4日	藤田博司「アメリカ・ジャーナリズムにおける報道改革の動き―パブリック・ジャーナリズムの試みをめぐって―」
小川和久「近代日本の民主主義とジャーナリズム―軍事報道のありかたからの考察―」	
1998年10月 16日	浅見雅男「華族報道の落差から見た皇室報道―赤化華族事件と不良華族事件から―」
柴山哲也「日本における情報公開法要綱の問題点」	
1998年10月 17日	栗木千恵子「日米ジャーナリズム現場の比較研究―署名記事のありかたと女性の進出―」
小田川興、小川和久「北朝鮮ミサイル報道の事実と諸	

相―討論および問題提起―	
1998年11月 27日	石田佐恵子「アカデミック・スターダムとその構築過程におけるジャーナリズムの役割」
1998年11月 28日	花田達朗「ジャーナリスト教育の隘路―プロフェッションとしてのジャーナリズム?―」
園田英弘「日本における社員ジャーナリストの構造と未来」	
1999年 1月 22日	柴山哲也「日本型言論の構造―不偏不党主義をめぐって―」
上山春平「討論および問題提起」	
1999年 1月 23日	保阪正康「日本の医療報道の問題点とジャーナリズム」
井上徹英「討論および問題提起」	
基調報告：日下雄一/司会：柴山哲也「テレビ・ジャーナリズムを考える」	
参加者全員によるティーチイン	
1999年 3月 26日	筒井清忠「两大戦間期におけるマスコミュニケーション」
吉田和男「複雑系とコミュニケーション」	
1999年 3月 27日	古関彰一「憲法記念日の社説に見る日本国憲法」
門奈直樹「国家、メディア、制度―現代における報道の自由―」	

054 日本の語り物―口頭性・機構・意味―

●研究域

第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅱ）

●共同研究期間

1998（平成10）年4月～1999（平成11）年3月

●研究の概要

叙事的な詞章に節（フシ）をつけて語る声楽曲――語り物は、近世以降、「文化の書記性」が支配的になると、日本文化における位置づけでは目立たず、日陰の存在へと押しやられた。元来、文字が導入されて書記文化が普及した中世になってからも、語り物は最も生き生きとした、本質的な文化のかたちだった。

本研究では、日本の語り物に改めて焦点を当て、中国・朝鮮など近隣諸国の語り物にも目を向け、まずは東アジア文化圏における日本の語り物の位置づけを確かめた。しかし、語り物はそもそも無文字社会の伝統を強くもっているところから、アフリカの語り物の研究も参考にしつつ、人類に共通する「語りの原理」とでもいうべきものを明らかにすべく、原則的には通時的、通ジャンルの的に研究をすすめた。

研究手法も、音楽学・文学・演劇・美術史・女性研究・人類学・民俗学などの研究者はもとより、演奏家を含めて集まり、語り物のもつ言語的・音楽的・視覚的側面などの複雑な関係を探り、語り物を担った人々、享受した人々、庇護した人々のイデオロギー、信仰、価値観、世界観・宇宙観の中にまで分け入った。（公募研究）

●研究代表者

アリソン・トキタ（日文研客員助教授／モナシュ大学日本研究センター所長・モナシュ大学助教授、日本伝統音楽・語り物）

●幹事

光田和伸（日文研助教授、日本文学）

●班員

井口淳子（大阪音楽大学音楽学部講師、中国の語り物）

小塩さとみ（日本学術振興会特別研究員、日本音楽学（長唄））

アンドリュー・ガーストル（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授、日本文学）

川田順造（広島市立大学国際学部教授、文化人類学・口承論）

蒲生郷昭（日本大学芸術学部教授、日本音楽史）

蒲生美津子（沖縄県立芸術大学音楽学部教授、日本音楽・中世）

シルヴァン・ギニャール（大阪学院大学国際学部助教授、筑前琵琶）

小島美子（国立歴史民俗博物館名誉教授、日本音楽史学）

薦田治子（東京芸術大学音楽学部講師、日本音楽・平曲）

斎藤英喜（相山女学院大学短期大学部助教授、日本文学・民間祭祀）

澤田篤子（大阪教育大学教育学部教授、日本音楽史）

田中悠美子（兵庫教育大学学校教育学部、義太夫節・一中節）

徳田和夫（学習院女子大学国際文化交流学部教授、中世文学）

徳丸吉彦（お茶の水女子大学文教育学部教授、音楽美学・民俗音楽学）

鳥居明雄（都留文科大学文学部教授、日本文学）

中川裕（千葉大学文学部助教授、アイヌの語り口・口承文芸）

西山克（京都教育大学教育学部教授、国文学・美術）

スティヴン・ネルソン（上野学園大学日本音楽資料室研究員、日本音楽史・声明）

野川美穂子（東京芸術大学音楽学部非常勤講師、日本音楽史）

橋本裕之（千葉大学文学部助教授、演劇学・民俗学）

兵藤裕己（成城大学文芸学部助教授、日本文学）

廣井榮子（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、音楽学）

藤田隆則（大阪国際女子大学人間科学部助教授、能楽）

細川周平（東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授、日本の近現代ポピュラー音楽）

細田明宏（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程、人類学）

真鍋昌賢（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、民俗学）

矢向正人（九州芸術工科大学芸術工学部助手、日本音楽）

山口修（大阪大学文学部教授、音楽美学・民族音楽学）

山下宏明（愛知淑徳大学文学部教授、日本音楽・平家物語）

山田智恵子（大阪音楽大学音楽学部講師、義太夫節・清元節）

横道萬里雄（沖縄県立芸術大学、日本楽劇・中世劇音楽）

脇田晴子（滋賀県立大学人間文化学部教授、日本女性史）

マイケル・ワトソン（明治学院大学国際学部助教授、日本文学・平家物語・絵巻物）

井波律子（日文研教授、中国文学）

井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）

長田俊樹（日文研助手、言語学）

落合恵美子（日文研助教授、家族社会学・家族人口学）

エドウィーン・オーガスタス・克蘭ストン（日文研客員教授／ハーバード大学人文・社会学部教授、古典文学）

小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学）

鈴木貞美（日文研教授、日本文学）

早川開多（日文研助教授、美術史）

頼富本宏（日文研教授、仏教学）

山田奨治（日文研助教授、応用情報学）

●成果物

日文研叢書26、時田アリソン／薦田治子編『日本の語り物―口頭性・構造・意義―』（日文研、2002年10月）

●研究発表

1998年 5月 15日 第1回 テーマ：「さまざまな文化・時代・ジャンルのにおける語り物の役割」

横道萬里雄「語り物の概観」

ヒュー・バリー・デフェランティ「オーラル・コンポジションにおけるテクスチュアリティの問題―座頭琵琶の伝承について―」

討論 問い：「オーラルナラティヴとは何か。音楽の役割とは何か。」

1998年 7月 10日 第2回 テーマ：「語り物における口頭性と書記性」

～11日 川田順造「語りということの位置づけ」

井口淳子「中国農村の語り物におけるテキストの『改

編』」

長田俊樹「インド・ムンダ人の創世神話」

長田マキ：デモンストレーション「ムンダの歌と舞踊」

山口修「語り物におけるテキストとしての詞章・音楽・身体語法の口頭性」

中川裕、千葉伸彦「アイヌの語り物―研究の現状―」

1998年 9月 18日 第3回 テーマ：「文字テキスト・記譜・身体的・視覚的表現」

山下宏明「口誦と文字テキスト」

頼富本宏「節談説経」

渋谷隆阿「節談説経の実演」

田中悠美子「義太夫節の記譜について」

スティヴン・ネルソン「講式の楽譜化」

1998年11月 13日 第4回 テーマ：「語り物の構造」

～14日 薦田治子「語り物の音楽構造を考えるための用語について（中世語り物を中心に）」

澤田篤子「講式の音楽構造」

蒲生美津子「能と幸若の音楽構造」

山田智恵子「義太夫節の音楽構造」

ディスカッション：近世の語り物の構造

アリソン・トキタ「語り物の構造モデル」

矢向正人/コメンテーター：山田奨治「三味線音楽への新しいアプローチ―計算機を用いた分析の可能性―」

マイケル・ワトソン「『平家物語』のナラトロジー―覚一本を中心に―」

1998年12月 11日 臨時研究会

～12日 ミュージック・プロ「音楽コンピュータソフトのデモンストレーション」

井上章一「ユリシ리즈の伝説と幸若舞」

蒲生郷昭「長唄が摂取した説経」

小島美子「民俗音楽における語り物」

斎藤英喜「中世期宗教儀礼のなかの祭文」

コメンテーター：小松和彦

1999年 1月 29日 第5回 テーマ：「語り物と女性の存在―ジェンダー研究との接点―」

脇田晴子「中世の女性芸能者について」

廣井榮子「『声』のゆくえ―豊竹呂昇のレコード演奏をめぐって」

徳田和夫「ヨーロッパ人来日以前の『百合若大臣の物語』～『ユリシ리즈』日本伝来・翻案説の否定～」

テーマ：「非語り物化・語り物の多元化・De-narrativization」

藤田隆則「語り物の立体化―能を例にして」

野川美穂子「地歌・箏曲と語り物の接点」

小塩さとみ「長唄の語り物性」

シルヴァン・ギニャール「筑前琵琶の語り性」

1999年 3月 19日 第6回 テーマ：「宗教・イデオロギー」

～20日 西山克「熊野観心十界図の絵相と語り」

半澤恵美子「近世浄瑠璃語りの諸相」

真鍋昌賢「ポピュラーテキストとしての浪花節」

兵藤裕己「芸能伝承における中世と近世」

アンドリュー・ガーストル「浄瑠璃・歌舞伎の世界と趣向：オラリティーとパフォーマンス」

055 19世紀の日本「発見」 —旅行と旅行記の中の異文化像—	
●研究域	第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）
●共同研究期間	1998（平成10）年4月～2001（平成13）年3月
●研究の概要	19世紀は、地球規模での大いなる旅行時代であった。旅行の隆盛は、出版の隆盛と結びついて多くの旅行記の流布につながった。旅行が語られ、記録され、出版されるなかから、さまざまな異文化像が生み出された。19世紀は、旅行を契機にして生まれる、とりわけ民衆レベルでの異文化像形成と享受の時代であった。
	この19世紀半ばに開国した日本は、それまでの既成日本像に加えて、諸外国における新たな大衆の日本像を生み出す源泉となり、旅行者の新しい「発見」のフィールドとなった。グローブ・トロッターズと呼ばれる新時代の西洋人旅行者をはじめ、諸外国の外交官や商人などによる公的・私的な日本観察の記録が多数生み出された。
●研究代表者	白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）
●幹事	長田俊樹（日文研助手、言語学）
●班員	安部文司（大阪教育大学助教授、政治学） 天野史郎（明治学院大学国際学部教授、仏文学） 石森秀三（国立民族学博物館先端民族学研究部教授、観光学） 伊藤久子（横浜開港資料館調査研究員、文化交渉史） 柏岡富英（京都女子大学宗教・文化研究所教授、社会学） 神崎宣武（旅の文化研究所研究主幹、民俗学） 斉藤多喜夫（横浜開港資料館企画調整係長、近代史） 柴山哲也（京都女子大学現代社会学部教授、ジャーナリズム論） 高田公理（武庫川女子大学生生活環境学部教授、文明論） 多田伊織（白鳳女子短期大学国際人間学科講師、思想史） 西田正憲（奈良県立商科大学教授、環境史） ペーター・パンツァー（ボン大学日本文化研究所教授、日欧外交史） 前田弘（阪南大学国際コミュニケーション学部助教授、観光学） 吉田憲司（国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授、民族学） 稲賀繁美（日文研助教授、比較文学・比較文化） 井波律子（日文研教授、中国文学） 井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論） 川勝平太（日文研教授、経済史） テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論） ボーリン・ケント（日文研客員助教授／龍谷大学国際文化学部助教授、社会学） アリ・ベッカ・コルホネン（日文研客員助教授／ユフスカラ大学教授、地理学・政治学） ヴラディ斯拉ブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリヤード（日文研客員教授／ロシア科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部極東部長、日本文学・日本思想） 蔡敦達（日文研客員助教授／同济大学外国語学院日本学研究所助教授、日中建築史・庭園史） 千田稔（日文研教授、歴史地理学）

園田英弘（日文研教授、社会学）	
西原大輔（日文研客員助教授／駿河台大学法学部助教授、比較文学・比較文化）	
ジェームズ・バクスター（日文研教授、日本近代史）	
原田信男（日文研客員教授／札幌大学女子短期大学部教授、日本史・食物文化史）	
マーク・メリ（日文研外来研究員／大阪大学大学院文学研究科研究生、比較哲学）	
アフアマット・モハメッド・ファトヒ・モスタファ（日文研客員助教授／カイロ大学文学部日本語日本文学科専任講師、日本中世文学・近代文学）	
頼富本宏（日文研教授、仏教学）	
劉建輝（日文研助教授、日中比較文化・比較文化）	
ケネス・リチャード（日文研客員教授／県立長崎シーボルト大学国際情報学部教授、日本文学）	
●成果物	日文研叢書43、白幡洋三郎編『旅と日本発見—移動と交通の文化形成力—』（日文研、2009年3月）
●研究発表	1998年 5月23日 長田俊樹「19世紀の日本語『発見』—博言学から言語学へ—」 伊藤久子「一英国女性の日本周遊—レイ夫人の旅行記から—」
1998年 6月27日	ヴィン・シン「ベトナム知識人が見た明治日本—潘佩珠（ファン・ボイチャウ）の場合—」 クリストフ・マルケ「チュルヌスキとデュレが見た明治四年の日本」 稲賀繁美「セルヌーシとテオドール・デュレのアジア旅行1871～72」
1998年 9月26日	ボーリン・ケント「ルース・ベネディクトと日本」 白幡洋三郎「ペリー艦隊報告書の挿絵」
1998年10月31日	天野史郎「フランス遍歴職人の旅」 ペーター・パンツァー「絵はがきの中の日本像」
1998年12月19日	嘉本伊都子「明治期『国際結婚』観」 園田英弘「西洋人の旅行」
1999年 4月24日	西田正憲「瀬戸内海の発見」 長島要一「在デンマーク日本関係資料の紹介」
1999年 4月25日	打ち合わせ
1999年 5月29日	白幡洋三郎「日本イメージの変遷—イザベラ・バードの富士—」 金坂清則「イザベラ・バード研究について」
1999年 6月26日	坂井洲二「ドイツ商人幕末をゆく」 唐権「王韜『扶桑遊記』について」
1999年 6月27日	打ち合わせ
1999年10月 2日	ヴラディ斯拉ブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリヤード「在ロシア日本関係資料について」 原田信男「ハインリッヒ・フォン・シーボルトの北海道旅行」
1999年11月13日	高田公理「クロウ『日本内陸紀行』1883」 頼富本宏「四国遍路の旅人生—目的・動機の変遷を通して—」
1999年12月18日	劉建輝「近代ツーリズムの成立と日本作家の中国『発見』」 マーク・メリ「ゴードン・スミスの日本旅行」
1999年12月19日	打ち合わせ
2000年 4月21日	アリ・ベッカ・コルホネン「北欧における19世紀の日本『発見』」 申昌浩「紳士遊覧団の李鍾永が見た日本」
2000年 4月22日	本年度共同研究会打ち合わせ
2000年 5月19日	井波律子「黄慶澄『東游日記』について」

	園田英弘「石炭を求めて：1840年代から1860年代の旅行」
2000年 5月20日	白幡洋三郎「ペリー艦隊報告書の挿絵について」
2000年 6月17日	吉田憲司「『他者』のみた日本・日本のみた“他者”—97～98『異文化のまなざし』展から—」 畑智子「万国博覧会における日本」
2000年 6月18日	全員による打ち合わせ
2000年 7月 8日	マリー・ルイゼ・レーグラント「異文化像の発生—欧米人の入浴体験（見学）記を巡って—」 長田俊樹「ヘンリー・サヴィッジ・ランドーの探検—単独行・源流行・縦横断行—」
2000年 7月 9日	白幡洋三郎「外国人の日本体験—保津川下り—」
2001年 1月27日	蔡敦達「中国文人の目に映った近代日本—旅行記の中の日本風景—」 白幡洋三郎「我的北京滞在記」
2001年 2月17日	井上章一「キリスト教と仏教—16世紀から19世紀まで—」 白幡洋三郎「3年間の共同研究会をふりかえって」
2001年 2月18日	全員による討論会
2001年 3月10日	原田信男「19世紀におけるヨーロッパの『琉球』認識—蝦夷との比較から—」 柴山哲也「米国世論が発見した日本—ペリー来航時のアメリカジャーナリズム—」
2001年 3月11日	テモテ・カーン “‘Letter from the wife of a port chaplain in Japan’ by Buchnill Evy”

056 ベトナム・日本関係のアジアにおける役割と影響—太平洋協力関係の現在と未来—	
●研究域	
第1研究域 動態研究（現代）	
●共同研究期間	1999（平成11）年4月～2000（平成12）年3月
●研究の概要	ベトナムと日本は、長期にわたって良好な関係を築いてきた。もちろん、紆余曲折があったものの、1975年以降の変化は画期的ともいえるもので、両国関係は、広範な諸分野において新時代に入ったといえるだろう。
	この両国の新しい関係とは、ではいったいどのような特徴や性格をもち、どのような内容のものなのか。また、どのような要因が両国関係の発展に寄与しているのか。さらに、両国の協力関係は、国際的に、地域的にどのような役割を演じ、重要性を担っているのだろうか。
	本研究では、ベトナム・日本関係を、現代における他の二国間関係と比較しつつ、さらなる発展の方途についての具体像を探ろうとした。（公募研究）
●研究代表者	グエン・ズイ・ズン（日文研客員助教授／ベトナム日本研究センター副所長、政治経済学）
●幹事	木村汎（日文研教授、政治学）
●班員	池内敏（鳥取大学教育地域科学部助教授） 岩月純一（東京大学大学院総合文化研究科助手） 小笠原高雪（山梨学院大学法学部助教授） 柏岡富英（京都女子大学宗教・文化研究所教授、社会学） 上垣外憲一（帝塚山学院大学人間文化学部教授、比較文化）

白石昌也（早稲田大学アジア太平洋センター教授）	
中野亜里（早稲田大学語学教育研究所非常勤講師）	
古田元夫（東京大学大学院総合文化研究科教授、歴史学）	
古屋博子（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）	
桃木至朗（大阪大学大学院文学研究科助教授、歴史学）	
アリ・ベッカ・コルホネン（日文研客員助教授／ユフスカラ大学政治科学研究所教授、地理学）	
川勝平太（日文研教授、比較経済史）	
小松和彦（日文研教授、文化人類学・民族学）	
シーラ・スミス（日文研客員助教授／ボストン大学国際関係学部助手、日本政治）	
園田英弘（日文研教授、社会学）	
●成果物	木村汎／グエン・ズイ・ズン／古田元夫編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』（世界思想社、2000年10月）
●研究発表	1999年 5月28日 グエン・ズイ・ズン「本研究の狙いと実施方法」 桃木至朗「ベトナム略史」 古田元夫「ベトナムの現状」
1999年 7月 5日	グエン・ズイ・ズン「本研究の狙いと実施方法」 古田元夫「日越国交25年史の若干の問題」
1999年 9月18日	グエン・ズイ・ズン「ベトナムのドイモイ政策と日越関係」 小笠原高雪「インドシナ和平における日本の役割」
1999年11月 1日	桃木至朗「近世ベトナムの『自国』と『世界』」 中野亜里「ベトナムの対日認識—アジア・太平洋地域政策の文脈から—」
2000年 3月22日	池内敏「漂流・漂着から見た近日越関係史」 白石昌也「ドイモイ開始前後のベトナムの対日認識」 古屋博子「在日ベトナム人問題」

057 類似性の科学と模倣の情報文化に関する研究	
●研究域	
第1研究域 動態研究（伝統）	
●共同研究期間	1999（平成11）年4月～2002（平成14）年3月
●研究の概要	1980年代以降の文化は、コピー文化といわれて久しい。日本人は、一般に情報のコピーに寛容であるといわれている。このことは、モドキ、マネキといった日本語に代表されるような、模倣を基調とした創造的表現や学習態度の伝統と無縁ではない。模倣すること、写すことは、創造を捨て去ることによる創造であり、そこに日本の情報文化の特性が潜んでいるのではないだろうか。近年の著作権論議において否定的にとらえられがちなコピーや模倣について、近代以前の日本や諸外国の文学・美術・芸能・芸道等における情報伝達や創造的活動との関連を見直しておく必要がある。
	一方で、そのような論をすすめるにあたっては、複数の対象に対する類似性の判定に関して、確固たる科学的基礎を固めておく必要がある。類似性の判定をめぐるでは、個人の経験に基づく主観的判断に頼る部分が多いのが現状である。認識学分野においても、対象間の類似度の定義が最大の問題になっている。類似性判定についての人文学的方法と認識工学的方法が融合することによって、模倣の情報文化研究にひとつの切り口を与えうるであろう。このように、本研究においては、類似性判定に関する科学的根拠を追究し、そのうえで情報文化の立場から模倣の価値を再検

討した。	
●研究代表者	
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）	
●幹事	
光田和伸（日文研助教授、日本文学）	
●班員	
安達文夫（国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授、情報工学）	
尼ヶ崎彬（学習院女子大学国際文化交流学部教授、美学）	
内田保廣（共立女子大学文芸学部教授、江戸文学）	
久保正敏（国立民族学博物館博物館民族学研究部教授、コンピューター民族学）	
柴山守（大阪市立大学学術情報総合センター教授、人文情報学）	
武井協三（国文学研究資料館研究情報部教授、芸能史）	
出水力（大阪産業大学経営学部教授、産業技術論）	
中野潔（㈱ジェイキャスト講座担当編集長、知的財産権論）	
中村敏枝（大阪大学人間科学部教授、心理学）	
八村広三郎（立命館大学理工学部教授、情報工学）	
埴原和郎（日文研名誉教授、人類学）	
原正一郎（国文学研究資料館研究情報部助教授、情報工学）	
福田收（共立女子大学文芸学部助教授、哲学）	
美濃導彦（京都大学総合情報メディアセンター教授、情報工学）	
村上征勝（統計数理研究所領域統計研究系教授、統計学）	
合庭惇（日文研教授、情報社会論）	
稲賀繁美（日文研助教授、比較文学・比較文化）	
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）	
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化）	
栗山茂久（日文研助教授、医学史）	
小松和彦（日文研教授、文化人類学）	
白石さや（日文研客員教授／京都文教大学人間学部教授、文化人類学）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）	
辻本雅史（日文研客員教授／京都大学大学院教育学研究科教授、教育学）	
早川聞多（日文研助教授、美術史）	
楊曉捷（日文研客員助教授／カルガリー大学準教授、日本中世文学）	
頼富本宏（日文研教授、仏教学・図像学）	
渡邊雅子（日文研助教授、社会学）	
●成果物	
山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』（勉誠出版、2003年2月）	
●研究発表	
1999年 5月 15日	山田奨治「共同研究会のねらい」 中野潔「経済戦争の道具になってきた著作権」
1999年 7月 10日	光田和伸「等類と同果―俳句の‘模倣’―」 鈴木貞美「オリジナリティと著作権問題を考えるために」
1999年 9月 11日	藤本孝一「自筆本概念の再検討」 吉村ミツ「手書き文字の筆者の自動認識技術」
1999年11月 20日	中村敏枝「『間（ま）』による感性情報の伝達―行動におけるタイミングの模倣―」 今井むつみ「子供がことばの意味について持つメタセオリー：言語・文化依存性と普遍性」
2000年 1月 8日	楊曉捷「長谷雄卿への視線―絵巻の表現と鑑賞にみる『類似』の効用―」 頼富本宏「図像転写の表裏―伝統性と恣意性の葛藤―」
2000年 3月 18日	井上章一「建築の近代」 白石さや「『マンガ』のグローバル化を考える―マンガ・リテラシーとイメージ・アライアンス―」 白田秀彰「著作権の情報流通技術決定論 仮説」
2000年 9月 9日	村上征勝「若紫やさぶらう―文章の統計分析で『源氏物語』の著者を探る―」 早川聞多「類似と見立て」

2000年10月 21日	美濃導彦「情報学におけるデータの同一性と類似性」 埴原和郎「計測値における大きさと形態」
2000年11月 24日	研究会の中間まとめと今後の方針についての議論 嵯峨野に類似と模倣をもとめて一厭離庵（藤原定家小倉山莊跡）見学―
2000年11月 25日	王向華“Adoption of Foreign Culture：An Anthoropological Critique of Western Academic Hegemony” 久保正敏「模倣と創造：Aboriginal Primitive・Art, Ethnic・Art, and Art」
2001年 1月 13日	柴山守「古文書文字の類似性と古文書OCR」 八村広三郎「画像の類似性と内容検索について」
2001年 3月 17日	出水力「日・欧・中のオートバイ産業をめぐる」
2001年 5月 12日	宇野隆夫「模倣現象に内在する主体的情報処理―考古資料から―」 武井協三「歌舞伎における似ているということ」 尼ヶ崎彬「たとえとなぞらえ」
2001年 7月 21日	渡邊雅子「模倣から始まる創造力：個性と創造力の日米比較」 稲賀繁美「類似の臨界―影響か否かの判別基準をめぐり―」
2001年 9月 7日	安達文夫「デジタルのアナロジー」 福田收「『として (als) 』構造の現象学―類似への哲学の一考察―」 辻本雅史「日本の学習文化における模倣と習熟―貝原益軒を手がかりに―」
2001年 11月 17日	栗山茂久「ものまねと病」 原正一郎「視覚の情報処理（見える?）」 内田保廣「江戸時代の模倣と類似―江戸文学における著作意識と出版における類同意識―」
2002年 3月 11日	牧野二郎「共有と創造のダイナミズム」 竹宮恵子「模倣が‘育てる’創造の土壌」 山田奨治「アニメ・ミュージックビデオに明日はあるか」
2002年 3月 12日	村上直之、谷貞夫「創造性教育プログラムとしての見立て発想法」 山田奨治「文明のコピー史観は可能か」

058 平安人物志の研究

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）
●共同研究期間
1999（平成11）年4月～2002（平成14）年3月
●研究の概要
近世幕末の100年、王城の地・京都に「平安人物志」という継続出版物（短冊）が登場した。およそ、人が生きて、生きるために必要とする学問諸芸が、この町のどこの筋でどの引き戸を引いて案内を請えば学ぶうかを、このシリーズ冊子は読者にくまなく教えていた。
日文研には、先年購入した小笹喜三氏収集の「平安人物志」短冊大揃など、当時の生きるための学問諸芸案内などを示す資料が豊富に所蔵されている。本研究は、先行した共同研究「短冊の研究」を継承して読解をさらにすすめ、京都の町屋文化の実態を再現しようとした。そして、後学者のためにデータベース化をめざし、その整理を行った。

●研究代表者	
光田和伸（日文研助教授、日本古典文学）	
●幹事	
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）	
●班員	
井上義夫（一橋大学大学院言語社会研究科教授、イギリス文学）	
大谷俊太（奈良女子大学文学部助教授、日本文学）	
小川佳世子（大手前女子大学大学院文学研究科博士課程、演劇・芸能史）	
押川かおり（武庫川女子大学非常勤講師、日本文学）	
加藤類子（池坊短期大学教授、日本美術史）	
杉本節子（助奈良屋記念杉本家保存会事務局長、町家研究）	
茅田道太郎（京都大学名誉教授、文化人類学・風俗史）	
田中仁（鳥取大学教育地域科学部教授、日本文学）	
佃一輝（和茶道花道連盟常務理事、江戸文化史）	
羽生清（京都芸術短期大学教授、染色研究）	
原章二（早稲田大学政治経済学部教授、哲学・美学）	
横谷一子（佛教大学大学院文学研究科博士課程、日本文学）	
吉田孝次郎（画家、町家研究）	
冷泉為人（池坊短期大学長、美術史）	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
エドウィン・オーガスタス・克蘭ストン（日文研客員教授／ハーバード大学教授、日本古典文学）	
金貞禮（日文研客員助教授／全南大学校人文科学大学副教授、日本文学）	
白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）	
宋敏（日文研客員教授／国民大学校文科大学教授、韓国語学・日本語学）	
早川聞多（日文研助教授、美術史）	
アレキサンダー・ニコラエヴィッチ・メシヤリコフ（日文研客員助教授／ロシア科学アカデミー東洋学研究所文化課長、日本古代文化）	
楊曉捷（日文研客員助教授／カルガリー大学準教授、日本文学）	
ジュディス・ナンシー・ラビノヴィッチ（日文研客員教授／モンタナ州立大学教授、日本文学・中国文学）	
●研究発表	
1999年 4月 24日	杉本秀太郎「『短冊の研究』発足からの経緯説明」
1999年 5月 22日	討論
1999年 6月 25日	討論
1999年10月 2日	討論
1999年10月 23日	京都市指定有形文化財 京町家「杉本家」見学 杉本秀太郎「講演」
1999年11月 27日	討論
2000年 1月 22日	討論
2000年 2月 18日	討論
2000年 3月 25日	討論
2000年 5月 27日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2000年 6月 24日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2000年 9月 9日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2000年10月 28日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2000年11月 25日	短冊読解（第三七八番 也足、第五番 芥川丹丘）、討論、打ち合わせ
2001年 1月 12日	短冊データベースのための調査
2001年 1月 13日	短冊データベースのための調査
2001年 1月 14日	短冊データベースのための調査 定例読み会
2001年 2月 27日	漢詩解説、討論、打ち合わせ
2001年 3月 31日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2001年 4月 28日	漢詩読解、討論、打ち合わせ
2001年 5月 14日	漢詩読解、討論、打ち合わせ
2001年 5月 15日	漢詩読解、討論、打ち合わせ

2001年 6月 23日	漢詩読解、討論、打ち合わせ
2001年 9月 22日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2001年11月 3日	漢詩解説、討論、打ち合わせ
2001年12月 8日	漢詩解説、討論、打ち合わせ
2002年 1月 12日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2002年 2月 2日	短冊読解、討論、打ち合わせ
2002年 3月 18日	北野天満宮千百年大萬燈祭奉納連歌会参観
2002年 3月 22日	「平安人物志短冊データベース」紹介、短冊読解
2002年 3月 23日	短冊読解、討論、打ち合わせ

059 日本人の時間意識の変遷

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）
●共同研究期間
1999（平成11）年4月～2000（平成12）年3月
●研究の概要
今日の日本人は時間に厳格といわれているが、明治初頭においてはむしろ「日本的時間＝ルーズ」とされていたほど、時間にルーズなことは日本人の代名詞であった。
では、明治から現代にいたるまでに、日本人はどのような歴史過程を経て厳格に時間を守るようになったのか。本研究では、この問題を中核にしながら、海外との比較をとおして、日本の近代化の過程における時間意識の変遷とその歴史的契機を抽出、分析した。そして、現代の状況の再認識から今後への展望も試みた。（公募研究）
●研究代表者
橋本毅彦（日文研客員助教授／東京大学先端科学技術研究センター助教授、科学技術史）
●幹事
栗山茂久（日文研助教授、医学史）
●班員
青木保（政策研究大学院大学政策研究科教授、文化人類学）
荒井良雄（東京大学大学院総合文化研究科教授、人文地理学）
伊藤美登里（大妻女子大学短期大学部非常勤講師、社会学）
内田星美（東京経済大学名誉教授、経済史）
川和田晶子（同志社大学大学院文学研究科博士課程、近世日本の科学文化史）
小森陽一（東京大学大学院総合文化研究科教授、国文学史）
鈴木淳（東京大学大学院総合文化研究科助教授、日本経済史）
竹村民郎（大阪産業大学経済学部教授、経済史）
角山榮（堺市博物館長、経済史）
中村尚史（埼玉大学経済学部助教授、日本経済史）
西本郁子（埼玉大学非常勤講師、時間社会学）
延広真治（東京大学大学院総合文化研究科教授、国文学）
長谷川權（読売新聞社次長、俳句）
廣松毅（東京大学大学院総合文化研究科教授、統計学）
森下徹（山口大学教育学部助教授、日本経済史）
大橋良介（日文研客員教授／京都工芸繊維大学工芸学部教授）
●成果物
橋本毅彦／栗山茂久編著『遅刻の誕生―近代日本における時間意識の形成―』（三元社、2001年8月）
●研究発表
1999年 5月 14日 橋本毅彦「欧米における時間研究：Time & Society 誌の研究論文紹介」

1999年 5月 15日	鈴木淳「明治の官営事業における時間管理」 中村尚史「日本における鉄道と時間意識」
1999年 7月 23日	内田星美「明治以降の時計産業の歴史」 橋本毅彦「能率運動と生活改善運動における時間意識」
1999年 7月 24日	小森陽一「明治期の文学に現れる時間意識の変遷」 渡邊雅子「時間はどちらへ流れるか：日米歴史教育比較」
1999年 9月 24日	川和田晶子「江戸後期～明治初期における日本の天文暦法制度とその変革」 伊藤美登里「大正・昭和初期の女性の時間―羽仁もと子を事例として」
1999年 9月 25日	廣松毅「統計データから見た日本人の時間」 荒井良雄「生活時間の地理学―都市と農村の夜の外出活動を中心に―」
1999年11月 26日	森下徹「江戸時代における職人の雇用形態からみる時間意識」 延広真治「江戸時代の人々の時間意識とゆとり」
2000年 1月 28日	西本郁子「子供にpunctualityを教える―小学校の内外―」 角山榮「『時間革命』と日本人の時間意識」
2000年 1月 29日	長谷川權「歳時記の時間」
2000年 3月 24日	島田信吾「ライフコース・文化・アイデンティティ―時間意識における日独比較―」 林勝彦「時間を乗りこなす―あるテレビマンの軌跡―」
2000年 3月 25日	成澤光「現代における死と時間意識」 竹村民郎「20世紀前後における鉄道の時間革命―自動連結器取り替えに関連して―」 青木保「混成文化の時間―物・記憶・都市―」 高橋正樹「サラリーマンは近代的時間意識の担い手か」

060 日本の政治経済とアジア諸国

●研究域
第3研究域 文化比較（制度）
●共同研究期間
1999（平成11）年4月～2002（平成14）年3月
●研究の概要
1970年代と80年代のアジア経済発展において、日本が資本、技術市場の提供者として大きな役割を果たしたことは明らかである。ここで興味深いことは、アジア諸国の発展は、明治以来の日本の政府と経済の関係に関する日本システムの成功と見られてきたことである。
それは、東アジアの発展も、それ以降の東南アジアの場合も、発展における政府の役割が大きいと認定されているからである。そのために、いわゆるバブル崩壊以降、日本システムの有効性と限界が一層大きな関心をもって見られているといえる。
本研究は、こうした日本システムのバイアスがかかったとされるアジアの諸国との比較をとおして、戦後日本の政治経済の特徴を分析することをめざした。このことにより、分析視角が広がりをもちことになった。なお、東南アジアについては一貫した統計データがないため、それぞれの地域の日本人研究者に参加してもらった。
●研究代表者
村松岐夫（日文研客員教授／京都大学大学院法学研究科教授、行政学）

●幹事
渡邊雅子（日文研助教授、社会学）
●班員
芦立秀朗（京都大学大学院法学研究科博士後期課程、政治経済）
伊藤光利（神戸大学法学部教授、政治学）
梅原弘光（立教大学文学部教授、フィリピン農業）
大西裕（大阪市立大学法学部助教授、韓国政治）
片山裕（神戸大学大学院国際協力研究科教授、フィリピン政治）
久米郁男（神戸大学法学部教授、日本政治）
白石隆（京都大学東南アジア研究センター教授、東南アジア研究）
玉田芳史（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科助教授、タイ政治）
恒川恵市（東京大学大学院総合文化研究科教授、政治経済学）
鳥居高（明治大学商学部助教授、マレーシア地域研究）
永井史男（大阪市立大学法学部助教授、タイ政治史）
服部民夫（同志社大学文学部教授、韓国経済）
東茂樹（日本貿易振興会アジア経済研究所地域研究第一部研究員、アジアの政治経済）
真淵勝（京都大学大学院法学研究科教授、日本政治）
三宅康之（京都大学大学院法学研究科助手、政治経済・中国の地方行政）
石井紫郎（日文研教授、日本法制史）
猪木武徳（日文研教授、経済学）
園田英弘（日文研教授、社会学）
●成果物
日文研叢書30、村松岐夫／白石隆編『日本の政治経済とアジア諸国〔上巻〕政治秩序篇』、村松岐夫／恒川恵市編『日本の政治経済とアジア諸国〔下巻〕政治経済篇』（日文研、2003年）
●研究発表
1999年 5月 7日 村松岐夫「共同研究のねらい、今後の方針に関する打ち合わせ」
1999年 5月 8日 恒川恵市「村上泰亮『反古典の政治経済学』の意義と限界」 久米郁男「収斂の終焉？日本とドイツの労使関係の変容を手がかりに」 大西裕「新制度論と韓国研究：金融政治の分析から」
1999年 7月 4日 玉田芳史「タイ近代国家形成期の官僚育成」 永井史男「タイ国における地方分権化―タンボン自治体とテーサバーンをめぐって―」 池本幸生「日本的経営と東南アジア社会の流動性」
1999年 9月 5日 服部民夫「韓国経済危機―技術蓄積からの検討―」 真田幸光「資金の流れから見た韓国の経済危機」 廉載鎬「変化と連続の韓国政治経済：金大中政権の改革」
1999年11月 6日 白石隆「インドネシア政治の現状」 小松正昭「インドネシア、経済発展と経済危機」 岡本正明「改革後のインドネシアの地方政治：西ジャワ州などに焦点を当てながら」
2000年 1月 8日 鳥居高「マレーシアの開発と政治体制」 穴沢眞「マレーシアの工業化政策」 ジョン・マロット「アメリカから見たマハティールの対外政策」
2000年 3月 5日 梅原弘光「岐路に立つフィリピン農業」 細川恒「APECの誕生前後から今日までの国際経済動向」 片山裕「エストラダ政権下のフィリピン政治」
2000年 5月 6日 伊藤光利「日本政治経済システム論（レビュー）」 村松岐夫「90年代の日本政治経済・パート1」 真淵勝「90年代の日本政治経済・パート2」
2000年 5月 7日 昨年度研究会の総括及び今年度研究会の打ち合わせ
2000年 7月 1日 陳昌珠「門の国際化政策の変化：政治的な要因を中心に」

	芦立秀朗「日本の援助行政の変化と継続」 谷川浩也「1980年代以降日本によるアジア諸国への投資」
2000年 9月 10日	佐藤幸人「台湾の発展メカニズム再考」 三重野文晴「タイ金融システムの形成過程と金融危機―企業金融構造を中心に―」 岸本周平「アジア経済と円の国際化」
2000年11月 11日	末廣昭「アジア危機と経済社会再構築：3つのシナリオ」 東茂樹「タイ経済改革と企業再構築」 大西裕「金融自由化と韓国の金融行政」
2001年 3月 3日	恒川恵市「門外漢が見たアジア諸国の開発と政治」 黒岩郁雄「インドネシアにおけるレント追求、汚職と経済危機」 三宅康之「改革期中国の経済発展と政府の役割」
2001年 5月 12日	村松岐夫「インドネシア・フィリピン・タイにおける分権化について」
2001年 9月 29日	恒川恵市「日本の政治経済とアジア諸国」 東茂樹「タイの発展・危機・その後」 佐藤幸人「台湾の発展・危機・その後」 大西裕「韓国財閥の経営破綻と処理の成功比較」 小松正昭「インドネシアのマクロ経済政策」 三宅康之「中国の経済発展と調整システム」 久米郁男「途上国の労働政治のレビュー」 真淵勝「日本：90年代までの金融・製造業へのコミットメント」
2001年 9月 30日	服部民夫「技能技術節約型工業化の比較」 梅原弘光「東南アジア諸国の都市農村関係の比較」 白石隆「アジア諸国の“政治”経済」 白石隆「インドネシアを中心とした安定性の比較」 玉田芳史「タイの政治的安定」 鳥居高「マレーシアの形骸化した安定」 片山裕「フィリピンの不安定？」 村松岐夫「フィリピン、タイ、インドネシアの地方分権の比較」 永井史男「タイの地方分権」 岡本正明「インドネシアの地方分権」 伊藤光利「政界再編」 芦立秀朗「援助政策の変化」 岸本周平「アジア危機への対応」
2002年 3月 30日	研究報告書第一巻「アジアの政治秩序形成と民主化」編集会議
2002年 3月 31日	研究報告書第二巻「アジアの経済発展の政治経済学」編集会議

061 聖なるものの形と場

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
1999（平成11）年4月～2002（平成14）年3月
●研究の概要
文化の一翼を形成する宗教では、日常生活の基盤ともいべき俗性の対極として、いわゆる「聖なるもの」を想定する。
そして、いかなる宗教でも、「聖なるもの」と「俗なるもの」のそれぞれの

内容と、それら両者の関係という三点が重要な意味をもっている。
本研究は、この三点のうち「聖なるもの」に焦点を当て、種々の学問領域や研究方法をもつ複数の研究者が、それぞれの主張をぶつけ合いながら、「聖なるもの」の現象形態ともいえる形と場がどのように表現化・造型化され、そして実践されたかを明らかにしようとした。日本文化のなかでも比較的明瞭性を欠く宗教の構造と機能について、新たな考察を加えることができたと思われる。
●研究代表者
頼富本宏（日文研教授、仏教学・図像学）
●幹事
早川聞多（日文研助教授、美術史）
●班員
阿部泰郎（名古屋大学大学院文学研究科教授、歴史学・民俗学）
石川知彦（大阪市立美術館主任学芸員、日本美術史）
石塚晴通（北海道大学大学院文学研究科教授、国文学・古文書学）
今井淨圓（種智院大学仏教学部専任講師、密教学）
入澤崇（龍谷大学経営学部助教授、仏教文化学）
岩城見一（京都大学大学院文学研究科教授、美学・芸術学）
岡田安弘（神戸大学名誉教授、大脳生理学）
小田淑子（関西大学文学部教授、宗教学）
落合仁司（同志社大学経済学部教授、宗教学・ギリシャ正教学）
金兄曉嗣（大阪市立大学文学部教授、宗教社会心理学）
加藤善朗（種智院大学仏教学部非常勤講師、日本思想史）
河原由雄（愛知県立大学文学部教授、東洋美術史）
木俣元一（名古屋大学大学院文学研究科助教授、キリスト教美術史）
河野亮仙（大正大学文学部非常勤講師、インド文芸史・身体論）
下泉全曉（真言宗大覚寺派最明寺住職、仏教図像学）
白木利幸（密教図像学会事務局職員、仏教民俗学）
竹内信夫（東京大学大学院総合文化研究科教授、比較文学・比較文化）
西本幸嗣（佛教大学文学部非常勤講師、日本史）
野口圭也（種智院大学仏教学部助教授、インド密教）
朴亨國（名古屋大学・日本学術振興会外国人特別研究員、東洋美術史）
藤井恵介（東京大学大学院工学系研究科助教授、日本建築史）
藤善真澄（関西大学文学部教授、中国中世史）
星野英紀（大正大学文学部教授、宗教社会学）
松長恵史（清風高等学校教諭、図像学）
真鍋俊照（宝仙学園短期大学長、仏教美術史）
宮城洋一郎（皇學館大学社会福祉学部教授、日本仏教史・福祉学）
宮治昭（名古屋大学大学院文学研究科教授、インド・中央アジア美術史）
森雅秀（金沢大学文学部助教授、インド学・仏教学）
ジャン＝ノエル・アレキサンドル・ロベール（日文研客員教授／国立高等研究院宗教学部教授、日本仏教史）
李光濬（日文研外国人研究員／東西心理学研究所長、心理学）
稲賀繁美（日文研助教授、比較文学比較文化・美術史）
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）
宇野隆夫（日文研教授、考古学）
大橋良介（日文研客員教授／京都工芸繊維大学工芸学部教授、哲学・美学）
長田俊樹（日文研助手、言語学）
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論）
金知見（日文研客員教授／韓国仏教教育大学大学院長、仏教学）
栗山茂久（日文研助教授、比較医学史・科学史）
ポール・シュルダン・グローナー（日文研客員教授／ヴァージニア大学教授、仏教学）
小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学）
カルパカム・シャンカルナラヤン（日文研客員教授／ K. J. ソーマイヤ仏教学センター所長、インド思想・仏教学）
辛容泰（日文研客員教授／東国大学校教授、古代韓・中・日語音韻論及び語彙論）

園田英弘（日文研教授、社会史）	
那須真裕美（日文研中核の研究機関研究員、仏教学）	
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）	
吉田元（日文研客員教授／種智院大学仏教学部教授、科学技術史・食文化史）	
●成果物	
頼富本宏編『聖なるものの形と場』（法蔵館、2004年3月）	
●研究発表	
1999年 5月 7日	頼富本宏「本研究会のねらいと進め方」 森雅秀「インド密教における成就（観想）法の構造」
1999年 5月 8日	宮治昭「仏像の成立（研究史を中心として）」 松永有慶「基調講演―仏教における形の意義―」
1999年 7月 23日	村田靖子「中国金銅仏とその銘」 井上章一「宮型霊柩車の成立と展開」
1999年 7月 24日	朴亨國「統一新羅時代の如来像の手印について―新羅華嚴宗の本尊の画像を中心に―」 山田奨治「美術作品のデータベース化をめぐる」
1999年10月 9日	松本肇「海の道」 真鍋俊照「聖と和合」 早川開多「見立ての雅と俗」
1999年11月 26日	野口圭也「後期密教における聖なるものの形と場」
1999年11月 27日	土居浩「『です』と『います』の地理学―聖地論のために―」 金知見「『華嚴經文義要訣問答』について―新羅の黄龍寺と日本の東大寺―」 金児曉嗣「心理学における聖と俗」
2000年 2月 26日	入澤崇「塔の威力」 ジャン＝ノエル・アレキサンドル・ロベール「言葉における聖と俗」 白木利幸「日本の巡礼における聖地（札所）選定について」 清水弘明「メディアから見た四国遍路」
2000年 6月 2日	吉田元「聖餐のパンとワイン」 木俣元一「1200年前後のカトリック教会と視覚イメージ―シャルトル大聖堂とステンドグラスにおける聖像と偶像を中心に―」 落合仁司「三一論とバラミズム ―ギリシア正教における形と場―」
2000年 7月 28日	霊宝館見学 日野西眞定「聖地高野山」 村上保壽「空海における聖」 阿部泰郎「霊地としての熊野―参詣とその形―」
2000年 7月 29日	高野山見学（奥院・墓塔群・壇上伽藍）
2000年11月 10日	河原由雄「日本における阿修羅像の展開」 河野亮仙「雲中供養菩薩は何を踊ったか？」
2000年11月 11日	石塚晴通「敦煌写経の形と場」 岩城見一「現代のコミックアート」
2001年 3月 9日	ポール・シェルダン・グローナー「中世日本天台における戒と〈聖〉」 鳥岩「インド新宗教運動における聖なるもの」
2001年 3月 10日	加藤善朗「大念寺蔵阿弥陀如来立像成立の〈場〉」
2001年 5月 25日	村田充八「『聖なる場』の変容―生駒山系宗教動態の事例より―」 竹内信夫「聖なるものの現われ」 岡田安弘「いのちを演じる場」
2001年 5月 26日	西本幸嗣「融通念仏宗における聖と俗―御回在にみる本尊受容を中心に―」 カルパカム・シャンカルナラヤン「空海の即身成仏とシヴァ派の生身解説」

2001年 7月 27日	宮城洋一郎「般若寺文殊像造立願文について―非人救済の場をめぐる―」 藤善真澄「中国の山岳信仰」 藤井恵介「日本の住宅と修法空間」
2001年 7月 28日	水野さや「八部衆像の成立と広がり―図像の形成と配置を中心に―」 那須真裕美「『不可説の真理』と『言表される真理』」
2001年 10月 26日	安元剛「『図像の漢訳』密教図像における文化変容―『四種護摩本尊並眷属図像』における降三世マンドラ諸尊の場合―」 ジョナサン・オーガスティン「聖人・高僧と社会事業」 李光潯「人間の胎生論についての禅心理学的研究」
2002年 3月 8日	パメラ・ウィンフィールド「密教の時間と禪の時間」 ドナルド・マッカラム「7世紀の四大寺について」 『聖なるものの形と場』出版について

062

武器の進化・退化の学際的研究（考古・歴史編）

●研究域	
第4研究域 文化関係（旧交圏Ⅰ）	
●共同研究期間	
1999（平成11）年4月～2001（平成13）年3月	
●研究の概要	
武器は、社会的・政治的状況の変化とともに、改良され進化することもある。逆に武器の改良が社会の変化に決定的な影響を与えることもある。しかし、こうしたことはとくに吟味を受けることもなく、いわば漠然とした常識のレベルにとどまっていた。	
たしかに、鉄砲や大砲の出現がドラスティックに社会を変化させたような「革命的」な事象については、改めて学問的吟味を加えることもないだろう。しかし、特定の武器の微妙な変化（たとえば、ヤジリの材料や形態の変化）が、具体的にどの程度の武力向上を意味し、それがどのような社会的インパクトを与えたか、といった細密な問題になると、事は単純ではない。	
さらに、社会的・政治的与件の変化と、それが要請する武器の改良・新武器の開発との相関関係というような問題になると、一層慎重な学問的分析を必要とするであろう。否、率直にいう、そもそもこれまでの歴史学、考古学、民族学等々、そして社会科学は、武器の社会的・政治的インパクトについて語りながら、肝心の武器そのものの物理的能力を科学的に測定したことがどれだけあるだろうか。憶測が全くなかった、と言い切れるだろうか。	
本研究は、この点に着目し、工学研究者と社会科学者との共同作業により、さまざまな武器の進化・退化と人間社会のあり方の相互規定関係について、本格的に科学のメスを入れた。今回は、さしあたり対象をいくつかの考古学的・歴史学的事例に則してケーススタディーを行い、方法論の確立と在来の歴史学・考古学の学説の検証にとどめた。	
●研究代表者	石井紫郎（日文研教授、日本法制史）
●幹事	赤澤威（日文研教授、先史人類学）
	宇野隆夫（日文研教授、日本考古学）
●班員	青柳正規（東京大学大学院人文社会系研究科教授、世界考古学）
	木村文彦（東京大学大学院工学系研究科教授、精密機械工学）
	佐々木憲一（明治大学文学部講師、日本考古学）
	佐藤慎一（東京大学大学院人文社会系研究科教授、中国政治史）

中島尚正（東京大学大学院工学系研究科教授、産業機械工学）
野林厚志（国立民族学博物館民族社会研究部助手、民族考古学）
細谷聡（信州大学繊維学部助手、感性工学）
松本武彦（岡山大学文学部助教授、日本考古学）
松本岩雄（島根県埋蔵文化財調査センター調査課長、日本考古学）
吉川弘之（放送大学学長、精密機械工学）
井波律子（日文研教授、中国文学）
野口淳（日文研中核の研究機関研究員、先史考古学）
森洋久（日文研助教授、情報科学）
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）
渡邊雅子（日文研助教授、比較教育社会学）
●成果物
日文研叢書 27、石井紫郎／宇野隆夫／赤澤威編『武器の進化と退化の学際的研究―弓矢編―』（日文研、2002年12月）
●研究発表
1999年 6月 4日 石井紫郎「平成11年度スケジュール等について」 宇野隆夫「出雲・姫原西遺跡出土の弩について」
1999年 6月 5日 野口淳「先史時代武器の復元」 赤澤威「旧石器について」
1999年11月 26日 赤澤威「ネアンデルタール人の狩猟について」 宇野隆夫「復元製作・実験研究のプログラム」
1999年11月 27日 野林厚志「弩の製作と使用に関する民族誌：中国雲南省の事例」 総合討論：復元製作・実験研究について
2000年 3月 17日 宇野隆夫「復元製作・実験研究の準備状況について」 総合討論：復元製作・実験研究について
2000年 3月 18日 足立克己「出雲・姫原西遺跡の弩について」 千葉敏朗「下宅部遺跡の弓矢について」
2000年 5月 26日 赤澤威、野口淳「旧石器・縄文時代の飛び道具展示案」 松本武彦「弥生・古墳時代の武器展示案」 宇野隆夫「古代・中世の武器展示案」 佐々木憲一「弩の展示案」「海外の武器展示案」
2000年 5月 27日 中島尚正「工学実験の展示案」 石器見学（復元石鏃と、実物の石器）
2000年 7月 26日 石井紫郎「研究経過の報告」 深澤芳樹「片山共同研究における武器の復元」
2000年10月 27日 展示の実見と意見交換
2000年10月 28日 山本博一「弓材としての木について」 林良博「防具素材としての獣皮について」 展示解説・弓試射の指導
2001年 1月 27日 中島尚正、笠原智治「復元弓矢の威力実験（1）」 細谷聡「射手の筋活動から見た復元弓の特徴（1）」 山田奨治「古流弓術の世界」
2001年 3月 7日 山田奨治「復元弓矢の弦音の分析」 笠原智治「復元弓矢の工学的実験の成果」 宇野隆夫「共同研究の総括」

063

大英帝国・英連邦の文明論的研究―日本との比較を中心に―

●研究域	
第4研究域 文化関係（新交圏）	
●共同研究期間	
1999（平成11）年4月～2003（平成15）年3月	

●研究の概要	
現代社会の形成に大英帝国の果たした役割は、その功罪を含めて、際立って大きいものがある。	
本研究は、国立民族学博物館（地域研究企画交流センター）所蔵の「英国議会資料」全1万2,000巻を基礎資料とし、比較文化・文明論的観点から、日本との比較を中心にその多面的な分析を行ったものである。	
その際、とくに柱として設定したのは以下の2点である。	
第一に、開放経済体制をとった大英帝国のバクスブリタニカと閉鎖経済体制をとった近世日本のバクストクガワナとの比較。第二に、大英帝国→英連邦への移行と、近世日本→日本帝国の形成→崩壊の比較史的研究。同時に、英国のイングランド、アイルランド、ウェールズの各地の代表的研究者との交流を行うとともに、同資料に含まれる日本情報の整理も行った。	
●研究代表者	川勝平太（日文研教授、比較経済史）
●幹事	松田利彦（日文研助教授、日朝関係史）
●班員	鶴飼政志（学習院大学文学部助手、日・英関係史）
	北政巳（創価大学経済学部教授、スコットランド史）
	北川勝彦（関西大学経済学部教授、アフリカ社会経済史）
	草光俊雄（東京大学大学院総合文化研究科教授、英国社会文化史）
	久米高史（東京大学東洋文化研究所研究員、アジア経済史）
	島田竜登（早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程、理論経済学・経済史）
	鈴木良隆（一橋大学大学院商学研究科教授、英国社会経済史）
	高橋周（早稲田大学現代政治経済研究所助手、日本経済史）
	辻智佐子（早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程、日本経済史）
	角山榮（和歌山大学名誉教授、英国・アジア関係史）
	中村宗悦（大東文化大学経済学部助教授、日本経済史）
	松島泰勝（東海大学海洋学部助教授、アジア太平洋の社会経済史）
	松原正毅（国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授、中央アジア）
	三田剛史（早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程、日中関係史・日本経済史）
	宮田敏之（天理大学国際文化学部講師、アジア経済史）
	本野英一（早稲田大学政治経済学部教授、近代の英国・東アジア関係史）
	四方田雅史（早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程、アジア経済史）
	金子晋右（日文研共同研究員、日本経済史）
	白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）
	園田英弘（日文研教授、社会史）
	ボアチ・ウリケル（総合研究大学院大学博士後期課程、比較文化）
	武藤秀太郎（総合研究大学院大学博士後期課程、日本経済史）
●成果物	
川勝平太編『アジア太平洋経済圏史1500-2000』（藤原書店、2003年5月）	
●研究発表	
1999年 4月 15日 研究報告「英国議会資料と私の研究」 四方田雅史「三角貿易と多角的貿易決済メカニズム」 高橋周「ラッコ皮について」 コメンテーター：中村宗悦	
1999年 4月 16日 英国議会資料見学（国立民族学博物館）	
1999年 5月 15日 金子晋右「生糸を巡る日中アジア地域間競争と世界市場」 宮田敏之「19世紀末のタイ米貿易とアジア間競争」	
1999年 5月 16日 三田剛史「日中文化交流の逆転―河上肇の事例」 コメンテーター：中村宗悦	
1999年 5月 28日 久米高史「両大戦間期の中国市場をめぐる糖業のアジア間競争」	

		辻智佐子「原稿における『脱ア』 ―朝鮮米綿移植の成功とその背景―」 島田竜登「近世日本の銅輸出の削減がアジア各地に与えた影響」 コメンテーター：中村宗悦
1999年 6月 26日	草光俊雄「18世紀イギリス社会における価値観の変容 ―徳から作法へ―」 コメンテーター：高橋周、辻智佐子 北政巳「スコットランド移民論」 コメンテーター：金子晋右、島田竜登	
1999年 6月 27日	中村宗悦「第一次世界大戦前期南部中国・東南アジア市場における通商ネットワーク構築 ―香港における『領事報告』を中心に―」 コメンテーター：三田剛史、四方田雅史	
2000年 3月 25日	北政巳「大英帝国とスコットランド海運業」 鶴飼政志「1900年～15年の対日外交・軍事関係議会資料について」	
2000年 3月 26日	金子晋右「戦前期インド絹関係品市場におけるアジア間競争」	
2000年 5月 27日	四方田雅史「1908年～1909年の英国領事報告」資料紹介と分析 久米高史「1914～1916年の英国領事報告」資料紹介と分析	
2000年 5月 28日	鶴飼政志「1902年の日英同盟の条文の検討」	
2000年 6月 17日	松島泰勝「太平洋地域（アジア・オーストラリア・ニュージーランドを除く）のどこどこにイギリスの情報収集の拠点があったか―時期資料集編纂との関連で―」 高橋周「1904～1906年の英日関係」―資料紹介と解説― 島田竜登「1906～1907年の英日関係」―資料紹介と解説―	
2000年 6月 18日	全体討議 1900～1914年のBPP（日本関係）資料集の刊行について 最近刊行された日英同盟関連の文献について	
2000年 8月 6日	金子晋右「1910～11年の英日関係―資料紹介と解説―」 北川勝彦「アフリカのどこにイギリス情報収集の拠点があったのか―次期資料集編纂との関連で―」	
2000年 8月 7日	辻智佐子「1914年の英日関係―資料紹介と解説―」	
2001年 3月 14日	久米高史「領事報告を読む」 クリストファー・ロイド「グローバルバージョンは資本主義の最終段階？」	
2001年 3月 15日	中村宗悦「領事報告を読む」	
2001年 3月 24日	辻智佐子「1914年度の英国領事報告」 川勝平太、濱下武志、杉原薫、山下範久、中山智香子、本野英一「海洋アジアと日本から近代世界を読み返す―G.フランク『リ・オリент』を手がかりに―」	
2001年 3月 25日	平成13年度の活動計画	
2001年 5月 28日	武藤秀太郎「私の研究」 川勝平太「日豪会議」 中村宗悦「日本経済思想史会議」 高橋周「1904～5年度の英国領事報告」 四方田雅史「1908～9年度の英国領事報告」	
2001年 5月 29日	今後の研究成果の取りまとめについて	
2001年 7月 17日	VANLUYD, Raf「私の研究：アジア太平洋とマグロ漁業」 松島泰勝「資料の編集：南太平洋」 北政巳「スコットランドと近代日本」	
2001年 10月 22日	井野瀬久美恵「私家版・大英帝国へのアプローチ―英国＝アフリカ＝アイルランドというトライアングルから―」	

		戸矢理衣奈「大英帝国への私流接近法―近著を中心に―」 草光俊雄「ラスキンの使徒：御木本隆三」
2002年 3月 11日	武藤秀太郎「イギリス認識からアジア発見へ―田口卯吉の場合―」 金子晋右「明治期における夏秋蚕の普及と内外市場」 合評会「共同研究中間報告書・川勝編『グローバル・ヒストリーに向けて』をめぐって」 共同研究員博士号取得記念報告：松島泰勝「博士論文の概要とその学説史的位置」、金子晋右「博士論文の概要とその学説史的位置」	
2002年 7月 22日	久米高史「インド砂糖市場におけるアジア間競争1890～1914」 北政巳「アングロサクソンとアジア・太平洋世界―西欧インパクトへの日本の対応―造船・海運ビジネス―」	
2002年 7月 23日	四方田雅史“The ‘Breakdown’ of Multilateral Settlement and the Asia-Pacific Dynamism in the 1930s” 松島泰勝「日本文明と太平洋諸島」	
2002年12月 6日	高橋周「日露戦争後の肥料不足と英国」 金子晋右「明治期における夏秋蚕の普及と内外市場」	
2002年12月 7日	鶴飼政志「イギリスの対露情報収集活動―サハリン島問題をめぐって―」 久米高史「1920～30年代のインド砂糖市場」 辻智佐子「19世紀のイギリスにおけるインド綿（短繊維綿）の意義（その1）―19世紀前半のイギリス人によるインド綿化栽培事業から―」	
2003年 2月 8日	島田竜登“Monopoly or Competition? Global Copper Traders in Eighteenth-Century Asia” 三田剛史「中国経済思想史上のイギリス」 四方田雅史「台湾近海におけるジャンク船貿易の長期的動向1860～1935」	
2003年 2月 9日	桜井寛彰「北西航路の出口としての北太平洋地域（16世紀から19世紀）―西洋文明にとっての北西太平洋地域―」	
2003年 3月 15日	久米高史「砂糖貿易をめぐるインド・モリーシャス関係1890～1914」 濱田陽「諸宗教・無宗教の共存―インターレリジナス・エクスピリアンスの仮説―」 北政巳「スコットランド・ルネッサンスからみた大英帝国と日本」	
2003年 3月 20日	〈早稲田大学 British Studies 研究所国際セミナー「歴史としての20世紀：自己認識と他者認識」と共催〉 本野英一、川勝平太「アジアから見た大英帝国：華人世界からの視点」	
2003年 3月 21日	全体会、パネル討議	
2003年 3月 22日	分科会	

064

日本のモダニズム ―関西を中心とした学際的研究―

- 研究域
- 第1研究域 動態研究（現代）
- 共同研究期間
- 2000（平成12）年4月～2003（平成15）年3月

- 研究の概要
- 昨今、日本の1920～30年代における芸術・文化の見直し機運がますます盛んになっている。これは、国際的な視点からもいえることである。
- 1920年代の文化動向の見直しは、都市大衆文化の形成期という観点から、文芸を中心に1980年代に起こり、既に各領域において定着をみている。とりわけ、ここ5年間くらい、
- ・1910年代へ遡行するかたちで、前衛芸術運動の見直しが進行していること
- ・ジェンダー研究というアプローチの浸透
- ・都市大衆文化の研究領域の広がりがみられること
- ・各地方文化の動向や資料の整備に進展がみられる
- ――こうしたことが明らかになったことから、このあたりで、総合的に、かつ学際的に総括することが要請されているといえよう。しかし、一挙にそれをなしとげるには、まだ各方面における掘り起こしが十分ではない。
- そこで、本研究では、総合化の作業を睨みながら、ここ数年、進展著しい関西におけるモダニズム研究に焦点を絞り、その深化を図った。
- 研究代表者
- 鈴木貞美（日文研教授、日本文化）
- 幹事
- 劉建輝（日文研助教授、日中比較文学・比較文化）
- 班員
- 石田潤一郎（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授、建築史）
- 池田知隆（毎日新聞社大阪本社論説室論説委員、マスコミ論）
- 五十殿利治（筑波大学芸術学系教授、大正前衛美術）
- 金子務（帝京平成大学情報学部教授、日本科学史）
- 木下直之（東京大学大学院人文社会系研究科助教授、日本文化史）
- 佐藤一樹（二松学舎大学国際政治経済学部教授、中国思想・日本思想）
- 佐藤バーバラ（成蹊大学文学部教授、女性史）
- 高橋睦郎（詩人、近現代詩）
- 竹村民郎（大阪産業大学経済学部客員教授、経済史）
- 佃一輝（嵯峨茶道花道連盟常務理事、文化史）
- 坪内祐三（文芸・文化評論家、ジャーナリズム）
- 戸塚隆子（日本大学国際関係学部助教授、日露比較文化）
- 中川成美（立命館大学文学部教授、比較文学・文化）
- 中河督裕（大阪府立四条畷高等学校教諭、日本文学）
- 延広真治（帝京大学文学部教授、国文学）
- 芳賀徹（京都造形芸術大学長、比較文化）
- 橋爪紳也（大阪市立大学大学院文学研究科助教授、地理学）
- 平井章一（兵庫県立近代美術館主査・学芸員、近代美術）
- 藤本寿彦（奈良大学文学部助教授、農業・詩）
- 増田周子（関西大学文学部助教授、日本近現代文学）
- 松隈洋（京都工芸繊維大学工芸学部助教授、建築計画）
- 三品理絵（佛教大学非常勤講師、日本文学）
- 三谷憲正（佛教大学文学部教授、日本文学）
- 山口昌男（札幌大学長、文化人類学）
- 依岡隆児（徳島大学総合科学部助教授、ドイツ文学）
- 渡辺裕（東京大学大学院人文社会系研究科助教授、美学芸術学）
- 李征（聖徳大学非常勤講師、日本近代文学）
- 稲賀繁美（日文研助教授、比較文学比較文化・美術史・仏語仏文学）
- 井波律子（日文研教授、中国文学）
- 井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）
- 白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）
- 西原大輔（日文研客員助教授／駿河台大学法学部助教授、比較文化・比較文学）
- 早川閑多（日文研教授、美術史）
- ケネス・リチャード（日文研客員教授／県立長崎シーボルト大学国際情報学部教授、日本文学）
- 成果物
- 竹村民郎／鈴木貞美編『関西モダニズム再考』（思文閣出版、2008年2月）
- 研究発表

2000年 5月 19日	鈴木貞美「モダニズムの定義をめぐって、そして、なぜ、関西モダニズムか」 竹村民郎「20世紀初頭わが国におけるモダナイゼーションと吉本興業の研究・その1」
2000年 7月 22日	佐藤バーバラ「女性とモダニズム」 西原大輔「関西オリエンタリズムの成立まで」
2000年 9月 30日	依岡隆児「日本におけるドイツ表現主義の受容―初期築地小劇場を中心に―」 中河督裕「梶井『檸檬』のトボスとクロノス」
2000年11月 25日	増田周子「宇野浩二文学作品にみるモダニズム」 井上章一「阪神（タイガース）という現象」
2001年 1月 13日	小川順子「チャンバラ映画における『殺陣（タテ）』―1920、30年代を中心に―」 佐藤一樹「『大阪は日本の米国だ』：関西モダニズムの諸言説」
2001年 5月 19日	五十殿利治「マヴォイスト関西到来」 芳賀徹「大阪の画家小出樽重と『モダニズム』」
2001年 5月 20日	李征「関西モダニズムと上海」 山口昌男「宮武外骨の大阪時代をめぐって」
2001年 7月 21日	石田潤一郎「関西のモダニズム建築―1920年代から60年代まで―」 池田知隆「宝塚モダニズム考」
2001年 7月 22日	橋爪紳也「イルミネーションの誕生―光と闇のモダニズム―」
2001年 9月 22日	浜田雄介「関西モダニズムと探偵小説―江戸川乱歩を中心に―」 渡辺裕「戦前の宝塚歌劇にみる東京対大阪」
2001年 9月 23日	竹村民郎「旧満州調査報告―モダニズム建築等を中心に―」 劉建輝「『満州』モダニズムと関西」
2001年12月 15日	谷崎潤一郎記念館見学・現地討論 芦屋市立美術博物館（小出樽重アトリエ）見学・現地討論 ヨドコウ迎賓館（国指定重要文化財）見学・現地討論
2002年 5月 18日	三品理絵「武智鉄二の周辺」 三谷憲正「太宰治とモダニズム」
2002年 5月 19日	松岡洋「前川國男の近代建築」
2002年 7月 26日	劉建輝「『欲望』としてのモダニズム―1920、30年代の上海―」 稲賀繁美「関西モダニズムと欧州滞在―美術関係―」
2002年 7月 27日	中川成美「京都モダニズムの源流―2人の勝太郎―」
2002年 9月 21日	平井章一「関西の1930年代のモダニズムの美術」 藤本寿彦「海港（横浜・神戸）の風景化―詩集『海港』と詩誌『羅針』を中心に―」
2002年 9月 22日	金子務「京におけるプロジェクトのモダニティー―琵琶湖疏水と田辺朔郎―」
2003年 2月 8日	竹村民郎「阪神間モダニズムの基調―特に芦屋、住吉の郊外住宅地を中心に―」 班員全員「総括および報告書作成について」

065

公家と武家
—王権と儀礼の比較文明史的研究—

●研究域
第1研究域　動態研究（基層）
●共同研究期間
2000（平成12）年4月～2003（平成15）年3月
●研究の概要
「公家と武家」を課題とした共同研究は、今回で3回目を迎える。このシリーズは、公家と武家という固有の階層に焦点を合わせ、それらの身分や職能のもつ意味、その秩序の形式、社会的役割といったものを浮かび上げらせようとしているところにある。今回は、とくにこれらの階層が支えている王権（天皇制）の存在形態、またそれをめぐる諸々の儀礼の意味についての解明を中心課題とした。
しかし、実際の研究は、対象を日本国内に限定することなく、むしろ日本以外に視野を広げ、アジアや中東、ヨーロッパなどの諸地域・諸民族の場合との比較、およびそれら相互間の比較を通して、王権と儀礼の問題等を取り上げていった。そして、武士層が成長した地域と、文官支配が優越して武士の出現をみなかった地域とにおける、王権および儀礼の性格の違いに着目し、その歴史的な意味をさまざまな角度から検討し、それらの差異が今日の社会におけるそれぞれの文化的特性といかなる関連を有しているかを構造的に解明しようとした。
●研究代表者
笠谷和比古（日文研教授、歴史学（武家社会論））
●幹事
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論）
●班員
磯田道史（慶應義塾大学文学部非常勤講師、家族史）
井上勝生（北海道大学大学院文学研究科教授、政治史）
井上浩一（大阪市立大学大学院文学研究科教授、西洋史（ビザンツ史））
江川温（大阪大学大学院文学研究科教授、西洋史（フランス史））
大庭脩（皇學館大学長、東洋史（中国史））
小野芳彦（北海道大学大学院文学研究科教授、情報論）
臈谷寿（同志社女子大学現代社会学部教授、政治史）
加藤善朗（種智院大学非常勤講師、仏教美術）
加納重文（京都女子大学文学部教授、日本文学）
川島昭夫（京都大学総合人間学部教授、西洋史（イギリス史））
川嶋将生（立命館大学文学部教授、文化史）
黒田日出男（東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター長、文化史）
源城政好（元宇治市歴史資料館長、文化史）
下坂守（京都国立博物館学芸課長、文化史）
杉立義一（日本医史学会常任理事、医学史）
鈴木董（東京大学東洋文化研究所教授、政治学（トルコ史））
瀧浪貞子（京都女子大学文学部教授、政治史）
竹村英二（国土館大学21世紀アジア学部助教授、経済思想史）
竺沙雅章（京都大学名誉教授、東洋史（中国史））
辻正博（滋賀医科大学医学部助教授、東洋史（中国史））
津田順子（国立歴史民俗博物館民俗研究部助手、音楽民俗学）
名和修（財陽明文庫文庫長、文化史）
西山恵子（宇治市源氏物語ミュージアム主任、文化史）
橋本義則（山口大学人文学部教授、政治制度史）
原田正俊（高野山大学文学部助教授、仏教史）
平木實（天理大学国際文化学部教授、東洋史（朝鮮史））
平田茂樹（大阪市立大学大学院文学研究科助教授、東洋史（中国史））
平山朝治（筑波大学社会科学系助教授、経済学）

三木亘（慶應義塾大学特選塾員、西洋史（アラブ史））
三谷博（東京大学大学院総合文化研究科教授、政治史）
南川高志（京都大学大学院文学研究科教授、西洋史（ローマ史））
村井康彦（京都造形芸術大学大学院長、文化史）
元木泰雄（京都大学総合人間学部助教授、政治史）
森田登代子（樟蔭東女子短期大学非常勤講師、近世風俗史）
横谷一子（東京福祉大学非常勤講師、歴史学）
頼富本宏（種智院大学長、仏教学）
石井紫郎（日文研教授、法制史）
落合恵美子（日文研助教授、歴史人口学）
川勝平太（日文研教授、経済史）
官文娜（日文研外来研究員、国史学）
小松和彦（日文研教授、民俗学）
園田英弘（日文研教授、歴史社会学）
高木侃（日文研客員教授／専修大学法学部教授、日本法制史・家族法）
谷井俊仁（日文研客員助教授／三重大学人文学部助教授、東洋史（中国史））
谷口昭（日文研私学研修員／名城大学法学部教授、法制史）
辻垣晃一（日文研共同研究員、家族史）
光田和伸（日文研助教授、日本文学）
マルクス・リュッターマン（日文研助教授、日本中世社会史・文化史）
●成果物
笠谷和比古編『公家と武家Ⅲ—王権と儀礼の比較文化史的考察—』（思文閣出版、2006年10月）
●研究発表
2000年　4月 14日　　笠谷和比古「共同研究会の運営方針」 小松和彦「文化人類学における王権論」 石井紫郎「王権と儀礼のコスモロジー」
2000年　4月 15日　アレキサンダー・ニコラエヴィッチ・メジェリヤコフ 「ロシアと日本の国王比較論」 瀧浪貞子「日本古代の女帝論」 江川温「西欧世界における王権と儀礼」
2000年　6月　9日　　臈谷寿「摂関時代の王権」 笠谷和比古「天皇と徳川将軍」
2000年　6月 10日　　村井康彦「王権と儀礼の諸相」 平田茂樹「中国皇帝論」
2000年　8月　4日　　井上浩一「ビザンツ皇帝の凱旋式」
2000年　8月　5日　　橋本義則「奈良時代における王権と宮都」 川嶋将生「中世後期の天皇と芸能」
2000年10月 13日　　下坂守「中世門跡寺院における修法執行手続き」 谷井俊仁「清朝皇帝における対面接触の問題」
2000年10月 14日　　黒田日出男「王権の肖像」 坂口修平「近世のヨーロッパと社会的規律化」
2000年12月　1日　　辻垣晃一「公家社会における婚姻儀礼—婿取り婚から嫁取り婚へ—」 三木亘「王権と医師とイスラム」 平木實「冊封体制における朝鮮国権—国名と印璽に関連して—」
2000年12月　2日　　平山朝治「王権の儀礼的起源と進化」 南川高志「ローマ帝政盛期の皇帝権力と儀礼」
2001年　1月 26日　　鈴木董「オスマン朝スルタンをめぐるライフ・サイクル、年中行事と儀礼」 竺沙雅章「封禅史略考」
2001年　4月 13日　　元木泰雄「院政の政治構造—その権威と権力—」 頼富本宏「護国御修法成立の思想的基盤」
2001年　4月 14日　　原田正俊「足利将軍と葬送儀礼」 磯田道史「近世武士の儀礼と格式」
2001年　6月　2日　　川島昭夫「王国の森—イングランドの森林法と狩猟—」 大庭脩「漢代の皇帝権」

2001年　8月　3日　　松原正毅「遊牧の王権」 名和修「近世における朝廷儀礼の復興」
2001年　8月　4日　　辻正博「唐宋時代における刑罰と皇帝権」 小野芳彦「『寛政重修諸家譜』データベースの概要」 津田順子「琉球王権と仏教—正月儀礼を中心に—」
2001年 10月　5日　　臈谷寿「摂関盛期における天皇の葬送」 テモテ・カーン「狂言と権力—『媒介者』としての役割を中心に—」
2001年 10月　6日　　谷口昭「中世王権の虚構と実像」 渡辺浩「王都遊覧—北京・ヴェルサイユ・江戸—」
2001年 12月　7日　　源城政好「室町期における禁裏小番」 蒋立峰「騎馬文明の中日比較—その9つの問題—」 江川温「中世フランス国王の墓所と墓」
2002年　1月 25日　　平山朝治「『父殺し』と天皇制—ホカート=フロイト的観点から—」 竺沙雅章「宋代宮廷の葬送」 橋本義則「日本古代における立后儀礼」
2002年　4月　5日　　笠谷和比古「共同研究総括および国際シンポジウム開催について」 下坂守「中世門跡寺院における修法」 三木亘「イスラム世界におけるカリフ制」
2002年　4月　6日　　川嶋将生「室町将軍と芸能儀礼」 服部良久「ドイツ中世の国王統治とコミュニケーション行為」 西山恵子「平等院の一切経会について」
2002年　6月 14日　　平田茂樹「政治日記から見た中国宋代の政治構」 井上浩一「ビザンツ皇帝の葬儀と場所」
2002年　6月 15日　　辻正博「中国中世における皇帝権と律令」 アレキサンダー・ベネット「武士道の定義の追求」
2002年　8月 30日　　王地山公園ささやま荘、青山歴史村にて合宿
2002年　8月 31日　　善導寺檀信徒会館にて合宿（篠山市立青山歴史村、篠山藩青山家文書見学）
2002年10月　4日　　官文娜「王位継承と血縁集団の構造」 源城政好「室町期の禁裏小番について」
2002年10月　5日　　原田正俊「年中行事にみる足利将軍と仏教諸宗派」 竹村英二「福澤諭吉と武士的素養」
2002年12月　6日　　鈴木董「オスマン朝君主の登場と退場のプロセス」 竺沙雅章「皇帝の葬送儀礼」
2002年12月　7日　　朝治啓三「1264、65年、シモン・ド・モンフォールの議会」 臈谷寿「摂関期天皇の葬送儀礼」 谷井俊仁「清朝皇帝における対面接触の問題」
2003年　1月 24日　　村井康彦「古代天皇制をめぐる諸問題」

066

王権と神祇

●研究域
第2研究域　構造研究（人間）
●共同研究期間
2000（平成12）年4月～2001（平成13）年3月
●研究の概要
王権と宗教に関するテーマは、従来は王権と仏教の関係、つまりは顕密体制論として読み直されてきたが、本研究の課題は、王権と宗教に関する全体を見通すために、まずは王権と神祇の関係を洗い直すところにあった。

学界には、戦後長らく、戦中期国民精神としての神道イメージへの反発があったが、今やそのようなイデオロギー偏重の見方から脱却し、新たな神道・神祇史を立ちあげることが要請されているといえるだろう。
このため、日本文学・民俗学・宗教学の研究者を糾合し、日本社会の王権と神祇をめぐる構造を東アジア世界にフィードバックし、なおかつ東アジア世界から再発信するために、中国・台湾・韓国の研究者との交流も視野に入れつつ、王権と宗教のパラダイムの修正を迫った。（公募研究）
●研究代表者
今谷明（日文研客員教授／横浜市立大学国際文化学部教授、日本中世史）
●幹事
千田稔（日文研教授、地理学・日本古代史）
●班員
赤坂憲雄（東北芸術工科大学東北文化研究センター所長、民俗学・日本精神史）
阿部泰郎（名古屋大学大学院文学研究科教授、日本中世文学）
伊藤聡（早稲田大学第二文学部非常勤講師、宗教学）
大谷節子（神戸女子大学文学部助教授、日本中世文学）
岡田荘司（國學院大學文学部教授、宗教学）
エミリア・ガデレフ（四国大学文学部講師、日本古代神話・比較神話学）
嵯峨井建（賀茂御祖神社権宣、神道史）
白山芳太郎（皇學館大学文学部教授、日本中世史）
高橋美由紀（東北福祉大学社会福祉学部教授、日本文学）
田中貴子（京都精華大学人文学部助教授、日本文学）
中村生雄（大阪大学大学院文学研究科教授、宗教学・思想史）
西岡芳文（神奈川県立金沢文庫学芸員、日本中世史）
西宮秀紀（愛知教育大学教育学部助教授、日本古代史）
西山厚（奈良国立博物館資料管理研究室長、日本仏教史）
西山克（京都教育大学教育学部教授、日本中世史）
西山良平（京都大学総合人間学部教授、日本古代史）
兵藤裕己（成城大学文芸学部教授、日本中世文学）
松岡心平（東京大学大学院総合文化研究科助教授、日本中世文学）
●成果物
今谷明編『王権と神祇』（思文閣出版、2002年6月）
●研究発表
2000年　6月 12日　　西山良平「古代天皇の不予と讓国」
2000年　6月 13日　　伊藤聡「麗気灌頂について」 西山克「中世王権と怪異」
2000年　8月 28日　　阿部泰郎「重源と後白河法皇と伊勢神宮—『東大寺衆徒伊勢大神宮記』をめぐりて—」 松岡心平「金春禪竹の能楽論とその背景—中世神道説との関わりのなかで—」
2000年　8月 29日　　大谷節子「和歌秘伝書と王権」 西岡芳文「軒廊御卜について」
2000年11月　1日　　今谷明「神判と王権—くじ引き将軍足利義教をめぐって—」 嵯峨井建「神社行幸について」
2000年12月 16日　　岡田荘司「神社神殿の創建について」 春日若宮おん祭見学
2000年12月 17日　　中村生雄「賛と放生と王権—気多大社『鸛祭』を手がかりとして—」
2001年　3月 27日　　白山芳太郎「神国観の中世的変容」
2001年　3月 28日　　西宮秀紀「律令国家・王権と神祇—奉幣をめぐって—」

067 徳川日本の家族と社会

●研究域
第2研究域 構造研究（人間）
●共同研究期間
2000（平成12）年4月～2003（平成15）年3月
●研究の概要
本研究は、当時、日文研で整備中であった「徳川日本家族人口データベース」を共同利用して、徳川日本社会と家族について、これまでになく精度の高い実証分析を行うことにあった。とくに重点をおいたのは、個人のレベルまでを分析対象としたこと、地域的多様性の分析、の2点であった。
もちろん、近代以前の日本社会と家族についてはこれまでにも多大な研究蓄積があるが、時代・地域・階層・性別・世帯構成などの異なる個人の人生が、当時の社会構造や家族制度によっていかに形づくられていたのかというミクロな視点からの実証研究は、資料的制約からなかなか行えなかったのが実情である。
他方、一地域についてのモノグラフ的研究を超え、日本全国をカバーして地域的傾向を統計的に描出することも、やはり資料的制約から難しかった。
本研究は、これらの制約を一挙に突破して、所期の目的を達成しようとしたものである。
●研究代表者
落合恵美子（日文研助教授、社会学）
●幹事
森洋久（日文研助教授、情報科学）
●班員
磯田道史（慶應義塾大学文学部非常勤講師、日本史）
太田素子（湘北短期大学幼児教育科教授、社会史）
小野芳彦（北海道大学大学院文学研究科教授、情報学）
川口洋（帝塚山大学経営情報学部教授、地理学）
鬼頭宏（上智大学経済学部教授、社会経済史）
木下太志（筑波大学社会学系教授、人口人類学）
沢山美果子（順正短期大学幼児教育科教授、日本史）
嶋陸奥彦（東北大学大学院文学研究科教授、人類学）
高木正朗（立命館大学産業社会学部教授、社会学）
坪内良博（甲南女子大学文学部教授、社会学）
坪内玲子（龍谷大学名誉教授、社会学）
中里英樹（甲南大学文学部助教授、社会学）
シワニ・ナンディ（ユーザイ（株）インターナショナルコーディネーター、日本研究）
東昇（九州国立博物館（仮称）設立準備室研究員、日本史）
平井晶子（京都大学医療技術短期大学部非常勤講師、社会学）
廣嶋清志（鳥根大学法文学部教授、人口学）
藤井勝（神戸大学文学部助教授、社会学）
松浦昭（神戸商科大学商経学部教授、経済史）
溝口常俊（名古屋大学大学院環境学研究科教授、地理学）
森謙二（茨城キリスト教大学教授、法社会学・法社会史）
八木透（佛教大学文学部教授、民俗学）
山本準（鳴門教育大学学校教育学部助教授、社会学）
石井紫郎（日文研教授、法制史）
笠谷和比古（日文研教授、日本史）
侯楊方（日文研外国人研究員／復旦大学中国歴史地理研究所講師、中国人口史）
周紹泉（日文研外国人研究員／中国社会科学院歴史研究所教授、中国明清史）

高木侃（日文研客員教授／専修大学法学部教授、日本法制史・家族法）	
村山聡（日文研客員助教授／香川大学教育学部助教授、西洋史）	
李卓（日文研外国人研究員／南開大学歴史研究所教授、日本家族史）	
●成果物	
落合恵美子編著『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話—』（ミネルヴァ書房、2006年4月）	
●研究発表	
2000年 5月19日	森本一彦「複檀家制に見る親族イデオロギー—宗門改帳の分析—」 平井晶子「近世農村における婚入者の帰属について—二本松藩人別改帳の定量分析を中心として—」 森謙二「女性の帰属—労働・姓・祭祀—」 コメント：石井紫郎
2000年 5月20日	落合恵美子「本共同研究会の趣旨と史料・データベース」 村山聡「ヨーロッパ社会科学史学会報告」
2000年 6月23日	松富直子「デモ：Shumonプログラムによる入力と校正」 Shumonプログラム実習 小野芳彦「基本テーブルの構造と基本情報の出し方」
2000年 6月24日	落合恵美子、平井晶子「RDBを用いた分析」 利用データを用いた実習
2000年 7月14日	落合恵美子「東アジア人口・家族史研究の現在：日本と中国」 侯楊方「The Household and Family in China:1900～1950」
2000年 7月15日	周紹泉「中国明代人口統計的経緯與万曆休寧県黄冊底籍試解」（通訳：唐権）
2000年 9月29日	村山聡「日本の学術雑誌における家族史研究」 中里英樹「近世東北農村における成人親子同居—ライフコース移行の規定要因—」 山本準「姉家督慣行を遡る—常陸国茨城郡有賀村を事例として—」
2000年11月17日	木下太志「江戸期農民の人口移動パターン—東北農村の宗門改帳の分析から—」 溝口常俊「下伊那郡雲雀沢村の歴史地理—新発見の近世史料をもとに—」 磯田道史「近世大名家臣の『世帯』と奉公人」
2000年11月18日	リチャード・ルビンジャー「日本の読み書き能力研究の問題点」 東昇「伊予国の宗門改について」
2000年12月15日	八木透「隠居慣行から見た家族関係：民俗学の視覚から」 高木侃「近世庶民の隠居：隠居契約証文とその自助努力をめぐって」 落合恵美子「徳川農民は異世代夫婦の同居を避けたか：濃尾と二本松における婚姻と相続のタイミング」
2000年12月16日	メアリ・ジョーンズ・ピコネ「Medical Discourse on Mabiki and Religion: Changes in Mentalite」
2001年 4月27日	高木正朗「仙台藩の人別改帳—資料検討の試み—」 松浦昭「宗門改帳の史料の検討—生年月日・前文・作成手順—」 森本一彦「宗門人別改帳の記載様式と旦那寺—美濃国安八郡楡保村の事例を中心として—」
2001年 4月28日	リチャード・ルビンジャー「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本—」 李卓「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
2001年 6月15日	川口洋「南山御蔵入領への移住者募集の方法」 磯田道史「津山藩領山北村の足軽・中間奉公」 太田素子「伝承譚に現れた農民家族の生殖観と子育

	て意識—宮負定雄研究ノート—」
2001年 6月16日	李卓「日本の婿養子と中国の贅婿」
2001年 7月13日	宇野隆夫「日本列島の家と家の集合形態—考古学から—」 辻垣晃一「中世前期の婚姻—公家と武家における嫁取婚の成立時期について—」 藤井勝「住民登録からみたタイ農村家族—東北地方の一事例から—」
2001年 9月21日	森謙二「明治国家と家：近世の家との比較、日本型近代家族との関連で」 嘉本伊都子「国際結婚と国民国家」 官文娜「古代社会における近親婚と親族集団の構造について：日中比較」
2001年 9月22日	平井晶子「19世紀における家の確立とライフコースの均質化：東北農村の場合」 小野芳彦「人口指標：寛政重修諸家譜から抽出できるものできないもの」
2001年10月13日	東昇「肥後国天草における人の移動—旅人改帳・往来請負帳—」 村山聡「天草諸島における隠れキリシタンのライフコースと世帯」 小野芳彦「東シナ海沿岸の家族と人口：肥前国彼杵郡野母村1766～1871」
2001年10月14日	官文娜「平安時代の養子およびその文化」
2001年11月30日	廣嶋清志「石見の人口・世帯の地域差」 中里英樹「二本松領下守屋村における高齢者と子—近接性の規定要因に関する一試論—」 平井晶子「家確立の2つのパターン：東北型と近畿型」
2001年12月 1日	高木侃「離縁状の地域性」 中昌浩「両班制度と家元制度」
2002年 5月10日	書評会 速水融／鬼頭宏／友部謙一編『歴史人口学のフロンティア』（東洋経済新報社、2001年） 書評：廣嶋清志、川口洋、森謙二 リブライ：鬼頭宏、浜野潔 他
2002年 5月11日	書評会 坪内玲子著『継承の人口社会学』（ミネルヴァ書房、2001年） 書評：磯田道史、落合恵美子 リブライ：坪内玲子
2002年 5月12日	タマラ・ハレブン「西陣伝統絹織物産業における家族と労働」
2002年 6月14日	磯田道史「近世大名家臣団の社会構造」 高橋美由紀「地域の中の地方都市—歴史人口学からみた近世後期在郷町の発展—」 木下太志著『近代化以前の日本の人口と家族』（ミネルヴァ書房、2002年） 書評：平井晶子
2002年 6月15日	千種キムラ・スティーブン「平安女性作家の社会的背景」 タマラ・ハレブン「Historical Changes in the Life Course: Their Implications for the Family」
2003年 3月 1日	坪内良博「武士のライフコース—徳山藩藩士を中心に—」 磯田道史「幕末武士の家計簿—発見された金沢藩士の詳細な記録—」 高木侃「武士の離婚と離縁状」 八木透「村・祭祀・家族—西播磨の当屋制と村落構造—」
2003年 3月 2日	木下太志「世帯と家族の研究史—文化人類学と歴史

	学を中心として—」
	高木正朗「18～19世紀東北日本の前近代型死亡パターンの概要—過去帳をもちいた村方と浦方の比較研究—」 森本一彦「半檀家にみる『家』の歴史的展開」 松浦昭「支配形態と宗門改帳記載」 Elaine Baxter「A Protestant Family in Nineteenth-century American Social History」
2003年 3月 3日	中里英樹「近世濃尾農村における世帯構成の動態—ライフコースにおける規定要因の分析—」 溝口常俊「甦る地域空間—尾張と美濃の近世・近代—」 川口洋「過去帳分析システムを含むDANJURO ver.3.0について」 山本準「徳川期の子供の教育について」

068 「東アジア」的空間と都市との関係体の形成と変容

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅱ）
●共同研究期間
2000（平成12）年4月～2003（平成15）年3月
●研究の概要
都市は、一般的にその勢力圏を越えた空間と多面的な関係をつくる。とくに、都市機能を指標とした都市的階層の上位クラスに位置する都市は、国家という、領域を越えた空間の形成に関与してきた。
本研究は、古代から近・現代にいたる「東アジア」という地理的空間を対象に、さまざまな分野の「都市史」と「都市誌」の叙述を交錯させて、それぞれの都市がどのようにして「東アジア」的空間としての関係体をつくり、かつ変容させてきたか、その歴史的過程を描こうとしたものである。
●研究代表者
千田稔（日文研教授、歴史地理学）
●幹事
宇野隆夫（日文研教授、考古社会史）
●班員
相原和邦（広島大学大学院教育学研究科教授、近代日本文学）
青木淳（高知女子大学文化学部助教授、日本美術史）
秋山元秀（滋賀大学教育学部教授、歴史地理学）
東潮（徳島大学総合科学部教授、朝鮮考古学）
内田忠賢（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授、人文地理学）
小方登（京都大学大学院人間・環境学研究科助教授、地域情報学）
愛宕元（京都大学総合人間学部教授、中国都城論）
金子裕之（奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部長、比較都城論）
金坂清則（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、都市地理学）
亀田修一（岡山理科大学総合情報学部教授、朝鮮考古学）
管寧（岐阜聖徳学園大学経済情報学部教授、日中比較経済史）
木原克司（鳴門教育大学学校教育学部教授、日本都城論）
許衛東（大阪外国語大学外国語学部助教授、中国経済地理学）
黄曉芬（東亜大学総合人間・文化学部教授、中国考古学）
小島泰雄（神戸市外国語大学大学院外国語学研究科助教授、中間地域研究）
佐野静代（滋賀大学教育学部助教授、歴史地理学）
渋谷鎮明（中部大学国際関係学部助教授、集落文化論）
高橋誠一（関西大学文学部教授、東アジア都城論）

高橋徹（滋賀県立大学人間文化学部非常勤講師、日本古代学）
瀧浪貞子（京都女子大学文学部教授、日本都城論）
田中淡（京都大学人文科学研究所教授、中国建筑史）
田中俊明（滋賀県立大学人間文化学部助教授、朝鮮古代史）
西岡尚也（琉球大学教育学部助教授、国際理解教育論）
野間晴雄（関西大学文学部教授、東南アジア地域研究）
河廷龍（滋賀県立大学人間文化学部非常勤講師、韓国史）
松下煌（東アジアの古代を考える会代表幹事、日本古代学）
溝口常俊（名古屋大学大学院環境学研究科教授、都市システム論）
山近久美子（防衛大学校人間文化学科講師、日本古代都市論）
井波律子（日文研教授、中国文学）
徐光輝（日文研客員助教授／龍谷大学国際文化学部助教授、中国考古学）
菅谷文則（日文研客員教授／滋賀県立大学人間文化学部教授、考古学）
廣重友子（日文研共同研究員、文化地理学）
松田利彦（日文研助教授、近代日朝関係史）
水内俊雄（日文研客員助教授／大阪市立大学文学部助教授、社会地理学）
安田喜憲（日文研教授、環境考古学）
頼富本宏（日文研教授、仏教学・仏教美術）
劉建輝（日文研助教授、比較文学）
●研究発表
2000年 5月20日 研究方針について・東アジアとは？（自由討議）
2000年 7月15日 小方登「衛星写真でみる渤海都城プラン」 劉建輝「文学にみる旧満州の都市」
2000年 9月30日 千田稔「慶州の都市発達史」 渋谷鎮明「植民地期朝鮮における都市計画と日本人の居住」
2000年12月 9日 青木淳「都市と勧進のネットワーク―東大寺復興と入宋僧―」 秋山元秀「中国内陸都市の展開と変貌―河南と四川の調査から―」
2001年 5月26日 松田利彦「現代のソウルを見て」 田中俊明「高句麗平壤城について」
2001年 7月23日 筑紫野市営地岳の新発見の神龍石見学と現地討議 草場啓一「新発見の神龍石と大宰府について」
2001年 7月24日 佐伯弘次「福岡中世の海外交流」
2001年10月21日 愛宕元「唐長安城掖庭宮（後宮）の規模と住人―唐代における後宮の女性たち―」 天野太郎「東アジアの歴史的都市における観光資源とその活用―西安の事例について―」
2001年12月 8日 木原克司「難波京研究の現状と課題」 野間晴雄「近代大阪論の課題―工都をめぐる周縁と東アジア―」
2002年 4月28日 西岡尚也「歴史都市である那覇からみえるもの―その歴史と文化から琉球（沖縄）をとらえ直す―」 高橋誠一「首里城下町 唐栄久米村」
2002年 6月23日 相原和邦「文学が捉えた都市―20世紀初頭の北京・東京―」 廣重友子「植民地都市の形成・変容と文学」
2002年10月 5日 溝口常俊「G.W.スキナーの中国における中心・周辺論について」 金坂清則「イザベラ・バード『中国奥地紀行』（1899）にみる揚子江域の都市」
2002年11月 9日 鄭在書「苑囿：帝国の空間を描く ―〈子虚賦〉と〈上林賦〉を例にして―」
2003年 3月18日 高橋徹「『まちのかたち』と文化―閉鎖性と開放性―」 黄曉芬「中国先史時代の都市構造」 東潮「中国南朝の都城と墓制」
2003年 3月19日 亀田修一「百済の王京について」 内田忠賢「都市民俗生活の試み：ムラのなかのマチ」

069 欠如・逆欠如の観点から見た日本の生活文化	
●研究域	
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）	
●共同研究期間	
2000（平成12）年4月～2004（平成16）年3月	
●研究の概要	
課題名にいう「欠如」とは、「外国にあるものが日本にない」というものの見方であり、「逆欠如」とは、「日本にあるものは外国にある」というものの見方である。「逆欠如」という概念は研究代表者によって理論化されたものであるが、日本の生活文化の諸相を、この二つの相互に異なる観点の意図的利用によって分析を深めることが、本研究の目的であった。	
このため、衣・食・住はもちろん、学校や家庭や地域、さらには職場や都市の問題など、日本人が日常的にかかわる生活文化を徹底的に国際比較することによって、問題点の発見と、より深みのある理解を獲得することをめざした。	
●研究代表者	
園田英弘（日文研教授、比較社会学）	
●幹事	
井上章一（日文研教授、建築史）	
●班員	
赤岡仁之（武庫川女子大学生生活環境学部助教授、生活環境学）	
浅見雅男（文藝春秋社編集部文春新書局次長、ジャーナリズム研究）	
嘉本伊都子（京都女子大学現代社会学部講師、社会学）	
ポーリン・ケント（龍谷大学国際文化学部助教授、社会学）	
斎藤清明（毎日新聞社京都支局編集委員、マスコミュニケーション学）	
佐田智子（朝日新聞社総合研究センター主任研究員、教育問題）	
佐藤バーバラ（成蹊大学文学部教授、社会史・文化史（近代））	
苑田知江（作家、生活学）	
高木博志（京都大学人文科学研究所助教授、日本史）	
高田公理（武庫川女子大学生生活環境学部教授、文化人類学）	
ツバタナ・クリステワ（東京大学大学院人文社会系研究科客員教授、日本文化と文学）	
土居浩（ものづくり大学技能工芸学部講師、地理学・人文人類学）	
濱名篤（関西国際大学人間学部教授、社会学）	
原田信男（札幌大学女子短期大学部教授、日本文化史）	
引馬滋（中小企業用リスク情報データベース運営協議会代表理事、経済学）	
廣瀬千紗子（同志社女子大学現代社会学部教授、日本文化史）	
眞嶋亜有（警察大学校非常勤講師、社会史）	
猪瀬直樹（日文研客員教授／作家、現代史）	
小谷野敦（日文研客員助教授／著述業）	
佐藤友美子（日文研客員教授／サントリー（株）不易流行研究所研究部長、都市文化論）	
●成果物	
園田英弘編著『逆欠如の日本生活文化―日本にあるものは世界にあるか―』（思文閣出版、2005年6月）	
●研究発表	
2000年 5月13日	園田英弘「逆欠如とは何か―理論篇と応用篇―」 白幡洋三郎「花見は世界にあるか」
2000年 6月10日	苑田知江「ブランド志向の比較考現学―ルイ・ヴィトンを持つ女―」 ポーリン・ケント「『日本的』コジンシュギ」 園田英弘「世界に東京大学はあるか・再考」
2000年 7月 1日	園田英弘「世界に東京大学はあるか：世界の東京大学

	問題再考」 佐藤友美子「日本型商品開発」
2000年 9月 9日	引馬滋「世界にある？『連れ残業』：日本のホワイトカラー文化」 佐藤バーバラ「Fragments of Communication（1）：家族像との関連」
2000年10月14日	井上章一「手すりとは海外にあるか？」 テモテ・カーン「日本の祖先崇拝から見た北米のアンセスター観」
2000年12月 9日	濱名篤「学校掃除や学校当番は世界にあるのか」 高田公理「座談会とディベート」
2001年 2月 3日	猪瀬直樹「『日本国の研究』再考」 バルト・ガーンズ「『日本の蹴球』は世界にあるか？」
2001年 4月14日	栗山茂久「日本人の肩こり」 高木博志「近代天皇制の秘儀と御物」
2001年 6月16日	嘉本伊都子「国際結婚は日本産である!？」 ツバタナ・クリステワ「涙の詩学―王朝文化の詩的言語―」
2001年 9月22日	苑田知江「下着の比較考現学―日本人における『白』の意味と機能―」 浅見雅男「華族は貴族か？―〈欠如〉の観点から見た近代日本―」
2001年11月10日	早川開多「春画の世界は世界にあるのか？」 申昌浩「世界に『家元』制度はあるか―両班世界から見た家元制度―」
2001年12月15日	佐々木瑞枝「日本語のジェンダー―表現をキーワードに―」 濱名篤「『老人いじめ（孤立）』は普遍的な問題か」
2002年10月19日	佐藤康己「『キング』は世界にあるか：国民的大衆雑誌に見る『日本的特色』」 斎藤清明「『棲み分け』理論から見た日本の特色：今西理論の射程」
2002年12月14日	高橋伸子「ゼネコンは世界にあるか―会計から見た日本建築業の特質―」 白幡洋三郎「校庭（学校運動場）は海外にもあるか」
2003年 3月15日	総合討論「私たちが見つけた文化比較の項目」
2003年 9月13日	佐田智子「歌俳は世界にあるか―新聞のコーナーに見る日本―」 書評会：園田英弘著『世界一周の誕生―グローバリズムの起源―』 評論者：白幡洋三郎
2003年12月13日	眞嶋亜有「水虫一足に輝く近現代日本の栄光とその痕跡―」 土居浩「『火葬』で国際的共通理解が可能か？」

070	生きている劇としての能：謡曲の多角的研究
●研究域	
第2研究域 構造研究（自然）	
●共同研究期間	
2000（平成12）年6月～2001（平成13）年3月	
●研究の概要	
「能」が西洋人に発見された明治時代以来、「謡曲」は母国の日本ではあくまで舞台劇の台本としてしか扱われないのに引き換え、西洋では主に	

文学として鑑賞されてきた。日本で「謡曲」が文学として高く評価されないことを知って、驚かない西洋人はいない。	
一方で、舞台抜きの「能」は本当の「能」ではありえない。と同様に、「謡曲」の文学的内容に無関心な「能」観劇も、本当の「能」鑑賞ではないだろう。	
本研究では、研究者と境界の人々が相見え、舞台とテキストの関係を多角的に検討し、こうした状況下にある「能」「謡曲」のあるべき姿を追究した。（公募研究）	
●研究代表者	ジェイ・ルービン（日文研外国人研究員／ハーバード大学教授、近・現代日本文学）
●幹事	稲賀繁美（日文研助教授、比較文学比較文化・美術史・仏語仏文学）
●班員	天野文雄（大阪大学大学院文学研究科教授、能楽史） 梅若猶彦（静岡文化芸術大学助教授、演劇） リチャード・エマート（武蔵野女子大学文学部教授、日本古典文学） 大倉源次郎（大倉流十六世宗家小鼓方、能楽） 河村晴久（観世流シテ方、能） 佐伯順子（帝塚山学院大学文学部教授、比較文学） 田代慶一郎（筑波大学名誉教授、日本古典芸能） 中西進（大阪女子大学長、比較文学・日本文学） 西野春雄（法政大学能楽研究所長、能楽） スティブン・ネルソン（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター助教授、日本音楽史学） 藤田六郎兵衛（藤田流宗家笛方、能楽） モニカ・ベーテ（大谷大学文学部教授、能楽） ヨコタ＝村上ジェリー（大阪大学言語文化部助教授、日本古典文学） 西原大輔（日文研客員助教授／駿河台大学法学部助教授、比較文学・比較文化） 光田和伸（日文研助教授、日本文学） ケネス・リチャード（日文研客員教授／県立長崎シーボルト大学国際情報学部教授、日本文学）
●成果物	日文研叢書37、ジェイ・ルービン／田代慶一郎／西野春雄編『桂坂謡曲談義―高砂／定家／三井寺／弱法師／鞍馬天狗―』（日文研、2006年3月）
●研究発表	2000年 7月24日 『高砂』についての話し合い 『白髭』についての話し合い 上記の曲の比較検討、初番目物全体の話し合い
2000年 7月25日	『忠度』についての話し合い 『兼平』についての話し合い 上記の曲の比較検討、二番目物全体の話し合い
2000年 9月25日	『井筒』についての話し合い 『定家』についての話し合い 上記の曲の比較検討、三番目物全体の話し合い
2000年 9月26日	『卒都婆小町』についての話し合い 『松虫』についての話し合い 上記の曲の比較検討、四番目物全体の話し合い
2000年11月27日	『邯鄲』についての話し合い 『三井寺』についての話し合い 『邯鄲』『三井寺』の曲の比較検討、四番目物全体の話し合い
2000年11月28日	『山姥』についての話し合い 『鶴』についての話し合い 『山姥』『鶴』の曲の比較検討、五番目物全体の話し合い
2001年 1月22日	『弦上』についての話し合い 『経政』についての話し合い 『弦上』『経政』の曲の比較検討、能における管弦の話し合い

	し合い
2001年 1月23日	『藤戸』についての話し合い 『鞍馬天狗』についての話し合い 『藤戸』『鞍馬天狗』の曲の比較検討
2001年 3月26日	『江口』についての話し合い 『恋重荷』についての話し合い 『江口』『恋重荷』の曲の比較検討
2001年 3月27日	『弱法師』についての話し合い ロイヤル・タイラー「能の機織り―『呉服』と『綿木』を中心に―」 モニカ・ペーテ「能に出る染色関係の色々」 『呉服』と『綿木』についての話し合い

071 日本語系統論の現在

●研究域
第1研究域 動態研究（基層）
●共同研究期間
2001（平成13）年4月～2002（平成14）年3月
●研究の概要
日本語系統論の研究は欧米・日本において盛んに行われているが、仮説がたくさんあるものの定説はまだない。しかも、この問題に関しては、これまで欧米と日本の研究者間に協力・交流がほとんどなされていなかった。
一方で、1980、90年代には日本語の復元がすすんだうえ、日本語と比較すべき諸言語の研究もすすんだ。こうしたところから、日本語系統論に関しては、現状では「混合言語」という仮説と「アルタイ系」とする仮説が有力になってきている。
そこで、本研究では、欧米と日本との、さらに両系統論の研究者がそれぞれの主張をたたかわせ、日本語系討論に合意が形成される場づくりをめざした。（公募研究）
●研究代表者
アレキサンダー・ボビン（日文研客員助教授／ハワイ大学助教授、言語学）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、国文学）
●班員
家本太郎（京都大学留学生センター助教授、言語学）
板橋義三（九州大学大学院比較社会文化研究科助教授、言語学）
大西正幸（名桜大学国際学部教授、言語学）
風間伸次郎（東京外国語大学外国語学部助教授、言語学）
切替英雄（北海学園大学工学部助教授、言語学（アイヌ言語））
児玉望（熊本大学文学部助教授、言語学）
小林正人（白鴎大学経営学部専任講師、歴史言語学）
高橋慶治（愛知県立大学外国語学部助教授、言語学（チベット語））
津曲敏郎（北海道大学大学院文学研究科教授、言語学（ツングース語））
中川裕（千葉大学文学部教授、言語学（アイヌ語））
林徹（東京大学大学院人文社会系研究科助教授、言語学（チュルク諸語））
日野資成（福岡女学院大学人文学部専任講師、国語学）
福井玲（東京大学大学院人文社会系研究科助教授、朝鮮語学）
ブレイン・エリクソン（金沢工業大学工学部講師、言語学）
峰岸真琴（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授、言語学（オーストラアジア語））
ウィリアム・ロジスキー（早稲田大学理工学部客員講師、言語学）
井上章一（日文研助教授、建築学）
長田俊樹（日文研客員教授／京都造形芸術大学芸術学部教授、言語学）

●成果物
日文研叢書31、アレキサンダー・ボビン／長田俊樹共編、ケリー・ラッセル英文編集『日本語系統論の現在―Perspectives on the Origins of the Japanese Language―』（日文研、2003年12月）
●研究発表
2001年 5月11日 アレキサンダー・ボビン「日本語系統論の現在：これからどこへ」
2001年 5月12日 板橋義三「日本語の形成過程の探究における現在位置―混成言語としての日本語：アルタイ諸語（含朝鮮語）とオーストロネシア諸語との関係―」
2001年 7月20日 風間伸次郎「日本語、朝鮮語、及びアルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）は本当に似ているのか―対照文法の試み―」 長田俊樹「日本語系統論はなぜはやらなくなったのか」 ジョン・ウィットマン「6（もしくは7）母音説から見たProto-Japanese-Ryukyuanとpre-Middle Koreanの比較」
2001年 7月21日 峰岸真琴「比較形態論へのパラメトリックアプローチ」
2001年 9月22日 津曲敏郎「ツングース語と日本語の文法上の類似点」 松本克己「日本語の系統と類型地理論」
2001年 9月23日 ブレイン・エリクソン“Old Japanese and Proto-Japonic word structure” 崎山理「日本語の形成におけるオーストロネシア語族の要素」 ユハ・ヤンフネン“A framework for the study of Japanese language origins”
2001年 11月 3日 高橋慶治「チベット・ビルマ系言語と日本語系統論」 児玉望「膠着再考」
2001年 11月 4日 ウィリアム・ロジスキー“When did the Japanese language arrive in the Archipelago?” マーク・ハドソン「考古学からみた日本語系統論」
2002年 1月12日 小林正人「日本語の音節構造と連濁」 日野資成「中央から東国への母音変化と前舌広母音の存在―上代の東国語と中央語の音韻対応をもとに―」
2002年 1月13日 大西正幸「琉球語（特に沖縄北部方言）と日本語系統論についての中間報告」 福井玲「古代朝鮮語についての若干の覚え書き」
2002年 3月 9日 切替英雄「アイヌ語の人称接辞の祖形」 ステファン・ゲオルグ“Japanese, The Altaic theory, and the limits of language classification”
2002年 3月10日 長田俊樹「共同研究会の報告書について」

072 モンゴロイドの自然誌

●研究域
第2研究域 構造研究（自然）
●共同研究期間
2001（平成13）年4月～2004（平成16）年3月
●研究の概要
われわれ日本人が属する人類集団であるモンゴロイドを概観すると、その基層部分についての理解が大きく欠落していることが分かる。モンゴロイドの分岐集団は有史以前、東アジアを起点として人類初の極寒地への進出を果たし、ペリンジア（シベリアアラスカ陸橋）を経てアメリカ大陸へ、また別の一団はオセアニアに乗り出すことによって、人類史上最大規模の移住

拡散をなした。しかし、モンゴロイドの基層を理解する上で重要なこの現象については、いまだに、それがいつ、どのような戦略をもって行われたのか、科学的には解明されていないのである。

本研究は、モンゴロイドの移住拡散現象に対して、関連する専門領域による学際的な共同研究を行い、最初の科学的メスを入れることを直接の目的とする。世界の人口の過半数を占めるモンゴロイド集団の社会とその文化の基層部分の解明を完結させ、ひいては日本人と日本文化の成り立ちを、モンゴロイドという視野の下に考えることをめざした。

●研究代表者
赤澤威（日文研教授、先史人類学）
●幹事
森洋久（日文研助教授、近代文化史・博物館工学）
●班員
青木健一（東京大学大学院理学系研究科教授、集団生物学）
石田肇（琉球大学医学部教授、自然人類学）
印東道子（国立民族学博物館民族社会研究部教授、先史学）
大貫良夫（東京大学名誉教授／野外民族博物館リトルワールド館長、文化人類学）
大野旭（静岡大学人文学部助教授）
小川英文（東京外国語大学外国語学部助教授、東南アジア考古学）
片山一道（京都大学霊長類研究所教授、自然人類学）
木村英明（札幌大学文化学部教授、考古学）
斎藤成也（国立遺伝学研究所集団遺伝研究系助教授、人類遺伝学）
佐川正敏（東北学院大学文学部教授、考古学）
佐々木史郎（国立民族学博物館民族文化研究部教授、文化人類学）
佐々木利和（東京国立博物館学芸部資料課民族資料室長、アイヌ民族学）
杉藤重信（相山女学院大学人間関係学部教授、民俗学）
関雄二（国立民族学博物館民族社会研究部助教授、文化人類学）
竹沢泰子（京都大学人文科学研究所助教授、文化人類学）
館野義男（国立遺伝学研究所教授、分子進化学）
徳永勝士（東京大学大学院医学系研究科教授、人類遺伝学）
中山一大（東京大学大学院理学系研究科大学院生、人類遺伝学）
楊海英（静岡大学人文学部助教授、文化人類学）
米倉伸之（東京大学名誉教授、自然地理学）
米田穰（国立環境研究所研究員、地球化学）
合庭惇（日文研教授、情報社会論）
宇野隆夫（日文研教授、考古社会学）
千田稔（日文研教授、歴史地理学）
●研究発表
2001年 4月23日 赤澤威「モンゴロイドの自然誌」 楊海英「モンゴロイド人からみた日本人」 赤澤威「モンゴロイドと人類史」
2001年 10月 9日 青木健一「性淘汰とヒトの皮膚色変異」 石田肇「日本列島におけるヒト骨格の形態変異」 印東道子「西部オセアニアへのオーストロネシア集団の拡散」 斎藤成也「東ユーラシア人集団の遺伝的近縁関係」 佐川正敏「長城地帯の先史モンゴロイドの初期農耕をめぐる諸問題」
2001年 10月 10日 館野義男「HLAクラスⅠ遺伝子群の進化」 徳永勝士「HLA遺伝子群からみるモンゴロイドの多様性」 中山一大「アジア地域におけるメラノコルチンⅠレセプター遺伝子の多様性」 米田穰「先史モンゴロイドの海産物利用」
2002年 3月28日 佐々木史郎「寒冷地帯の狩猟技術」
2002年 3月29日 関雄二「モンテ・ベルデ再考」
2002年 6月24日 片山一道「アジアのモンゴロイド」 赤澤威「アウト・オブ・アフリカ」

2003年 3月 7日	データベース「蝦夷生計図説」 赤澤威「目的について」 佐々木利和「内容について」 森洋久「構造について」 「モンゴロイドの世界」出版計画―総合討論
2003年 3月29日	片山一道「先史時代の太平洋横断航海」 関雄二「南米におけるポリネシア文化要素とは？」
2003年 4月25日	竹沢泰子「自然科学と社会科学の対話として人種を考える」 青木健一「兄妹相姦の禁忌が平等社会で広がるための条件」

073 日本植民地法制度の形成と展開に関する構造的研究

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
2001（平成13）年4月～2002（平成14）年3月
●研究の概要
本研究の目的は、近代の日本帝国がいかなる性格の国家と社会を形成し、外部の周辺地域社会といかなる関係によって接合されていたのかを、法制度全体の構造を切り口としながら解明しようとするところにある。
その際、明治日本の国内法制が条約改正という外交上の要請を契機として整備されていったように、帝国法制の構造を対外政策と絡めて理解し、外交上の必要性や国内政治史との関係も視野に入れておく必要があるだろう。近年の植民地研究において社会史的なアプローチが流行しているが、外交や政治、そして法という素材は、しかるべき結論を前提とせず、相互の検証のなかで実証研究をすすめていくために極めて適切であり、社会史も含めた歴史学全体の視野拡大に貢献するはずである。
研究を設計するにあたっては、関連する学問領域の研究者を可能な限り幅広く集め、日本近代史研究に一石を投じることを目標にした。（公募研究）
●研究代表者
浅野豊美（日文研客員助教授／中京大学教養部助教授、東アジア国際関係史・政治学）
●幹事
松田利彦（日文研助教授、朝鮮近代史）
●班員
吉川仁（中京大学教養部教授、行政法・憲法）
近藤正巳（近畿大学文芸学部教授、台湾近現代史）
酒井一臣（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、日本外交史）
酒井哲哉（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本政治史・外交史）
田浦雅徳（皇學館大学文学部助教授、日本政治外国史）
長尾龍一（日本大学法学部教授、法思想史）
波多野澄雄（筑波大学社会科学系教授、日本政治外交史）
藤森智子（慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程、台湾近現代史・政治学）
馬曉華（大阪教育大学教育学部助教授、国際関係史）
益子英雄（中京大学教養部教授、社会学）
水野直樹（京都大学人文科学研究所教授、朝鮮近代史）
文竣暎（京都大学人文科学研究所外国人共同研究員、法学（刑事法））
森山茂徳（東京都立大学法学部教授）
山口輝臣（九州大学大学院人文科学研究院助教授、日本近現代史）
山崎有恒（立命館大学文学部助教授、日本近代政治史）

李鐘暎（京都市大学人文科学研究所外国人共同研究員、社会史・犯罪社会学）	
劉夏如（東京大学大学院総合文化研究科博士課程、台湾法制史）	
リン・ヒョング（一橋大学経済研究所客員研究員、朝鮮近代史）	
洪郁如（日文研共同研究員、近現代台湾社会史・女性史）	
●成果物	
浅野豊美／松田利彦編『植民地帝国日本の法的構造』（信山社出版、2004年3月）	
浅野豊美／松田利彦編『植民地帝国日本の法的展開』（信山社出版、2004年6月）	
●研究発表	
2001年 5月 12日	参加者から各自の問題意識について発表
2001年 5月 13日	浅野豊美「日本帝国法制の研究視角と現代的意義」
2001年 7月 15日	大沼保昭「『講演と討論』戦後在日朝鮮人の法的地位の形成」 文竣暎「六三法体制と植民地法院の構成問題」
2001年 9月 16日	劉夏如「植民地特別法域の形成と準国際私法台湾旧慣立法事業再考」 酒井一臣「『文明国標準』としての協調外交―中国共同管理論を中心に―」 酒井哲哉「アナキズムの想像力と国際秩序―橋樑の場合―」
2001年 11月 18日	洪郁如「植民地の法と慣習―台湾社会の養女・媳婦仔・査某嫻をめぐる諸問題―」 李鐘暎「日本本土・朝鮮・関東州における軽犯罪処罰令」 松田利彦「植民地期朝鮮における参政権要求団体『国民協会』について」
2002年 2月 2日	山口輝臣「国籍法以前」 吉川仁「北海道、沖縄、台湾に対する初期植民地支配と土地制度」 水野直樹「植民地住民登録制度の成立―台湾の第1回戸口調査と朝鮮の民籍法実施―」
2002年 3月 30日 ～31日	山崎有恒「満鉄付属地行政権の法的性格―関東軍の競馬場戦略を中心に―」 田浦雅徳「満洲国における治外法権撤廃問題―武部六蔵日記を中心に―」 馬曉華「『大東亜共栄圏』における法秩序再構築への道―不平等条約撤廃を中心に―」 波多野澄雄「大東亜国際法をめぐる攻防―大東亜国際機構と国際法学会・条約局―」 近藤正巳「朝鮮軍と植民地兵役制」 浅野豊美「保護国と併合の狭間―自治をめぐる基本法制と居留地システム―」 森山茂徳「朝鮮における伝統法制と植民法制」 長尾龍一「ドイツ植民地あれこれ」

074 表現における越境と混淆

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圏Ⅰ）
●共同研究期間
2001年（平成13）4月～2004（平成16）年3月
●研究の概要
世紀の変わり目にあって、ありとあらゆる領域において既存のパラダイム

転換がはかれている。	
本研究では、その実態を検証すべく、文学・音楽・美術・建築等々、さまざまな表現領域において、いかにして既存の境界を越え、異質な要素を混淆しながら、新しいものが生み出されていくか、そのプロセスを、主として「表現者」および「表現ジャンル」の二方向から探究した。	
こうして、「表現における越境と混淆」の多種多様な様相を、より具体的なかたちで検証し、浮き彫りにすることができた。	
●研究代表者	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
●幹事	
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）	
●班員	
青柳いづみこ（大阪音楽大学教授、音楽学）	
池内紀（ドイツ文学者、ドイツ文学）	
宇佐美斉（京都市大学人文科学研究所教授、フランス文学）	
上垣外憲一（帝塚山学院大学人間文化学部教授、比較文化）	
佐伯順子（同志社大学文学部教授、日本文学）	
徐蘇斌（東京芸術大学非常勤講師、建築史）	
武田雅哉（北海道大学大学院文学研究科教授、中国文学）	
中村隆文（神戸女子大学文学部教授、教育学）	
西成彦（立命館大学文学部教授、比較文学）	
西川祐子（京都文教大学人間学部教授、フランス文学・日本文学）	
西村大志（広島国際大学人間環境学部講師、文化社会学）	
原章二（早稲田大学政治経済学部教授、哲学）	
細川周平（東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授、音楽学）	
エンゲルベルト・ヨリッセン（京都大学総合人間学部助教授、比較文学）	
稲賀繁美（日文研助教授、比較文学・比較文化・美術史）	
長田俊樹（日文研客員教授／京都造形芸術大学芸術学部教授、言語学）	
小谷野敦（日文研客員助教授／著述業）	
佐藤卓己（日文研助教授、メディア史・広報学）	
白幡洋三郎（日文研教授、造園史・産業技術史）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）	
園田英弘（日文研教授、社会史）	
田中貴子（日文研客員助教授／京都精華大学文学部助教授、日本文学）	
西横偉（日文研客員助教授／愛知県立大学外国語学部助教授）	
早川開多（日文研助教授、美術史）	
光田和伸（日文研助教授、日本文学）	
劉建輝（日文研助教授、日中比較文学・比較文化）	
●成果物	
日文研叢書36、井波律子／井上章一編『表現における越境と混淆』（日文研、2005年9月）	
●研究発表	
2001年 5月 11日	井波律子「研究会主旨説明」 井波律子「中国の画と書について」
2001年 7月 7日	井上章一「金鯢の世界史―地中海から名古屋まで―」 白幡洋三郎「富士山の創造―『文化複合』の視点―」
2001年 9月 14日	田中貴子「みにくい女の物語―仏教説話と女性―」 エンゲルベルト・ヨリッセン「『オリエント』と葡萄牙文学におけるアイデンティティの問題―特に19世紀後半と20世紀前半の著者をめぐって―」
2001年 11月 16日	井上章一「『女の裸（ヌード）』は日本人にとって何だったのか」 佐藤卓己「日本人にとってナチ・カルとは何なのか」
2002年 2月 2日	鈴木貞美「進化、生命、自我―思考型の系譜―」 上垣外憲一「富士山とポール・クローデル」
2002年 5月 18日	山田奨治「表現の所有権をめぐる越境と混淆」 細川周平「声・マイクローフォン・スイング―淡谷のり子と笠置シズ子を中心に―」
2002年 7月 27日	長田俊樹「オリエンタリズム VS オリエンタル・ルネッサ

	ンス―19世紀西洋におけるサンスクリット語再発見―」 池内紀「カフカの筆記用具」
2002年 9月 14日	西村大志「身体の名づけにみるオリエンタリズムとナショナリズム―『蒙古』斑をめぐる―」 宇佐美斉「偽作のはなし」
2002年 11月 16日	中村隆文「動物愛護運動のはじまり」 原章二「小林秀雄の真贋」
2003年 2月 15日	徐蘇斌「異文化体験―建築留学生の事情―」 西川祐子「ニュータウン研究―分断／交信／関係性―」
2003年 5月 31日	細川周平「松竹少女歌劇研究―『春のおどり』と元号転換期の大阪モダン―」 白幡洋三郎「『島台』考」
2003年 7月 19日	井波律子「中国ミステリーの系譜―近代を中心に―」 佐伯順子「性の越境―異性装とジェンダー―」
2003年 9月 27日	鈴木貞美「宮沢賢治の生命観ふたたび」 西成彦「父の気かり―ブラジルのユダヤ文学・日系文学と近代―」
2003年 11月 8日	井上章一「伊勢神宮の彼方に―天地根元宮造から弥生の高床「神殿」まで―」 青柳いづみこ「実際に『越境』してみたら、こんなに大変だった―CD・書籍『水の音楽』同時刊行苦闘記―」

075 近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究

●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅱ）
●共同研究期間
2001（平成13）年4月～2005（平成17）年3月
●研究の概要
中国の東北部、つまり旧「満州」は、日本の近代史においてきわめて重要な場所である。なぜならば、日清戦争をはじめとして、その後の日露戦争、日中戦争、さらに日米戦争にいたるまで、いわば日本の運命を決めた戦争という戦争は、究極のところ、この地域の権益をめぐって起こされたものであり、ある意味において、日本の近代はまさに「満州」を中心に展開されたとさえ認識できるからである。
しかし、この旧「満州」について、これまでではかって十分に研究されてきたとは言い難い。むしろ、旧「満州」、とりわけ「満鉄」に関する歴史学的なアプローチには長い蓄積があり、多くの課題においてかなりの成果をあげている。だが、そのほとんどが政治、経済、あるいは軍事史に偏っており、当時の人々の精神活動、あるいは行動原理に深く影響を与えた社会や文化などについての考察はごくわずかしか存在していない。
本研究は、この欠落している旧「満州」の社会や文化などの諸問題を取り上げ、史実の追跡とともに、この社会を構成していた「在満日本人」の活動を中心に、その生活文化の全体像を解明しようとした。
●研究代表者
劉建輝（日文研助教授、日中比較文化）
●幹事
稲賀繁美（日文研教授、比較文学比較文化・美術史）
●班員
井村哲郎（新潟大学文学部教授、歴史学）
川村湊（法政大学国際文化学部教授、日本文学・比較文学）
岸陽子（元早稲田大学法学部教授、日中比較文学）
君野隆久（京都造形芸術大学助教授、比較文学・比較文化）
佐藤一樹（二松学舎大学国際政治経済学部教授、中国思想・日本思想）

姜克実（岡山大学文学部教授、日本史・日中交流史）	
孫江（静岡文化芸術大学文化政策学部助教授、中国近代史・比較社会）	
竹村民郎（大阪産業大学客員教授、産業社会史・文化史）	
立石揚志（西南学院大学商学部教授、経済史）	
単援朝（崇城大学工学部助教授、日中比較文学）	
テレント・アイトル（北海学園大学文学部教授、日中比較文化）	
中川成美（立命館大学文学部教授、比較文学・比較文化）	
西原和海（文芸評論家、日本文学）	
西原大輔（広島大学大学院教育学研究科助教授、比較文学・比較文化）	
三谷憲正（佛教大学文学部教授、日本文学）	
宮沢恵理子（国際基督教大学教養学部非常勤講師、歴史学）	
安元隆子（日本大学国際関係学部助教授、日露比較文化）	
山口功二（同志社大学文学部教授、社会学・メディア論）	
山田敬三（福岡大学文学部教授、中国文学）	
山本美紀（文化経済学会・日本音楽学会会員、芸術学・音楽学）	
李青（大谷大学文学部助教授、日中比較文化）	
李征（筑波大学文芸言語学系外国人研究者、日中比較文学）	
劉香織（京都産業大学外国語学部助教授、日中比較文化）	
劉岸偉（東京工業大学外国語研究教育センター教授、日中比較文化）	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）	
川島真（日文研客員助教授／北海道大学大学院法学研究科助教授、日中外交史）	
キム・レチュン（日文研外国人研究員／ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員、日本文学・日露比較文学）	
小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学）	
佐藤卓己（日文研客員助教授／京都市大学大学院教育学研究科助教授、メディア学）	
ウィリアム・ショー・シーウェル（日文研外国人研究員／セント・メアリーズ大学助教授、都市史）	
白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文化）	
戦曉梅（日文研外来研究員、比較文化・日中近代美術史）	
園田英弘（日文研教授、社会学）	
西横偉（日文研客員助教授／熊本大学文学部助教授）	
松田利彦（日文研助教授、近代日朝関係史）	
●成果物	
〈雑誌〉『環』第10号（特集 満州とは何だったのか）（藤原書店、2002年7月）	
〈雑誌〉『アジア遊学』第44号（特集 日中から見る「旧満州」）（勉誠出版、2002年10月）	
呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『満洲浪漫』（復刻）第1～7巻（ゆまに書房、2002年7月）	
呂元明／鈴木貞美／劉建輝著『満洲浪漫・別巻―「満洲浪漫」研究―』（ゆまに書房、2003年1月）	
呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『藝文』（復刻）第1～22巻（ゆまに書房、2007年7月～2008年6月）	
呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『藝文』（復刻）第1～7巻〈満洲藝文聯盟版・満洲文藝春秋社版〉（ゆまに書房、2010年9月）	
呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『満洲公論』（復刻）第1～7巻〈満洲公論社版〉（ゆまに書房、2011年1月）	
●研究発表	
2001年 4月 21日	鈴木貞美「研究会を立ち上げる経緯について」 鈴木貞美「『満洲』研究の回顧と展望」 劉建輝「『満洲』幻想の誕生―明治・大正期における諸ジャンルの言説を中心に―」
2001年 6月 30日	松宮貴之「日満支親善書道展」 西原和海「論陥期東北文化研究の現状と今後―『満洲』文学を中心に―」

2001年 10月 13日	孫江「旧『満州』の『秘密結社』（宗教結社）と日本」 西澤泰彦「中国東北地方における日本人建築家の活動」
2001年 12月 22日	川島真「満州・関東州における『ラジオ』史に関する問題提起」 竹村民郎「大連における娼娼運動—日本娼婦の状況に関連して—」
2002年 6月 29日	テレングト・アイトル「（旧）満州におけるモンゴル語新聞『フフトグ（青旗）』について」 劉建輝「近代日本作家と『蒙疆』—保田與重郎を中心に—」
2002年 9月 28日	西原大輔「日本人画家の満州」 麻国慶「定居化とオロチョン族の社会文化変容—旧満州支配されたオロチョン族と1949年以後のオロチョン族の変化を中心として」
2002年12月 21日	ウィリアム・ショール・シーウェル「戦前日本帝国主義の都市表現」 劉岸偉「日本占領期の雑誌を読む—『東西』『風雨談』『天地』を中心に—」
2003年 2月 22日	キム・レチュン「ロシア亡命作家バイコフの満州浪漫」 鈴木貞美「文芸雑誌『満州浪漫』：その位置をめぐって」
2003年 5月 31日	村上圭三「『満鉄図書目録』（昭和14年～昭和20年）作成の経過について」 劉傑「『満鉄図書』の内容と意義」
2003年 7月 12日	川島真「満州国外交史の可能性—満州国研究史の回顧と展望—」 井村哲郎「満鉄調査組織論：拡充調査部とその課題」
2003年 9月 27日	立石揚志「日本企業の中国進出—満州時代と現代—」 劉建輝「受け継がれる帝国の記憶—大連近代都市空間の成立とその変遷—」
2003年12月 12日	〈日文研シンポジウム「近代中国東北部の歴史と文化」〉 劉建輝 主旨説明 呂元明「『満州国』の阿片政策」 王中忱「地理概念としての『靺鞨海峡』の成立とその文化的意味」 宮沢恵理子「建国大学と民族協和」 劉春英「東北淪陥（日本占領）期のイスラム」
2003年12月 13日	〈日文研シンポジウム「近代中国東北部の歴史と文化」〉 李振遠「大連歴史文化の形成と特徴」 宗延平「大連都市文化建設の理論と実践」 楊乃喬「ポストコロニアリズムと現代中国の文化思潮」 劉雨珍「雨遼憲の『満州』認識」 林容澤「日本時代における『満州朝鮮人』文学」 高寧「夏日漱石の『満州』体験」 鈴木貞美「『満州』文化に関する日中共同研究の可能性」
2004年 6月 26日	竹村民郎「日露戦争と満州—『太陽』論説に関連して—」 劉建輝「共同研究報告書作成に関する問題提起—9月に予定される海外（大連・長春・ハルビン）シンポジウムの開催の説明をかねて—」
2005年 2月 19日	単援朝「『満人文学』の『暗さ』について—『日満文学交流』の一面を見る—」 鈴木貞美「『満州』文化研究への私のアプローチ」

076	歴史的空間情報の解析・解釈法の研究
●研究域	第1研究域 動態研究（基層）
●共同研究期間	2002（平成14）年4月～2005（平成17）年3月
●研究の概要	考古学や地理学では、集落や都市の墓の構造、集落網・都市網・墓群の構造、威信財から生活財にわたり各種の品々の分布圏・流通圏にいたる、数多くの歴史的空間情報を蓄積している。これによって、世界の各時代・各地域における、諸文化・諸文明の研究をすすめてきた。 ただし、地域間あるいは国際的な比較研究を行うためには、情報を解析し解釈する共通した方法を確立することが不可欠であり、現在における最も大きな課題になっている。 そこで本研究では、情報学との学際的協力により、歴史的空間的情報をどのようにデータとして蓄積していくか、またそのデータをGIS（地理情報システム）や統計学の手法を用いてどのように解析するか、解析結果をどのように解釈するかについて、文化・文明研究を実践的に推進するなかで確立しようとした。
●研究代表者	宇野隆夫（日文研教授、考古学）
●幹事	森洋久（日文研助教授、情報科学）
●班員	赤澤威（高知工科大学教授、先史人類学） 東潮（徳島大学総合科学部教授、考古学） 安藤廣道（慶應義塾大学文学部助教授、考古学） 伊藤淳史（京都市大学大学院文学研究科助手、考古学） 碓井照子（奈良大学文学部教授、GIS情報学） 小方登（京都大学大学院人間・環境学研究科助教授、人文地理学・地理情報科学） 河野一隆（九州国立博物館設立準備室主任研究員、考古学） 桑原久男（天理大学文学部助教授、考古学） 黄曉芬（東亜大学総合人間・文化学部教授、考古学） 酒井英男（富山大学理学部教授、地球物理学・遺跡探査学） 作花一志（京都情報大学院大学・京都コンピュータ学院教授、天文学） 鋤柄俊夫（同志社大学歴史資料館助教授、考古学） 津村宏臣（東京大学空間情報科学研究センター助手、考古学） 菱田哲郎（京都府立大学文学部助教授、考古学） 藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館研究部助教授、考古学） 増田浩太（鳥根県古代文化センター研究員、考古情報学） 松本岩雄（鳥根県古代文化センター／鳥根県立博物館主査、考古学） 溝口常俊（名古屋大学大学院環境学研究科教授、人文地理学） 宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所主任、考古情報学） 森下章司（大手前大学人文科学部助教授、考古学） 森本晋（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官） 山口欧志（中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程） 吉田広（愛媛大学法文学部助教授、考古学） 吉留秀敏（福岡市教育委員会文化財部文化財主事、考古学） 合庭惇（日文研教授、情報社会論） 徐光輝（日文研客員助教授／龍谷大学国際文化学部助教授、考古学） 千田稔（日文研教授、歴史地理学） 山田奨治（日文研助教授、応用情報学）

●成果物	宇野隆夫編著『実践 考古学GIS—先端技術で歴史空間を読む—』（NTT出版、2006年12月）
●研究発表	2002年 6月 1日 宇野隆夫「共同研究の目的と方法」 森洋久「GLOBAL BASE 地理情報システム」 伊藤淳史「弥生～古墳時代における京都府南部の地域動態—GISによる解析の試み—」
2002年 9月 7日	宮原健吾「平安京における空間情報の整備と条坊復原」 碓井照子「考古学GISにおける課題」 森本晋「奈文研作成の遺跡データベースについて」
2002年12月 15日	森洋久「国土地理院の数値地図データの検証」 津村宏臣「考古学におけるGeo Computation—空間情報考古学の現状・課題・展望—」 鋤柄俊夫「京都市内遺跡調査地点データと今出川遺跡情報のデジタル化計画について」
2003年 2月 22日	小方登「衛星写真で見える集落の立地・分布パターン」 溝口常俊「甌る地域空間—尾張と美濃の近世・近代—」 作花一志「惑星聚合から見た古代史」
2003年 5月 10日	山口欧志「地理情報システムを利用した弥生時代の集落の基礎的研究」 森洋久「発掘データの状況」 及川昭文「大規模考古学データの分析—貝塚データベースを例にして—」
2003年 6月 29日	宇野隆夫「発掘データの電子化の課題」 鋤柄俊夫「同志社大学今出川キャンパスにおける遺跡情報取得の実際」
2003年 8月 2日	伊藤淳史「縄文晩期—古墳前期の山城地域における遺跡GIS解析—」 谷謙二「ツールとしての地理情報分析支援システム『MANDARA』—時間・空間・社会—」 合庭惇「GXMLとその応用」
2003年 9月 27日	難波宮跡等遺跡見学 （株）パスコ 植田真、小田博之他「最新の計測技術紹介」、「遺跡調査におけるデジタル技術」、「GIS技術によるデジタルデータの活用」
2003年12月 13日	小方登「パソコンを利用したラスタ型景観・地理データの表示と分析」 安英樹「縄紋晩期—古墳前期の加賀・能登地域における遺跡GIS解析—」 宮原健吾「オルン画像ができるまで」
2004年10月 9日	宇野隆夫「帰朝報告・中国歴代の都市を測る」、国際シンポジウム「世界の歴史空間を読む」打ち合わせ 出田和久「歴史地理学における空間情報解析に関するいくつかの試み—個人的経験の紹介を中心に—」 安藤廣道、津村宏臣「鶴見川流域を中心とした弥生集落遺跡のGIS研究—立地論的検討を中心に—」
2004年12月 11日	宇野隆夫 国際シンポジウム「世界の歴史空間を読む」打ち合わせ 福井亘「GISを利用した地域調査について—多田銀鉦山遺跡をケーススタディーとして—」 東潮「東北アジアの都城と墳墓の踏査報告」 鋤柄俊夫、古泉秀敏「公開版同志社大学遺跡GISシステムについて」 菱田哲郎「アンコール遺跡群における空間情報の統合」

077	日本人の異界観—その構造と意味—
●研究域	第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間	2002（平成14）年4月～2005（平成17）年3月
●研究の概要	「異界」とは、日常生活の向こう側として想定される世界である。日本人は、ひいては人間はなぜその異界をイメージすることを欲するのか、そして、それは人々に何をもたらすのだろうか。 環境・人間（異人）・靈魂（神・妖怪）をキーワードにしつつ、前近代の日本人がイメージしてきた異界観に焦点を合わせ、とくにその構造と意味を浮かび上がらせ、さらに現代にいたる異界観の変容過程を考察することによって、この課題を解明することが本研究の目的であった。 異界には、大別して、物理的・空間的に遠距離ではあるが踏査可能な異界と、人間の想像力が生み出した異界（死後観を含む）とがある。本研究で考察したのは、後者の異界である。そこで、民俗世界での異界観を中心に据えながら、文芸や芸術、映像作品の領域へと視野を広げ、現代の日本人の異界観を照らし出す手がかりをつかもうとした。
●研究代表者	小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学）
●幹事	山田奨治（日文研助教授、情報科学）
●班員	阿部泰郎（名古屋大学大学院文学研究科教授、宗教学） 飯島吉晴（天理大学文学部教授、民俗学） 齊藤純（天理大学文学部助教授、民俗学） 佐々木高弘（京都学園大学人間文化学部教授、人文地理学） 關一敏（九州大学大学院人間環境学研究院助教授、宗教学・文化人類学） 高岡弘幸（高知女子大学文化学部助教授、民俗学・文化人類学） 橋弘文（大阪明浄大学助教授、民俗学） 常光徹（国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授、口承文芸論） 土居浩（ものづくり大学技術工芸学部講師、人文地理学） 徳田和夫（学習院女子大学国際文化交流学部教授、中世文学） 内藤正敏（東北芸術工科大学東北文化研究センター教授、写真論・民俗学） 永松敦（宮崎公立大学人文学部助教授、民俗学） 井波律子（日文研教授、中国文学） テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論） 川村邦光（日文研客員教授／大阪大学大学院文学研究科教授、宗教学） アニタ・カンナ（日文研外来研究員／ネルー大学教授、仏教文学） 才津祐美子（日文研研究機関研究員） 色音（日文研外国人研究員／中国社会科学院民俗学人類学研究所研究員） 高木侃（日文研客員教授／専修大学法学部教授） 田中貴子（日文研客員助教授／京都精華大学人文学部助教授、中世国文学） 魯成煥（日文研外来研究員／蔚山大学校教授、比較民俗学） スーザン・バーンズ（日文研外国人研究員／テキサス大学準教授、日本思想史） デービッド・ハウエル（日文研外国人研究員／プリンストン大学準教授、日本近代史） 朴鎰烈（日文研外国人研究員／中央大学校教授、日韓比較芸能史） エフゲーニー・バクシェエフ（日文研外国人研究員／国立ロシア文化研究所主要研究員、文化人類学）

ハルトムート・O・ロータモンド（日文研外国人研究員／フランス国立高等研究院教授、日本宗教史・説話文学・民間信仰）	
佐治靖（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程）	
●成果物	
小松和彦編『日本人の異界観―異界の想像力の根源を探る―』（せりか書房、2006年10月）	
●研究発表	
2002年 5月24日	小松和彦「共同研究『日本人の異界観』の趣旨」 山田奨治「怪異伝承の名豪と分布」
2002年 5月25日	中山和久「日本の巡礼にみる異界観―篠栗新四国霊場を中心として―」
2002年 6月14日	アニタ・カンナ「ジャータカ物語にみられる異界観」 橘弘文「無法者伝承と異界―竹本長十郎と佐藤兵馬の伝承から―」 ハルトムート・O・ロータモンド「唱え言の地理的考察」
2002年 9月27日	廣田律子「中国江南漢族の追離行事」 内藤正敏「東北の修正会にみる“国家と宗教”―黒石寺（岩手県）・鮎峰寺（宮城県）・鬼神社（青森県）を中心に―」
2003年 2月22日	松村薫子「宗教服にみる異界観―福田会の糞掃衣を中心として―」 高岡弘幸「異人・異界創出の作法―『村はちぶ』の事例より―」
2003年 2月23日	全体討議
2003年 3月17日	朴銓烈「村落の拡大と夫婦和合の離合―韓国・大迎港における婆神の爺神訪れの儀礼から―」 齊藤純「道灌山の法螺抜け―明治期瓦版の伝説的背景―」
2003年 5月30日	スーザン・バーンズ「異界としてのらい療養所の確立―『らい文学』の役割をめぐって―」（コメンテーター：川村邦光） デービッド・ハウエル「社会秩序の破壊者と保護者―『日常』を取り巻く政治―」（コメンテーター：高橋敏）
2003年 9月17日	シンポジウム・いざなぎ流をめぐって 常光徹、松尾恒一「いざなぎ流の映像記録製作について」 小松豊孝（いざなぎ流太夫）特別講演「いざなぎ流とは何か」 総合討論「いざなぎ流のこれからの課題をめぐって」（司会：小松和彦） 問題提起：梅野光興「いざなぎ流のこれまでとこれから」
2003年12月26日	戦死者と慰霊をめぐって（1） 川村邦光「戦死者と幽霊」 岩田重則「戦死者靈魂のゆくえ」
2004年 7月23日	戦死者と慰霊をめぐって（2） 宮武実知子「戦死者の『記念』と『記憶』―沖縄の場合―」 西村明「〈タマシズメ〉と〈タマフリ〉―戦争死者慰霊の基本構造―」（コメンテーター：丸山泰明）
2004年 7月24日	戦死者と慰霊をめぐって（2） 土居浩「接地する異界―刑罰のトポグラフィティから―」 亀川泰照「御仕置場から刑事跡まで―小塚原仕置場の史学史―」
2004年 8月21日	小松和彦「妖怪研究の現在について」 湯本豪一「幻獣とは何か」 資料調査および「日本の幻獣」展見学 第一部：研究発表・データベースから見た日本の妖怪 総合司会：小松和彦 山田奨治「みえる狐、みえない狸」（コメンテーター：中

村 慎里）	
第二部：シンポジウム「幻獣から怪獣へ―日本文化における『ありえざる獣』の系譜―」	
齊藤純「幻獣から怪獣へ」	
伊藤龍平「妖怪から未確認生物へ」	
香川雅信「化物から怪獣へ」	
野上暁「妖怪からポケモンへ」	
共催：川崎市市民ミュージアム「妖怪文化研究フォーラム2004」	

2004年10月	1日	阿部泰郎「〈魔界〉―中世仏教の世界像と異端をめぐって―」	永松敦「殭師と異界―宗教儀礼としての解体作法―」
2004年11月20日	～21日	エフゲーニー・S・バクシエフ「死者から神へ―沖縄の死者儀礼と生と死の境界期間―」	佐治靖「『口寄せ』の諸相―〈憑依〉の先にあるもの―」
		色音「日本におけるオシラサマ信仰の重層性について」（コメンテーター：佐々木伸一）	討論会「“モノノケ”の比較研究―山内昶著『もののけ』（I、II）をめぐって―」
		山内昶「『もののけ』について」	
2005年	3月	4日	ハルトムート・O・ロータモンド「幕末明治期の洋行者の異国文化体験」
		高木侃「江戸時代の入婚の地位―四谷怪談や累伝説の背景―」	
2005年	3月	5日	飯島吉晴「中国四川省涼山彝族の安靈儀式」
		魯成煥「韓国の切腹について」	
		關一敏「異界からの還りかた―中山みきの場合―」	

078	旅の「情報」と「表現」―交流と孤立から見た日本文化史の再検討―
●研究域	
第3研究域　文化比較（生活）	
●共同研究期間	
2002（平成14）年4月～2005（平成17）年3月	
●研究の概要	
近世の日本文化は都市内の情報流通や人的交流、都市間の往来が著しく、地域文化はつねに攪拌され、各種情報媒体にのって全国化された。しかしながら一方では、お国ぶりや特産品など、地域独自の精神的・物質的所産はそれぞれ個性をもち、独自の性格を保っていた。	
旅はふつう交流を促す側面からみられがちだが、本来は孤立があってこそ旅が生まれ、また旅によって地域の個性が発見され、大きく育つ。旅は日記や絵図、文芸や絵画など多彩なジャンルを生み出し、それらはまた逆に旅を促した。	
本研究は、旅から生まれ旅を促した多様な「情報」と「表現」を、さまざまな研究分野から読み解くことにより、交流と孤立の二つの相から日本文化史に再検討を加えようとしたものである。	
●研究代表者	
白幡洋三郎（日文研教授、文化史）	
●幹事	
早川開多（日文研教授、美術史）	
●班員	
浅見和彦（成蹊大学文学部教授、日本中世文学）	
板坂耀子（福岡教育大学教育学部教授、日本近世文学）	
今橋理子（学習院女子大学国際文化交流学部教授、美術史）	

長田俊樹（総合地球環境学研究所教授、言語学）		
白井哲哉（埼玉県立文書館、日本史）		
申昌浩（京都精華大学人文学部講師、比較宗教史）		
高橋伸子（札幌大学女子短期大学部助教授、経営学）		
唐権（関西外国語大学非常勤講師、日中交流史）		
原田信男（国士舘大学21世紀アジア学部教授、歴史学）		
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論）		
佐藤卓己（日文研客員助教授／京都大学大学院教育学研究科助教授、メディア史）		
園田英弘（日文研教授、社会史）		
玉井哲雄（日文研客員教授／千葉大学工学部教授、建築・都市史）		
錦仁（日文研客員教授／新潟大学人文学部教授、日本文学）		
濱名篤（日文研客員教授／関西国際大学人間学部教授、社会学）		
森洋久（日文研助教授、情報学）		
劉建輝（日文研助教授、比較文学）		
マルクス・リュッターマン（日文研助教授、日本中世社会史）		
李偉（総合研究大学院大学博士後期課程）		
●成果物		
日文研叢書43、白幡洋三郎編『旅と日本発見―移動と交通の文化形成力―』（日文研、2009年3月）		
●研究発表		
2002年	5月11日	白幡洋三郎「趣旨および方針説明」
	～12日	全員討論「今後の進め方」
2002年	7月12日	白幡洋三郎「新着資料の紹介」
		全員討論「旅の『表現』に関する研究の現状」
2002年	7月13日	全員討論「今後の進め方」
2002年11月30日		白幡洋三郎「新収（絵入り本）〈名所図会もの〉について」
		早川開多「近世艶本の流布について」
2002年12月	1日	全員討論「今後の進め方」
2003年	4月27日	白幡洋三郎「図会関係資料の収集について」
		錦仁「冥土蘇生記・地獄絵に見る『旅』」
		浅見和彦「国文学の旅」
2003年	4月28日	全員「図会並びに旅関係資料の検討」
2003年	6月21日	早川開多「『京都名勝図絵』のデータベース化」
		原田信男「日本中世の交流史―『人とモノと道と』から―」
2003年	6月22日	全員討論「今後の進め方」
2003年	7月15日	唐権「明清時代の旅行案内書について」
		白井哲哉「日本近世地誌にみる『孤立』と『交流』」
2003年	7月16日	全員討論「今後の進め方」
2003年11月15日		フレデリック・クレインス「17～18世紀ヨーロッパにおける日本観」
		錦仁「菅江真澄の地誌作成法―だれのための地誌か―」
2003年11月16日		全員討論「今後の進め方」
2003年12月	6日	コンスタンチン・ヴァボリス「参勤交代に見る旅の『表現』と『情報』」
		小松正史「サウンドツーリズムのススメ」
2003年12月	7日	全員討論「今後の進め方」
2004年	4月24日	福山市鞆の浦にて開催 福山市鞆の浦歴史民俗資料館見学（案内：壇上浩二、西田正憲）
2004年	4月25日	西田正憲「紀行文にみる鞆の浦」
2004年10月23日		李偉「三つの『借』景―小石川後楽園に借景はあったか―」
		早川開多「舟木本・洛中洛外図屏風にみる都市観」
2004年11月27日		申昌浩「花見をすると敲き100回―旅を禁じる儒教文化―」
		原田信男「江戸の小さな旅―雑司ヶ谷鬼子母神―」

2004年12月18日	高橋伸子「『旅館』の定義―北海道観光の展開からの考察―」
浅見和彦「女の旅、聖の旅　附・庶民の旅」	

079 近代化と日本人の身体感覚

●研究域

第3研究域 文化比較（制度）

●共同研究期間

2002（平成14）年4月～2004（平成16）年3月

●研究の概要

日本の近代化の過程で生じてきた「身体観」の変化と、それに伴って現れた日本人の日常的な実践の変化、身体感覚の変化の歴史を明らかにすること——これが、本研究の目的であった。

近代化の過程で、西洋医学や新しい自然認識の概念が持ち込まれた結果、日本人の身体の見方が変化したことについては、これまで多くの研究で指摘されている。ところが、これらの観念体系や認識といった「観念上」の不連続に関する研究が盛んに行われる一方で、日本人の身体感覚や日常的な行動の変化など、個別の「実践上」に生じた変化については、従来、あまり注目されてこなかった。

そこで本研究では、新しい身体観を通してからだを見つめるようになった結果、日本人が自分の身体感覚をどのように修正したのか、またその際、どのような葛藤が生じたのかについて比較文化史的に究明した。（公募研究）

●研究代表者

北澤一利（日文研客員助教授／北海道教育大学釧路校助教授、健康管理政策論）

●幹事

栗山茂久（日文研助教授、医学史）

●班員

尾鍋智子（同志社女子大学非常勤講師、科学史・比較思想）

北中淳子（東海大学文学部非常勤講師、医療文化人類学）

樽沼範久（横浜国立大学教育人間科学部助教授、表象文化論）

酒井シヅ（順天堂大学名誉教授、医学史）

白杉悦雄（東北芸術工科大学教養部助教授、医学史）

鈴木見仁（慶應義塾大学経済学部助教授、医学史）

鈴木則子（奈良女子大学生生活環境学部講師、医療社会史）

西本郁子（埼玉大学非常勤講師、政治思想史）

眞嶋亜有（国際基督教大学大学院比較文化研究科博士課程、比較文化論）

山田憲政（北海道大学大学院教育学研究科助教授、バイオメカニクス）

渡邊雅子（日文研助教授、社会学）

●成果物

栗山茂久／北澤一利編著『近代日本の身体感覚』（青弓社、2004年8月）

●研究発表

2002年 4月 19日 酒井シヅ、栗山茂久「研究テーマの紹介」
栗山茂久「『身体観』とその歴史的研究について」

2002年 4月 20日 西本郁子「Lynn Payerの*Medicine and Culture*について」

2002年 7月 4日 資料収集・分析、調査経過報告

2002年 7月 5日 資料収集・分析、全体討論

2002年 8月 1日 資料収集・分析、調査経過報告

2002年 8月 2日 資料収集・分析、全体討論

2002年10月25日 西本郁子「〈過労死〉—新しい言葉が明るみに出すもの—」

	栗山茂久「ストレスの考古学（その1）」
2002年 10月 26日	白杉悦雄「頭寒足熱、冷え・のぼせ」 北中淳子「日本における鬱病と神経衰弱の歴史」
2002年 11月 15日	北澤一利「なぜ『栄養ドリンク』を飲むのか―死の渴望と『ヒロイズム』―」 酒井シヅ「『仮病』としての頭痛・腹痛」
2002年 11月 16日	尾鍋智子「20世紀初頭の婦人雑誌にみられる食べ物の彩り―『家庭の友』『家族雑誌』などにおける、お弁当や料理の色彩、たべあわせ、の変遷―」 眞嶋亜有「『近代日本に於ける身体美意識の西洋化』を巡る問題」
2002年 12月 20日	樽沼範久「椅子・身体―近代以降―」 鈴木則子「19世紀日本の近代化過程における疾病・清潔・美意識をめぐる諸問題」
2002年 12月 21日	山田憲政「日本の遠近法と再検討」 鈴木見仁「専門家治療と自己治療の分岐点：昭和13年滝野川健康調査の分析」
2003年 3月 5日	資料収集・分析
2003年 3月 6日	資料収集・分析
2003年 3月 7日	資料収集・分析、研究経過報告、全体討論
2003年 5月 23日	栗山茂久「ストレスの考古学（その2）」 スーザン・バーンズ「ハンセン病患者の身体と文体」
2003年 5月 24日	白杉悦雄「頭寒足熱、冷え・のぼせ（その2）」 北中淳子「日本における鬱病と神経衰弱の歴史（その2）」
2003年 7月 4日	眞嶋亜有「『西洋』の魅惑と日本の苦闘―明治・大正期大都市エリート層の身体美を巡る社会・文化史―」 尾鍋智子「お弁当の彩り（その2）」
2003年 7月 5日	北澤一利「栄養ドリンクとヒロイズム」 西本郁子「ストレス学説と過労死」
2003年 9月 26日	鈴木則子「明治前期の化粧風俗をめぐる一考察」 酒井シヅ「江戸から明治へ、腹痛と頭痛の変化」
2003年 9月 27日	山田憲政「動く襦袢：分散と協調の視覚性」 鈴木見仁「滝野川健康調査の研究」 樽沼範久「椅子―もたれる身体―」
2003年 12月 4日	酒井シヅ「野間文庫について」 ジャン＝ピエール・ペテール「サイコセラピー発達史の一段階：アニマル・マグネティズムと夢遊トランス（メスメルとブイセギュール、1775～1820年）」 コメンテーター：松下正明

080 1920―1970の五十年間にわたる日本文学・日本文化の連続性・不連続性

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
2002（平成14）年4月～2003（平成15）年3月
●研究の概要
20世紀の日本において、1945年を境にして政治制度、憲法、家族構成、女性の地位などに関して一大改革がなされたことに疑問の余地はない。しかし、文化の発展に関しては、これらと同じように扱うことはできない。
1930年代、日本の文学、文化活動が制限され、時には禁止されもした。作家は投獄されたり、時の政策に迎合することを余儀なくされたり、沈黙を守ったりして、一種の精神的亡命時代を過ごした。そして、戦後まもなく彼ら

は再び姿を現し、一時中断したその時点から活動を再開した。当時のイデオロギーや戦争が禍して、致命的な痛手を被った人もたしかに存在した。しかし、全般的にみた場合、1935年から45年までの10年間は不幸な幕間、一種の空白時代ではあっても、文化発展の連続性に関しては根本的な打撃を与えていないといえよう。言い換えれば、社会・政治面での不連続性が、文化面での連続性と対峙していたともいえるのである。

この連続性と不連続性の対峙の有り様を、1920年代から70年代の50年間を対象期間として検証すること――これが、本研究の主題であった。この50年間にわたるパノラマ的な展望によって、20世紀の日本文化について新しいパラダイムが描かれたはずである。（公募研究）

●研究代表者
エドゥアルド・クロッペンシュタイン（日文研外国人研究員／チューリッヒ大学日本学部教授、日本文学）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）
●班員
阿毛久芳（都留文科大学文学部教授、現代詩）
小田川大典（岡山大学法学部助教授、政治思想史）
黒古一夫（筑波大学図書館情報専門学群教授、現代文学）
島村輝（女子美術大学教授、現代文学）
種田和加子（藤女子大学文学部教授、現代文学）
長木誠司（東京大学大学院総合文化研究科助教授、音楽学）
坪井秀人（名古屋大学情報文化学部教授、現代詩）
十重田裕一（早稲田大学文学部助教授、映画・現代文学）
中川成美（立命館大学文学部教授、現代詩）
長谷川啓（城西大学女子短期大学部教授、現代文学）
林洋子（京都造形芸術大学芸術学部助教授、日本美術）
三品理絵（佛教大学非常勤講師、日本近代文学）
渡辺知也（大阪女子大学人文社会学部教授、演劇）
稲賀繁美（日文研助教授、美術）
白石さや（日文研客員教授／東京大学大学院教育学研究科教授）
孫才喜（日文研研究機関研究員）
劉建輝（日文研助教授、日中比較文学・比較文化）

●成果物
エドゥアルド・クロッペンシュタイン／鈴木貞美編『日本文化の連続性と非連続性 1920年－1970年』（勉誠出版、2005年11月）
●研究発表
2002年 4月 20日 自己紹介、プロジェクトに関する説明、メンバーによる研究の進め方の討議
2002年 4月 21日 メンバーによる研究の進め方の討議
2002年 6月 1日 小田川大典「『戦前戦後連続論』と『総力戦論』」 各自の研究テーマにおける連続・非連続の枠組について
2002年 6月 2日 中川成美「1930年代文学における思想状況」
2002年 7月 13日 坪井秀人「近代日本の民謡運動」 渡辺知也「日本演劇―新劇―1920年から1970年までの変遷―」
2002年 7月 14日 長谷川啓「女性文学に見る連続・非連続」 重松恵美「フランス戦中戦後文学受容史―A・フランスからジイド、サルトルまで―」 島村輝「石川淳の戦中と戦後」
2002年 10月 5日 林洋子「藤田嗣治/Léonard Foujitaにおける戦前と戦後」 種田和加子「メロドラマの連続性・非連続性―泉鏡花『通夜物語』の受容を中心に―」
2002年 10月 6日 阿毛久芳「『四季』―戦中から戦後へ―」、「武道/武術における戦前と戦後（Pre/Post War Transition in Japanese Martial Arts）」 稲賀繁美「合気道、柔道を中心に」 アレキサンダー・ベネット「剣道の考察」

	山田奨治「弓術を中心に」
2002年 12月 7日	塚原康子「『邦楽』の戦中・戦後」 長木誠司「1930～40年代における『国民音楽』形成」
2002年 12月 8日	黒古一夫「『近代文学』派の戦中・戦後―平野謙・小田切秀夫を中心に―」 十重田裕一「〈名作〉誕生のプロセスとマス・メディア―川端康成と『伊豆の踊子』の戦前・戦後の50年―」
2003年 1月 25日	孫才喜「張赫宙文学における戦中・戦後」 三品理絵「近代文学における能楽受容/戦前・戦後」
2003年 1月 26日	鈴木貞美「『歴史小説』と『時代小説』―その概念と戦前・戦後―」



共同研究の成果をまとめた出版物（第2期）



「文学における近代―転換期の諸相―」共同研究会討議（1996年）

第3期 2003(平成15)～2011(平成23)年度の記録

●外国人研究者による共同研究の推進

第3期になると、教員の約半数が入れ替わって、文字通りの世代交代が進行した。こうしたなかで、当初は客員の外国人研究者として研究していた人が今度は共同研究を主宰する教員として再来日し、共同研究のリーダーとして活躍するなど、日文研「共同研究」の展開は新たな領域を開拓しつつあった。そうした外国人研究者も、当初の欧米系中心からアジア系の研究者も増加していった。

研究者の国際化は、日文研が創設当初から意図的に積極的に取り組んできたことであった。その結果、単に研究者の国際化が徐々に浸透しただけでなく、研究代表者として外国人研究者が共同研究をリードすることも多くなった。直接的きっかけとしては1994年から採用された公募制度が外国人研究者の応募しやすいシステムであったこともあり、第1期は27件中わずかに1件しかなかったものが、第2期になると8件へと急増している（全53件、15%）。そして、この第3期はこうした傾向がさらに進行し、いよいよ本格化して全54件中12件、つまり22%が外国人研究者の主宰する共同研究が実施されるようになっているのである。この傾向は日文研としては歓迎すべきことであり、さらに今後とも維持されるべき「国際性」であろう。

●「アジアの中の日本文化」研究が盛んに

第3期に目につく特徴として、種々の研究課題のなかに1つの傾向がみられる。日文研の目的は国際的視野に立った日本研究、とりわけ日本文化研究であった。この大きな目標となんら矛盾しないが、国際的視野＝アジア圏から考える、という傾向が近年顕著になっているのである。明らかに、研究課題として「アジアの中の日本文化」の諸相がクローズアップされてきた。

これも、外国人研究者の場合と同様に、第3期に入って突然現れた現象ではない。しかし、第1期には2件、第2期には7件、そして第3期にはやはり13件と急増していることは注目すべきことである。しかも、第1期は、課題が時代的にかなり遡ったものであったが、第2期以降は近現代へとシフトされてきた。もちろん、研究者の問題意識の所在によるものであろうが、アジア諸国での近現代に関する資料の公開が急速にすすんでいるこ

とが大きな要因でもあろう。この傾向が今後どのような方向に向かうか、日文研「共同研究」の新しい方向づけとなるのか、大いに注目すべきであろう。

●日文研所蔵資料を活用した「共同研究」

日文研の2大活動として、研究とともに研究協力活動があることは既に何度も触れてきた。その研究協力活動の重要な一環として、日本文化研究に資する各種情報の収集・整理・提供がある。これらは、図書館や各種ネットワークを通じての閲覧・公開によって研究者への便宜供与を行っている。

その一部の利用形態として、実は日文研「共同研究」での活用がある。

その最初の事例は、日文研が創設されて間もない1988年1月スタートの「江戸時代の芸術における外国文化（中国を中心として）の受容と変容」（研究代表者：ドナルド・キーン、杉本秀太郎）で外書（日文研では外国人による日本研究書の総称として「外書」としている。日本文のものも含む）を主たるテキストにしたことである。他に、外書を活用した研究としては「19世紀の日本『発見』—旅行と旅行記の中の異文化像—」（1998～2000年度、研究代表者：白幡洋三郎）、「生きている劇としての能：謡曲の多角的研究」（2000年度、ジェイ・ルービン）などがある。

さらに日文研が購入した貴重な資料に『平安人物志』なる短冊の膨大な綴りがあるが、これを「短冊の研究」（1993～95年度、研究代表者：杉本秀太郎）は、3年がかりでひたすら読解にあてた。この読解研究を承けて、4年後に「『平安人物志』の研究」（1999～2001年度、研究代表者：光田和伸）が、さらに精緻に継承して、ついにデータベース化に成功した。その分析的研究は、次の継続研究にゆだねられている。

同様に、初期の日文研の収集資料のなかに世界人口統計マイクロフィルム版集成があり、研究者にとっては垂涎的であった。これらを利用した共同研究が「家族と人口の歴史社会学」（1997～99年度、研究代表者：落合恵美子）であり、さらに「徳川日本の家族と社会」（2000～02年度、研究代表者：落合恵美子）という研究にも活用された。さらに、「総合雑誌『太陽』の総合的研究」（1993～96年度）と「大正期総合雑誌の学際的研究」（1997～99年度、研究代表者はいずれも

鈴木貞美）は、雑誌『太陽』の当該期全巻本の収集によって、また「画像資料が物語る身体の文化史」（1997～99年度、研究代表者：栗山茂久）は、日文研が収集に努めてきた近世風俗資料によって成立したともいえる。「コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化」（2003～05年度、研究代表者：山田奨治）もそうした事例のひとつである。

こうしたなかで、特筆すべきは資料収集と研究との一体化を同時に進行させて、それぞれの充実化を図ってきた「怪異・妖怪」班の共同研究の進め方である。既述のように、このプロジェクトは1997年度に始められてまだ進行中の、日文研「共同研究」では最長のシリーズ企画となっただけでなく、日文研の代表的な共同研究としての評価も高い。それを可能にしたのも、研究そのものが資料収集計画から始められ、資料評価を厳正に進めつつオリジナリティ保持に格別の熱意をもって組織的に取り組み、その結果を研究に直結させたからである。

この事例は、日文研「共同研究」のこれからの展望を考えると、大いに示唆的であるように思われる。それは、これまで25年間にわたって資料＝情報収集と整理、公開をすすめてきた活動の成果を、共同研究の側から改めて光を当てて積極的に課題（テーマ）を開拓していくことの重要性を再認識させるとともに、「怪異・妖怪」プロジェクトのような研究課題が資料収集をリードすることもありうるということで、日文研「共同研究」の新しい可能性を拓いているといえる。

081

コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化

●研究域
第1研究域 動態研究（現代）
●共同研究期間
2003（平成15）年4月～2006（平成18）年3月
●研究の概要
日本にテレビのコマーシャル映像が登場して50年が経とうとしている。この間、無数のコマーシャル映像が制作され、電波を通じて日本人の脳裏にさまざまなメッセージを絶え間なく伝えてきた。それは、イメージを伴って反復されるため強力に人間の心に残る。とくに幼少期からテレビになじんできた世代にとっては、コマーシャル映像自体がひとつの文化であり、古いコマーシャル作品は古典といえるまでになっている。
コマーシャル映像は広告という本質をもっているため、その時代の物質文化が映像に反映されていることはいうまでもない。それに加えて、メッセージの伝え方にその時代の情報文化が反映され、同時にコマーシャル映像のメッセージと伝え方自体が情報文化を形づくってきたともいえる。コマーシャル映像は、こういった物質文化と情報文化の交差する地点にある文化資料と位置づけられる。

これまでのコマーシャル映像の研究利用は、マーケティングや世相評論的な観点に偏っていて、文化研究としての広がりをもたなかった。その理由のひとつに、コマーシャル映像のアーカイブが整備されていなかったことと、映像資料に特有な検索性・一覧性の悪さがあった。この研究会では、先ごろ日文研に構築されたテレビコマーシャル動画データベースを核にして、コマーシャル映像を多角的に利用した、新たな文化研究の視点と方法を生み出すことをめざした。

●研究代表者	
山田奨治（日文研助教授、情報学）	
●幹事	
稲賀繁美（日文研教授、美術史）	
佐藤草己（日文研助教授、社会学 平成7年4月～日文研客員助教授／京都大学大学院教育学研究科助教授）	
●班員	
赤間亮（立命館大学文学部教授、演劇学）	
李珣淑（元京都市立芸術大学非常勤講師／京都大学人文科学研究所共同研究員、デザイン・建築・生活文化）	
柄本三代子（東京国際大学人間社会学部専任講師、身体文化社会学）	
落合恵美子（京都大学大学院文学研究科教授、社会学）	
君塚洋一（京都学園大学人間文化学部助教授、広告論）	
朽木量（千葉商科大学政策情報学部助教授、歴史考古学）	
香坂玲（東京大学大学院農学生命科学研究科農学共同研究員、環境社会学）	
白石さや（東京大学大学院教育学研究科教授、教育人類学）	
関谷直也（東京大学大学院情報学環特任助手、情報行動の社会心理学）	
高野光平（東京大学大学院人文社会系研究科助手、文化資源学）	
谷川建司（早稲田大学大学院政治学研究科助教授、映画史）	
難波功士（関西学院大学社会学部助教授、文化社会学）	
葉口英子（中部大学人文学部コミュニケーション学科非常勤講師、音楽学）	
濱崎好治（川崎市市民ミュージアム学芸員、メディアスタディー）	
ジャン＝クリスチャン・ブーヴィエ（元九州大学芸術工学部外国人教師、フランス文学・広告研究）	
山下典子（甲南女子大学大学院社会学専攻特別研修員、社会学）	
吉見俊哉（東京大学大学院情報学環教授、社会学・文化研究）	
吉村和真（京都精華大学表現研究機構マンガ文化研究所研究員、思想史まんが研究）	
伊東章子（日文研研究機関研究員、科学技術・文化研究）	
井上章一（日文研教授、意匠論）	
小川順子（日文研研究機関研究員、日本映画史）	
呉咏梅（日文研外国人研究員／北京外国語大学北京日本学研究中心専任講師、社会学・文化人類学）	
●成果物	
山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』（世界思想社、2007年3月）	
●研究発表	
2003年 5月 23日	山田奨治「研究会開催にあたって」
	CMデータベース紹介
	資料検討会
2003年 5月 24日	資料検討会
2003年 7月 11日	濱崎好治「海外CMに描かれたニッポン」、「日本のCMキャラクターの変遷」
2003年 7月 12日	資料検討会
2003年 9月 12日	難波功士「CM分析の方法をめぐって」
2003年11月 8日	川崎市市民ミュージアム
	濱崎好治「川崎市市民ミュージアムのCM資料について」
	資料検討会
2004年 5月 7日	資料検討会
	山下典子「ミニ発表（わたしの研究）」
	高野光平「ACC賞とは何か：『偏り』の歴史的考察」
	ジャン＝クリスチャン・ブーヴィエ「CMのメタフィクション」

2004年 6月 7日	赤間亮「立命館大学のCMプロジェクトについて」 香坂玲「ミニ発表（わたしの研究）」 関谷直也「環境広告—広告中の『環境』を解剖する」
2004年 6月 8日	資料検討会
2004年 7月 10日	共催：日本広告学会九州部会（会場：西南学院大学） 葉口英子「広告と音楽—歴史と変遷—」 小川順子「映画、TV、TVCMへ—映画人の技術の流れと規制：旧大映を例にして—」 古川静男「日本広告学会九州部会からの発表 九州のテレビCM事情：あなたが審査員—福岡広告協会賞コンテストから—」 「世界のCMフェスティバル2004」へ参加
2004年 9月 6日	呉咏梅「わたしの研究」 伊東章子「CMにおける技術表現—新聞広告と比較して—」 柄本三代子「CMにみる科学—栄養・機能言説の変遷—」 総合討論：CMと科学技術
2004年 9月 7日	谷川建司「CMと外国人タレント—『外タレCM』が含有するイメージの変容を探る試み—」
2004年11月 19日	呉咏梅、アレキサンダー・ベネット、山田奨治 ミニシンポジウム「コマーシャルのなかの日本文化」 資料調査等
2004年11月 20日	香坂玲「日本と欧州のCM映像にみる動物の表象とナレーションの語る（生命）倫理：『我々』と『彼ら』の線引きをめぐる最後の聖戦？」 山下典子「CMの中の風景」 朽木量「CM中の生活財を読む—物質文化から見たライフスタイル—」
2005年 1月 7日	李珣淑「コマーシャル映像にみる住まい・家電イメージの諸相—韓流・日流考—」 高野光平「CM文化と史料価値—原版廃棄問題を契機として—」
2005年 3月 23日	君塚洋一「広告コミュニケーションと生活者の経験形成—文化社会学の視点から（仮）—」 佐藤卓己「宣伝=広告の歴史社会学」
2005年 5月 13日	オリヴィア・ストロヤ「テレビコマーシャルを通してみた日本とルーマニア」 呉咏梅「サントリーのテレビCMに見る日本の洋酒文化とナショナルアイデンティティ」 全体討論
2005年 7月 19日	葉口英子「CM音楽にみる異文化へのまなざし—タカラ焼酎のCM変遷を事例に—」 井上章一「全体主義は美しく—ヒトラー・ムッソリーニ・スターリンそれぞれの都市計画—」
2005年 7月 20日	国際シンポジウムについての意見交換
2005年10月 7日	吉村和真、高野光平「『TCJ』の歴史」データーベースからみえるもの—CM/アニメ史の空白—」
2005年10月 8日	資料検討会
2005年11月 28日	ジャン＝クリスチャン・ブーヴィエ「日本の広告における『外人』起用：アラン・ドロンからジャン・レノまで—日本文化のプライドの再発見—」 眞嶋亜有「アジア・ビューティーというパラドックス—体毛からみた日本人の美意識の流れ—」
2005年11月 29日	朽木量「CMの中に配された物質文化」 資料検討会
2006年 1月 13日	赤間亮「古典芸能を題材にしたCM」 研究会まとめ（総合討論）

082 公家と武家—官僚制と封建制の比較文明史的研究—

●研究域
第1研究域 動態研究（伝統）
●共同研究期間
2003（平成15）年4月～2006（平成18）年3月
●研究の概要
前近代社会における支配エリート層＝公家（貴族）と武家という階層に焦点を合わせて、その社会的役割を比較文明史的に研究するシリーズも、今回で4回目になる。今回は、これらの階層が構成した社会組織としてとりわけ重要な官僚制度と封建制度に基づく人間関係を主題として取り上げ、それらの歴史的特質を究明していくことを中心課題とする。
今回も、研究方法は従来と変わらない。まず、対象としては日本以外に視野を広げ、アジアや中東ヨーロッパなどの諸地域・諸民族の場合との比較、および相互間の比較を通して行うこと。また、武士層（騎士・職業戦士）が成長した地域と文官支配が優越して武士の出現をみなかった地域とにおける社会組織の性格の違いに着目して、その歴史的な意味を多角的に検討したこと。そして、最終的には、それらの差異が今日の社会における、それぞれの文化的特性とどのような関連を有しているかを構造的に解明していったのである。
●研究代表者
笠谷和比古（日文研教授、歴史学（武家社会論））
●幹事
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論）
●班員
會田実（四国大学文学部教授、文化史） 朝治啓三（関西大学文学部教授、西洋史） 池田温（創価大学文学部教授、東洋史） 石井紫郎（日文研名誉教授、法制史） 磯田道史（茨城大学人文学部助教授、家族史） 井上浩一（大阪市立大学文学研究科教授、西洋史） 岩津洋二（桃山学院大学文学部教授、文化史） 上横手雅敬（皇學館大学大学院文学研究科教授、政治史） 江川温（大阪大学大学院文学研究科教授、西洋史） 臈谷寿（同志社女子大学文学部教授、政治史） 加藤善朗（京都西山短期大学教授、仏教美術） エミリア・ガデレフ（四国大学文学部講師、日本文化） 官文娜（大阪外国語大学非常勤講師、国史学） 桑山由文（兵庫教育大学学校教育研究科助教授、西洋史） 源城政好（立命館大学アトリーサーチセンター客員研究員、文化史） 佐々木克（京都大学名誉教授、日本史） 佐藤次高（早稲田大学文学部教授、西洋史） 杉立義一（日本医史学会名誉会員、医学史） 鈴木董（東京大学東洋文化研究所教授、政治学） 高橋昌明（神戸大学文学部教授、政治史） 武内恵美子（秋田大学教育文化学部助教授、文化史） 竹村英二（国土館大学21世紀アジア学部助教授、経済思想史） 谷井俊仁（三重大学人文学部教授、東洋史） 谷口昭（名城大学法学部教授、法制史） 辻正博（滋賀医科大学医学部助教授、東洋史（中国史）） 辻垣晃一（元日文研共同研究員、家族史） 筒井清忠（帝京大学文学部教授、歴史社会学） 徳橋曜（富山大学人間発達科学部助教授） 名和修（叻陽明文庫文庫長、文化史）

根津寿夫（徳島城博物館学芸員、政治史） 原田正俊（関西大学文学部助教授、仏教史） 平木實（京都府立大学文学部非常勤講師、東洋史） 平田茂樹（大阪市立大学大学院文学研究科助教授、東洋史） 平山朝治（筑波大学大学院人文社会科学研究科助教授、経済学） 深澤徹（桃山学院大学社会学部教授、西洋史） 藤善眞澄（関西大学名誉教授） 前田勉（愛知教育大学教育学部教授、日本思想史） 三木亘（慶應義塾大学特選塾員、西洋史） 三谷博（東京大学大学院文化研究科教授、政治史） 南川高志（京都大学大学院文学研究科教授、西洋史（ローマ史）） 村井康彦（日文研名誉教授／元京都造形芸術大学大学院大学院長、文化史） 村山聡（香川大学教育学部教授、地理学） 森田登代子（樟蔭東女子短期大学非常勤講師、近世風俗史） 横谷一子（近畿大学豊岡短期大学非常勤講師、歴史学） 頼富本宏（種智院大学長、仏教学） 李御寧（日文研外国人研究員／梨花女子大学校文理大学碩座教授、韓国文学） 今谷明（日文研教授、日本中世史） 張翔（日文研外国人研究員／復旦大学人文学院教授、日本史） アレキサンダー・ベネット（日文研助手、宗教学） マルクス・リュッターマン（日文研助教授、日本中世社会史）
●成果物
笠谷和比古編『公家と武家Ⅳ—官僚制と封建制の比較文明史的考察—』（思文閣出版、2008年3月）
●研究発表
2003年10月 11日 A.ポラード「卑俗な話：初期のロビン・フッド伝説」
2004年 4月 23日 佐々木克「公家と大名の明治維新—政治空間の諸相—」 李御寧「ゾンビと武士—陶山書院を中心に—」
2004年 4月 24日 コンスタンティン・ヴァボリス「参勤交代制度をめぐる諸問題」 朝治啓三「1258年の国王と諸候による権力の構造」
2004年 6月 26日 上横手雅敬「死刑をめぐる公家と武家」 池田温「唐宋の変革をめぐる」 佐藤次高「イスラムの王権儀礼—バイアとフトパー」 村山聡「ヨーロッパにおける主従関係と住民把握の論理」
2004年 8月 28日 高橋昌明「日本の武士発生に関する基本的視点」 前田勉「近世日本の兵学と朱子学」 平木實「王族と官僚間の親睦儀礼の意味するもの—朝鮮時代初期の投壘—」
2004年10月 23日 竹村英二「武家社会と幕末武士／構造と行為」 谷井俊仁「一心一徳—清朝皇帝の政治的正当性の論理—」 今谷明「室町幕府の官僚制」
2004年12月 11日 藤善眞澄「隋唐時代における中国仏教儀礼と王権」 井上浩一「聖遺物とビザンツ皇帝権」 深澤徹「『愚管抄』に見る『ハカリイ』の政治学—文武兼行の摂籙臣、あるいは信仰武士層の取り込みをめぐる言説戦略について—」 橋本義則「古代宮都の構造と皇権」
2005年 1月 22日 會田実「『いわゆる『曾我の雨』について—頼朝の政権成立と曾我物語の表象—」 名和修「徳川時代における朝議復興をめぐる」 徳橋曜「中世イタリアにおける帝権と都市共和政」
2005年 4月 15日 笠谷和比古「『封建制と官僚制』をめぐる論点と分析視角」

	三木亘「カリフ制、天子制、天皇制—王権のコスモロジー—」 辻正博「中国中世における皇帝の特別裁判」
2005年 4月 16日	朝治啓三「ClevicusとMagister」 石井紫郎「中世国家論をめぐる」
2005年 6月 18日	イアン・ジェームズ・マクマレン「徳川時代の釈奠（孔子祭祀）」 村山聡「『財産継承における公証人の登場』—ドイツにおける権力と民衆のあいだで—」 平山朝治「改元・官僚制・革命」 桑山由文「元首政期ローマ帝国における騎士身分公職」
2005年10月 21日	今谷明「封権制に於ける二つの支配原理について」 原田正俊「中世禅宗寺院の住持任命制度と国家」 竹村英二「幕末武士の素養を醸成するもの—『川路聖謨遺書』にみる漢字の素養と『祖法』、『祖訓』—」
2005年10月 22日	深澤徹「橘氏の祖先祭祀について—慈円『愚管抄』にみる、歴史のビジョンとしての『女人入眼』を起点に—」 會田実「『真名本曾我物語』における頼朝の位置（親族と鎮魂）」 平木實「『高麗・朝鮮時代初期の縁坐制』と『李重煥の官制と人事行政論』」 井上浩一「ビザンツ官僚制の建前と実態」
2005年12月 16日	谷井俊仁「満漢品級前史攷」 江川温「中世フランス王侯の宮廷役人制度」 鈴木董「オスマン帝国における封権制と家産官僚制—比較史的考察—」
2005年12月 17日	官文娜「血縁構造と封建制—一周の分封に基づく分析—」 磯田道史「藩における家老合議の終焉—水戸・鳥取・岡山藩の分析—」 佐藤次高「イスラームの騎士と官僚—剣の人と筆の人—」
2006年 2月 17日	横山輝樹「近世武家社会と武芸—享保期幕府武芸奨励を題材に—」 孫承「近代移行期における士大夫」 佐々木克「公家と武家の『王政復古』」
2006年 2月 18日	徳橋曜「都市の領域支配における政治的正当性の理念と言説」 辻垣晃一「天皇に対する摂関家の僭越」 谷口昭「武家官僚制の一視覚—甲府支族松平氏の場合—」 筒井清忠「近代日本における『主君押込め』」
2006年 3月 18日	フリーディスカッション
2006年 3月 19日	現地見学会

083 京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来

●研究域

第1研究域 動態研究（伝統）

●共同研究期間

2003（平成15）年4月～2007（平成19）年3月

●研究の概要

日本の古都・京都では、古くから陶藝、染色、漆藝、絹織物など多くの伝統工芸が栄えてきた。しかし近年、経済条件、労働状況などの変貌に伴って、その多くが変質を迫られ、業種によっては、技能の伝承がもはや不可能という危機的状況に立ち至っているところもある。

	本研究では、まずは、こうした状況にある日本の伝統工芸の過去・現在を、職人や芸術家などの直接的な関係者はもとより、それぞれの分野の研究者・支援者、伝統保存を手がけている実務担当者、メディア関係者、視聴覚作品制作者など多くの参加を得て、多角的な視野から徹底的に検証し、分析を行った。そして、さらに討論を重ねて、最終的には伝統工芸の再生ビジョンとしてまとめ、将来展望を提示した。
●研究代表者	稲賀繁美（日文研教授、文化交渉史）
●幹事	パトリシア・フィスター（日文研助教授、美術史）
●班員	荒川正明（勸出光美術館主任学芸員、日本陶磁史）
磯部直希（立命館大学大学院文学研究科博士課程、装飾芸術・工芸論・近代「蒐集」論）	伊東徹夫（京都市立芸術大学美術学部助教授、東洋工芸史）
伊藤奈保子（元日文研研究支援員、仏教美術）	今井祐子（福井大学教育地域科学部講師、近代美術史）
リチャード・ウィルソン（国際基督教大学教養学部教授、工芸）	鶴飼敦子（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程、日仏文化交渉史）
後小路雅弘（九州大学大学院人文科学研究院教授、アジア近現代美術史）	大熊敏之（富山大学芸術文化学部助教授、近代造型史・日本近代美術批評史）
大滝幹夫（文星芸術大学教授、文化庁・工芸行政）	大西清右衛門（大西清右衛門美術館長、金工）
柿野欽吾（京都産業大学経済学部教授、中小企業論）	柏木加代子（京都市立芸術大学美術学部教授、フランス文学）
金谷（舟川）美和（京都市大学人文科学研究所研究機関研究員、インド・日本の工芸）	岸本康志（社京都国際工芸センター事務局長、工芸）
北澤憲昭（跡見学園女子大学文学部教授、日本近代美術史）	木村法光（京都市立芸術大学美術学部名誉教授、日本工芸史）
櫛勝彦（京都市立芸術大学美術学部教授、プロダクトデザイン）	栗本夏樹（京都市立芸術大学美術学部講師、漆芸）
後藤結美子（京都市美術館学芸員、近代日本美術・工芸）	小林純子（沖縄県立芸術大学美術工芸学部助教授、日本近代美術史）
佐藤敬二（京都精華大学デザイン学部教授、近代工芸・デザイン史・伝統産業論）	佐野真由子（静岡文化芸術大学専任講師、文化財行政）
澤野道玄（㈱さわの道玄代表取締役、文化財修復）	徐蘇斌（東京大学生産技術研究所協力研究員、建築史）
戦畹梅（東京工業大学外国語研究教育センター助教授、東洋美術史）	多田哲久（姫路工業大学非常勤講師、家・同族・家業論（社会学））
龍村光峯（日本伝統織物保存研究会理事長、織物美術）	玉蟲敏子（武蔵野美術大学造形学部教授、日本美術史）
土田真紀（帝塚山大学非常勤講師、工芸・デザイン史）	鶴岡真弓（多摩美術大学美術学部教授、美術史・ケルト美術表象）
出川哲朗（大阪市立東洋陶磁美術館学芸課長、陶芸史）	長崎巖（共立女子大学家政学部教授、日本染織史）
中ノ堂一信（京都造形芸術大学芸術学部教授、日本工芸史）	中村錦平（多摩美術大学美術学部教授、陶芸）
並木誠士（京都工芸繊維大学工芸学部教授、日本美術史）	西口光博（龍谷大学大学院経営学研究科助教授、京都市工芸行政）
西原大輔（広島大学大学院教育学研究科助教授、中国・朝鮮文化史）	芳賀徹（京都造形芸術大学長、比較文学比較文化・ジャポニスム・京都学）
朴美貞（立命館大学大学院外国人客員研究員、日韓美術史）	畑智子（京都文化博物館学芸員、美術工芸）
林（日比野）洋子（京都造形芸術大学芸術学部助教授、日仏美術交渉史）	原田平作（大阪大学名誉教授、近代美術）

樋田豊次郎（京都工芸繊維大学美術工芸資料館助教授、デザイン工芸史）	ひろいのぶこ（長野信子）（京都市立芸術大学美術学部教授、染織）
藤田治彦（大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授、デザイン史）	松原龍一（京都国立近代美術館学芸課主任研究官、美術工芸）
リンネ・マリサ（奈良国立博物館調査員）	クリストフ・マルケ（フランス国立東洋言語文化研究所教授、日本近代美術史）
望月重延（京都市立芸術大学美術学部教授、漆工芸）	山川暁（京都国立博物館文部科学技官、染織史）
山田実（日本伝統織物保存研究会理事・事務局長、伝統保存）	芳井敬郎（花園大学文学部教授、日本文化史）
吉村良夫（美術批評家連盟会員、クラフト論）	渡邊眞（京都市立芸術大学美術学部教授、デザイン論）
李御寧（日文研外国人研究員／梨花女子大学校文理大学碩座教授、批評文学・記号学）	井上章一（日文研教授、建築・意匠）
片平幸（日文研機関研究員、庭園言説批評史）	金恵信（日文研客員助教授／学習院大学非常勤講師、日・韓近現代美術史、比較文化論）
鈴木禎宏（日文研客員助教授／お茶の水女子大学生活科学部助教授、近代陶芸）	西横偉（日文研客員助教授／熊本大学文学部助教授、比較史学）
早川開多（日文研教授、江戸時代美術）	関周植（日文研外国人研究員／嶺南大学校造形大学・大学院教授、美学・芸術学・美術史）
李美林（日文研外来研究員／日本学術振興会特別研究員、日韓美術史）	ノーマ・レスビシオ（日文研外国人研究員／フィリピン大学芸術学部教授、織物美術）
●成果物	稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと―過去発掘・現状分析・将来展望―』（思文閣出版、2007年7月）
樋田豊郎／稲賀繁美編『終わりにきれない「近代」―八木一夫とオブジェ焼―』（美学出版、2008年4月）	●研究発表
2003年 5月 26日	龍村光峯「研究会発足までの経緯説明」 稲賀繁美「研究会の主旨説明」 今井祐子「ジャポニスム期における日本の陶磁器コレクションの形成 ―フランス・ジャポニザンの収集熱とその社会的背景―」 樋田豊次郎「〈近代〉の〈工芸〉とその〈伝統〉―京都の位置―」
2003年 5月 27日	龍村光峯工房見学
2003年 7月 7日	北澤憲昭「近代日本における『工芸』の成立 概念およびジャンルについて」 柿野欽吾「近年における西陣織工業の生産・出荷動向と技術・技能問題―産業集積の視点から―」
2003年 7月 8日	吉村良夫「資源浪費型文明を問い直す工芸の方向」
2003年 9月 29日	岸本康志「京都を中心とした伝統工芸振興事業の推移」 佐藤敬二「近代の琳派―神坂雪佳と京漆器―」
2003年 9月 30日	全員討論
2003年11月 10日	中村錦平「自作・持論・東京焼―日本VS西欧モダンが生んだやきもの―」 森口邦彦「日本工芸会50周年記念展によせて」
2003年11月 11日	稲賀繁美「研究計画に関する打ち合わせ」
2003年12月 8日	三重野久美子「情報誌『京都』の目的と取材の現状」
2003年12月 9日	稲賀繁美「近代京都における美術教育の変遷1870～1927」
2004年 4月 26日	戸矢理衣奈「『木櫃（ムクゲ）食ウ馬』馬具屋から育った高級ブランド・エルメス職人気質、京都との関わり、経営戦略を中心に」

	金屋美和「『産地』なき伝統染色業：インド、グジャラート州カッチ県の絞り染め」
2004年 4月 27日	ひろいのぶこ「布からみえてくること―繊維と織物の原点を振り返る―」
2004年 5月 31日	樋田豊次郎、鈴木禎宏「第2年次研究会の方向に関して」
2004年 6月 1日	山田実「伝統・人まずありき」
2004年 6月 28日	芳賀徹「近代日本の風流論」 関周植「魯山人の風流」
2004年 6月 29日	分科会ごとの打ち合わせ・調査
2004年 7月 23日	古川加津夫「京都デザイン優品の取り組み」 塚田章「伝統工芸の産業化に伴う諸問題」
2004年 7月 24日	調査チームの立ち上げと、チームごとの調査計画概要報告
2004年 9月 6日	原田平作「近代京都の工芸・美術織物について」 西原大輔「近代日本工芸と植民地」
2004年 9月 7日	柏木加代子「柴田是真と京都」 冬木偉沙夫「日本漆工の装飾技法に類似する1970年代メキシコの塗り物に於ける装飾技法について」
2004年10月 25日	鈴木禎宏「私的『民芸』論」 西横偉「中国の工芸と京都」
2004年10月 26日	調査旅行等実施研究員「調査旅行等のご報告」
2005年 4月 22日	龍村光峯「伝統工芸研究の問題点を問い直す」 稲賀繁美「京都を中心とする工藝の近代」
2005年 4月 23日	磯部直希「壽岳文章以降の書物装丁と修復の諸問題」
2005年 5月 20日	西島安則「伝統工芸の栄える世に」 大島清次「伝統と創造、ことばもの―情報社会における思惟と現実―」
2005年 5月 21日	後小路雅弘「アジアにおける現代美術と工芸」
2005年 6月 24日	西口光博「1970年代以降の京都市の伝統産業行政」 柿野欽吾「転換点を迎えた京都の伝統産業政策『京都市伝統産業活性化検討委員会 提言』を中心に経済面から」 佐藤敬二「京都市の伝統産業のデザイン・技術の振興―京都市伝統産業活性化委員会提言を中心に―」 大滝幹夫「―伝統産業の未来を切り拓くために―京都市伝統産業活性化検討委員会 提言」
2005年 6月 25日	伊藤奈保子「変わり行く仏壇・仏具業界 現状瞥見」
2005年 7月 29日	稲賀繁美、松重和美 経過説明―事務連絡「伝統技術の保存・修復と次世代の先端技術―産学複合開発を視野に」 コメンテーター：大滝幹夫、中村錦平 「『京都市伝統産業活性化条例』をめぐって」（自由討議）
2005年 7月 30日	山川暁「京都勤業場 織殿について」 仏壇・仏具生産の現場見学会（若林靖博氏）
2005年 9月 16日	全員「文化政策と商工政策との競合と棲み分け―縦割り構造の打破に向けて―」 吉村良夫「工芸を問い直した内田邦彦のクラフト運動」 原田平作「柳宗悦と岡倉天心」
2005年 9月 17日	朴美貞「朝鮮美術展覧会における『工芸』というブランド―文人趣味と工業革命とのほざまで―」 京都造形芸術大学にてフェノロサ学会
2005年10月 14日	総合討論会「オブジェ焼の死」 峯村敏明「戦後日本美術におけるオブジェ」 松原龍一「誰か八木一夫の作品を買ったのか」 大槻倫子「八木一夫が使った古陶磁技法」 稲賀繁美「海外から見た八木、海外を見る一夫」 樋田豊郎「戦後日本工芸におけるオブジェの役割」 中村錦平（コメンテーター）「オブジェ焼の功罪」

2005年10月 15日	畑智子「ボウズ・コレクションにみる輸出工芸の受容の―様相」 後藤結美子「消えゆく京都の七宝産業―七宝製造販売の老舗の事例をとおして―」
2006年 4月 21日	鶴飼敦子「『工芸』と美術―19世紀フランスに学ぶこと―」 稲賀繁美「近代の茶道・美術収集・中世美学の復権と工藝」
2006年 4月 22日	国際研究集会報告書、共同研究会報告論文集・編集作業および調査チームごとの研究とりまとめワーキング・セッション
2006年 6月 2日	土居浩「ものづくり大学の現状と将来：その断片的考察」
2006年 6月 3日	分科会ごとの作業部会
2006年 6月 30日	ジョゼフ・キブルツ「モノの比較文化史―文化人類学の視点から―」 大熊敏之「オキモノ再考」
2006年 7月 1日	戦畹梅「鹿間時夫と『満州』の民藝蒐集」 林洋子「藤田嗣治と工芸：京都国立近代美術館での展覧会への導入」 京都国立近代美術館の藤田嗣治展見学
2006年 7月 31日	シンポジウム「民芸の将来：民芸から工芸を考える」 小林純子「戦後沖縄における民芸運動の展開」 濱田琢司「工芸と地方行政―3つの民陶産地の事例から―」 鈴木禎宏「情報化革命と工芸：民芸論の立場から」
2006年 8月 1日	徐蘇斌「清末における勸業博覧会の受容と都市空間の再編過程―直隸工芸総局の成立事情と日本―」 シンポジウム「やきもの―工藝の未来を議論する―中村錦平さんの東京焼を叩き台に」 発言者：吉村良夫、稲賀繁美 龍村光峯「将来展望・3年半の共同研究会を振り返りかえて」

084 性欲の文化史
●研究域
第2研究域 構造研究（人間）
●共同研究期間
2003（平成15）年4月～2007（平成19）年3月
●研究の概要
性欲は、食欲とならび、本能のひとつとされている。だが、人間の性欲には、文化によって規定されている面もある。何に性欲を感じるか、どういうときにそえられるか、は時代により、地域によって、けっこう異なる。やはり本能のひとつである食欲についても、食物、食事に関する嗜好が、文化差をはらんでいるのと同じである。
この研究では、文化と性欲との関係性をさぐった。日本、東アジアの近代を調査対象とすることからとりかかり、将来的にはその枠を広げていく。
●研究代表者
井上章一（日文研教授、風俗史）
●幹事
劉建輝（日文研助教授、日中交流史）
●班員
青木健一（東京大学大学院理理学系研究科教授、自然人類学）
石田仁（中央大学大学院文学研究科博士後期課程、社会学）

岩見照代（麗澤大学外国語学部教授、日本近代文学）
梅川純代（大妻女子短期大学非常勤講師、東洋史）
小川順子（中部大学人文学部講師、日本文化論（日本映画・大衆文化））
嘉本伊都子（京都女子大学現代社会学部助教授、社会学）
川井ゆう（武庫川女子大学非常勤講師、日本文化史）
阪本博志（宮崎公立大学人文学部講師、社会学）
澁谷知美（東京女学館大学非常勤講師、社会学）
朱禎（日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程、映画論）
申昌浩（京都精華大学人文学部講師、宗教学）
竹村民郎（元大阪産業大学客員教授、社会学）
田中貴子（甲南大学文学部教授、国文学）
唐権（関西外国語大学非常勤講師、日中交流史）
永井良和（関西大学社会学部教授、社会学）
中村隆文（神戸女子大学文学部教授、教育史）
西村大志（広島国際大学心理科学部講師、社会学）
原武史（明治学院大学国際学部教授、日本思想史）
原田信男（国士舘大学21世紀アジア学部教授、日本近世史）
古川誠（関西大学社会学部助教授、社会学）
松田さおり（宇都宮共和大学専任講師、社会学）
光石亜由美（中部大学非常勤講師、日本近代文学）
三橋順子（早稲田大学総合研究機構客員研究員、日本文化史）
斎藤光（日文研客員教授／京都精華大学人文学部教授、科学史）
平松隆円（日文研特別共同利用研究員／佛教大学大学院教育学研究科博士後期課程）
●成果物
井上章一&関西性欲研究会編『性の用語集』（講談社、2004年12月）
井上章一編『性欲の文化史 1』（講談社、2008年10月）
井上章一編『性欲の文化史 2』（講談社、2008年11月）
●研究発表
2003年 5月 22日 文献探索
2003年 5月 23日 文献探索
2003年 8月 7日 文献探索
2003年 8月 8日 文献探索
2003年 9月 19日 文献探索
2004年 4月 10日 井上章一「日本文化とエロチシズム」
2004年 7月 10日 青木健一「配偶者選択と性淘汰」 斎藤光「『へんたい』あるいは『変態性欲』の記号史/誌（その起源）」
2004年11月20日 唐権「牛庄からの匿名投書―日中交流史に関する一考察―」 三橋順子「日本女装史・近代編」
2004年12月25日 梅川純代「房中術と立川流」 光石亜由美「赤線小説―戦後、小説家は〈赤線〉をどのように描いたか―」
2005年 3月 5日 長田俊樹、鈴木貞美『性の用語集』批判
2005年 4月 23日 井上章一「桂離宮にエロスを読む」 曹陽
2005年 6月 25日 小川順子「時代劇映画とトランス・ジェンダー」 原田信男「戦後映画史にみる性表現と性風俗の変遷」
2005年 9月 17日 岩見照代「女の性の描かれ方―1910年代前後を中心に―菅野須賀子を中心に―」 中村隆文「かしこい女が好き―オールドミスはこうしてつくられた―」
2005年11月26日 松田さおり「ホステスの『仕事』と仕事仲間『女パフォーマンス』を売る」 中村隆文「かしこい女が好き―オールドミスはこうしてつくられた―」
2006年 2月 18日 石田仁「ゲイ・ブーム期(1989～94)における女性のゲイ受容」

	澁谷知美「旧制高校生の性生活」
2006年 5月 13日	川井ゆう「人体模型と性の欲望」 西村大志「リアルをこえて―人体模倣はどこへ向かうのか―」
2006年 7月 8日	平松隆円「『ギャル男』論―男はおしゃれになれないのか―」 澁谷知美「無防備なセックスをする男子とはどんな男子か―1999年『青少年の性行動』調査の二次分析から―」
2006年 9月 16日	古川誠「鶏姦罪とその周辺」 染谷智幸「17世紀東アジアの恋愛小説と西鶴の『男色大鑑』」
2006年12月 2日	劉建輝「壁にかけられた摩登」 永井良和「警察と風俗取締」
2007年 3月 10日	阪本博志「雑誌『平凡』の時代としての1950年代―大衆文化の展開と『送り手』『受け手』の様相―」

085 文化としての植物―日本の内と外―

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
2003（平成15）年4月～2006（平成18）年3月
●研究の概要
日本列島は、植生の豊かさでは世界でも有数の地である。古典文学、絵画にも、その多様な反映がみられる。なかでも、俳句の季語に関連する語彙が採用されている比率の高さは特筆に値しよう。
一方で、日本は大陸の周縁部に位置することから、大陸の先進文明国であった中国から伝来したウメやモモにみられるように、植物への接し方も併せて摂取し吸収していったことが明らかである。だが、時代とともに日本独自の接し方も誕生し発達した。たとえば、ツバキの品種「佗助」に代表される一重の小輪花好み、班入りや獅子芸などを代表とする葉芸への好尚は、中世以降の日本に起こった、世界に類例をみない独自の美意識である。また、盆栽はもと中国に由来する樹木の鑑賞形式であるが、その理想とする形態は、今日では中国と日本の間で大きな隔たりををみせている。明治以降に本格的に移入されたサボテン、多肉植物の観賞においても、とりわけ好みに合う個体を実生により選抜育種したり、班入りや綴化（cristata）、石化（monstrosa）などの分野を発達させる傾向がみられる。
幕末から明治にかけて、多くの日本原産の植物が欧米に紹介され、このうちのいくつかは外国で園芸植物として高く評価されて、数々の新品種が育成されるなど、めざましい発展をとげた。アオキ、アジサイ、サクラソウ、ナンテン、フクジュソウ、マツバラン、マンリョウ、ヤブコウジなどは、日本における伝統的な評価のわりに、世界には広がっていない種である。
アオキ型とアサガオ型の差異はどこから生まれてくるのか。もとより、世界のさまざまな栽培先進国においても、自国に固有な植物の伝播について、同様の現象が生じているのだから。
本研究においては、植物との接し方の変化と多様性を通して、世界における日本文化の特質を考えた。
●研究代表者
光田和伸（日文研助教授、日本古典文学）
●幹事
劉建輝（日文研助教授、日中比較文学・比較文化）
●班員
小川佳世子（京都造形芸術大学非常勤講師、能楽研究）
萩巣樹徳（東方植物文化研究所主宰、植物学）

押川かおり（武庫川女子大学非常勤講師、日本古代文学）
加藤類子（京都造形芸術大学非常勤講師、日本絵画）
加藤善朗（京都西山短期大学教授、仏教学・説話学）
黒柳敦子（京都女子大学非常勤講師、連歌）
小林善帆（滋賀県愛知川町史編纂調査員、華道研究）
矢野梓（京都産業大学講師、DNA考古学）
横谷一子（大阪医療福祉専門学校非常勤講師、日本中世文化）
岩井茂樹（日文研技術補佐員、日本文化論）
川勝平太（日文研教授、比較経済学）
ボイカ・エリット・ツィゴヴァ（日文研外国人研究員／ソフィア大学東アジア学科準教授、日本文学・比較文化論）
那須浩郎（日文研研究機関研究員、環境考古学）
早川開多（日文研教授、美術史）
朴銓烈（日文研外国人研究員／韓国中央大学校文化大学教授、民俗学・韓日比較文学）
福永健二（日文研研究支援推進員、植物文化論）
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）
●研究発表
2003年12月 14日 今後の方針について打ち合わせ
2005年 1月 8日 全員討議
2005年 2月 4日 全員「盆梅展にて」
2005年 3月 12日 高兵兵「日中漢詩における『残菊』―菅原道真を中心に―」
2005年 3月 31日 今年度の反省と次年度の実施計画について 勝持寺、大原神社見学
2005年 8月 6日 福永健二「モチアワの起源―モチの文化誌からモチの遺伝誌へ―」
2006年 3月 25日 那須浩郎「考古植物学と日本文化」
2006年 3月 31日 知足院・若草山 春日山原生林・春日大社神苑・白毫寺の花を見学

086 戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて―政・官・軍・メディア・経済界・教育事業家などを中心に―

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅱ）
●共同研究期間
2003（平成15）年4月～2007（平成19）年3月
●研究の概要
ひとつの新たなる社会秩序の形成期とも考えられる戦間期の日本社会を対象に、さまざまな社会集団あるいは中間組織が、どのような動きを示しながら相互関係とネットワークを創りあげたかを、具体的な事例を取り上げながら分析した。つまり、社会集団の成立・対立・相互依存が、第一次世界大戦後の日本社会にいかなる影響を与えたかを探ることによって、リベラル・デモクラシー（産業民主主義を含め）にとって必要な（あるいは有害な）中間組織の意味を吟味しようとしたのである。
●研究代表者
猪木武徳（日文研教授、経済学）
●幹事
佐藤卓己（日文研助教授、メディア学 平成16年4月～日文研客員助教授／京都大学大学院教育学研究科助教授）
ジェームズ・バクスター（日文研教授、経済史）
●班員
石田あゆう（京都精華大学教育推進センター講師、文化社会学）
伊藤之雄（京都大学大学院法学研究科教授、日本政治史）

岡崎哲二（東京大学大学院経済学研究科教授、日本経済史）
河崎吉紀（同志社大学社会学部専任講師、新聞学）
北岡伸一（東京大学大学院法学政治学研究科教授、日本政治外交史）
斎藤修（一橋大学経済研究所教授、日本経済史）
スヴェン・サーラ（東京大学大学院総合文化研究科助教授、日本政治史）
申昌浩（京都精華大学人文学部講師、宗教史）
竹内洋（関西大学文学部教授、教育社会学）
戸部良一（防衛大学校人文科学群教授、日本政治史・軍事史）
林（日比野）洋子（京都造形芸術大学芸術学部助教授、近現代美術史）
福岡良明（香川大学経済学部助教授、社会学）
松田宏一郎（立教大学法学部教授、日本政治思想史）
村松岐夫（学習院大学法学部教授、行政学）
望月和彦（桃山学院大学経済学部教授、経済発展論）
阿部武司（日文研客員教授／大阪大学大学院経済学研究科教授、日本経営史）
伊東章子（日文研研究機関研究員、比較文化）
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）
園田英弘（日文研教授、社会史）
吉沢英成（日文研客員教授／甲南大学経済学部教授、経済学）
●成果物
猪木武徳編著『戦間期日本の社会集団とネットワーク―デモクラシーと中間団体―』（NTT出版、2008年3月）
●研究発表
2003年 5月 10日 猪木武徳「挨拶と趣旨説明」 北岡伸一「1920年代の政治構造について」 望月和彦「歴史からの教訓―戦間期日本経済の『失われた10年』―」 佐藤卓己「情報局情報官・鈴木庫三中佐の『悪名』と現代化のゆらぎ」
2003年 5月 11日 参加者の研究テーマの紹介と討論
2003年 7月 5日 伊東章子「科学・技術の『日本的性格』の追求―総力戦体制と科学者・技術官僚たち―」 阿部武司「戦間期日本における在華訪の展開について」 申昌浩「プロテスタント教派の統合と教会の衰退：1876～1940」 竹内洋「『左傾学生』の群像」
2003年 9月20日 戸部良一「大正期の軍人と社会―『偕行社記事』から」 鈴木貞美「両大戦間の『文壇』をめぐるって：その再編と『総力戦体制』へ」 石田あゆう「戦時下の衣服―雑誌『主婦の友』と『被服』にみるスタイルの比較―」 松田宏一郎「橘撲の『郷土社会論』」
2003年11月 9日 伊藤之雄「昭和天皇と立憲君主制」 スヴェン・サーラ「大正期における『軍部』―インフォーマル社会集団の形成―」 四方田雅史「戦間期日本・中国の工業化比較―メリヤス製造業などを中心に―」 岡崎哲二「戦時期日本の労働組織：産業報告会の役割」
2004年 5月 22日 ジェームズ・バクスター「戦間期における銀行家の団体」 園田英弘「フロンとデューク：『東京人名録』（昭和11年）に見る華族の所得」 井上章一「両大戦間期の建築家たち」 中西寛「戦間期の反英米主義」
2004年 7月 10日 福岡良明「知の編成とナショナルリティ」 河崎吉紀「新聞社における結社から会社への変遷―新聞記者の採用をめぐるって―」 猪木武徳「戦間期日本の社会集団とデモクラシーの崩壊―論点整理―」
2004年 9月 18日 望月和彦「大正期における工業家団体の発生」

		佐藤卓己「ジャーナリストにおける右翼言論人の位置―総合雑誌執筆者の変動分析から―」 吉沢英成「普選と民主主義のあいだ―マルコニー事件をめぐって―」
2004年11月 27日	石田あゆう「生活改善運動のネットワークとその影響」 伊藤之雄「昭和天皇・元老・宮中側近勢力の情報・ネットワークと政治」 斎藤修「厚生政策・愛育会・愛育村・山梨県源村の場合」	
2005年 2月 19日	阿部武司「戦間期における在華紡の活動―内外綿会社を中心に―」 スヴェン・サーラ「大正期における政治結社の発展、活動とそのネットワーク」 戸部良一「在郷軍人会と普選」	
2005年 5月 21日	伊東章子「電気業界団体の国民向け啓蒙活動にみる国家観とリベラリズム―電気協会と電気知識普及会を中心に―」 竹内洋「蓑田胸喜と原理日本社」 松田宏一郎「再構成された『自治』概念―戦間期の言説における植民地統治と国内行政のリンケ―」	
2005年 7月 16日	ジェームズ・バクスター「南洋協会について」 河崎吉紀「新聞記者の学校歴」 猪木武徳「本研究会の報告書の内容構成と執筆について」、「小作争議と政党勢力」	
2005年10月 8日	武藤秀太郎「戦間期の知識人集団―黎明会を中心に―」 園田英弘「働く貴族―社会階級としての華族は存在するか―」 吉沢英成「戦間期日本の政・軍関係―デモクラシーと軍事―」	
2005年12月 17日	四方田雅史「戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて『声価』・外国商・工業組合」 福岡良明「『民族』をめぐる知のネットワークとその亀裂」 韓錫政 "From Manchukuo to South Korea: The Diffusion of the High Modernist State"	
2006年 3月 11日	石田あゆう「『文化生活』グループの人的ネットワーク―消費・生活問題をを中心に―」 佐藤卓己「キャッスル事件と世論―戦間期『輿論の世論化』の一例―」 岡崎哲二「戦間期の銀行間ネットワーク金融システム」	
2006年 7月 22日	河崎吉紀「メディアにおける早稲田―在野精神による類似性の限界―」 スヴェン・サーラ「大正期における政治結社―黒龍会の活動と人脈―」 望月和彦「戦間期における『財界』の形成」 四方田雅史「『声価』概念と工業組合・輸出商―『声価』からみた戦間期の中間組織と中小企業政策―」	
2006年11月 4日	武藤秀太郎「戦間期における知識人集団―黎明会を中心に―」 佐藤卓己「キャッスル事件というフレーム・アップ―怪文書イベントと新聞の大衆転化―」 福岡良明「民族知の制度化―日本民族学会の成立と変容―」 戸部良一「帝国在郷軍人会と政治」	
2007年 3月 3日	伊東章子「電気業界団体の国民向け啓蒙活動にみる国家観とリベラリズム」(contributed paperで本人の発表はなし) 斎藤修「母子衛生政策・中間組織・乳児死亡率低下―愛育会の事業を中心に―」 吉沢英成「戦間期日本の政・軍関係―デモクラシーと	

	軍事―」
2007年 3月 4日	猪木武徳「木崎村小作争議と無産農民学校の設立運動」 松田宏一郎「戦間期の法思想と『団体』の理論構成」 伊藤之雄「昭和天皇・元老・宮中勢力の情報・ネットワークと政治」

087

出版と学芸ジャンルの編成と再編成
—近世から近現代へ—

●研究域

第4研究域 文化関係（新交圏）

●共同研究期間

2003（平成15）年4月～2007（平成19）年3月

●研究の概要

今日、人間をめぐる環境が大きく問い直されており、学問研究のあり方にも新たな変革が求められている。まず、みずからの足元をよく見つめ直すためには、われわれが当然のことのように思っている学問・芸術の諸ジャンルの形成過程をよくわきまえておくことが必要だろう。これらは、日本近現代において種々の教育やメディア（とりわけ出版）制度を通じて形づくられ、また、分岐と再編成を重ねながら一応の定着をみてきたものである。

その多くは、西欧近代の概念と諸制度の移入によって、徳川時代のものの編成替えされたものが基本になっているが、さらに第二次世界大戦後に再度編成替えされたものもある。それぞれの過程は、きわめて錯雑としたものでありながら、そのことが看過されたまま今日にいたっている。それゆえ、今や、徳川時代から今日にいたる学芸ジャンルの編成と再編成の様子を解明することが問われているといえよう。本研究の課題は、ここに絞られている。

しかし、必要な作業はあまりにも多い。徳川時代から明治期にかけての出版の全体像は、その概要すら解明されていない。西欧近代の基礎概念は、中国経由で輸入されたものが多いのだが、日本近現代における再編成過程とその内実の解明も依然として果たされていない。しかも、それらが、のちに中国・朝鮮半島のそれらに変化を促したのだが、その軌跡の解明も詳らかにされてはいない。とりわけ、ジャンルの分類などについては、メディア全般やリテラシーなど文化全体の動向と関連させつつ検討する必要がある、国際的かつ多分野の研究者による共同研究が必須であった。

●研究代表者

鈴木貞美（日文研教授、日本文学）

●幹事

マルクス・リュッターマン（日文研助教授、日本中世社会史・文化史）

●班員

浅岡邦雄（白百合女子大学図書館非常勤職員、読書空間論）

阿毛久芳（都留文科大学文学部教授、近現代詩）

荒木正純（筑波大学人文社会科学部研究科教授、イギリス文学）

有馬学（九州大学大学院比較社会文化研究院教授、近現代史）

池内輝雄（國學院大学文学部教授、日本近現代文学）

石田あゆう（京都精華大学教育推進センター講師、女性雑誌）

磯部敦（日本学術振興会特別研究員、明治期出版史）

市古夏生（お茶の水女子大学文教育学部教授、近世文学・出版）

井上健（東京大学大学院総合文化研究科教授、文学理論・翻訳）

今村忠純（大妻女子大学比較文化学部教授、比較文化学）

大原祐治（学習院高等科教諭、近現代文学）

小田川（三品）理絵（皇學館大学文学部国文学科専任講師、日本文学）

柏崎順子（一橋大学大学院法学研究科教授、法学）

梶山雅史（東北大学大学院教育学研究科教授、教育史）

金子務（大阪府立大学名誉教授、科学ジャーナリズム）

甘露純規（中京大学文学部言語表現学科助教授、明治期出版）

衣笠正晃（法政大学法学部教授、日本文学研究史）
ロバート・キャンベル（東京大学大学院総合文化研究科助教授、日本文学・出版史）
小谷野敦（著述業、比較文学）
酒井敏（中京大学文学部教授、明治期メディア史）
佐藤一樹（二松学舎大学国際政治経済学部教授、中国思想史）
佐藤卓己（京都大学大学院教育学研究科助教授、現代メディア史）
佐藤・バーバラ（成蹊大学文学部教授、女性史）
鈴木俊幸（中央大学文学部教授、近世出版史）
鈴木広光（奈良女子大学文学部助教授、印刷史）
高木元（千葉大学文学部教授、近世文学）
竹内洋（関西大学文学部教授、知識社会学）
竹村民郎（元大阪産業大学客員教授、経済史）
竹本寛秋（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程、文学）
谷川恵一（国文学研究資料館文献資料部教授、明治期出版）
津本信博（早稲田大学教育学部教授、近世文学）
寺澤行忠（慶應義塾大学経済学部教授、日本中世文学）
十重田裕一（早稲田大学文学学術院教授、近現代文学・映画）
十川信介（学習院大学文学部教授、明治期文学）
中川成美（立命館大学文学部教授、明治期文学）
中込重明（法政大学非常勤講師、講談・落語）
中嶋隆（早稲田大学教育・総合科学学術院教授、徳川期文学）
長島弘明（東京大学大学院人文社会系研究科教授、日本近世文学）
林正子（岐阜大学地域科学部教授、日本近代文学）
兵藤裕己（学習院大学文学部教授、語り物）
福井純子（立命館大学非常勤講師、芸能史）
藤實久美子（学習院女子大学非常勤講師、近世出版）
増田周子（関西大学文学部助教授、随筆）
松田清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、洋学史・科学技術史）
真鍋昌賢（大阪大学大学院文学研究科助手、大衆演芸）
目野由希（国士館大学文学部専任講師、日本近代文学）
リース・モートン（東京工業大学外国語研究教育センター教授、近現代文学）
安野一之（私立普連士学園非常勤講師、国文学研究）
山本美紀（元神戸女学院大学音楽学部非常勤講師、芸術文化）
横田冬彦（京都橘女子大学文学部教授、近世職人史）
吉岡亮（苫小牧工業高等専門学校文系総合学科講師、文学（演劇））
吉川登（大手前大学社会文化学部教授、近現代出版史）
依岡隆児（徳島大学総合科学部助教授、ドイツ文学・比較文学）
李漢燮（日文研外国人研究員／高麗大学校教授、近代日本文学）
稲賀繁美（日文研教授、芸術論・文化交渉論）
チャールズ・シロー・イノウエ（日文研外国人研究員／タフツ大学教授、近代文学・映像）
猪木武徳（日文研教授、経済史）
岩井茂樹（日文研技術補佐員、日本文学・日本芸能史・日本思想史）
マッツ・アーネ・カールソン（日文研外国人研究員／ストックホルム大学助教授、近代日本文学）
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論）
アグネシカ・ヘレナ・コズィラ（日文研外国人研究員／ワルシャワ大学東洋学研究所助教授、日本の宗教・哲学・文学）
アーデル・アミン・サーレ（日文研外国人研究員／カイロ大学専任講師、言語学）
鈴木敏昭（日文研客員教授／金沢大学非常勤講師、言語学）
ロイ・アンソニー・スターズ（日文研外国人研究員／オタゴ大学教授、近代日本文学・思想史）
檜垣樹理（日文研客員助教授／足利工業大学共通課程助教授）
関周植（日文研外国人研究員／嶺南大学校教授、美学芸術学・美術史）
劉建輝（日文研助教授、日中比較文学）

●成果物
日文研叢書 46、浅岡邦雄／鈴木貞美編『明治期「新式貸本屋」目録の研究』（日文研、2010年11月） 〈共同研究報告〉『日本研究』第37集（日文研、2008年3月）
●研究発表
2003年 4月 19日 鈴木貞美「趣旨説明」 浅岡邦雄「明治期貸本目録における分類と書目」
2003年 4月 20日 磯部敦「文栄堂における書籍の製作費と流通網」
2003年 6月 21日 鈴木俊幸「弥次さん喜多さんの時代―近世後期における文芸・学術の『大衆化』について」 早川聞多「古事類苑の分類」
2003年 6月 22日 甘露純規「田口卯吉『支那開化小史』偽版告訴事件について」
2003年 7月 19日 林正子「明治期における〈批評〉概念の成立〔序〕」 谷川恵一「『国民之友』の批評空間」
2003年10月 18日 福井純子「我楽珍スタイル―狂画にみる政治と社会―」 吉岡亮「現実を投影／構成する演劇―明治十年代の演劇の言説と諸ジャンルの再編―」
2003年10月 19日 竹本寛秋「明治四十年代『口語詩』概念の形成をめぐって」
2003年12月 20日 目野由希「山田美妙の『史伝』をめぐって」 高島健一郎「販売戦略から見る『円本』―改造社『現代日本文学全集』と春陽堂『明治大正文学全集』と―」
2003年12月 21日 鈴木貞美「概念＝ジャンル史研究の基本的な方法について」 兵藤裕己「演劇の身体―幕末から明治へ―」
2004年 4月 17日 福井純子「法蔵館三代目当主西村七兵衛日記について」 李漢燮「井上角五郎と韓国初期新聞の発行との関わりについて―『漢城旬報』『漢城周報』を中心に―」
2004年 4月 18日 依岡隆児「日独影響関係から見た絵入り文芸雑誌の成立―『パンの会』の『情調』を中心に―」 マッシミリアノ・トマシ「日本における修辞学受容をめぐって―島村抱月の文章論を中心に―」
2004年 6月 19日 鈴木広光「和文組版とジャンルの再編成」 金子務「雪文化地誌の成立―鈴木牧之『北越雪譜』出版をめぐって―」
2004年 6月 20日 古川登「明治・大正期の出版業界―大阪を中心に―」 徐蘇斌「『四庫全書』の分類に見る『建築』認識」
2004年 9月 4日 十川信介「随筆というジャンル」 真鍋昌賢「『民俗芸術』概念の成立と展開」
2004年 9月 5日 梶山雅史「教育雑誌にみる教育・学芸ジャンル（1）―明治前期教育雑誌の諸相―」 中嶋隆「江戸時代前期『好色本』の発生と展開―出版メディアの役割について―」
2004年11月 20日 リース・モートン「明治期における恋愛文学の編成―人情本から小説へ―」 横田冬彦「近世の軍書と〈歴史〉」
2004年11月 21日 マルクス・リュッターマン「いわゆる『けさうふみ』・『艶文』のジャンルの限定について―今川了俊・小笠原氏の書札禮伝書を軸に―」 目野由希「史談―その変遷―」
2005年 2月 19日 鈴木貞美「学芸ジャンル・概念史研究をどうすすめるか―『芸術』・『自然科学』を例に―」 岩井茂樹「『日本的』美的概念の形成―『幽玄』を中心に―」
2005年 2月 20日 増田周子「関西におけるカフェと文芸運動」 安野一之「法蔵館主の日記に読む風俗」
2005年 4月 16日 浅岡邦雄「著者と出版社との経済関係―明治期の印税・買取り・著作権―」

	柏崎順子「江戸出版界における『権利』意識の生成と展開」
2005年 4月 17日	藤實久美子「書肆出雲寺の創業とその活動―閉鎖系の『知』から開放系の『知』への回路―」
2005年 6月 11日	佐藤バーバラ「女性雑誌の編集戦略―増田義一と都河龍をめぐって―」 浅岡邦雄「明治期―書店の『雇人心得及賞罰法』―」
2005年 6月 12日	アグネシカ・ヘレナ・コズィラ「日本の近代哲学概念の発展における『気』と『理』」
2005年 8月 30日	国際研究会の結果をふまえての総合討論
2005年12月 17日	チャールズ・シロー・イノウエ「絵がなくなるという近代意識」 佐藤一樹「遊記と歴史：久米邦武と重野安禪にみる近代漢文」
2005年12月 18日	アンドリュウ・ガーストル「摺物と役者絵における俳諧・狂歌のジャンルの問題」 金炳辰「1920年代初期の在日朝鮮人社会主義者たちの動向―機関紙の分析を中心に―」
2006年 3月 11日	鈴木貞美「日本における芸術概念の形成、象徴美学の誕生」 東晴美「評判記から劇評へ：歌舞伎における批評の近世から近代」
2006年 3月 12日	浅岡邦雄「共益貸本社目録における簿記書」
2006年 4月 15日	李明剛「明治大正期の読書行為―『文藝春秋』の読者層の成立―」 マルクス・リュッターマン「『書簡』とはなにか―その概念の戦略的限定と帰納的特定―」
2006年 4月 16日	分科会 福田純子「共益貸本社目録：歴史・演説及討論書―植木枝盛読書記録との比較から―」
2006年 7月 22日	鈴木貞美「『日記』というジャンル」 井上健「翻訳文学とジャンル編成」
2006年 7月 23日	分科会 磯部敦「貸本日録分析―小説之部―」
2006年 9月 16日	依岡隆兄「交感する情調―ドイツ・ハイクの生成と俳句の再評価―」 十重田裕一「交錯する雑誌とジャンル―大正期『文藝春秋』の展開を中心に―」
2006年 9月 17日	分科会 共益貸本社目録の分析
2006年11月 18日	陸留弟「中日茶文化の視点―茶芸と茶道・『楽感』の茶と『苦寂』の茶―」 堀まどか「野口米次郎と戦争―ラジオと出版物にみる戦争詩―」
2006年11月 19日	分科会 安野一之「共益貸本社書籍目録における『小説書』を巡る一考察」
2007年 3月 17日	竹村民郎「我国における田園都市と公衆衛生―肺結核予防対策を中心として―」 金子務「西村伊作の文化事業―『文化学院』と月刊『科学と文芸』をめぐって―」
2007年 3月 18日	分科会 磯部敦「共益貸本社書籍目録にみる『地理書』」

088

「封建・郡県」論を巡った中国と日本における思想連環―漢字文化圏における他国認識と自国改革―

●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）

●共同研究期間
2003（平成15）年8月～2004（平成16）年7月
●研究の概要
同じく漢字文化圏に属している中国と日本の知識人の間の「封建・郡県」をめぐる対話の歴史は、とくに17世紀以降盛んになり、長く近代初期まで続いた。この課題に関して、かなりの研究の蓄積もなされているが、まだ問題もいくつか残されていると思われる。とくに、以下の2点が改めて検討されるべきであろう。
（1）「封建・郡県」論へのアプローチでは、中央と地方の関係だけではなく、秩序と規範、教育と学問、自国と外国勢力、科举制と身分制、家族とコミュニティの構造、官僚制、さらに、議会民主制などの視角も取り入れるべきであろうこと。
（2）「封建・郡県」の比較において、両国の知識人は自国の体制を弁護していたが、重大な危機に瀕した際には、相手国の長所や短所をより注意深く観察して、自国の現状批判や体制改革の参考等に活用していたこと。
これらの問題を、先学の成果を踏まえつつ、思想史、制度史、社会史との関連・交錯のなかで考察した。さらに、これらの研究を通して、漢字文化圏の諸国における儒教的共通観念に基づく思想連関や、欧米の衝撃による近代的改革とは違う自生的改革についても検討した。（公募研究）
●研究代表者
張翔（日文研外国人研究員／復旦大学人文学院歴史系教授、日本史）
●幹事
園田英弘（日文研教授、比較社会学）
●班員
菊部直（東京大学大学院法学政治学研究科助教授、日本政治思想史）
官文娜（武漢大学中国伝統文化研究センター客員教授）
権純哲（埼玉大学教養学部教授、東アジア思想史・文化史）
小島康敬（国際基督教大学社会学科教授、日本倫理思想史）
佐藤慎一（東京大学大学院人文社会系教授、中国近代思想史）
杉山文彦（東海大学文学部教授、中国思想史・東アジア文明史）
曾田三郎（広島大学大学院文学研究科教授、中国近代史）
田尻祐一郎（東海大学文学部教授、日本近世思想史）
陶徳民（関西大学文学部教授、日中比較思想史）
中田喜万（立正大学非常勤講師）
中山富広（広島大学大学院教育学研究科助教授、日本近世史）
林文孝（山口大学人文学部助教授、東アジア思想史・文化史）
本郷隆盛（宮城教育大学人文学部教授、日本思想史）
前田勉（愛知教育大学教育学部教授、日本近世思想史）
松田宏一郎（立教大学法学部教授、日本政治思想史）
水林彪（東京都立大学法学部教授）
山内弘一（上智大学文学部教授）
頼祺一（比治山大学教授、思想史）
李廷江（中央大学法学部教授、中国近代史・日中交流史）
六反田豊（東京大学大学院人文社会系研究科助教授、東アジア思想史・文化史）
渡辺浩（東京大学大学院法学政治学研究科教授、政治思想史）
コンスタンティン・ヴァボリス（日文研外国人研究員／メリーランド大学準教授、近世日本史）
テモテ・カーン（日文研助教授、比較文化論）
笠谷和比古（日文研教授、歴史学）
劉建輝（日文研助教授、日中比較文学）
●成果物
張翔／園田英弘編『「封建」・「郡県」再考―東アジア社会体制論の深層―』（思文閣出版、2006年7月）
●研究発表
2003年10月 11日 張翔「『封建・郡県』論における思想連環についての問題提起」 園田英弘「『封建』・『郡県』概念は東アジア産の社会科学の主要概念になりうるか」

2003年12月 20日	笠谷和比古「幕藩制国家における『封建』と『郡県』」 佐藤慎一「封建・郡県問題を考えるためのポイントについて」 頼祺一「幕末・維新时期における知識人の『封建』・『郡県』のイメージはどのようなものであったか」
2004年 4月 17日	頼祺一「近世知識人の『封建』・『郡県』のイメージはどのようなものであったか―古賀精里と頼山陽の場合―」 本郷隆盛「幕藩制後期の政治改革構想と『封建・郡県』論」 張翔「中国における封建・郡県論関係資料の紹介」
2004年 5月 22日	林文孝「明末清初の封建・郡県論―顧炎武を中心に―」 前田勉「近世日本の封建・郡県論のふたつの論点―日本歴史と世界地理についての認識―」 本郷隆盛「近世国家における封建・郡県論」
2004年 6月 26日	権純哲「朝鮮王朝の体制と改革論」 曾田三郎「中国の立憲改革と大隈重信の『封建』論―他国の政治改革をめぐる自国史認識―」 陶徳民「内藤湖南の『支那論』―民国初期の行財政改革に関する処方箋―」
2004年 7月 17日	中山富広「近世日本の国制と公儀領主制」 中田喜万「『封建・郡県』論からみた政治学―人材論との連関を踏まえつつ―」 杉山文彦「清末立憲論・革命論と『封建』・『郡県』」
2004年 7月 18日	溝口雄三「中国近世の封建論（地方分権論）」 水林彪「国制史からみた『封建』と『郡県』―『封建』『郡県』概念の普遍的可能性―」

089	日本文明史の再建―21世紀の環境・経済・文明―
●研究域	
第2研究域 構造研究（自然）	
●共同研究期間	
2004（平成16）年4月～2007（平成19）年3月	
●研究の概要	いま、われわれは地球環境問題に直面している。本研究は、この自然環境と人間の間に生まれた危機を克服し、持続的な文明社会を構築するためにに行った。
	その手段として、豊かな土壌と水が現在においても維持されている稲作漁労文明のエートスと豊かな森を背景とした山岳信仰の解明から始めた。
	稲作漁労社会が生物多様性を温存し、麦作農業に比べて豊かな自然を維持していることは誰の目にも明らかである。こうした水環境を維持し生物多様性を温存する稲作漁労文明と森の文明のエートスを探究するなかで、日本文明史の再建への足がかりとなることをめざした。（なお、本研究は、富山県日本海学推進機構との地域連携共同研究として実施された。）
●研究代表者	
安田喜憲（日文研教授、環境考古学）	
●幹事	
池内恵（日文研助教授、イスラム史）	
●班員	
石田秀輝（東北大学大学院環境科学研究科教授、ネイチャーテクノロジー）	
石弘之（北海道大学公共政策大学院教授）	
岩鼻通明（山形大学農学部教授、地理学）	

植田和弘（京都大学大学院経済学研究科教授、環境経済）
上田穰（会津大学コンピュータ理工学部専任講師、コンピューター情報学）
大塚邦明（東京女子医科大学東医療センター教授、内科学）
小佐野峰忠（会津大学コンピュータ理工学部教授、コンピューター情報学）
小田匡保（駒澤大学文学部教授、地理学）
欠端實（麗澤大学比較文明文化研究センター教授、民俗学）
片井修（京都大学大学院情報学研究科教授、情報科学）
加藤めぐみ（国立科学博物館・日本学術振興会研究員、珪藻分析）
金田久璋（福井県美浜町誌編纂委員会委員長、民俗学）
上垣外憲一（帝塚山学院大学人間文化学部教授、比較文化）
岸本吉生（警察庁組織犯罪対策部暴力排除対策官、環境経済学）
北村必勝（財損保ジャパン環境財団専務理事、環境学）
鬼頭昭雄（気象庁気象研究所気候研究部第一研究室室長、気候学）
倉阪秀史（千葉大学法経学部助教授、環境経済学）
黒田晃弘（國學院大學文学部大学院生、地理学）
河野博子（読売新聞東京本社編集委員、情報メディア論）
小林正明（環境省環境大臣官房秘書課長、環境保全）
坂井正人（山形大学人文学部助教授）
佐藤文一（秋田県産業経済労働部長）
篠上雄彦（新日本製鐵㈱環境部環境リレーションズグループマネジャー、エネルギー資源学）
下原勝憲（同志社大学工学部教授、コンピューター情報学）
染川明義（人間文化芸術研究所長）
高橋恵美子（大阪外国語大学外国語学部助教授）
高橋学（立命館大学文学部教授、環境考古学）
竹林征三（富士常葉大学環境防災学部教授、風土工学）
田中章義（ワールドユースピースサミット平和大使／作家）
田中克（京都大学フィールド科学教育研究センター教授、海洋資源学）
谷口正次（国際連合大学ゼロエミッションフォーラム理事、鉱産資源学）
民間順朗（㈱オリエンタルコンサルタンツ分野リーダー、文化財保護）
塚原鐵二（富山県生活環境部長、環境学）
常木晃（筑波大学大学院人文社会科学研究科助教授）
十市勉（日本エネルギー経済研究所常務理事、エネルギー資源学）
外山秀一（皇學館大学文学部教授、環境考古学）
中井徳太郎（東京大学医科学研究所教授、経済学）
永里善彦（㈱旭リサーチセンター代表取締役社長、経済学）
永野博（科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー、科学政策）
中山厚（東京税関総務部長、経済学・国土保全）
新妻弘明（東北大学大学院環境科学研究科教授、環境工学）
秦陽一（王子ネピア㈱特別顧問、物質材料科学）
畠山重篤（水山養殖場代表、水産学）
萩原秀三郎（日本民俗学会／民俗芸能学会評議員、民俗学）
萩原法子（文化庁文化審議会専門委員／八千代市文化財審議会審議委員）
羽田肇（物質研究所ディレクター、物質材料科学）
速水享（速水林業社長、林学）
平泉滋祥（勝山市立図書館長）
平川新（東北大学東北アジア研究センター教授、歴史学）
平野秀樹（環境省総合環境政策局環境影響評価課長、森林セラピー）
笹木裕二（東京電力㈱環境部副長）
福澤仁之（首都大学東京都市環境学部教授、堆積学）
藤木利之（名古屋大学環境学研究科COE特別研究員、花粉学）
藤崎憲治（京都大学大学院農学研究科教授、昆虫学）
古沢広祐（國學院大學経済学部教授、環境経済学）
前田泰宏（経済産業省製造産業局ものづくり政策審議室長）
真下正樹（日本経団連自然保護協議会顧問、環境保全学）
松井彰彦（東京大学経済学研究科教授、経済学）
宮内博美（経済産業省商務情報政策局サービス政策課長補佐）
宮本融（北海道大学公共政策大学院特任助教授、政治学）

<div>村田泰夫（農林漁業金融公庫理事、メディア情報）</div> <div>百田弥栄子（アジア民族造形文化研究所教授、民俗学）</div> <div>森鐘一（モリエコロジー(株)代表取締役、水産学）</div> <div>守田益宗（岡山理科大学自然科学研究所助教授、植物生態学）</div> <div>森本英香（環境省環境保健部企画課長、環境学）</div> <div>矢野康明（東京電力(株)環境部担当グループマネージャー、エネルギー資源学）</div> <div>米延仁志（鳴門教育大学学校教育学部助手、年輪考古学）</div> <div>米原寛（立山博物館長、歴史学）</div> <div>李国棟（広島大学大学院文学研究科外国人教師）</div> <div>渡邊幸平（日本工営(株)首都圏事業部環境部技術士補、都市環境学）</div> <div>今谷明（日文研教授、中世史）</div> <div>宇野隆夫（日文研教授、考古学）</div> <div>笠谷和比古（日文研教授、近世史）</div> <div>佐藤洋一郎（日文研客員教授／総合地球環境学研究所教授、遺伝学）</div> <div>千田稔（日文研教授、古代史）</div> <div>山辺規子（日文研客員助教授／奈良女子大学文学部助教授、西洋史）</div> <div>●成果物</div> <div>安田喜憲編著『山岳信仰と日本人』（NTT出版、2006年4月）</div> <div>●研究発表</div>	<div>米原寛「立山信仰について」</div> <div>2005年 6月 4日 安田喜憲「森と海を守る食・破壊する食」</div> <div>畠山重篤「鱈の森を育てる」</div> <div>パネルディスカッション「21世紀の経済と食そして環境」</div> <div>司会 岸本吉生</div> <div>パネラー：中井徳太郎、平川新、田中克、立林昭彦、菅原昭彦</div> <div>2005年 6月 5日 北川淳子「日本の海を守る黒山」</div> <div>浄土ヶ浜 資料収集</div> <div>※受託研究シンポジウム</div> <div>2005年 7月 16日 積水化学工業(株) 奈良工場見学</div> <div>2005年 7月 17日 石田秀輝、岸本吉生 オープニングアドレス</div> <div>座長 北村必勝「自然の凄さを賢く使う」</div> <div>石田秀輝「ネーチャーミックスリーからネーチャーテックへ」</div> <div>吉野美耶子「ジュニン・ペニユスの中のバイオミックスリー」</div> <div>座長 篠上雄彦</div> <div>小林一紀「ネーチャーミックスリープラットフォーム」</div> <div>小林俊安「自然の凄さを形につくる」</div> <div>赤池学「自然の凄さを賢く活かすものづくり暮らし方」</div>	<div>2004年 6月 26日 [セッション1]「山岳信仰研究の新しい取り組みと方法」</div> <div>司会 佐藤洋一郎</div> <div>安田喜憲、福澤仁之、藤木利之、那須浩郎「山岳信仰を湖底の年縞から読み解く」</div> <div>小佐野峰忠、上田穰「山岳信仰をコンピュータから読み解く」</div> <div>2004年 6月 27日 [セッション2]「中国と日本の山岳信仰は関係しているか」</div> <div>司会 金田久璋</div> <div>萩原秀三郎「山と里の民俗文化的特質」</div> <div>平泉滋祥「白山平泉寺を歩く」</div> <div>※日文研伝統文化芸術総合研究プロジェクトとの合同研究会</div> <div>2004年 7月 27日 黒田晃弘「白山参詣曼荼羅をよむ」</div> <div>梅原猛「日本の伝統文化と現状—白山信仰と円空が語るもの—」</div> <div>中西進「日本のエトスと詩歌」</div> <div>安田喜憲「山岳信仰と日本文明史の再建」</div> <div>魚住孝至「武道の国際化をめぐる諸問題」</div> <div>廣瀬量平「日本の伝統音楽と現代音楽」</div> <div>白幡洋三郎「史跡・名勝の現代的意義」</div> <div>稲賀繁美「職人のモノヅクリの伝統と現代社会」</div> <div>パネルディスカッション</div>	<div>2004年 7月 28日 百田弥栄子「雷神研究—中国の山曼荼羅—」</div> <div>萩原法子「十二山の神と三本足の鳥」</div> <div>築田直幸「絹本著色恵日寺絵図を読む—神仏習合を完成させた徳—」</div> <div>2004年 9月 27日 金田久璋「山の神論言説批判」</div> <div>佐々木高明「新説・山の神信仰をめぐる問題」</div> <div>2004年 9月 28日 欠端實「稲作文化のエートス—稲魂と祖霊を受け継ぐ女性たち—」</div> <div>李国棟「日本人のアイデンティティー—『山人』—」</div> <div>2004年10月 17日 福井・泰澄寺、泰澄御母堂願、白山平泉寺博物館と発掘現場（現地研究会）</div> <div>フェクリ・ハッサン「西アジアから地中海世界における山岳信仰」</div> <div>2004年10月 18日 白山ひめ神社（現地研究会）</div> <div>岩鼻通明「立山信仰と出羽三山信仰について」</div> <div>2004年10月 19日 室堂平「立山信仰について」（現地研究会）</div>	<div>2005年10月 25日 司会 安田喜憲</div> <div>[セッション1]「なぜマヤ文明は誕生し崩壊したのか?」</div> <div>司会 ノルム・カッター</div> <div>ゲラルド・ハウク「熱帯地域の気候変動ダイナミックスと文明の興亡」</div> <div>ベルノン・スカルボロウ、パトリシア・モラ「熱帯の生態と儀礼：古代マヤと現代のバリ島人の比較のなかで」</div> <div>全員討論「なぜマヤ文明は崩壊したのか?」</div> <div>安田喜憲、福澤仁之 コメント「渤海の滅亡とマヤ文明崩壊の不思議な一致」</div> <div>2005年10月 26日 [セッション2]「モンスーンアジアの文明の持続性」</div> <div>司会 ミハエル・オコーネル</div> <div>フェクリ・ハッサン「完新世におけるナイル川の洪水—ファイユーム盆地の分析から—」</div> <div>スニール・グプタ「ガンジス川とインド西海岸そしてインド洋のネットワーク：その交流と都市のダイナミズムおよび資源利用研究（紀元前100～紀元後500）」</div> <div>司会 ヴェルナン・スカルボロウ</div> <div>セルゲイ・ラプチェフ「東アジア南部における古代越とクメル人国家の興亡（長江とメコン）」</div> <div>安田喜憲「長江文明の発見とその持続型文明のエートス」</div> <div>全員討論「モンスーンアジア文明の持続性とは?」</div> <div>[セッション3]「アジア太平洋の島々の持続性—その社会・経済・環境と文化—」</div> <div>司会 スニール・グプタ</div> <div>福澤仁之「イースター島の文明の興亡に気候変動は大きな影響を与えたか?」</div> <div>北川淳子「イースター島ラノ・カオ堆積物の予察的花粉分析」</div> <div>那須浩郎「イースター島ラノ・カオとラノ・ララクの第四紀堆積物の大型植物遺体分析」</div> <div>司会 キャセイ・ヒバード</div> <div>バリー・ロレット「南太平洋の島々の持続型環境：その成功の理由とは」</div> <div>藤木利之「沖縄県石垣島名蔵アンバル湿原における完新世の植生変遷」</div> <div>ミロスロウ・マコホニエンコ「東アジア島嶼部における気候と陸上生態：韓国済州島における現間氷期の開始について」</div> <div>全員討論「イースター島文明はなぜ崩壊したのか?」</div> <div>2005年10月 27日 [セッション4]「大西洋の島々の持続性—その社会・経済・環境と文化—」</div> <div>司会 ゲラルド・ハウク</div> <div>ノイム・カトー、ガイル・カトー「北大西洋の地域社会の持続性—カナダ ニューファウンドランドとプリンス・エドワード島の例—」</div> <div>ミハエル・オコーネル「ヨーロッパの島における農耕文化の発展と気候変動：アイルランド6,000年間の変遷」</div> <div>キャセイ・ヒバード「ここ数十年間における人間と環境の相互作用」</div>	<div>全員討論「東洋と西洋の人間と環境の相互作用の脆弱性と持続性」</div> <div>十和田湖見学</div> <div>[セッション5]「未来の持続型文明社会モデル」</div> <div>司会 上田穰</div> <div>下原勝憲「進化発展モデルと自己分解モデル—文明の興亡シミュレーションに向けて—」</div> <div>田路和幸「イオウの循環を利用した水素製造」</div> <div>全員討論「持続性文明社会へ向けて」</div> <div>2005年10月 28日 [セッション6]「地球と人類を救済する資源循環型社会のテクノロジー」</div> <div>司会 ミロスロウ・マコホニエンコ</div> <div>山崎伸道「日本の伝統文化からみたガイヤと融合する生態的持続型社会の構築」</div> <div>中村圭吾「日本における河川と湿地の再生」（コメンテーター：真下正樹）</div> <div>司会 本郷一美</div> <div>谷口正次「資源循環型社会に向けて」</div> <div>島田和明「物質大循環時代の担い手としての新しい精錬所像について」</div> <div>司会 新妻弘明</div> <div>篠上雄彦「環境型水素社会を目指して：日本の鉄鋼業の現場から」</div> <div>湯原哲夫「先進工業社会における自己完結型のエネルギー利用／循環システムへのビジョン」</div> <div>司会 フェクリ・ハッサン</div> <div>石田秀輝「人と地球を考えたものづくりからネイチャー・テクノロジーへ自然のすごさを賢くいかす」</div> <div>垣澤英樹「自然の不思議のショールーム構築」</div> <div>小佐野峰忠、上田穰「D・メドゥズ博士のシステム・ダイナミック・モデルの再考察」</div> <div>討論「資源循環型社会を目指して」（討論者：秦陽一）</div> <div>2005年10月 29日 エクスカーション 鳥温泉ブナ林、大湯環状列石</div> <div>エクスカーションガイド 本郷一美、北川淳子、藤木利之、那須浩郎、五反田克也</div> <div>共同研究会</div> <div>2006年 1月 21日 中川毅「高精度分解能の気候変動復元と近未来予測」</div> <div>竹原正篤「地球温暖化と企業経営—損害保険会社の視点から—」</div> <div>2006年 1月 22日 福澤仁之「年縞によるモンスーンアジア気候変動」</div> <div>大塚邦明「身体のリズムと気候変動」</div> <div>総合討論「地球温暖化と企業経営」</div> <div>2006年 7月 29日 安田喜憲「本年度の活動方針について」</div> <div>中井徳太郎「ものづくり生命文明機構の設立について」</div> <div>佐藤文一「秋田県の現状と課題」</div> <div>小野勇「秋田県の将来構想」</div> <div>全員討論「秋田県の未来を考える」</div> <div>司会 中山厚</div> <div>2006年 7月 30日 森本英香「命と心の輝く都市再生をめざして」</div> <div>関原宏昭「循環型社会をめざして」</div> <div>民岡順朗「命と心の輝く都市再生」</div> <div>大塚邦明「命と環境のリズム」</div> <div>総合討論「命と心の輝く都市再生をめざして」</div> <div>司会 岸本吉生</div> <div>2007年 2月 11日 松重和美「大学を核としたイノベーションの創出—伝統文化・先端技術・芸術の融合—」</div> <div>笠谷和比古「伝統文化とグローバリズム」</div> <div>竹林征三「東洋の智慧と環境学」</div> <div>村田泰夫「共生社会と環境保全型農業」</div>
--	--	--	--	---	--

2007年 2月 12日 安田喜憲「3年間の研究成果の総括と今後の研究計画」

090 日本の近代化過程における技術と身体の思想

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
2004（平成16）年4月～2005（平成17）年3月
●研究の概要
幕末開国から昭和戦前期までのほぼ100年間を「日本の近代化過程」と位置づけ、その間における技術と身体 の不可分な相関のあり方を、思想史的観点から解明することが、本研究の目的であった。
技術と身体 のたがいに映しあう関係を、とくに技術の側から照らし出すことによって、現代技術文明の来歴を問いた だとともに、日本の近代化の意味を深層から明らかにすることをめざした。この主題は、当然ながら「近代対反近代」の対立を止揚する立場を射程に入れることになる。
西欧から輸入された技術は、日本的・東アジア的な伝統 のなかで形成された日本社会の身体性といかに関係したか。その過程には、全面的な受容あるいは拒否、妥協ないしは融合、さらに外来的技術を契機とする内発的技術の開発、そして日本の特殊における普遍の自覚…といった段階的時期が存在する。その各時期における（技術—身体）の関連を、6つの思想運動とその代表の人物（あるいはグループ）に照準を合わせて検討した。（公纂研究）
●研究代表者
木岡伸夫（日文研客員教授／関西大学文学部教授、現代哲学・風土学）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、日本文芸・思想・文化）
●班員
東徹（大阪府教育センター主任研究員、科学技術論）
伊藤徹（京都教育大学社会科学科助教授、日本近代精神史）
萩野雄（京都教育大学社会科学科助教授、ドイツ政治思想史）
角野昇八（大阪市立大学工学部教授、河海工学）
川向正人（東京理科大学理工学部教授、建築学）
桑子敏雄（東京工業大学大学院社会理工学研究科教授、環境哲学）
品川哲彦（関西大学文学部教授、倫理学）
千田智子（日本学術振興会特別研究員、日本近代思想史）
千代章一郎（広島大学大学院工学研究科助教授、建築史）
竹山重光（和歌山県立医科大学助教授、技術論・身体論）
中澤務（関西大学文学部助教授、生命倫理学）
長妻三佐雄（同志社大学非常勤講師、日本近代政治思想史）
西村将洋（日本学術振興会特別研究員、日本近代文学史）
服部健二（立命館大学文学部教授、西洋近現代哲学）
水野友晴（大阪外国語大学非常勤講師、日本近代哲学史）
嶺秀樹（関西学院大学文学部教授、哲学・京都学派研究）
宮野真生子（京都大学文学研究科博士後期課程、日本近代哲学史）
宮野美子（京都教育大学非常勤講師、日本近代哲学史）
望月俊孝（福岡女子大学文学部教授、近代哲学・建築論）
八百俊介（神戸市立工業高等専門学校助教授、人文地理学）
吉田公平（東洋大学文学部教授、中国近世思想史）
●成果物
木岡伸夫／鈴木貞美編著「技術と身体—日本「近代化」の思想—」（ミネルヴァ書房、2006年3月）
●研究発表
2004年 4月 23日 西村将洋「『第三日本』の周辺—ブルーノ・タウトと同時

	代言説—」 鈴木貞美「日本近現代の生命観：進化論受容を中心に」 桑子敏雄「国土管理システムの転換と空間の思想」
2004年 4月 24日	萩野雄「柳宗悦における『文化』と『政治』 —沖縄方言論争を中心にして—」 吉田公平「2つの物理学」
2004年 7月 23日	東徹「『技術』の視点からみた佐久間象山と科学技術」 角野昇八「『日本の近代化過程における技術と身体 の思想 」に関わる工学的視点」 宮野美子「『眼』の技術としての『知』 —柳宗悦の心悞『見テ知リソ』をめぐって—」
2004年 7月 24日	川向正人「身体論から見る堀口捨己の庭の思想」 木岡伸夫「近代化過程における住まいと自然—大阪を中心に—」
2004年 9月 18日	水野友晴「西周における『啓蒙』と『理』」 千田智子「明治政府の宗教政策と国土空間再編の論理」 千代章一郎「近代京都における庭・庭園・公園の変容」 望月俊孝「自然のロゴスに沿う建築—タウトの近代日本文化批判—」
2004年10月 29日	国際シンポジウム「風土と技術の近代」 〈技術と身体 の歴史性 〉 オギュスタン・ベルク「サイボーグの住まいの機械学」 ミシェル・ティボン＝コルニエ「現代技術の大波」 アンドリュウ・フィーンバーグ「技術の批判理論」 マーク・ラリモア「風土学 の倫理学的挑戦と危険—停滞と偶然の間の和辻哲郎— 」 常俊宗三郎「技術と日本文化」
2004年10月 30日	オギュスタン・ベルク「オギュスタン・ベルクとの対話—風土学 の可能性— 」 品川哲彦「ベルク教授との対話—倫理学（環境倫理学）の観点から—」 中澤務「ギリシア哲学の立場から見た風土学 の諸概念 」 野間晴雄「水田・農民と技術の風土化—通態性のアジア の表出、日本の表出— 」 嶺秀樹「人間存在論としての風土学」
2005年 1月 7日	服部健二「京都学派の人間学 の系譜とその身体論技術論 」 宮野真生子「柳宗悦から柳宗理へ—民芸の近代性と自然—」 集中討議「近代性及び近代化について」
2005年 1月 8日	長妻三佐雄「政教社ナショナリズムと進化論—三宅雪嶺を中心に—」 竹山重光「『優生運動』の医者たち」 八百俊介「入会林野整備に関する一考察」
2005年 3月 25日	中澤務「優生学 の形成—1900年・1910年代における技術と身体— 」 総括討議Ⅰ「近代化過程が意味するもの」（代表者による提議） 総括討議Ⅱ 所感と展望（全員によるコメント）
2005年 3月 26日	出版計画および2005年度共同研究について 各分科会

091 日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅰ）
●共同研究期間
2004（平成16）年4月～2007（平成19）年3月
●研究の概要
本研究は、戦前日本の植民地支配の実務を担った官僚について、その制度・動態・政策への影響などを総合的に究明しようとするものであった。植民地統治の動向に影響を及ぼした支配者側のファクターとしては、現地の総督および軍指導者と植民地官僚、入植日本人、本国の藩閥・政党・軍部等の諸勢力などを想定できようが、その中で植民地統治を実地に担った官僚群については、今なおまとまった研究が存在しない。
植民地支配の研究は、相互に連関するいくつかの問題群を含んでいる。第一に、植民地官僚を制度面から明らかにすることである。植民地官僚層の人事・組織・動態を規定していた制度的基盤には従来ほとんど関心が払われてこなかったが、たとえば当時の朝鮮総督府は、当時の日本のいかなる官庁をもしのぐ規模の官僚を抱えていた事実 に鑑みるとき、基礎的な問題として解明する必要がある。
第二に、政策決定への影響という政策史の次元からの研究である。前述のように植民地官庁が大量の官僚を抱えていたことは諸外国の植民地支配と比較しても日本の植民地支配の特徴をなしていた。このように大量の官僚を送り込み、徹底した末端支配を貫徹させようとするスタイルが日本植民地主義の特徴として認められる以上、官僚の政策決定への影響は重要な研究課題となった。
第三に、植民地独自の問題として、日本人官僚のみならず現地民族が（とくに朝鮮の場合）一定の比率で植民地支配機構に編入されていた点に目をむけなければならない。韓国では、「親日派」研究の一環として朝鮮人官僚についての関心が高まっている。また、それらの研究の蓄積に立ち、彼らを単なる「民族の裏切り者」という糾弾を超えた視角も模索されはじめ、日本による植民地支配の矛盾の一面を最も象徴的に体现する存在として理解する議論も現れている。
●研究代表者
松田利彦（日文研助教授、近代日朝関係史）
●幹事
マルクス・リュッターマン（日文研助教授、日本中世社会史）
●班員
青野正明（桃山学院大学文学部教授、朝鮮近代史）
浅井良純（天理大学・同志社大学非常勤講師、朝鮮近代史）
浅野豊美（中京大学教養部教授、東アジア近代史）
大浜郁子（法政大学兼任講師、台湾近代史）
河合和男（奈良産業大学経済学部教授、台湾朝鮮経済史）
川崙陽（京都大学大学院文学研究科博士後期課程、日朝関係史）
河原林直人（名古屋学院大学経済学部専任講師、台湾近代史）
木村健二（下関市立大学経済学部教授、近代朝鮮社会史）
通堂あゆみ（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程、朝鮮近代史）
永井和（京都大学大学院文学研究科教授、近代日本史）
野口真広（早稲田大学政治経済学術院研究員、台湾近代史）
橋谷弘（東京経済大学経済学部教授、東アジア近代経済史）
浜口裕子（拓殖大学政経学部教授、東アジア近代史）
廣岡淨進（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程、朝鮮近現代史）
広瀬貞三（福岡大学 の 文学部教授、朝鮮近代史）
福井譲（広島大学大学院国際協力研究科博士後期課程、朝鮮近現代史）

堀添伸一郎（滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士後期課程、朝鮮近現代史）
水野直樹（京都大学 の 人文科学研究所教授、朝鮮近現代史）
三谷憲正（佛教大学文学部教授、日本・朝鮮文学）
やまだあつし（名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授、台湾近代史）
李鐘旼（中央大学総合政策学部非常勤講師、近代朝鮮社会史）
李昇燁（京都大学 の 人文科学研究所助手、近代朝鮮社会史）
李炯植（東京大学大学院 の 人文社会学系研究科博士後期課程、近代朝鮮政治史）
金仁徳（日文研外国人研究員／韓国国立中央博物館学芸研究師、近代韓国史）
鄭在貞（日文研外国人研究員／ソウル市立大学校文理工科大学教授、韓国現代史）
ジェームズ・バクスター（日文研教授、日本近代史）
林洋子（日文研客員助教授／京都造形芸術大学芸術学部助教授）
韓錫政（日文研外国人研究員／東亜大学校教授、歴史社会学）
劉建輝（日文研助教授、日中比較文化）
●成果物
松田利彦／やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（思文閣出版、2009年3月）
●研究発表
2004年 5月 9日 松田利彦「植民地期朝鮮における官僚（制）についての研究史」 浅井良純「植民地期朝鮮の官僚データベースについて—韓国歴史情報統合システムを中心に—」 やまだあつし「植民地台湾における官僚についての研究史」
2004年 7月 16日 浅井良純「韓国併合前後における日本人官僚について—文官高等試験合格者を中心に—」 水野直樹「朝鮮総督府の法務官僚—『思想検事』を中心に—」 廣岡淨進「満州国閩島省公署の朝鮮人官僚」 河原林直人「植民地官僚と文化団体に関する一考察—南洋協会と台湾総督府の関係—」
2004年10月 3日 三谷憲正「朝鮮総督府—官僚の軌跡—鈴木穆をめぐって—」 李炯植「所謂『文化統治』初期における朝鮮総督府官僚の統治構想」 川崙陽「朝鮮総督府の学務官僚—『皇民化』政策期を中心に—」 浜口裕子「朝鮮と満州の間の人の動きと東アジア史」
2004年11月 15日 松田利彦「1910年代朝鮮における『憲兵警察制度』再考」 やまだあつし「台湾総督府の技術官僚について—殖産局を中心に—」 金仁徳「朝鮮総督府博物館史についての研究史的検討」 李昇燁「植民地出身者高文合格者に関する基礎的調査」 橋谷弘「朝鮮総督府の日本人官僚」
2005年 1月 17日 永井和「『職員録』の使い方—あるケース・スタディー—」 野口真広「石塚英蔵の植民地政策—台湾時代を中心に—」 福井譲「朝鮮総督府通信局について—郵政官僚を中心に—」
2005年 3月 29日 広瀬貞三「朝鮮総督府の土木局長・土木課長」 青野正明「植民地期朝鮮の神職に関する基礎的研究—人事を中心に—」

	木村健二「戦時経済統制と朝鮮総督府官僚」
2005年 4月 25日	松田利彦「1920年代前半における警察官僚の治安認識」 大浜郁子「台湾公学校令（勅令）の制定過程—学務官僚との関連において—」 浅野豊美「台湾植民地官僚について」
2005年 6月 13日	浅井良純「大韓帝国における親日派官僚の社会身分について—社会身分を中心に—」 水野直樹「朝鮮総督府法務官僚の治安問題認識」 川崙陽「朝鮮総督府の学務官僚」
2005年 7月 24日	三谷憲正「朝鮮総督府官僚—鈴木穆の場合—」 野口真広「台湾—関東州—朝鮮を移動した官僚層の分析—」 橋谷弘「朝鮮の都市計画と植民地官僚」
2005年10月 19日	鄭在貞「朝鮮総督府の鉄道官僚と鉄道政策—大村卓一の場合—」 金玄「戦前日本における『中央朝鮮協会』に関する基礎研究—その実態と役割について—」 やまだあつし「野呂寧—明治期台湾のある技術官僚について—」 浜口裕子「植民地の人の流れ：教育機関からみる」 李炯植「植民地朝鮮における司法権独立—朝鮮における裁判所構成法の適用問題を中心に—」
2005年12月 27日	松田利彦「国際研究集会について」 永井和「倉富勇三郎と植民地朝鮮」 長沢一恵「朝鮮総督府官僚の鉱業政策—両大戦間期における保護奨励策をめぐって—」 李昇燁「三・一運動期における朝鮮在住日本人社会の対応と動向」 松田利彦「1920年代後半期における朝鮮総督府警察官僚の治安認識と対応—社会主義運動と新幹会に対する認識を中心に—」
2006年 3月 6日	李昇燁「外務省の『外地人』官僚：朝鮮人・台湾人副領事を中心に」 福井譲「朝鮮総督府官僚の通信政策—朝鮮簡易生命保険制度の導入について—」 青野正明「植民地朝鮮の神職に関する基礎的研究」 広瀬貞三「朝鮮総督府の労働官僚—宮孝一（1907〜？）を中心に—」
2006年 5月 13日	松田利彦「本年度研究会予定について」 木村健二「戦時統制下の在朝日本人政策と経済官僚」 河合和男「朝鮮総督府の電力政策」 廣岡淨進「満州国間島省における省公署官僚の構成と統治実態—朝鮮総督府との関係への関心から—」 河原林直人「戦時期における台湾総督府の指針：臨時台湾経済審議会を中心に」
2006年 7月 18日	三谷憲正「鈴木穆と朝鮮総督府—植民地官僚のメンタリティーをめぐって—」 ジェームズ・バクスター「朝鮮銀行の経済陣と植民地官僚」 広瀬貞三「朝鮮総督府土木官僚の土木工事認識」 浅野豊美「植民地台湾阿片行政と星製薬」
2006年10月 2日	通堂あゆみ「京城帝国大学生の卒業後動向：法文学部を中心に」 青野正明「植民地朝鮮の神職に関する基礎的研究—『神社人事関係綴』を中心に—」 橋谷弘「朝鮮総督府高等官 試論」 河原林直人「南洋経済懇談会を巡る官民の齟齬：外務省・台湾総督府・在外邦人の認識」
2006年12月 22日	金玄「『中央朝鮮協会』と参政権問題」

	長沢一恵「朝鮮における鉱業行政と朝鮮鉱業会」 永井和「倉富勇三郎と植民地朝鮮」 川崙陽「朝鮮総督府の学務官僚」
092	「関西」史と「関西」計画—文化の生成と自然的・社会的基盤—
●研究域	
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）	
●共同研究期間	
2004（平成16）年4月～2007（平成19）年3月	
●研究の概要	
本研究は、「関西」を対象として、先駆的に日本文化をつくりあげること	
に影響を与えた自然的基盤と、それを支えた社会的基盤についての特徴を、	
多角的に議論した上で、改めて総括的な「関西」史を描ききり、さらに、今日	
の「関西」がかかえている文化的諸状況を展開するために、自然的基盤を	
いかに活用し、どのような社会的基盤の整備が必要とされるかという将来	
的な問題について討論を深め、新たな「関西」計画を立案することを課題と	
した。	
このため、たとえば中国の上海や韓国の釜山との歴史的文化的関係や現	
状との比較のため、ゲストスピーカーを招いて検討素材等の提供を受けた。	
こうした成果は、報告書『関西を創造する』としてまとめられた。	
●研究代表者	
千田稔（日文研教授、歴史地理学）	
●幹事	
宇野隆夫（日文研教授、考古学）	
●班員	
青木淳（日文研客員助教授／高知女子大学文化学部助教授、仏教美術史）	
青山宏夫（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授、景観史）	
足立敏之（国土交通省河川局河川計画課長、国土整備行政）	
池田浩（阪神電気鉄道㈱社長室課長、観光開発論）	
石森秀三（北海道大学観光学高等研究センター長、観光人類学）	
上田正昭（京都大学名誉教授、日本古代史）	
大石久和（国土技術研究センター理事長、道路工学）	
尾田榮章（日本水フォーラム相談役、河川工学）	
小野田一幸（神戸市立博物館学芸課事業係学芸員、地図学史）	
鍵岡正謹（岡山県立美術館長、美術評論）	
柏岡富英（京都文教大学人間学部教授、社会学）	
桐村英一郎（神戸大学客員教授、社会評論）	
佐伯順子（同志社大学文学部社会学科教授、文学）	
高橋徹（滋賀県立大学非常勤講師、古代文化論）	
武部宏明（近畿日本鉄道㈱秘書広報部長、観光開発論）	
谷口博昭（国土交通省技監、都市整備論）	
土井勉（神戸国際大学経済学部教授、都市開発論）	
樋口忠彦（京都大学大学院工学研究科教授、景観環境計画論）	
福田珠己（大阪府立大学人間社会学部助教授、文化地理学）	
藤本貴也（国土地理院長、土木工学論）	
三木理史（奈良大学文学部助教授、交通地理学）	
森洋久（大阪市立大学大学院文学研究科助教授、情報学）	
脇田修（大阪歴史博物館長、日本近世史）	
渡辺豊和（渡辺豊和建築工房主宰、建築学）	
井上章一（日文研教授、建築学）	
今谷明（日文研教授、国史学）	
鈴木貞美（日文研教授、文学）	
光田和伸（日文研助教授、文学）	

	安田喜憲（日文研教授、環境考古学）
●成果物	
千田稔編『関西を創造する』（和泉書院、2008年3月）	
●研究発表	
2004年 5月 8日	千田稔「研究会の趣旨説明にかえて。関西とはどこなのか。何なのか どうすればええのか」 千田稔「なぜ、吉野・熊野に宗教文化が成立したのか」 小田匡保「大峰の宗教地理学的諸問題」 藤井賢一「吉野・熊野の文化遺産と観光開発」
2004年 7月 10日	千田稔「画像資料紹介」 小野田一幸「近世刊行大坂図にみる大阪湾」 伊藤安男「蘭人雇工師たちの治水思想—淀川水系を中心として—」 足立敏之「大阪湾再生計画」
2004年 8月 28日	千田稔「淀川略史」 佐伯順子「淀川をめぐる文学と芸能」 鍵岡正謹「円山応挙『淀川兩岸図鑑』をめぐって」 宮本博司「淀川流域の将来計画」
2004年11月 27日	千田稔「琵琶湖の古代水運略説」 出口晶子「琵琶湖舟景」 マルクス・リュッターマン「近江の中近世史—国としての文化形成について—」 河村賢二「琵琶湖水位と環境」
2005年 2月 19日	千田稔「古代王権と大和川についての略説」 元永秀「300年、人・ゆめ・未来 大和川」 小松清生「学校教育と大和川」 森下郁子「大和川の水環境」 大宮守人「大和川の舟運」
2005年 5月 21日	三木理史「関西における私鉄創業期の事業」 池田浩「阪神電車100年の歩み—トピック風にな—」 杉本尚次「甲子園球場と都市化」 井上章一「関西人にとって阪神タイガースとは何なのか」
2005年 7月 30日	武部宏明「近鉄の路線網と文化事業の変遷」 千田稔「近鉄橿原線、このゴールデンライン—沿線資源活用論の一視点—」 土井勉「都市と『私鉄』と小林一三—主に阪急電鉄を事例として—」 柏岡富英「阪急文化圏：津金澤聡彦『宝塚戦略』と阪田寛夫『わが小林一三』を中心に」
2005年10月 8日	千田稔「イントロダクション：なぜ大阪のメディアはキタに集中したのか—朝日新聞と毎日新聞の立地から—」 高橋徹「大阪の朝日新聞」 永井芳和「読売新聞の大阪進出の事情」
2005年10月 8日	鈴木昭典「『日本イコール東京なのか？』—テレビの中のローカル報道—」
2006年 1月 28日	小川順子「時代劇映画の盛衰—日本のハリウッド及び関西を中心に—」 森田富士郎「『劇映画撮影ロケーション・ハンティング』について」 森脇清隆「京都の映画撮影所の変遷」
2006年 3月 25日	福田珠己「空間を切り取る、空間を表現する：地理学的視点からみた博物館の魅力」 渡辺豊和「博物館・美術館の建築考」 河崎晃一、土井勉「芦屋市立美術館の現状」
2006年 6月 17日	青木淳「都市型信仰としての浄土教—鎌倉時代における鎮魂・勧進・開発のネットワーク—」 桐村英一郎「生きた歴史とは？—門外漢からの疑問—」 樋口忠彦「京都の景色の特徴」
2006年 9月 16日	千田稔「関西広域圏のあり方—イントロダクションにか

	えて―」
	足立敏之「国土形成計画を考える ―道州制の議論を踏まえて―」
	尾田榮章「畿内と淀川流域―道州制の単位としての河川流域―」
2007年 2月 17日	三年間のまとめと今後の展望 フリートークpart I、part II
093 近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究	
●研究域	
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）	
●共同研究期間	
2004（平成16）年8月～2005（平成17）年7月	
●研究の概要	
中国と日本は、漢字文化圏の主なメンバーとして、近代における西学東漸の情勢下において、その語学層面には深刻な変遷が起こったが、西洋近代の慣用語を翻訳する漢字がどんどん現れたのは、その変遷の激しさを示すものであった。近代漢字慣用語が、中国と日本の語学を互いに揺さぶるなかで成立してきた。	
16世紀末から19世紀中葉にかけては、中国に渡ったキリスト教会士・新教会士が中国土人と協力して多くの西洋慣用語を対訳し、漢字の新しい言葉を創造した。それが日本に入り、受容されて、日本の蘭学と洋学の語彙となった。	
1896年以降、中国からの留日と和籍を翻訳するようになって、明治日本から新しい漢字がつつぎつと中国に伝えられるようになった。これが、清末から民初にかけての新しい語彙の普及の重要な源となった。	
本研究は、漢字慣用語の古漢語の淵源を辿り、16世紀から20世紀にかけての漢字慣用語の成立を総合的に明らかにした。これにより、近代の漢字慣用語が中国と日本とで相互に影響を及ぼしている実態が鮮明になった。（公募研究）	
●研究代表者	
馮天瑜（日文研外国人研究員／武漢大学中国伝統文化研究センター主任・教授、文化史）	
●幹事	
劉建輝（日文研助教授、日中比較文学）	
●班員	
荒川清秀（愛知大学国際コミュニケーション学部教授、文学）	
井上健（東京工業大学外国語研究教育センター教授、文学理論・翻訳）	
緒方康（神戸大学大学院文化学研究科助教授、法学）	
官文娜（大阪外国語大学非常勤講師、国史学）	
榑原貴教（ナダ出版センター代表取締役、語学）	
史有為（明海大学大学院応用言語学研究科教授、語学）	
秦兆雄（神戸外国語大学中国学科助教授）	
鈴木広光（奈良女子大学文学部助教授）	
戦曉梅（東京工業大学外国語研究教育センター助教授）	
孫江（静岡文化芸術大学文化政策学部助教授）	
沈国威（関西大学外国語教育研究機構教授、語学）	
陳力衛（日白大学人文学部教授、語学）	
鄧紅（大分県立芸術文化短期大学助教授、歴史学）	
鄧新華（GIS中部㈱社員、語学）	
飛田良文（明海大学外国語学部客員教授、語学）	
松井利彦（神戸松蔭女子学院大学文学部教授、語学）	
松田清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、書誌学）	

湯浅茂雄（実践女子大学文学部教授）	
李济倉（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員、歴史学）	
劉柏林（愛知大学現代中国学部助教授、文学）	
柳父章（桃山学院大学文学部非常勤講師、語学）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）	
李漢燮（日文研外国人研究員／高麗大学校教授、日本語学）	
●成果物	
冯天瑜／劉建輝／聂长顺編「语义的文化变迁」(武漢：武汉大学出版社、2007年10月)	
●研究発表	
2004年11月 26日	劉建輝「近代概念の成立に関する総合的研究の可能性―研究会の趣旨説明をかねて―」
	李漢燮「日本語学における近代概念研究の過去と現在」
	鈴木貞美「学芸における近代概念の成立とジャンルの再編」
2004年11月 27日	馮天瑜「日中における近代漢字術語の生成と相互影響に関する研究試案」
2005年 2月 18日	張哲嘉「近代漢字医学術語の生成―杉田玄白と合信の比較―」
	黄興濤「文化・文明概念在中国興起的考察」（文化・文明概念の中国における成立について）
2005年 2月 19日	鄧紅「『合理』と『合理主義』について」
2005年 4月 23日	陳力衛「『共産党宣言』の訳語について―日本語版と中国語版を比較して―」
	馮天瑜「『封建』について」
2005年 4月 24日	荒川清秀「『空気』について」
2005年 6月 11日	史有為「西洋の度量衡單位と中、欧、日光流」
	飛田良文「『哲学字彙』の訳語―その出典と影響―」

094 日本における「死の場所」と死生観の変遷に関する総合的研究

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
2005（平成17）年4月～2006（平成18）年3月
●研究の概要
かつての日本人は家で生まれ、家で育ち、そして家で死ぬのが当たり前であった。しかし今や、医療環境や食生活の変化によって、以前には考えられない長寿がもたらされ、日本人の多くが自宅で亡くなることがほとんどなくなった。
本研究は、「死の場所」の変化が、日本人の「死生観」にどのような影響を及ぼしたのか、あるいは及ぼしつつあるかを、医療人類学的観点からのフィールドワーク・データを基に、具体的事例を取り上げながら歴史のおよび比較文化論的展望の下に検討したものである。
とくに、「死に場所」「火葬場」「骨」などのキーワードに生と死を対比させ、関連づけながら現代人にとっての「生と死」を再考した。（公募研究）
●研究代表者
近藤功行（日文研客員教授／沖縄キリスト教学院大学人文学部教授、医療人類学・医療福祉学）
●幹事
小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学）
●班員
安保英勇（東北大学大学院教育学研究科助教授、社会心理学・行動科学）
江崎一朗（志學館大学法学部助教授、哲学・生命倫理学）

大林雅之（京都工芸繊維大学繊維学部教授、生命倫理学）	
木ノ上高章（東海大学医学部専任講師、公衆衛生学・内科学）	
高坂宏一（杏林大学社会科学部・総合政策学部教授、人類生態学）	
小島摩文（鹿児島純心女子大学国際人間学部専任講師、物質文化論）	
蔡文高（秋国際大学国際情報学部助教授）	
塩月亮子（日本橋学館大学人文経営学部助教授、文化人類学・民俗学）	
寺澤昇久（京都工芸繊維大学工芸学部教務技官、物質科学・物理学）	
町健次郎（瀬戸内町立図書館郷土館学芸員、民俗学）	
山田慎也（国立歴史民俗博物館民俗研究系生活技術伝承研究部門助手、民俗学・生命倫理学）	
柳修平（東京女子医科大学大学院看護学研究科教授、基礎保健学）	
●成果物	
近藤功行／小松和彦編著『死の儀法―在宅死に見る葬の礼節・死生観―』（ミネルヴァ書房、2008年3月）	
●研究発表	
2005年 5月 14日	近藤功行「本プロジェクトの趣旨説明」『与論島におけるこれまでの研究の歩み』
	江崎一朗「生命倫理学的観点からみた鹿児島之死生観」
	安保英勇「宮城県農村部の高齢者の死生観」
2005年 5月 15日	小島摩文「『在宅』と『外在化』―家と人―」
	小松和彦「次回研究会開催に向けて」
2005年 7月 2日	近藤功行「前回の概要説明」
	全体討論「『死生観』を考える視点①」
	江崎一朗「『死生観』を考える視点② 地域に潜む死生観を倫理学はどうとらえるか―与論島における事例から―」
	第一部 塩月亮子「沖縄の村落における伝統的死生観―国頭村本部町備瀬の事例から―」
	第二部 塩月亮子「死生観の人類学―死をみつめる―」、
	「死生観の人類学―死を体験する―」
	第三部 塩月亮子「日本における新たな死生観の創出―樹木葬にみる死後のお隣さんネットワーク―」
2005年 7月 3日	小島摩文「『在宅』と『外在化』―家と人―」
	小松和彦「次回研究会開催に向けて」
2005年 9月 10日	江崎一朗「『死生観』を考える視点① これまでの共同研究を振り返って」
	蔡文高「『死生観』を考える視点② 死の場所と靈魂観―中国漢族の従来の死生観についての一考察―」
2005年 9月 11日	蔡文高「『死生観』を考える視点③ 江西省南部地方の死者儀礼」
	木ノ上高章「『死生観』を考える視点④ 患者医師関係に関わる家族の存在―医師患者関係のインフォームド Consent に関わる日米比較研究から―」
	小松和彦「次回研究会開催に向けて」
2005年11月 12日	近藤功行「前回までの研究を振り返って」「本共同研究会での『死生観』を考える視点①」
	山田慎也「死と葬儀の場の移り変わり その1（映像）」
	「死の儀礼の場の移り変わり その2（発表）」
2005年11月 13日	蔡文高「遺骨・墓・死生観―南部中国の洗骨改葬儀礼を中心にして―」
	小松和彦「次回研究会開催に向けて」
2006年 1月 14日	近藤功行「①ハンセン病医療医学を通してみた『死』」、
	「②難病を通してみた『死』」
	柳修平「医療・保健学領域での『生』と『死』の研究動向」
2006年 1月 15日	高坂宏一「娼捨を通して死生観を考える」
	小松和彦「次回研究会開催に向けて」
2006年 3月 18日	近藤功行「前回の研究会を振り返って―映画『橋山節考』（ビデオ）を見て―」

	寺澤昇久「死の場所での効率化と環境への配慮」
2006年 3月 19日	大林雅之「生命への隠蔽された決断―『橋山節考』と先端医療技術をめぐって―」
	小松和彦「今後の計画について」

095 「文明交流圏」としての「海洋アジア」

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）
●共同研究期間
2005（平成17）年4月～2008（平成20）年3月
●研究の概要
「海洋アジア」という用語は、研究代表者が「大陸アジア」と区別する目的で用いたのが最初だが、近年、社会経済史の分野では違和感なく使われるようになった。「海洋アジア」は、大まかに「海洋東アジア」と「海洋南アジア」と、両者が交わる「海洋東南アジア」の3つの海洋世界からなる。
海洋は、陸地を隔てる境界ともなるが、離れた陸地同士を結ぶ媒介でもある。とくに「海洋アジア」は、先史時代より、人々が船で移動し、文物を運び、交換・交易し、文物の伝播に多大の役割を果たしてきており、まさに文化・文明の交流圏としての特徴をもっている。「海洋アジア」の中央にある「海洋東南アジア」にさまざまな宗教が混在しているのはその証しである。この海域は近代文明の勃興とも無縁ではない。「海洋南アジア」はヨーロッパに勃興した近代文明の土台となり、「海洋東アジア」は日本に勃興した近代文明の母体にもなった。
本研究では、現在の「海洋東アジア」が「東アジア共同体」の基礎となりつつあるという現実や、「海洋アジア」が国際関係論では「不安定な弧」とみられているという現実などを念頭におきながら、歴史的にはさまざまな文化・文明圏に属する人間と文物の交流した「交流圏」としての「海洋アジア」の実態を、この海域世界が「平和の弧」として「海の文明」たりうるかどうか、その可能性を含めて多面的に探った。
●研究代表者
川勝平太（日文研教授、比較経済史 平成19年4月～日文研客員教授／静岡文化芸術大学長）
●幹事
松田利彦（日文研准教授、近代日朝関係史）
●班員
李珣淑（帝京大学非常勤講師、比較デザイン論）
池田哲（アルバータ大学／京都大学東南アジア研究所準教授）
鶴飼政志（学習院大学文学部非常勤講師、近代日本史・近代国際関係史）
金子晋右（城西大学非常勤講師、近代日本アジア経済史）
北政巳（創価大学経済学部教授、英国経済史・比較経済史）
北川勝彦（関西大学経済学部教授、経済史・西洋経済史）
草光俊雄（放送大学教授、経済学）
久米高史（埼玉工業大学人間社会学部非常勤講師、近代日本アジア、経済史）
島田竜登（西南学院大学経済学部准教授、近代日本アジア、経済史）
高橋周（大東文化大学経済学部非常勤講師、近代日本経済史）
辻智佐子（城西大学経営学部助教、近代日本経済史）
中村宗悦（大東文化大学経済学部教授、近代日本経済史）
濱田陽（帝京大学文学部講師、比較宗教学）
アレキサンダー・ベネット（帝京大学文学部講師、宗教学・日本史・武道文化）
松島泰勝（東海大学海洋学部准教授、比較島嶼文明論）
三田剛史（日本学術振興会特別研究員、経済思想史）

宮田敏之（東京外国語大学外国語学部准教授、アジア経済史）	
宮田昌明（帝塚山大学非常勤講師、近現代史）	
武藤秀太郎（日本学術振興会特別研究員、経済史・経済思想史）	
四方田雅史（早稲田大学政治経済学術院助教、日本経済史）	
本野英一（日文研客員教授／早稲田大学政治経済学部教授、アジア経済史）	
ロバート・アラン・エスキルドセン（日文研外国人研究員／スミス大学助教授、日本史）	
シンシア・ネリ・ザヤス（日文研外国人研究員／フィリピン大学国際研究センター準教授、文化人類学）	
●研究発表	
2005年 4月 8日	川勝平太「文明交流圏について」
	松島泰勝「西太平洋島嶼における文明交流圏の形成」
	金子晋右「海洋アジアとアメリカ」
2005年 4月 9日	久米高史「海洋アジア ―モーリシャスを中心に―」
	三田剛史「中国をどうみるか」
	ゲストコメンテーター：北政巳、北川勝彦、池田哲
2005年 6月 16日	池田哲「世界システム論から見た『文明交流圏』―『海洋アジア』はシステムたりうるか」
	北政巳「スコットランド人ディアスポラと海洋アジア」
2005年 6月 17日	宮田昌明「英米関係と東アジアにおける日本の役割―中国再建の可能性をめぐって1921～1926」
	濱田陽「『文明交流圏』と『宗教』」
2005年 9月 16日	川勝平太「問題提起」
	伊東俊太郎「文明交流圏とは何か」
	服部英二「大乘仏教と海の道」
	劉建輝「近代の海洋アジアにおける開港のネットワーク」
2005年 9月 17日	総合討論 司会：川勝平太
	コメンテーター：金子晋右、濱田陽
2006年11月 18日	武藤秀太郎「日本における社会科学の受容と土着化―『アジア』の概念と実態をめぐって―」
	コメンテーター：池田哲
	司会：川勝平太
2005年11月 19日	川勝平太「『土民革命』論」
	笠谷和比古「武士道の文明史的意義」
	アレキサンダー・ベネット「武道の『道』化」
2006年 1月 20日	鶴飼政志「英露からみた19世紀後半の日本海北方海域」
2006年 1月 21日	川勝平太「問題提起」
	高橋周「オホーツク海域をめぐる日本とロシア」
	四方田雅史「海洋アジアと太平洋経済圏―近代以降の比較経済史の視点から―」
2006年 3月 11日	川勝平太「問題提起」
	福島安紀子「『東アジア共同体』をめぐって―安全保障論の視座から」
	鶴飼政志「19世紀後半における日本の北方海域―イギリスからみたサハリン島問題―」
	島田竜登「18世紀の海洋アジア―オランダ東インド会社のアジア貿易の分析から―」
2006年 5月 27日	川勝平太「東アジア海の信頼醸成をめぐって」
	金子晋右「文明論的観点から見た市場主義と環境問題」
	四方田雅史「『アジア間競争』の制度・文明的基礎」
2006年 7月 28日	川勝平太「ヘルシンキ・シンポジウムに向けて」
	北政巳「スコットランドとアジア海運業」
	川勝平太「問題提起『地域学』をめぐって」
	高谷好一「『地域学』を論ず」
2006年10月 27日	川勝平太「ヘルシンキシンポジウム報告」
	シンシア・ネリ・ザヤス「フィリピンとボルネオにおける Kampong ayer（Water village）について」

		川勝平太「問題提起」 上垣外憲一「日本と朝鮮半島との交流」
2006年12月	6日	松島泰勝「琉球・沖縄の『自治』をめぐる一近著『琉球の『自治』』（藤原書店、2006年10月刊）をもとに―」 ロバート・アラン・エスキルドセン「異国船物語：江戸後期に船の画像はどう変遷したか？」
2007年	2月22日	北政巳「ディアスポラ活動から見た19世紀アジアースコットランド・ユダヤ―インド・中国人活動比較―」
2007年	2月23日	金子晋右「環境経済史から見たアジア太平洋の諸文明」
2007年	3月10日	A.J.H.LATHAM “The International Rice Trade: Rice Milling and Asian Industrialisation” comment and following discussion 久米高史「イギリス帝国主義とモーリシャス」
2007年	4月21日	松島泰勝「海面上昇による太平洋島嶼国の危機と日本の政策」
2007年	5月18日	J. Forbes MUNRO “Diaspora and Networks: Scottish Merchants in Nineteenth Century Asia” 総合司会：川勝平太 北政巳 Comment I 北川勝彦 Comment II
2007年	6月23日	宮田昌明「日英米関係における〈手帝国〉と移民問題」 田中耕司「東南アジア海域の人とモノのフローをテーマに」
2007年	7月21日	武藤秀太郎「近代日本の社会科学と東アジア―序論と結論部から―」 北川勝彦「アフリカ史研究の現状と課題―アフリカ独立50年を回顧して―」
2007年	9月22日	草光俊雄「イギリスとアジアの文化交流―歴史的考察―」 シンシア・ネリ・ザヤス “Relics of Maritime Civilization in the Pacific Asian Region―Stone tidal weirs in the Visayas (Philippines),Piscadores (Taiwan), and the Ryukyus (Japan)”
2008年	1月25日	濱田陽「賀川豊彦と海洋文明」 宮田敏之「ジャスミン・ライスの世界―タイ経済史研究の新展開―」 川勝平太「文明交流圏としての海洋アジア―歴史的展望―」
2008年	1月26日	応地利明「ユーラシアの海と陸―文明空間論の試み―」 立本成文「フィールドワークから語る文明交流圏―海洋アジアの現代的展望―」

096 王権と都市に関する比較史的研究

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
2005（平成17）年4月～2008（平成20）年3月
●研究の概要
従来、わが国の学界において、都市生成の研究、および都市の地域的比較研究はあったが、王権と都市の関連を検討する研究は、イブン＝ハルドゥーンの問題提起以来、一部の例外を除いて多くはなく、しかも地理的に偏りもあった。
本研究は、ここに主題を設定し、まず、肥沃半月帯における王権の発生と都市の発生の関連を検討し、メソポタミア、アナトリア（小アジア）等におい

て、都市がどのように王権によって創出されたかを考察した。さらに、ギリシア、ヘレニズム、ローマ等古典時代の都市と、王政・民主制との関連、すなわち、王権による都市と共和制下の都市とでは、市壁・庁舎・宮殿・広場等の構成においてどのような差異をみせるかを明らかにした。併せて、都市支配の装置・構成等においても比較検討した。

こうした作業を、アジア、イスラム、ヨーロッパ中世・近代等の領域にも拡張し、各時代・各地域での都市史のあり方を、相互に比較検討した。そして、全体として、王権と都市の関わりについて、総括的提言を提示した。

●研究代表者
今谷明（日文研教授、日本中世史・王権論）
●幹事
宇野隆夫（日文研教授、考古学）
●班員
大月康弘（一橋大学大学院経済学研究科教授、ビザンツ社会史） 岡田保良（国士舘大学イラク古代文化研究所教授、建築史・考古学） 乙坂智子（横浜国立大学国際総合科学部准教授、中国・チベット史/アジア王権論） 金銀貞（東北大学大学院文学研究科博士課程、日本古代史） 佐藤健太郎（早稲田大学総合研究機構客員講師、イベリア半島史） 白幡俊輔（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程、城郭史・軍事史） 国師宣忠（大阪産業大学人間環境学部非常勤講師、中世フランス史） 筒井清忠（帝京大学文学部教授、歴史社会学） 土居浩（ものづくり大学講師、歴史地理学） 仁藤敦史（国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系准教授、日本古代王権・都市論） 長谷部史彦（慶應義塾大学文学部准教授、イスラム中世史） 藤井真生（日本学術振興会特別研究員、ヨーロッパ中世都市・王権論） 池内恵（日文研准教授、イスラム都市論） 井上章一（日文研教授、建築史・都市史） 加藤祐三（日文研客員教授／横浜国立大学名誉教授、東洋史・都市史） 小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学） 白幡洋三郎（日文研教授、近代ヨーロッパ都市論） 千田稔（日文研教授、歴史地理学） 園田英弘（日文研教授、日本ミヤコ史） 西川幸治（日文研客員教授／前滋賀県立大学長、都市史・保存修量計画） マルクス・リュッターマン（日文研准教授、日本中世史・ドイツ都市論）
●成果物
今谷明編『王権と都市』（思文閣出版、2008年3月）
●研究発表
2005年 5月28日 今谷明「趣旨説明」「トルコ圏の王権と都市（問題提起）」 藤井真生「中世ボヘミアに於ける王権の都市創出」
2005年 8月27日 仁藤敦史「古代王権と宮の構造」 長谷部史彦「中世のスルターン権力と王都―マムルーク朝期のカイロ―」 井上章一「ヒトラーの都市計画―ナチスの目指した建築美―」
2005年11月12日 宇野隆夫「王権の空間編成と国家形成」 岡田保良「西アジアに於ける古代宮廷建築」 加藤祐三「近代に於ける都市比較論」
2005年12月17日 白幡洋三郎「都市城壁と都市権力―ヨーロッパ近代を中心として―」 西川幸治「『隊商都市』をかんがえる」 園田英弘「全球化時代の『王権』と都市―横浜・パンクーパー・シドニー―」
2006年 3月25日 土居浩「徳川期日本に於ける引廻し径路から『都市と王権』を考える」 池内恵「カイロの都市文化を読む」
2006年 3月26日 筒井清忠「二・二六事件と宮城占拠」

		乙坂智子「元代チベット仏教の都市儀礼」 国師宣忠「中世南仏に於ける誓約と文書―都市と王権をめぐる一―」
2006年	5月20日	マルクス・リュッターマン「日本学者からみた中近世に於ける日本の都市」 大月康弘「ビザンツと皇帝権―ソウトブランド『使節記』に見る中世キリスト教世界の秩序原則―」
2006年	7月 1日	今谷明「日本中世の都市建設―守護所を中心として―」 藤井真生「中世チェコの首都形成について」
2006年	8月26日	飛鳥史跡見学（解説：仁藤敦史） 金銀貞「宮都における『庭』について―神聖なる『庭』―」
2006年	8月27日	佐藤健太郎「モロッコの王権とシャリーフ（預言者裔）の都市フェス」
2006年10月	21日	笠谷和比古「二条城論（徳川時代における王権と城都）」 長谷部史彦「王権・貴種・宦官―12～15世紀の聖地都市メディーナ―」
2006年12月	16日	森田登代子「天皇即位式と近世の民衆」 白幡俊輔「ルネサンス理想都市と築城技術」
2007年	3月24日	国師宣忠「13・14世紀南フランスにおける王権・異端審問・都市」 西川幸治「近世城下町の形成」
2007年	3月25日	乙坂智子「元大都の遊皇城」 宇野隆夫「インダス文明の都市」 井上章一「日本に古代史はあったのか」
2007年	5月19日	岡田保良「王の道とデカポリスの遺跡にみる前イスラーム時代オリエント都市の様相」 土居浩「民俗学における都市論再考」
2007年	8月25日	調査（五稜郭・四稜郭） 今谷明「蝦夷地植民地化と都市松前」 加藤祐三「幕末松前藩と日露交渉」
2007年	8月26日	調査（福山城・藩主墓所・大館跡）

097 日本における住まいの風土性・持続性

●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）
●共同研究期間
2005（平成17）年4月～2006（平成18）年3月
●研究の概要
本研究は、フランス国立社会科学高等研究院が統括している10年間にもわたる国際的なプログラムの一環で、日本を対象事例として取り上げ、人間の「住まいの非連続性」を検証しようとしたものである。参加国は、フランス、オランダ、日本、中国、カナダ、オーストラリア、アメリカなどで、参加研究者は約40人に達する。
日本が研究対象に選ばれたのは、2004年9月にフランスで行われたシンポジウム「田園都市の3つの源流」における問題提起にあった。日本は、住まいにおける伝統的な「風土性」の保持者として知られていたが、前世紀、とりわけ1945年以降にまたたく間にこの遺産を喪失してしまった。短期間に崩壊した日本の住まいの「風土性」は、どのような社会的（政治的、経済的、文化的）要因のなせるワザであったのか、という問いかけであった。
これに対する回答は、ある意味で明解である。
1945年以降、日本は基本的なモデルを、日本が普通にもっていた「風土

性」のカケラもない（とくに土地利用に関しては）アメリカから導入したのだった。たとえば、都市郊外開発において、アメリカ型理想の典型を導入するということは、日本のような土地の乏しい国土にあってはナンセンス以外の何ものでもなかったはずであった。

ここからいえる外縁的なこと、計測可能なことは以下のようなことだろう――日本が20世紀後半に苦しんだことは、文化の基層にまで達してしまった「風土性」の喪失であった。和辻哲郎が定義したごとく、「人間存在の構造的な時間」が危機に瀕しているのだ。

さて、日本の持続的な「住まい」を、物質的かつ倫理的観点からも取り戻す可能性を明示するものはなにか。それは、風土性に基づく展望である。これが、本研究がめざすことであった。日本の伝統的風土性の潜在力を再評価し、機械とは反対の真に人間的な文化と自然の関係を合一すること。――「文化を再び自然に、自然を再び文化に」。〈公募研究〉

●研究代表者
オギュスタン・ベルク（日文研外国人研究員／フランス国立社会科学高等研究院教授、地理学）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、文化史）
●班員
木岡伸夫（関西大学文学部教授、哲学） 桑子敏雄（東京工業大学大学院社会理工学研究科教授、哲学） 土屋和男（常葉学園大学造形学部講師、建築学） 千葉政継（宮城大学事業構想学部教授、建築学） 鳥海基樹（東京都立大学大学院工学研究科講師、建築学） 樋口忠彦（京都大学大学院工学研究科教授、景観学） 三浦展（カルチャースタディーズ研究所主宰） 横張真（筑波大学大学院システム情報工学研究科教授、行政学） 白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業史） 千田稔（日文研教授、歴史地理学）
●成果物
日文研叢書41、オギュスタン・ベルク編『日本の住まいと風土性』（日文研、2007年8月）
●研究発表
2005年 5月21日 オギュスタン・ベルク「住まいの風土性と持続性―問題提起の案―」 鈴木貞美「日本の田園都市と日露戦争後の生命観の変容」
2005年 7月 2日 千葉政継「都市・農村における郊外住宅地の役割」 横張真「縮小・撤退する都市における“農”のランドスケープの再生」
2005年 9月 3日 桑子敏雄「住宅政策転換と風土性の意味」 木岡伸夫「原風景とは何か」
2005年11月 5日 鳥海基樹「―都市居住の急増が惹起する都市設計的問題に関する日仏比較―『住宅基本法』制定と『まちづくり三法』改定に向けた提言」 土屋和男「近代の茶会記録に見られる和風住宅の敷地の変遷と場所性」
2006年 1月 6日 見学会「銀閣寺周辺に形成された近代の郊外住宅地めぐり」京都大学→吉田山（谷川住宅と庭園）→鹿ヶ谷地域→浄土寺地域→橋本関雪邸
2006年 1月 7日 三浦展「脱ファースト風土の可能性について」 樋口忠彦「京都に於ける山の辺の景色の持続性について」
2006年 3月 4日 横張、千葉、土屋、鳥海、樋口「都市学、建築、風景工学の立場からの總め」 三浦、木岡、鈴木、ベルク「社会学、哲学、文学、風土学の立場からの總め」

098	前近代東アジア三国の交流と文化的波長
●研究域	
第5研究域　文化情報（外国における日本研究Ⅱ）	
●共同研究期間	
2005（平成17）年7月～2006（平成18）年6月	
●研究の概要	
東アジアの三カ国、中国・日本・韓国における友好と関係強化はかつてない切実な問題として顕在化している。三カ国の間には、軋轢と反目の時期があったのも事実であるが、今は新たな協力と友好のために、生産的で建設的な新しいパラダイムの構築が要請されている。	
本研究は、このような認識の下に、東アジア三カ国の交流や、交流を通した各国のアイデンティティーを究明することを目的としたものである。とりわけ、先行研究が一国中心か、あるいは二カ国相互間の交流にとどまっていたものを、三カ国の総体的、かつ有機的な側面に着目しながら、東アジアの普遍性と特殊性を探り各国の文化的特性を究明しようとした。	
具体的には、前近代中国の秩序の下での東アジア三国間の文化交流の実態と相互影響を、「朝鮮通信使」と「燕行使」の検証を通じて探ってみようとしたものである。	
「朝鮮通信使」と「燕行使」は、約250年にわたって日本と中国に派遣されており、彼らが残した記録は膨大な量に達する。のみならず、日本と中国側の資料も相当の量に達しているだろう。これらの資料の中には、詩文学・儒学・仏教・絵画・漢方医学・本草学・西学・自然科学・幾何学・交易・大衆文化などと、人と物との交流がもたらしたさまざまな事象が盛り込まれている。これらを総合的にまとめ、学際的な観点から事象と人物の双方に同時に照明を当てることによって、三カ国の文化的・文明的アイデンティティーを明確にしようとした。（公募研究）	
●研究代表者	
崔博光（日文研外国人研究員／韓国成均館大学校教授、比較文化）	
●幹事	
劉建輝（日文研助教授、日本近代文学）	
●班員	
安大玉（東京大学大学院人文社会系研究科助手、中国哲学・東アジア科学史）	
李元植（元近畿大学文芸学部教授、東アジア文化交流）	
石川了（大妻女子大学文学部教授、日本近世文学）	
井上健（東京大学大学院総合文化研究科教授、比較文学・アメリカ文学）	
巖基珠（専修大学ネットワーク情報学部教授、韓国文学）	
上垣外憲一（帝塚山学院大学文学部教授、比較文学・韓国文化）	
川原秀城（東京大学大学院人文社会系研究科教授、東アジア思想史・東アジア科学史）	
川本皓嗣（大手前大学長、比較文化）	
姜在彦（元花園大学客員教授、韓国史）	
姜東樺（天理大学客員教授）	
黒住真（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本思想史）	
高翔龍（大東文化大学大学院法務研究科教授、法哲学・思想）	
古田島洋介（明星大学日本文化学部教授、日中比較文学・漢文訓読論）	
小島康敬（国際基督教大学教養学部教授、日本思想史）	
小宮彰（東京女子大学文学部教授、比較文化・日本近世文化）	
齋藤希史（東京大学大学院総合文化研究科助教授）	
佐野真由子（静岡文化芸術大学講師、文化交流史・文化政策）	
管宗次（武庫川女子大学教授）	
菅原克也（東京大学大学院総合文化研究科教授、比較文化・日本近代文化）	
杉下元明（東海大学非常勤講師、日本近世文学・漢文学）	

杉田英昭（神戸大学海事科学部名誉教授、造船学）	
戦晓梅（東京工業大学外国語研究教育センター助教授、比較文学・日中近代美術史）	
高橋博巳（金城学院大学文学部教授、日本語文化学）	
竹内信夫（東京大学大学院総合文化研究科教授、比較文化・仏教文化）	
竹村民郎（元大阪産業大学客員教授）	
徳盛誠（東京大学大学院総合文化研究科講師）	
仲尾宏（京都造形芸術大学客員教授、比較文化）	
長森美信（天理大学国際学部専任講師、海上交通史・朝鮮使行）	
芳賀徹（京都造形芸術大学長、比較文化）	
朴鍾祐（神戸大学留学生センター助教授、日本近世文学）	
花田富二夫（大妻女子大学比較文化学部教授、本草学・近世文学）	
羽生紀子（武庫川女子大学短期大学部講師、日本近世文学）	
濱下武志（龍谷大学国際文化学部教授、東洋史）	
濱下昌宏（神戸女学院大学文学部教授、美術史・美学）	
平川祐弘（大手前大学特任教授）	
平木實（京都府立大学文学部非常勤講師、韓国史）	
許芝銀（京都大学人文科学研究所外国人共同研究者、韓日関係史）	
許聖一（大阪市立大学非常勤講師、韓国文学・韓日比較文学）	
松田清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、日本近世文化・蘭学）	
真柳誠（茨城大学大学院人文科学研究科教授）	
水戸部浩子（荘内日報社論説委員、韓・中・日海上路）	
吉田公平（東洋大学文学部教授、中国哲学思想・朱子学）	
吉田宏志（京都府立大学名誉教授、韓国美術史）	
李岩（國學院大學客員研究員、韓中比較文学）	
稲賀繁美（日文研教授、芸術論・文化交渉史）	
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）	
笠谷和比古（日文研教授、歴史学・古文書学）	
加藤祐三（日文研客員教授／横浜市立大学名誉教授、中国近代史）	
金容儀（日文研外国人研究員／全南大学校助教授、民俗学）	
白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）	
魯成煥（日文研外国人来訪研究員／蔚山大学校人文大学教授、比較民俗学）	
早川開多（日文研教授、美術史）	
●研究発表	
2005年11月　11日　崔博光「本共同研究に関する趣旨説明」	
2005年12月　　2日　平川祐弘「日曜日の世紀としての18世紀」 崔博光「外から見た日本と朝鮮―樺路勝区図と奉使図」	
2005年12月　　3日　総合討論	
2006年　1月14日　仲尾宏「朝鮮通信使研究の現段階」 真柳誠「17～19世紀の日本・朝鮮・ベトナムにおける中国医籍受容傾向」	
2006年　1月15日　総合討論	
2006年　3月　4日　吉田宏志「朝鮮通信使関係の美術資料の紹介―新出作品を中心に―」 川本皓嗣「漢文訓読とは何か―翻訳論と比較文化論の視点から―」	
2006年　3月　5日　平木實「朝鮮国と日本との物的交流の側面―朝鮮国からの木綿・虎皮、日本からの胡椒をめぐる―」	
2006年　4月22日　姜在彦「韓国思想史における西学を受容について―異文化格闘の歴史、西洋と朝鮮―」 松田清「江戸時代舶載蘭書の書誌的研究―研究史と最近の成果紹介―」	
2006年　4月23日　川原秀城「西学と中学と東学」	
2006年　6月10日　金容儀「朝鮮通信使の倭学訳官―『海行摺載』に描かれた訳官の活動」 小島康敬「太宰春台と朝鮮通信使―『先王同文の治』への想い―」	

2006年　6月11日　吉田公平「気の哲学の一展開―身体論の試み―」	
●研究域	
第1研究域　動態研究（現代）	
●共同研究期間	
2006（平成18）年4月～2008（平成20）年3月	
●研究の概要	
幸田露伴は明治、大正、昭和を通じ、小説家、劇作家、随筆家等々として多彩な才能を発揮し、すぐれた作品を発表しつづけた。そのおびただしい作品群は40巻の全集におさめられている。日本文学史においても、思想史、精神史においても非常に重要な存在であるにもかかわらず、難解であるなどの理由で、従来、全面的な露伴研究がなされてきたとは言い難い。	
本研究においては、小説や評論など文学面はもちろんのこと、都市、遊戯、旅行、自然観察、人生論等々の著作を通じて多様な角度から露伴にアプローチし、その全体像を探ることをめざした。	
なお、露伴の弟、幸田成友は日本史研究者、妹の幸田延、安藤幸は音楽家、長女の幸田文は小説家である。露伴研究にあわせて、幸田一族についても検討した。	
●研究代表者	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
●幹事	
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）	
●班員	
池内紀（ドイツ文学者、ドイツ文学）	
佐伯順子（同志社大学社会学部教授、日本文学）	
平松隆円（佛教大学大学院教育学研究科博士後期課程、心理学）	
松山巖（評論家、建築学）	
猪木武徳（日文研教授、経済学）	
岩井茂樹（日文研技術補佐員、日本文学）	
小松和彦（日文研教授、文化人類学）	
白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文学・思想・文化）	
園田英弘（日文研教授、社会史・比較社会学）	
早川開多（日文研教授、美術史学・文化史学）	
細川周平（日文研教授、音楽学）	
劉建輝（日文研准教授、日中比較文学・文化）	
●成果物	
井波律子／井上章一共編『幸田露伴の世界』（思文閣出版、2009年1月）	
●研究発表	
2006年　5月20日　井波律子「露伴と『水滸伝』」	
2006年　7月　3日　井上章一「露伴とさしえ」 園田英弘「露伴エッセイ『宴会』を読む―都会人とインAKER―」	
2006年　9月30日　岩井茂樹「二宮金次郎のモデルは誰か？幸田露伴『二宮尊徳翁』における少年イメージの形成過程再考」 猪木武徳「幸田露伴と濫譯策―」	
2006年12月　9日　岩井茂樹「芭蕉七部集評釈―露伴の古さと新しさ―」 白幡洋三郎「露伴の都市論」	
2007年　2月　9日　劉建輝「『文人』としての露伴の成立とその背景」 鈴木貞美「努力論考」	
2007年　5月11日　細川周平「露伴の妹たち―露伴は洋楽を聴いたのか―」 佐伯順子「『五重塔』というプロジェクトX―前進座『五	

	重塔』と日本の高度成長―」
2007年　7月　6日　平松隆円「露伴と正久」 池内紀「露伴の現代性―『水の東京』『道路』ほかをめぐって―」	
2007年10月12日　鈴木貞美「風流仏を読む」 佐伯順子「ひげ男を読む」	
2007年12月21日　井上章一「『頼朝』を読む」 金榮哲「『枕久物語』を読む」	

100	怪異・妖怪文化の伝統と創造―前近代から近現代まで―
●研究域	
第2研究域　構造研究（自然）	
●共同研究期間	
2006（平成18）年4月～2010（平成22）年3月	
●研究の概要	
本研究は、先行した「日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究」の延長線上に企画された。前回の研究では、怪異・妖怪文化の資料の発掘および古代から近代にいたる変遷に研究の主眼を置いていたが、今回は「是害房絵巻」や「つくも神絵巻」などの妖怪の存在を重要な登場人物とする物語が登場して以降の、文学や演劇、絵本などの作品群に焦点を合わせ、その歴史的・社会的背景や創造性を探るとともに、現代のアニメやコミックへの影響なども考察した。	
●研究代表者	
小松和彦（日文研教授、文化人類学）	
●幹事	
山田奨治（日文研准教授、情報学）	
●班員	
一柳廣孝（横浜国立大学教育人間科学部教授、近代文学）	
香川雅信（兵庫県立歴史博物館主査（学芸員）、民俗学・玩具論）	
アダム・カバット（武蔵大学人文学部教授、近世文学）	
近藤瑞木（首都大学東京都市教養学部助教、近世文学）	
齊藤純（天理大学文学部教授、民俗学・口承文芸論）	
佐々木高弘（京都学園大学人間文化学部教授、人文地理学）	
佐藤至子（日本大学文理学部准教授、日本近世文学）	
志村三代子（早稲田大学演劇博物館グローバルCOE研究員、映画史）	
高田衛（東京都立大学名誉教授、近世文学）	
高橋明彦（金沢美術工芸大学准教授、近世文学・コミック論）	
辻惟雄（MIHO MUSEUM館長、美術史）	
堤邦彦（京都精華大学人文学部教授、近世文学・怪談論）	
常光徹（国立歴史民俗博物館教授、民俗学・口承文芸論）	
徳田和夫（学習院女子大学国際文化交流学部教授、中世文学）	
永原順子（高知工業高等専門学校准教授、宗教民俗学）	
永松敦（宮崎公立大学人文学部教授、民俗学）	
ジェームズ・バスキンド（九州工業大学情報工学准教授、宗教学）	
松村薫子（元神戸女学院大学非常勤講師、宗教民俗学）	
横山泰子（法政大学工学部教授、近世演劇学・映画論）	
湯本豪一（川崎市市民ミュージアム学芸室長、美術史）	
フランソワ・ラショウ（フランス国立極東学院京都支部長、宗教学（日本仏教））	
飯倉義之（日文研機関研究員、民俗学）	
稲賀繁美（日文研教授、比較美術史）	
チャールズ・シロー・イノウエ（日文研外国人研究員／タフツ大学教授、近代日本文学）	

今谷明（日文研教授、中世史）	
金容儀（日文研外国人研究員／全南大学校助教授、民俗学・文化人類学）	
プラットゥ・アブラハム・ジョージ（日文研外国人研究員／ジャワハルラル・ネルー大学教授、日本近代文学）	
鈴木貞美（日文研教授、近代文学）	
ラジェンドラ・トマル（日文研外国人研究員／ジャワハルラル・ネルー大学客員教授、日本史・インド日本比較文化）	
●成果物	
小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで—』（せりか書房、2010年9月）	
●研究発表	
2006年 7月 8日	共同研究会の趣旨説明 常光徹「後ろ向きと妖怪・幽霊—しぐさの想像力—」 小松和彦「サブカルチャーとフォークカルチャー—ヤマタノオロチからゴジラまで—」
2006年 7月 9日	安井眞奈美「身体と妖怪・怪異」
2006年10月 7日	高橋明彦「『ねこ目小僧』と妖怪ブーム—1968年の『少年キング』と少年的知識—」 堤邦彦「『化ける女』の創られ方—『女人蛇体』補遺—」
2006年10月 8日	ヨセフ・キプルツ「護符が語る日本の神仏信仰」
2007年 1月27日	飯倉義之「現代メディアが読ませる怪異—実話・都市伝説・アンダーグラウンド—」 安松みゆき「ツェツィーリエ・グラフ・プファフの『日本妖怪書』をめぐって—著者の活動と同書の評価—」 横山泰子「ツェツィーリエ・グラフ・プファフの『日本の妖怪の本』と江戸文化」
2007年 3月17日 ～18日	〈基盤科研「怪異・妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析的手法の開発に関する研究」第9回研究会と合同開催〉 山田奨治「怪異・妖怪呼称の名彙分解とその計量」 鈴木貞美「妖怪文化交流史の方へ—田中貢太郎のことなど—」 朴銓烈「韓国のメディアにおけるキツネの伝承と再構築」 魯成煥「海を渡ってきた日本の妖怪—口裂け女の都市怪談を中心に—」 金容儀「『遠野物語』における妖怪の世界」 安井眞奈美「妖怪・怪異に狙われやすい身体部位—日本人の身体観の解明に向けて—」 小松和彦「柳田國男『妖怪談義』付載『妖怪名彙』の資料検証について」 常光徹「絶縁の呪力—縁切榎の由来をめぐって—」 徳田和夫「わざはひ（禍・災い）の襲来」 堤邦彦「親鸞と蛇体の女—仏教説話から民談への軌跡—」 佐々木高弘「異界のイメージと廃墟—18世紀のビクチャレスクから現代映画まで—」 アダム・カバット「ももんがが対見越入道—黄表紙の化物を通してみる江戸の文化—」 串崎真志「心理療法という境界—「怪しい」セラビーと「怪しくない」セラビーはどう分けられてきたか—」 林文「調査からみた妖怪・超自然に対する感情と素朴な宗教的感情」 横山泰子「狸は戦い、舞い踊る—近代芸能における狸のイメージ—」
2007年 6月23日	佐藤至子「幕末期合巻における妖術と怪異」 徳田和夫「『道成寺縁記』：室町絵巻から江戸絵巻へ—国際日本文化研究センター本の怪異性、在地性—」
2007年 9月29日	辻惟雄「読本挿絵に見る妖怪」 清水潤「後期鏡花文学に見られる妖怪像」

近藤瑞木「『滑稽怪談』の潮流—江戸草双紙に於ける浮世草子『怪談御伽桜』の享受—」	
2007年12月15日	小松和彦「新資料・日文研蔵『百鬼ノ図』をめぐって」 今井秀和「データベースとしての江戸随筆—『甲子夜話』を中心に—」 志村三代子「映画のなかの『蛇女』」
2008年 3月 1日	木場貴俊「『怪異』という情報と法度—『本朝神社考』などを手がかりに—」 香川雅信「郷土玩具と妖怪—妖怪文化の『伝統の創造』—」
2008年 5月10日	マーク・オンブレロ「南洋と妖怪学—海の幽霊から怪獣まで—」 桑野あさひ「近世における累怨霊像の変遷—累物にみられる怪異表現に注目して—」 杉原たく哉「天狗はどこから来たか？」
2008年 9月20日	永松敦「阿蘇・高千穂の鬼八伝説—人身御供と集団狩猟—」 齊藤純「『恐竜』以前—怪獣史の—コマ—」 一柳廣孝「ライトノベルにおける怪異—柴村仁『我が家のお稲荷さま。』から—」
2008年11月15日	松村薫子「妖怪町おこしにおける妖怪文化の創造—『稲生物怪録』を活用した広島県三次市を中心に—」 佐々木高弘「上方落語の怪異空間」
2009年 1月24日	永原順子「能にあらわれる怨霊—怨霊はこわくない!?—」 山田奨治「『百鬼夜行図』編集の系譜」
2009年 1月25日	大森亮尚「怨霊から妖怪へ—井上内親王伝説の軌跡—」 山田雄司「怨霊研究の諸問題—崇徳院怨霊をてがかりに—」 小松和彦「総括および出版計画について」
2009年 7月18日	（国文学研究資料館において） 小松和彦「九頭龍信仰論素描—戸隠山と箱根山を中心に—」 調査：「展示『百鬼夜行の世界』」
2010年 1月30日	湯本豪一「明治期における怪異記事にみる『近代』の諸相」 山田奨治「怪異・妖怪画像データベースについて」 安井眞奈美「現代の妖怪と名づけ—大学生と、妖怪を創る—」

101 文化の所有と拡散	
●研究域	
第2研究域 構造研究（社会）	
●共同研究期間	
2006（平成18）年4月～2009（平成21）年3月	
●研究の概要	
文化は時間と空間を越えて拡散する。そうして伝わった異文化と触れあうことで、文化の活性化や変容が起こる。文化は他者の存在があって初めて意識されるものでもある。それでいて、文化を護るために、あるいはそこから利潤を得るために、他者を排除する所有の意識がつきまとう。	
このように、文化には所有と拡散という相容れないふたつの側面がある。そのことが、いま最も先鋭に現れているのが、知的財産権、なかでも著作権をめぐる問題群であろう。内外からの巨大な文化産業からの要請で、米国のプロ・コピライต์主義を真似た権利保護が、日本でも声高に叫ばれて	

いる。	
マンガ・アニメなどのサブ・カルチャーは、日本を代表する知的財産だとして、そのソフト・パワーを世界市場で活用する施策がすすめられている。しかし、マンガ・アニメにしても、1990年代後半からの日本の政府や産業の努力で海外市場ができたわけではない。数十年にわたる、いわゆる「海賊版」などの非合法活動や、海外ファンの個々人の熱意が、マンガ・アニメを日本文化として世界に拡散させ、海外市場が生まれたという事実は否定できない。	
日本の有力なソフト・パワーとされる「伝統文化」を通覧すれば、著作権ができる以前からすでにあるものがほとんどである。つまり、プロ・コピライต์主義で保護することが、後世に残る文化を生み出す唯一の方法でないことは明らかなのだ。	
文化的に豊かで実り多い社会を実現するために、文化の所有と拡散についてどのようなスタンスが必要なのか。日本の社会に蔓延しつつある、プロ・コピライต์主義とは異なる方向性を模索したい。	
本研究会は、著作権のインセンティブ論・人権論のいずれにも与さず、情報のコントロール・モデルや法の運用についての議論には重きを置かなかった。それらに代わって、ひとびとのあいだを情報が自由に交通するなかで生まれる文化変容や創造、そして文化の所有と拡散が火花を散らしあう現場でのダイナミズムをみつめながら、豊かな文化が生まれる原理とは何かを探究した。	
●研究代表者	
山田奨治（日文研准教授、情報学）	
●幹事	
細川周平（日文研教授、音楽学）	
●班員	
秋道智彌（総合地球環境学研究所研究部教授、生態人類学）	
市古夏生（お茶の水女子大学文教育学部教授、近世文学）	
井上真（東京大学大学院農学生命科学研究科教授、森林社会学）	
瓜生吉則（立命館大学産業社会学部非常勤講師、メディア論・文化社会学）	
奥田晴樹（金沢大学人間社会研究域教授、幕末維新史）	
加藤雅信（上智大学法学研究科教授、民法）	
白石さや（東京大学大学院教育学研究科教授、教育人類学）	
菅豊（東京大学東洋文化研究所教授、民俗学）	
杉藤重信（相山女学園大学人間関係学部教授、文化人類学）	
立岩真也（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授、社会学）	
富田倫生（青空文庫世話人、文化共有論）	
中野三敏（九州大学名誉教授、日本近世文学）	
細川修一（江戸川大学非常勤講師、社会学）	
牧野二郎（牧野総合法律事務所長、知的財産権論）	
増田聡（大阪市立大学大学院文学研究科准教授、音楽学・メディア論）	
丸川哲史（明治大学政治経済学部准教授、東アジア文化論）	
本橋哲也（東京経済大学コミュニケーション学部教授、カルチュラル・スタディーズ）	
山中千恵（仁愛大学人間学部講師、社会学）	
義江彰夫（帝京大学経済学部教授、日本古代・中世史）	
米沢嘉博（評論家・コミックマーケット準備会代表、マンガ文化論）	
稲賀繁美（日文研教授、美術史）	
岩井茂樹（日文研技術補佐員、日本文化史）	
岩渕功一（日文研客員教授／早稲田大学国際教養学部教授、メディア・文化研究）	
佐野真由子（日文研客員准教授／静岡文化芸術大学文化政策学部准教授、文化交流史）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）	
早川開多（日文研教授、日本美術史）	
ペイ・ヒョンイル（日文研外国人研究員／カリフォルニア大学サンタバーバラ校東アジア言語文化学科準教授、人類学）	
チャワーリン・サウェッタナン（日文研外国人研究員／チュラロンコン大	

学専任講師、言語学）	
●成果物	
山田奨治編『コモンズと文化—文化は誰のものか—』（東京堂出版、2010年3月）	
●研究発表	
2006年 5月13日	山田奨治 研究会のねらい、問題設定について
2006年 7月15日	イアン・コンドリー「アメリカのアニメファンと著作権戦争」 鈴木貞美「日本の文化ナショナリズム：雪舟と芭蕉の帰属をめぐって」 岩渕功一「文化の実用性：ブランドナショナリズムを超えて」
2006年 9月 9日	岩井茂樹「粉本主義礼賛—狩野派から二宮金次郎へ—」 井上真「コモンズ論について」
2006年11月25日	細川修一「日本の初期レコード産業と音楽著作権制度：桃中軒雲右衛門事件を中心に」 増田聡「音楽の所有・作者性・収益メカニズムの現在」
2007年 1月13日	奥田晴樹「加賀藩領の土地制度と田地割および石川県の地租改正と割地慣行について」 市内関連史跡見学（足軽屋敷・武家屋敷野村家・前田土佐守資料館・薬種商中屋彦十郎店舗兼住宅）
2007年 3月17日	名和小太郎「学術雑誌の電子化と著作権」 山田奨治「一年目のまとめおよび今後の予定について」
2007年 5月12日	杉藤重信「文化の戦略的利用：オーストラリアにおける先住民運動との関連で」 菅豊「『民間美術』の発明と所有—中国根芸の創造運動から—」
2007年 7月14日	細川周平「ブラジルのカルナバルにみる日本の表像」 池内恵「イスラーム教における所有の観念」
2007年 9月15日	チャワーリン・サウェッタナン「国内・海外のCMにおける日本像—日本CMとタイCMの事例—」 集中討議「コモンズとは何なのか」
2007年 9月16日	集中討議「文化はコモンズなのか」
2007年12月 8日	山田奨治「文化の所有と拡散をめぐる最近の議論」 集中討議「法学とコモンズ、文化コモンズの定義」
2008年 1月12日	瓜生吉則「『ぼくらのマンガ』の成立と変容」 山中千恵「韓国における日本マンガ海賊版が『文化の拡散』に果たした役割」
2008年 3月22日	ペイ・ヒョンイル「パラダイスからの葉書：韓国名所の形成と日本近代観光」 加藤雅信「法・文化・社会」
2008年 5月17日	マルクス・リュッターマン「『菅浦文書』に反映している所有理念について」 松村圭一郎「多民族社会の『文化』の流用と混淆—エチオピア農村部における『共同性』の創出過程—」
2008年 7月26日	山田奨治「海賊版映像の広がりについて」 才津祐美子「文化遺産保護制度は文化遺産を護れるか？—世界遺産『白川郷』を事例として—」
2008年11月 8日	潮洛蒙「モンゴルの言語事情」 佐野真由子「『日本文化』は誰のものか—文化政策の見地から—」
2009年 1月10日	白石さや「グローバル化する文化『拡散』：マンガ・アニメの事例から—」
2009年 1月11日	（キャンパスプラザ京都において） 【テレビ文化は残せるか—著作権・アーカイブス・コモーション—】 福井健策 基調講演「テレビ映像の二次利用と著作権」 討論「テレビ文化を残すには」

福井健策、岩渕功一、石田佐恵子、増田聡、田村和人、高野光平

102 近代東アジアにおける知的空間の形成 ―日中学術概念史の比較的研究―

●研究域
第3研究域 文化比較(制度)
●共同研究期間
2006(平成18)年4月～2007(平成19)年3月
●研究の概要
日中両国は、いずれも漢字という道具を用いて西洋／近代文化を受容した。近世とりわけ近代以降、両国はそれぞれ独自の西洋の学術概念を受け入れた。しかしながら、明治期日本の急速な近代化にともない、19世紀末20世紀初期に大量の和製漢語が中国に伝わり、それを抜きにしては近代中国の「知」を語るができない。
しばしば指摘されるように、学術概念の翻訳と紹介は「言語横断的实践」(translingual practice)である。文化的コンテクストの相違により、翻訳者自らの主観的理解と解釈により誤訳と誤解が生じる。これは西洋の作品が漢字文化圏に紹介される際にのみ生じる問題ではなく、漢字を共用する日中両国の間でも、和製漢語で表記される学術概念が中国に逆輸出される際にも生じる問題である。言い換えれば、近代東アジアに形成された漢字を媒介とした共通の「知の空間」にも内在の相違を孕んでいるのである。
本研究は、近代東アジアにおける「知の空間」の同一性と非同一次性、具体的には、日中両国における学術概念の形成過程を考察することが目的であった。これにより、日中両国において「近代性」がどのように形成され、知の空間が両国における歴史意識の形成や近代的世界観の形成にどのような影響を与えたかなどの問題の解明に寄与することが期待されたのである。(公募研究)
●研究代表者
孫江(日文研客員助教授／静岡文化芸術大学文化政策学部助教授、比較思想・宗教社会学)
●幹事
劉建輝(日文研助教授、比較文化・日中比較文学)
●班員
テレングト・アイトル(北海学園大学人文学部教授、比較文学)
荒川清秀(愛知大学国際コミュニケーション学部教授、中国語学)
岩月純一(一橋大学大学院言語社会研究科助教授、ベトナム言語政策)
石川禎浩(京都大学人文科学研究所助教授、中国思想史)
井上健(東京大学大学院総合文化研究科教授、比較文学・翻訳史)
王晓葵(愛知県立大学外国語学部客員助教授、日中比較文化史)
岡田建志(静岡文化芸術大学文化政策学部助教授、ベトナム史)
緒形康(神戸大学文学部教授、中国思想史)
上垣外憲一(帝塚山学院大学文学部教授、比較文学・比較文化)
川島真(東京大学大学院総合文化研究科助教授、外交史)
川尻文彦(帝塚山学院大学人間文化学部助教授、中国近代思想)
川本皓嗣(大手前大学長、比較文学・比較文化)
姜克実(岡山大学文学部教授、日本近現代史)
黄東欄(愛知県立大学外国語学部教授、国際関係論)
坂元ひろ子(一橋大学大学院社会学研究科教授、中国近現代思想・文化批評)
砂山幸雄(愛知大学現代中国学部教授、現代中国思想)
戦晓梅(東京工業大学外国語教育研究教育センター助教授、美術史)
孫安石(神奈川大学外国語学部助教授、東アジア・メディア研究)
高柳信夫(学習院大学外国語教育研究センター教授、中国近代思想)

竹村民郎(元大阪産業大学客員教授、経済史)
田中比呂志(東京学芸大学教育学部助教授、東洋史)
单援朝(崇城大学総合教育部教授、比較文学)
陳捷(国文学研究資料館文学資源研究系助教授、日中比較文化)
陳力衛(目白大学人文学部教授、日本語史・日中対照言語学)
陳継東(武蔵野大学人間関係学部助教授、宗教学)
十重田裕一(早稲田大学文学学術院教授、日本近代文学)
並木頼壽(東京大学大学院総合文化研究科教授、歴史学・東洋史)
橋本行洋(花園大学文学部助教授、言語学)
村田雄二郎(東京大学大学院総合文化研究科教授、中国哲学・東洋史)
茂木敏夫(東京女子大学現代文化学部教授、国際関係論)
安田敏朗(一橋大学大学院言語社会研究科助教授、近代日本言語史)
八耳俊文(青山学院女子短期大学教養学科教授、科学史)
吉澤誠一郎(東京大学人文社会系研究科助教授、東洋史)
李曉東(鳥根県立大学総合政策学部助教授、日中比較思想)
李梁(弘前大学人文学部助教授、中国近代思想)
林少陽(東京大学大学院総合文化研究科特任助教授、表象文化)
稲賀繁美(日文研教授、比較文学・比較文化)
鈴木貞美(日文研教授、日本近現代文学・文化史)
園田英弘(日文研教授、社会学)
●研究発表

2006年 5月 27日	劉建輝「200年の困惑―いま、なぜ概念史か―」
	孫江「テキストの終わりと近代知の誕生―概念史に関するこれまでの研究の歩みと本プロジェクトの趣旨説明―」
2006年 7月 29日	八耳俊文「寧波の最初の華字定期刊行物『中外新報』(1854-1861)の研究」
	黄克武「近代中国における私領域概念の発生と限界」
2006年10月 28日	岩月純一「ベトナム近代言語社会史概観―きたるべき近代漢字語彙研究のために―」
	林少陽「『文学』という概念―夏目漱石の『文学論』を中心に―」
2006年12月 9日	橋本行洋「初期中日辞典に見られる中英辞典の影響について」
	上垣外憲一「西周の『哲学』の翻訳について」
2007年 2月 24日	川尻文彦「中国近代思想と『概念史』」
	藩光哲「近代中国における『政党』概念の系譜」
2007年 3月 22日	孫江「共同研究会の総括」
2007年 3月 23日	総合討論

103 TOWARDS A NEW JAPAN? ―Bridging the Perception Gap Concerning Japan's Contemporary Cultural Identity―

●研究域
第5研究域 文化情報(外国における日本研究I)
●共同研究期間
2006(平成18)年6月～2007(平成19)年5月
●研究の概要
現代のグローバル社会のなかにあって、その巨大なパワーと可視性にもかかわらず、日本は海外においては相応の意義ある影響力を行使しえていない。これは、日本がもっている本来の独自性と海外で受け取られるイメージとのあいだに、相当なパーセプション・ギャップがあるからに違いない。本研究の目的は、日本についての海外におけるイメージ形成を、日本国内における著名で一流の研究者たちに対する、根源的で高度な調査を実施することによって、正しいものに修正していくことにある。対象となる研究者たちは、いずれも現代日本の文化的アイデンティティに関して、その信念において確

固たる卓見をもっている人たちがばかりである。
本研究がめざすものとして、具体的には次の3つを設定した。
(1) 現代日本の変化の中で、主要なものは何であることを示すこと。
(2) 現代日本において現実に行き起きている変化と、海外で受けとめられている変化とのあいだのパーセプション・ギャップを狭めること。
(3) こうした変化に関して、日本の国内と海外とで同様に認識されるようになった場合の効果を示すこと。
選択された領域は以下のとおりである。
統治形態(国家、都道府県、市町村)、企業文化、経営戦略、経済成長、教育、環境問題、財政システム、外交戦略と海外関係、ライフスタイル、文学と芸術、メディア、政治システムと政治文化、大衆文化、女性の地位、宗教、社会連帯、技術。(公募研究)
●研究代表者
リン・T・セーヘルス(日文研外国人研究員／フローニンゲン大学日本研究センター所長、文化企業アイデンティティ・現代日本研究)
●幹事
川勝平太(日文研教授、経済学 平成19年4月～日文研客員教授／静岡文化芸術大学長)
井上章一(日文研教授、建築史)
●班員
家森信善(名古屋大学大学院経済学研究科教授、金融論)
猪口孝(中央大学法学部教授、政治学)
小倉和夫(国際交流基金理事、外交)
榊原英資(早稲田大学総合研究機構客員教授、国際金融論)
佐伯順子(同志社大学文学部教授、比較文化)
佐藤卓己(京都大学大学院教育学研究科助教授、メディア論)
長坂寿久(拓殖大学国際開発学部教授、NGO・NPO論)
中沢新一(多摩美術大学美術学部教授、宗教学)
西垣鳴人(岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授、金融論)
野中郁次郎(一橋大学大学院国際企業戦略研究科名誉教授、知識創造論・組織論)
秦由美子(大阪大学大学教育実践センター助教授、比較教育学)
濱田陽(帝京大学短期大学現代ビジネス学科講師、宗教学・共存・対話研究)
業師寺泰蔵(慶應義塾大学客員教授、政治学・国際政治理論)
山折哲雄(日文研名誉教授、宗教史・日本思想史)
稲賀繁美(日文研教授、比較文学・比較文化)
岩渕功一(日文研客員准教授／早稲田大学国際教養学部助教授、メディア・文化研究)
本野英一(日文研客員教授／早稲田大学政治経済学部教授、経済史)
山田奨治(日文研准教授、情報学・文化交流史)
●成果物
Rien T. SEGERS, Editor “A NEW JAPAN FOR THE TWENTY-FIRST CENTURY―An Inside Over view of Current Fundamental Changes and Problems―”(Routledge、2008年3月)
●研究発表
2006年 7月 7日 研究会の概略及び説明
2006年11月 24日 25分ずつの報告と討論
2007年 4月 27日 川勝平太“Welcome speech”
リン・T・セーヘルス Presentation

104 古代東アジア交流の総合的研究

●研究域
第1研究域 動態研究(伝統)
●共同研究期間
2007(平成19)年4月～2008(平成20)年3月
●研究の概要
古代東アジアでは、地域間交流がとくに盛んであった。なかでも中日の往来は、日本の国家制度・都市建設・宗教活動・交易活動にまで大きな変革をもたらすものであった。また中国も、中国周辺の諸国やシルクロードを通じた西方諸国との交流を通じて、その社会を充実させていった。
このように、古代東アジアは、国際交流が大きな社会変革を生んだモデルケースであり、そのさらなる解明は、時間空間を越えて人類史を考えるための重要な知見となるだろう。しかし、このような学問的課題はひとつの研究方法で解明することは難しく、学際的な共同研究がとくに有用であると考えられる。
そこで、本研究は以下のような目的設定と方法によって推進した。
対象とする時代：古代東アジア交流が最も盛んであった隋唐時代(ほぼ7世紀から9世紀)。
対象とする地域：中国と日本を中心としつつ、中国東北地方や朝鮮半島、東南アジア諸国、北方遊牧民、西域諸国などを含む。
研究方法：学際的な研究方法による。考古学、歴史学、歴史地理学、思想史、情報学(衛星画像・GIS解析など)の協力によってすすめる。
以上によって、古代東アジアの交流の実相を従来よりはるかに詳細に描き出し、その歴史的意義を明らかにした。(公募研究)
●研究代表者
王維坤(日文研外国人研究員／西北大学国際文化交流学院副院長、考古学・歴史学)
●幹事
宇野隆夫(日文研教授、考古学)
●班員
新宮学(山形大学人文学部教授、東洋史)
井上和人(奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室長、考古学)
井上満郎(京都産業大学文化学部教授、考古学)
臼井正(大阪産業大学非常勤講師、天文考古学)
小澤毅(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長、考古学)
川崎保(長野県埋蔵文化財センター調査部調査第2課調査研究員、陵墓制研究)
気賀澤保規(明治大学文学部教授、東洋史)
肥塚隆保(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長、文化財科学)
小嶋芳孝(金沢学院大学美術文化学部教授、考古学)
菅谷文則(滋賀県立大学人間文化学部教授、考古学)
関清(富山県埋蔵文化財センター所長、考古学)
妹尾達彦(中央大学文学部教授、東洋史)
銭静怡(一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程、領主制・国家の比較研究)
高瀬奈津子(札幌大学文化学部准教授、隋唐社会文化史)
田中俊明(滋賀県立大学人間文化学部教授、考古学)
土屋昌明(専修大学経済学部教授、中国思想史)
豊田裕章(大阪府立豊中養護学校教諭、日中古代都城制)
中川あや(奈良文化財研究所都城発掘調査部研究員、考古学)

橋本義則（山口大学人文学部教授、日本史）	
林部均（奈良県立橿原考古学研究所総括研究員、考古学）	
菱田哲郎（京都府立大学文学部准教授、考古学）	
宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所主任、情報考古学）	
門田誠一（佛教大学文学部教授、高句麗研究）	
矢野建一（専修大学文学部教授、日本史）	
合庭惇（日文研教授、電子メディア・情報社会論）	
千田稔（日文研教授、地理学）	
中谷正和（日文研機関研究員、考古学）	
山田奨治（日文研准教授、情報学）	
●成果物	
日文研叢書42、王維坤／宇野隆夫編『古代東アジア交流の総合的研究』（日文研、2008年12月）	
●研究発表	
2007年 5月 19日	王維坤「唐の留学生井真成墓誌の発現と新研究」 気賀澤保規「遣隋使の見た隋の風景—あわせて北朝後期の山東仏教石刻をめぐる—」 矢野建一「井真成研究—その後の動向—」 土屋昌明「開元期前後の長安道教の状況」
2007年 7月 21日	王維坤「唐の長安城大明宮含元殿の発掘と竜尾道の復元—渤海の宮殿と平城京・平安京の宮殿から見る—」 田中俊明「朝鮮三国の王都」 妹尾達彦「隋唐の長安と洛陽—城内における官人居住地の変遷を手がかりに—」 新宮学「近世中国の都城建設過程—大都・中都・南京・北京—」 小嶋芳孝「渤海の遺跡分布と都城」
2007年10月 20日	飛鳥遺跡調査
2007年10月 21日	林部均「飛鳥宮の形成とその構造」 小澤毅「藤原京の成立と構造をめぐる諸問題」 井上和人「平城京形制研究の現段階」 橋本義則「日本古代の後期宮都—平城京から長岡京・平安京へ—」 白井正「古代日本の都城の方位」 王維坤「東アジア都城制の総括」
2007年12月 2日	宇野隆夫「漢皇帝陵の設計・配置原理と漢長安城」 王維坤「ソグド人墓の発見と最新研究」 門田誠一「朝鮮三国時代墳墓にみられる中国文化と思想」 杉山洋「日本古代の墓制」 豊田裕章「中国における都城の概念の変化と日本の宮都付論：阮譜撰『周室王城明堂宗廟圖』について」 高瀬奈津子「唐後半期における聴政制度の変遷と国家運営—財政政策の変遷とあわせて—」
2008年 3月 15日	王維坤「シルクロードと正倉院銀盤」 アレキサンダー・ヴォヴィン「神聖の剣と魔法の領巾—言語学と歴史学の接点—」 川崎保「縄文時代の玉製品にみられる大陸文化の影響」 関清「東アジアにおける日本列島の鉄生産」 馬場基「日本古代交通の諸相」

105	日本文明史の再建 —生命文明の時代を求めて—
●研究域	
第1研究域 動態研究（基層）	
●共同研究期間	
2007（平成19）年4月～2010（平成22）年3月	
●研究の概要	
先行研究「日本文明史の再建」の成果は、2006（平成18）年4月に共同研究報告書『山岳信仰と日本人』として刊行したが、本研究はその発展形態として企画され、実施された。	
本研究の目的とするところは、地球環境の危機にに直面している現在、これを克服し、持続的な文明社会を構築するために、豊かな土壌と水が現在でも維持されている稲作漁労文明のエトスを背景とした生命文明の構築に向け、最終ステージで挑戦することであった。	
本研究は、自然科学から人文社会科学、そして工学にいたるまでの研究者、財界・官界・政治家をも含めた産官学連携プロジェクトによって推進された。	
●研究代表者	
安田喜憲（日文研教授、環境考古学）	
●幹事	
池内恵（日文研准教授、イスラム史）	
フレデリック・クレインス（日文研准教授、日本文明史）	
●班員	
赤池学（㈱ユニバーサルデザイン総合研究所代表取締役所長、産業論・ユニバーサルデザイン論）	
石田秀輝（東北大学大学院環境科学研究科教授、ネイチャーテクノロジー）	
磯野宏夫（画家）	
植田和弘（京都大学大学院地球環境学堂教授、環境経済学）	
大熊一寛（環境省大臣官房秘書課大臣秘書官事務取扱、環境学）	
大塚邦明（東京女子医科大学東医療センター教授、医学博士・内科学）	
大橋力（財国際科学振興財団主席研究員、情報環境学・サウンドエコロジー）	
小佐野峰忠（会津大学コンピューター理工学部教授、情報科学）	
我喜屋まり子（鹿児島大学稲森経営・技術アカデミー特任教授、経営・社会政策）	
加藤忠哉（㈱あの津技研代表取締役、地域活性化論）	
河合徳枝（国際科学振興財団主任研究員、精神生理学・情報環境学）	
岸本吉生（経済産業省中小企業庁経営支援課長、環境経済学）	
鬼頭昭雄（気象研究所気候研究部長、気候変動予測・気候学）	
河野博子（読売新聞東京本社編集委員、情報メディア論）	
小林俊安（㈱積水インテグレートドリサーチ副社長、環境経営）	
小林正明（環境省大臣官房審議官、環境学）	
佐藤文一（経済産業省大臣官房情報システム厚生課長、産業経営労働）	
佐藤真弓（NPO法人バードライフ・アジア研究員、生物学・生態学）	
佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所研究部教授、遺伝学）	
椎川忍（総務省地域力創造審議官、地域政策）	
篠上雄彦（新日本製鐵㈱環境部環境リレーションズグループマネージャー、エネルギー資源学）	
清水昭（㈱ヘルスクリック代表取締役会長、脳神経外科・産業医）	
下原勝憲（同志社大学理工学部教授、人間情報科学）	
杉田定大（日本商品委託者保護基金専務理事、経済学）	
杉山洋（奈良文化財研究所飛鳥資料館企画調整部国際遺跡研究室長、考古学）	
高橋美恵子（大阪大学世界言語研究センター准教授、社会学）	
竹林征三（富士常葉大学客員教授、風土工学）	

竹林征雄（国際連合大学ゼロエミッションフォーラムプログラム・コーディネーター、環境と産業）	
田中章義（アジア国際支援財団理事、環境と人間）	
田中克（京都大学名誉教授、応用生物科学）	
谷口正次（国際連合大学ゼロエミッションフォーラム理事、鉱産資源学）	
民岡順朗（㈱オリエンタルコンサルタンツプロジェクトリーダー、文化財保存）	
嶋謙一（国際リサイクル教育センター長、静脈産業論・環境マネージメントシステム論）	
十市勉（財日本エネルギー経済研究所専務理事、エネルギー資源学）	
中井徳太郎（財務省理財局計画官、経済学）	
永里善彦（㈱旭リサーチセンター代表取締役社長、エネルギー科学）	
永野博（政策研究大学院大学教授、科学政策）	
中山厚（北海道大学公共政策大学院教授、経済学・国土保全）	
名越万里子（立命館大学客員研究員、人類学）	
新妻弘明（東北大学大学院環境科学研究科教授、環境工学）	
仁科エミ（放送大学ICT活用・遠隔教育センター教授、情報環境学・都市計画）	
畠山重篤（京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授、水産学）	
羽田肇（物質・材料研究機構センサ材料センター長、物質材料科学）	
秦陽一（ものづくり生命文明機構理事、物質材料学）	
速水亨（速水林業代表、林学）	
平川新（東北大学東北アジア研究センター教授、歴史学）	
平野秀樹（森林総合研究所理事、森林セラピー）	
藤崎憲治（京都大学大学院農学研究科教授、昆虫生態学）	
古沢広祐（國學院大学経済学部教授、環境経済学）	
本田学（国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第7部長、生命科学）	
前田泰宏（内閣府特命担当大臣（行政刷新参事官）、ものづくり政策）	
真下正樹（日本経団連自然保護協議会顧問、森林経営）	
南敦資（ものづくり生命文明機構事務局事務局長、地域政策論）	
宮内博美（経済産業省地域経済産業グループ地域経済産業政策課課長補佐、ものづくり政策）	
宮本昌宏（JSR㈱知的財産部主事、生物学・高分子化学・知的財産権）	
宮本融（北海道大学サステイナビリティ学教育研究センター特任准教授、政治学）	
村田泰夫（農業問題ジャーナリスト、メディア情報）	
森鐘一（モリエコロジー㈱代表取締役、水産学）	
森勇一（金城学院大学薬学部非常勤講師、環境史学・環境考古学・昆虫生態学）	
森本英香（環境省大臣官房秘書課長、環境学）	
吉澤保幸（びあ㈱顧問、場所文化の発見と地域の創造）	
今谷明（日文研教授、中世史）	
宇野隆夫（日文研教授、考古学）	
笠谷和比古（日文研教授、近世史）	
千田稔（日文研教授、古代史）	
アミ・ムティア（日文研外国人研究員／インドネシア科学研究所陸水学研究センター研究員、水環境学）	
●研究発表	
2007年 6月 9日	司会 森鐘一「お伊勢さんに学ぶものづくりと生命文明」 田中章義「万葉集に学ぶことのはと生命文明」 安田喜憲「マヤ文明と伊勢神宮に共通するものづくりと生命文明」 櫻井治男「伊勢神宮の自然崇拜と現代のライフスタイルへの提言」 頼富本宏「空海密教に学ぶ地球環境問題への提言」
2007年 6月 10日	「内宮・外宮・式年遷宮・神宮の森 赤福おかげ横丁—式年遷宮に学ぶものづくりとわれわれの未来—」（案内：金田憲明）

	パネルディスカッション 司会 岸本吉生 パネリスト 前田泰宏、濱田益嗣
2007年10月 27日	下原勝憲「関係性をデザインする—社会情報学の研究—」 小佐野峰忠「環境と人間のシミュレーション・京都クラブモデルの具体化」
2007年10月 28日	総合討論
2007年12月 15日	石田秀輝「欲の構造と生物多様性—新しいテクノロジーのかたちを考える—」 赤池学「生物多様性実現のための社会経済システム」 森鐘一「環境の視点から経済への要望」 田中順三「生物多様性と材料開発」 宇根豊「農政と農学は、生物多様性を掌中にできるか」 大橋力「利他的遺伝子の優越性」
2007年12月 16日	内山節「里の思想と生物多様性」 ラクパ・ツォコ「慈悲と環境」 藤崎憲治「地球温暖化と生物多様性—昆虫からの視点—」 戒見司「生物多様性と松イキイキ」 小林正明「生物多様性について」 南敦資「NPO法人ものづくり生命文明機構の今後について」
2008年 3月 20日	加藤忠哉「英虞湾水域の底質・水質汚染の現状について」 前川行幸「漁業者と連携したアマモ場造成」 矢野康明「多摩川源流百年の森づくり」 阿部宣男「板橋区ホタル飼育施設を持つ意味」 綾部斗清「在来種マルハナバチ安定飼育繁殖について」 篠上雄彦「新日鉄の“郷土の森づくり”と“海の森づくり”」 小林俊安「水の浄化と日本—我が国のなすべきこととは—」
2008年 5月 31日	清水昭「みない・頭とやわらかい脳の話—脳と心と環境の深い関係—」 畠山重篤「『鉄が温暖化を防ぐ』コンプが地球を救う」 討論「—森・里・海の連携と鉄が温暖化を防ぐ！持続可能な社会をめざして—」 岸本吉生、石田秀輝、加藤忠哉、篠上雄彦、谷口正次
2008年 6月 1日	総合討論
2008年11月 22日	真下正樹「生物多様性の保全—経済界の役割COP9ドイツ ボンからCOP10名古屋開催に向けて—」 谷口正次「オーストラリアの北の国から—ウラン開発をめぐるアボリジニと巨大資本のバトル—」 嶋謙一「緑の産業革命」
2008年11月 23日	村田泰夫「汚染米事件から何が見えたか」 大塚邦明「生体リズム研究の最近の進歩」
2009年 1月 31日	古沢広祐「世界複合危機と地域コミュニティ再生—08～09年世界動向、複合的危機の時代への対応—」 竹林征雄「話題提供 限界集落の再生試案」 森鐘一「『魚食文化の継承』による『豊かな里海づくり』」 岸本吉生「地域資源活用・農商連携の促進のために」 吉澤保幸「現在の金融危機への対応と地域政策のあり方—ローカルからの新たな社会構想—」 竹林征三「東洋の知恵の環境学」
2009年 3月 14日	【森里海連環基本法をめざして】 岸本吉生「森里海連環基本法を目指すことについて」 津田雄造「国土ニューディール構想（国土保全隊の創設）—不況でこそできる若年者雇用対策と国家資産への将来投資—」

	三宅曜子「地域資源ビジネスからみた、日本人の価値観、自然観の変化」 杉田定大「瀬戸内発達ビジョンの提言—瀬戸内フォーラムの創設—」 藤崎憲治「奄美における環境教育の理念と実践」
2009年 3月 15日	遠藤正俊「王子製紙の海外植林と社会貢献への取り組み」 山根正義「本物の野菜工場 地球を考えて 日本を考えて 野菜を考えて」 【カンボジア報告】 Sophady HENG、VOEUN Vuthy 【カンボジア・プンスナイ遺跡調査報告I】 赤山容造、宮塚義人、平尾良光 【カンボジア・プンスナイ遺跡調査報告II】 森勇一、藤本利之、那須浩郎
2009年 6月 27日	公開シンポジウム「森里海連環と日本の原風景」 (山形県鶴岡市：いでは文化記念館) 【基調講演「未来を開く山形県民の心」】(司会：吉澤保幸) 島津慈道「修験の心と日本人の役目—山と海を守る為に—」 千歳栄「日本人の心の原風景と次世代へのメッセージ」 【討論「山形県を元気にする」】(司会：岸本吉生) 討論者：國井英夫、小野木學、椎川忍、杉田定大、土屋了介、中村稔 【パネルディスカッション「森里海連環がもたらす恵みと日本人の役目」】(司会：中井徳太郎) パネリスト： 田中克「森里海連環構想について」 丹保裕「日本海学の軌跡と展望」 中村浩二「能登半島の森里海連環」 末武栄子「佐渡のくらしと佐渡の夢」 近藤等則「地球を吹く」 泉椿魚「日本海のくらしといのち」 緒方久信「羽羽三山信仰と日本海」
2009年 6月 28日	調査：湯殿山神社
2009年 7月 20日	研究会テーマ：生命の水について 司会 小林俊安 中井徳太郎「森里海連環基本法のイメージについて」 佐久間智子「水道の民営化と住民参加をめぐる課題 水道民営化における問題点」 永里善彦「地球温暖化と水問題—最近の水のハイテク化を例として—」 杉田定大「我が国の官民連携（PPP）と水ビジネスについて」
2009年11月 7日	森鐘一「豊かな海づくりに向けて —過去の外部不経済—」 竹林征三「ダムと環境問題とダム無用論—国家百年の計としてのダム事業を考える—」 柴田昌三「森里海連環調査と地域性—過去の自分の研究成果をもう一度森里海環学の視点から見てみると…—」 河合徳枝「バリ島の水と神々を活かした生存科学」
2010年 3月 14日	篠上雄彦「鉄分供給による「海の森づくり」の国家プロジェクト化について」 村田泰夫「日本農業再生のためにいま何が必要か—減反廃止による『米』増産の動機—」 竹林征三「ダムと環境そしてダム無用論について（その2）」 鶴謙一「ブラジル、アルゼンチン、中南米における使用

済自動車の現状と自動車リサイクル法制定の課題」 新妻弘明「エネルギーの地産地消 EIMY エイミー—新しい文明のかたちを求めて—」
--

106 性欲の社会史
●研究域
第2研究域 構造研究（人間）
●共同研究期間
2007（平成19）年4月～2011（平成23）年3月

●研究の概要

先の「性欲の文化史」という研究会を、3年間続けてきたことを承けて、今回は、同じ「性欲」を扱うが、対象に挑む構えを変え、文化史であるよりは、社会史に挑んだものである。

たとえば、「つれあい」の選び方を問題にしてみよう。生物学は、さまざまな動物の異性に対する好みをしばしば明らかにしようとする。しかし、人間の場合、ことはそう単純ではない。どういう異性を好むかは、時代により民族により、異なっている。いわゆる美人観、美男観には、文化的なずれがある。文化史に携わる研究者は、それらがいかに違っているのかを調べていく。

しかし、人間は、自分が好みだと思う異性を、必ずしも「つれあい」として選べる訳ではない。この人が一番だとは思えない相手で、折り合いをつけることも、ままある。

のみならず、社会が好みの異性へこだわることを許さぬ場合も、ないではない。夫婦の縁組みは、互いの容姿を知らずに決める。そんなことより、家柄や血筋のつりあいを重んじる。「つれあい」を世間に披露する、その宴にいたるまで、妻になる人、夫になる人の顔も見ない。そんな夫婦選びさえ、人間はしばしば営んできた。

「つれあい」の決め方だけに限ったことではない。人間の性欲は、文化のみならず、社会によっても、縛られている。社会もまた、人々の性的な振る舞い、あるいは想いを、ある枠の中に閉じ込めてきた。一見解き放っているようにうつる社会でも、性欲があふれ出す向きを整えているのである。

そして、社会が性欲と向き合うそのありようも、ひとつには限らない。人間は、さまざまな関わり合いを、これまでもに繰り返してきた。この研究会ではその筋道を追いかけていった。

●研究代表者
井上章一（日文研教授、風俗史）

●幹事
新井菜穂子（日文研准教授、情報学）
松田利彦（日文研准教授、現代史）

●班員
青木健一（東京大学大学院理学系研究科教授、人類学）
赤枝香奈子（京都大学大学院文学研究科特定助教、社会学）
石田仁（聖マリアンナ医科大学非常勤講師、社会学）
岩見照代（麗澤大学外国語学部教授、国文学）
梅川純代（大妻女子大学短期大学部非常勤講師、科学史）
小川順子（中部大学人文学部講師、映画論）
川井ゆう（武庫川女子大学非常勤講師、風俗史）
斎藤光（京都精華大学人文学部教授、科学史）
阪本博志（宮崎公立大学人文学部准教授、社会学）
澁谷知美（東京経済大学現代法学部准教授、社会学）
申昌浩（京都精華大学人文学部准教授、宗教学）
菅沼信彦（京都大学大学院医学研究科教授、医学）
永井良和（関西大学社会学部教授、社会学）
中村隆文（神戸女子大学文学部教授、教育学）

西村大志（広島大学大学院教育学研究科講師、社会学） ノッター・デビット（慶應義塾大学経済学部准教授、教育学） 古川誠（関西大学社会学部准教授、社会学） 松田（鴻嶋）さおり（宇都宮共和大学専任講師、人類学） 光石亜由美（奈良大学文学部講師、近代日本文学） 三橋順子（多摩大学非常勤講師、風俗史） 平松隆円（日文研機関研究員、教育学） 劉建輝（日文研准教授、比較文学） [海外共同研究員] 唐権（華東師範大学外語学院副教授、比較文化論）	●成果物 井上章一／斎藤光／澁谷知美／三橋順子編『性的なことば』（講社社、2010年1月） ●研究発表 2007年 6月 16日 井上章一「社会史的性欲研究の可能性—文化史とは何かちがうのか—」 全体討論 2007年 9月 22日 三橋順子「中国の（MtF）トランスジェンダー『相公』についての基礎的研究」 斎藤光「近代日本における『「性」整序原則・男女間秩序』の基底あるいは、『社会的男女分離機構』の問題」 2007年11月 10日 赤枝香奈子「『令女界』誌上にみる女同士との親密な関係」 ノッター・デビット「愛の俗化」 2008年 1月 12日 斎藤光「資料紹介（戦後純潔教育をめぐる資料）」 石田仁「創られる『争点』、消される『争点』ブルーボーイ裁判の内側における法の外側」 2008年 3月 8日 斎藤光「資料紹介（戦前の性科学をめぐる資料）」 酒井順一郎「揺れる留学生生活—清国人留学生の性—」 2008年 4月 19日 井上章一「好色の受け皿—民俗と美術のはざまに—」 小川順子「日本映画から何が読み取れるか？ —現状整理と課題設定—」 2008年 7月 5日 濱田陽「賀川豊彦と性—社会・私・宇宙—」 澁谷知美「M検（男性器露出検査）の言説史・戦後編—あるいは男性身体の〈侵襲的〉経験はいかにして忘却されるか—」 2008年 9月 13日 古川誠「白袴隊とその時代—世紀転換期の不良学生集団と美少年騒動—」 菅原信彦「性の分化とその異常」 2008年11月 29日 【批評】「性欲の文化史I、II」 岩見照代、中村隆文、古川誠、斎藤光 2009年 2月 28日 申昌浩「Well-Being性生活を造る韓国の成形成業」 澁谷知美「1930年代における青少年の性的逸脱」 2009年 5月 9日 松田さおり「女給からホステスへ—銀座を中心にみたホステスの『形成史』—」 古川誠「少年愛小説の系譜」 2009年 7月 25日 青木健一「進化理論から探るヒトの学習と文化の特性」 井上章一「性欲と治安をめぐる仮説の可能性—小野常徳のひとことから—」 2009年10月 3日 申昌浩「新・儒教的『成形美人論』—二つの戦争と二つのスポーツ祭典による新・儒教的成形美人の誕生—」 斎藤光「尖端少女の／と京都—京都とモダンガールキ尖端少女を調査することを通して見えた大正期新興美術運動—あるいは、映画・コスチューム・女優・アバンギャルド—」 2009年12月 26日 ジェフリー・アングルス「昭和初期における『猟奇』の概念史」 菅沼信彦「万能細胞を用いた生殖補助医療に対する性同一性障害患者の意識調査」
---	---

2010年 3月 6日	平松隆円「美しく育てるということ」 光石亜由美「トルコ風呂と文学」
2010年 4月 24日	長田俊樹「『性的なことば』の品定め」
2010年 7月 3日	斎藤光「社交的と性的のあいだ」 根川幸男「ブラジルにおける日系エスニックタウンの形成と性」 Haeng-ja Sachiko CHUNG「『技能』と『ビザ』カテゴリーのギャップが引き起こす問題と『人間の安全保障』：韓国クラブ『ローズ』のケースを中心に—」 コメント：松田さおり 多田良子「性風俗サービスの利用における『対人感度』」
2010年 7月 4日	阪本博志「大宅社—と猥談」 永井良和「アカとピンク 赤化防止と桃色統制」
2010年 9月 4日	川井ゆう「マネキンについて」 澁谷知美「1950～60年代における『不純異性交遊』概念の成立と運用—性非行言説のジェンダー視点による分析—」 唐権「吾妻鏡とその周辺—近代中国のセクソロジーに関する一考察—」 三橋順子「昭和期、大阪における女装文化の展開」 コメント：松田さおり
2010年 9月 5日	岩見照代「明治の未亡人論」 梅川純代「日中オマタ事情」 小川順子「神代辰巳が描いた性—神代監督映画作品を中心に—」

107 近代日本の公と私、官と民—比較の視点から—
●研究域
第3研究域 文化比較（制度）
●共同研究期間
2007（平成19）年4月～2011（平成23）年3月

●研究の概要

「公共的なもの」への人々の姿勢は、国のかたちを規定する重要な要素である。デモクラシーと市場経済のもとでは、社会的な紐帯を失いアトム化した個人は、「私」的な世界に閉じこもり、「公」的な事柄への関心を失いがちになる。「公」と「私」のバランスと境界はどこにあるか、それはいかにすれば保持されうるか。

本研究では、近代日本を主たる対象としながら、歴史的あるいは国際比較の視点から、「公」と「私」の問題を取り上げた。その際、理念としての公（共）と私と、現実の「官」と「民」を区別しつつ、歴史的側面（たとえば英米法と大陸法、あるいは西洋・東洋の公の哲学）、理論面（common goodの歴史、公的責任の制度論など）、現実の諸問題（プライバシーの概念と関連事件、メディアの役割とその活動の制限、公共経済的な政策など）など、参加者の専門分野に応じてさまざまな分野からのアプローチを試みた。

●研究代表者
猪木武徳（日文研所長、経済政策思想）

●幹事
マルクス・リュッターマン（日文研准教授、日本中世史）

●班員
井出文紀（九州産業大学商学部講師、アジア経済）
上山隆大（上智大学経済学部教授、医療史）
桂木隆夫（学習院大学法学部教授、法哲学）
紙谷雅子（学習院大学法学部教授、英米法）

木村真（北海道大学公共政策大学院特任助教、公共経済）
佐伯啓思（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、社会経済学）
佐藤一進（京都精華大学芸術学部講師、社会思想史）
デトレフ・シャウベッカー（関西大学名誉教授、演劇史・東西文化交流史）
田島正樹（千葉大学文学部教授、哲学）
土井真一（京都大学大学院公共政策連携研究部教授、公法）
中岡俊介（国土館大学政経学部専任講師、日本経営史）
橋本努（北海道大学大学院経済学研究科准教授、経済思想）
藤倉皓一郎（元同志社大学法科大学院教授、英米法）
宮一穂（京都精華大学デザイン学部教授、マスメディア論）
望月和彦（桃山学院大学経済学部教授、経済史）
山本貴之（帝塚山大学経済学部教授、経済学説史）
井上章一（日文研教授、建築史）
松村博行（日文研機関研究員、アメリカ経済）

●研究発表	
2007年 6月 9日	桂木隆夫「公共の哲学について」 藤倉皓一郎「アメリカにおける『公と私』の考え方」
2007年 9月 29日	上山隆大「生命現象をめぐる公と私：科学知識の商業化・プロフェッショナルリズム・利益相反」 田島正樹「寺の経営」
2007年12月 22日	佐藤一進「著述の技法と知識人の生—観想と言論にみる公と私—」 土井真一「司法における官と民、公と私—法の支配の担い手—」
2008年 3月 15日	ジル・ジャン＝ピエール・カンパニョーロ「公⇄私の対立から政府介入の可否へ—『オールドリベラリズム』、ミシェル・フーコー、ロスバードの観点から考える—」 マルクス・リュッターマン「『合点がゆく』—多数決原理と公共性との関連について—」
2008年 5月 24日	猪木武徳「福沢諭吉の『公』と『私』へのふたつの姿勢」 紙谷雅子「What is Public about “Public Domain”？あるいは、資本主義社会における『私』の賛美」
2008年 7月 24日	武藤秀太郎「君主をめぐる公と私—小泉信三を中心に—」 橋本努「高田保馬論」
2008年10月 4日	井上章一「都市と建築」 佐伯啓思「『公』と『義』：日欧の『公共性』の比較」
2008年12月 20日	中岡俊介「納税をめぐる『公』と『私』—近代日本の富裕層と納税に関する一考察—」 白幡洋三郎「屋外空間の公と私—近代日本の公園史から—」
2009年 2月 21日	瀧井一博「知の国制—伊藤博文の国家構想—」 望月和彦「上田貞次郎と新自由主義—私益と公益の調和の条件—」
2009年 5月 30日	マルクス・リュッターマン“Brief mit dem Beginn ‘Nach verlassen der Kapitale’” 田島正樹「移行（踏破）」
2009年 7月 18日	猪木武徳「公智と友情—福沢諭吉と西郷隆盛の場合—」 木村真「情報公開と監査」
2009年 9月 26日	デトレフ・シャウベッカー「イエズス会文献における公と私—日本布教前期の場合—」 佐藤一進「『恭順』と『抵抗』—公共精神の分岐点—」
2009年12月 5日	井出文紀「木崎争議と真島桂次郎—『極悪非道の悪地主』と公益・利益—」 猪木武徳、マルクス・リュッターマン「視点・論点の整理」
2010年 3月 6日	紙谷雅子「リベラル・アーツ・カレッジ入学者選抜が意味する『公』と『私』の棲み分け」 上山隆大「知識はだれのものか？：大学研究とパブリックドメイン」

2010年 7月 3日	猪木武徳「『公』と『私』の境界点、転換点、収束点—利益、徳、智恵—」 田島正樹「福沢諭吉のやせ我慢の精神」 桂木隆夫「商人道における〈正直〉、日本の公と私のあいだ」
2010年 10月 30日	武藤秀太郎「君主をめぐる公と私—小泉信三を中心に—」 上山隆大「知識生産の二つの秩序：私益と公益のはざま」 紙谷雅子「近代日本における公私のあり方—教育機関における公と私の役割分担について—」 阿川尚之「アメリカ憲法史から見る政府の役割について—米国憲法史から見る、公と私、官と民—」
2011年 1月 22日	橋本努「高田保馬の勢力論と民族論」 望月和彦「戦前期における自由主義の凋落」 中岡俊介「官の論理・資本の論理—大正9年所得税法改正をめぐる一考察—」

108 都市文化とは何か？—ユーラシア大陸における都市文化の比較的研究—

●研究域	
第4研究域	文化関係（旧交圈Ⅰ）
●共同研究期間	
2007（平成19）年4月～2011（平成23）年3月	
●研究の概要	
従来、都市の発生とその後の都市の発展史を対象とする研究は多く行われてきた。また都市を含め、個別地域における文化の特徴と地域文化同士の関連をさぐる研究もよく行われてきた。都市とその構造に関する研究は、地理学・考古学などを中心に行われ、他方、地域文化に関しては文化人類学や文化史学などによる研究が個別に行われてきた。しかしながら、都市の構造面における特徴とその地域における個別文化との関わりを包括的に考察することにより、特徴ある都市文化の全体を比較史的に検討しようとする研究はこれまでほとんどみられなかったし、地域的な偏りもあった。	
本研究は、従来の都市構造研究と地域文化研究とを連携させ、総合的な都市文化研究をめざした。ユーラシア大陸における多様な都市のあり方と都市の発達、都市構造の特徴と地域文化との関連を多面的に明らかにすることで、「都市文化とは何か？」に答えようとした。	
●研究代表者	
白幡洋三郎（日文研教授、都市文化論）	
●幹事	
牛村圭（日文研教授、政治史）	
●班員	
天野史郎（明治学院大学国際学部教授、西洋史）	
新井菜穂子（元日文研准教授、通信学）	
大澤直哉（京都大学大学院農学研究科講師、生態学）	
長田俊樹（総合地球環境学研究所教授、言語学）	
小野健吉（国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部長、文化史）	
小野寺浩（鹿児島大学学長補佐特任教授、環境史）	
川島真（東京大学大学院総合文化研究科准教授、外交史）	
越澤明（北海道大学大学院工学研究院教授、都市計画史）	
佐藤友美子（サントリー文化財団上席研究フェロー、社会学）	
佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所教授、遺伝学）	
申昌浩（京都精華大学人文学部准教授、比較文化）	
図師宣忠（京都造形芸術大学非常勤講師、西洋史）	

武田佐知子（大阪大学大学院文学研究科教授、日本史）	
竹村民郎（元大阪産業大学教授、近代史）	
田中淡（元京都大学人文科学研究所教授、中国建築史）	
豊田裕章（大阪府立豊中支援学校教諭、考古学）	
錦仁（新潟大学人文社会・教育科学系教授、日本文学）	
端信行（兵庫県立歴史博物館長、文化人類学）	
原田信男（国土館大学21世紀アジア学部教授、日本史）	
日向進（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授、日本建築史）	
平野秀樹（森林総合研究所理事、森林学）	
藤井真生（秀明大学学校教師学部講師、西洋史）	
宮一穂（京都精華大学デザイン学部教授、出版文化）	
矢ヶ崎善太郎（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科准教授、日本建築史）	
渡辺千香子（大阪学院大学国際学部准教授、美術史）	
池内恵（日文研准教授、政治史）	
奥野卓司（日文研客員教授／関西学院大学社会学部教授、社会学）	
テモテ・カーン（日文研助教、比較宗教学）	
上垣外憲一（日文研客員教授／大手前大学総合文化学部教授、比較文化）	
フレデリック・クレインス（日文研准教授、文化交流史）	
町田香（日文研技術補佐員、日本文化史）	
李偉（日文研外来研究員、比較文化史）	
劉建輝（日文研准教授、比較文学）	
〔海外共同研究員〕	
唐権（華東師範大学外語学院副教授、比較文化）	
●成果物	
白幡洋三郎／錦仁／原田信男編著『都市歴史博覧—都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ—』（笠原書院、2011年12月）	
●研究発表	
2007年 7月 7日	白幡洋三郎「都市文化研究とは何か」 劉建輝「中国の都市とその文化のとらえかた」
2007年 9月 15日	錦仁「地誌を生みだす和歌—都と地方を結ぶもの—」 唐権「倭の婦人、淫妬せず—中華文人の日本風俗観察小史—」 調査（菅大神神社）
2007年11月 17日	原田信男「アジアのなかの江戸文化—食文化を中心に—」 小野寺浩「日本の自然、国土」
2008年 1月 12日	小野健吉「日本庭園の諸相」 牛村圭「『文明』から『文化』へ」
2008年 2月 24日～26日	酒田・鶴岡（山形県）現地調査、研究会 上垣外憲一「石原莞爾の思想風土と鶴岡について」 【調査】（酒田市）本間美術館、山居倉庫・旧鎧屋・本間家旧邸宅など 原田信男「鶴岡の食文化」 【調査】（鶴岡市）鶴岡城跡、鶴岡天満宮、致道博物館など 越澤明「社会的共通資産としての歴史まちづくり」 佐藤友美子「都市の社交空間（第三の場所の可能性）」 新井菜穂子「地方都市の地理と都市文化」
2008年 5月 10日	竹村民郎「阪神間モダニズムを問う—『田園都市』と『花苑都市』の形成に関連して—」 渡辺千香子「都市文化としての古代メソポタミア」
2008年 7月 5日	奥野卓司「稗から萌へ—東アジアの都市メディア—」 天野史郎「都市と職人」
2008年 7月 6日	豊田裕章「中国と日本における城郭都市の再検討—城と郭、郭と郊、神聖都市という視点から—」 李偉「大名庭園の空間構成—江戸時代の庭園における『眺望』—」
2008年10月 4日	今谷班・白幡班 合同研究会「都市文化とは何か？—

『王権と都市』を読む—	
【討論1】「近代の都市類型—横浜と上海—」 発表・加藤祐三 コメント・竹村民郎	
【討論2】「13世紀南フランスにおける誓約と文書—統治者と都市との関係構築の諸相—」 発表・図師宣忠 コメント・牛村圭	
【討論3】「中世王権の『首都』形成—チェコの君主たちとプラハ—」 発表・藤井真生 コメント・端信行	
【討論4】「中世城壁から稜堡式城郭へ—15世紀イタリアの軍事技術・建築家・君主」 発表・白幡俊輔 コメント・天野史郎	
2008年10月 5日	今谷班・白幡班 合同研究会「都市文化とは何か？—『王権と都市』を読む—」 【討論5】「『山背遷都』の背景—長岡京から平安京へ—」 発表・仁藤敦史 コメント・錦仁
【討論6】「信長の本能寺“御殿”について」 発表・今谷明 コメント・原田信男	
2008年12月 6日	大澤直哉「昆虫からみた都市文化」 越澤明「都市研究史」
2008年12月 7日	町田香「飾られる都市の庭園」 白幡洋三郎「三都物語」
2009年 3月 7日	宮一穂「編集者の日々—出版をめぐる40年—」 佐藤友美子「都市と盛り場—生活研究からのアプローチ—」
2009年 3月 8日～9日	研究発表、姫路・赤穂現地調査見学 【調査】（姫路市）姫路城・好古園・兵庫県立歴史博物館 【調査】（赤穂市）旧赤穂城跡・赤穂市立歴史博物館
2009年 4月 25日	端信行「都市文化と文化政策」 錦仁「都市・国家を暗喩する『古今集』仮名序」
2009年 4月 26日	新収資料の紹介と検討
2009年 6月 20日	上垣外憲一「江戸庶民のリクリエーションとしての富士講」 平野秀樹「辺境VS都市—辺境から眺める都市—」
2009年 6月 21日	申昌浩「都市文化コンテンツとしての“館・屋・房”—韓国の“房”文化を事例に：妓房からチムジル房まで—」
2009年 9月 26日	豊田裕章「鎌倉時代の庭園都市水無瀬—水無瀬離宮に関する再検討を中心に—」 日向進「町屋の坪庭と茶室の露地—都市文化的な視点から—」
2009年 9月 27日	国際シンポジウムに向けて
2009年11月 14日	図師宣忠「中世都市の遺産化とミュージアムの思想」 藤井真生「設立文書にみる中世チェコの都市文化」
2009年11月 15日	国際研究集会打合せ
2010年 5月 14日	多田伊織「平城京の『南』」
2010年 5月 15日	報告集出版打ち合わせ
2010年 7月 9日	報告集出版打ち合わせ
2011年 2月 4日	町田香「図面から見た都市の土地利用—熊本藩細川家戸越下屋敷「戸越御屋敷惣御参図」—」 白幡洋三郎「都城・都市・都会」
2011年 2月 5日	報告集出版打ち合わせ

109 18世紀日本の文化状況と国際環境

●研究域
第4研究域 文化関係(旧交圏Ⅱ)
●共同研究期間
2007(平成19)年4月～2010(平成22)年3月
●研究の概要
18世紀は、世界史的にみても重要な時期である。西欧社会では蒸気機関の発明と産業革命の展開で近代資本主義システムが勃興し、政治の世界では自然法理論と啓蒙主義の盛行が市民革命と近代社会を形成した。
東アジアにおいても、中国では清朝の三大皇帝による安定的治世と、一連の国家的規模による典籍編纂事業、地誌編纂事業により文運は隆盛をきわめていた。李氏朝鮮においても朱子学が全盛時代を迎えており、儒教文化が両班官僚によって最も純粋なかたちで展開されていた。
日本もまた、100年を超える持続的平和のなかで、社会のさまざまな局面において独自性に充ち満ちた文化的発展をみせていた。
社会経済活動の分野では、全国規模での商品生産・流通が展開されるとともに、中央市場である大坂では世界に先駆けるかたちで証券市場、先物取引のシステムが形成され、経済活動の飛躍的發展をもたらしていた。政治の分野では公共性理念の顕著な進化がみられ、一方では行政的統治システムの精緻な構築と、他方では「国家・人民のための君主」という国王機関説的な政治理論が普及しつつあった。学問の世界では、儒者の荻生徂徠が文献学的実証主義の方法論を確立することによって、以後の学術的諸分野における近代的・科学的な思惟の成長の基礎を形成した。
また、徳川吉宗の享保改革において推進された一連の国家プロジェクト――薬種国産化政策、全国物産総合調査、全国的人口調査etc.――は、物産開発のための経済学、自然観察を精緻化する博物学の発達を促すとともに、政治形態としての統一的国家を志向するものとなっていた。このほかに、文学・芸術の分野、文楽・歌舞伎といった舞台芸術の分野も含めて、日本の18世紀は豪華絢爛たる文化的内容を誇っている。
そこで、本研究では、こうした18世紀日本の文化状況はいかにして形成されたか、それらは東アジア世界、また西洋世界まで含めたグローバルな環境の下で、どのような影響を受けつつ、また独自の展開を示していたのか、さらには、欧米社会以外では、なぜ日本が19世紀において独自に近代化を達成しえたのか、これらの諸問題について総合的に検討した。
●研究代表者
笠谷和比古(日文研教授、歴史学(日本近世史・武家社会論))
●幹事
フレデリック・クレインス(日文研准教授、文献学・日欧交流史・科学史)
●班員
新井業穂子(元日文研准教授、情報通信工学)
伊藤奈保子(広島大学大学院文学研究科准教授、日本工芸史)
岩下哲典(明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部教授、日本文化・世界遺産研究)
魚住孝至(国際武道大学体育学部教授、日本思想・実存思想・身体文化)
落合恵美子(京都大学大学院文学研究科教授、社会学)
加藤善朗(京都西山短期大学教授、仏教美術)
川勝平太(静岡文化芸術大学長、経済学)
郡司健(大阪学院大学企業情報学部教授、軍事学)
小林龍彦(前橋工科大学大学院工学研究科教授、数学史・科学史)
小林善帆(徳川美術館非常勤研究員、華道史)
佐伯順子(同志社大学社会学部教授、比較文化)
佐藤次高(早稲田大学文学学術院教授、中世アラブ社会史研究)
高橋博巳(金城学院大学文学部教授、歴史学)

武井協三(国文学研究資料館文学形成研究系教授、国文学演劇学)
竹市明弘(京都大学名誉教授、哲学)
武内恵美子(秋田大学教育文化学部准教授、音楽学(日本音楽史))
竹村英二(国士舘大学21世紀アジア学部教授、経営理念史・日本思想史)
谷井俊仁(三重大学人文学部教授、東洋史)
谷口昭(名城大学法学部教授、法制史)
辻垣晃一(京都府立東舞鶴高等学校教諭、地理学)
芳賀徹(東京大学名誉教授、比較文学・比較文化)
長谷川成一(弘前大学人文学部教授、日本近世史)
林淳(愛知学院大学文学部教授、宗教学・日本宗教史)
原道生(元明治大学教授、日本文学)
平井晶子(神戸大学大学院人文学研究科准教授、近世家族史)
平石直昭(帝京大学文学部教授、日本政治思想史)
平木實(京都府立大学文学部非常勤講師、朝鮮史)
藤實久美子(ノートルダム清心女子大学文学部准教授、歴史学)
ヘルベルト・ブルチョウ(城西国際大学人文学部教授)
前田勉(愛知教育大学教育学部教授、日本思想史)
真栄平房昭(神戸女学院大学文学部教授、日本近世史・東アジア国際交流史)
松田清(京都大学大学院人間・環境学研究科教授、日本洋学史・日欧知識交流史)
松田泰代(京都大学経済研究所専門職員、図書館学)
松山壽一(大阪学院大学経営学部教授、西洋哲学・科学史)
水田かや乃(園田学園女子大学近松研究所研究員、近世演劇論)
宮崎修多(成城大学文芸学部教授、国文学・日本史)
森田登代子(桃山学院大学文学部非常勤講師、近世庶民文化史)
横田冬彦(京都橋大学文学部教授、日本近世史)
横谷一子(大阪医療福祉専門学校非常勤講師、歴史学)
脇田修(大阪歴史博物館長、日本近世史)
和田光俊(科学技術振興機構文献情報部資料書誌課長、近世日本科学思想史)
稲賀繁美(日文研教授、比較文学・比較文化・文化交流史)
上村敏文(日文研客員准教授／ルーテル学院大学准教授、宗教学)
上垣外憲一(日文研客員教授／大手前大学総合文化学部教授、比較文化)
姜鶯燕(日文研技術補佐員)
佐野真由子(日文研客員准教授／静岡文化芸術大学文化政策学部准教授、文化交流史・外交史)
白幡洋三郎(日文研教授、造園学・産業技術史)
早川開多(日文研教授、美術史学・文化史学)
パトリシア・フィスター(日文研教授、日本美術史)
平松隆円(日文研機関研究員、化粧心理学・風俗史)
山田奨治(日文研准教授、情報学)
●成果物
笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』(思文閣出版、2011年8月)
●研究発表
2007年 4月 6日 笠谷和比古「18世紀日本をめぐる研究課題とその意義」
2007年 4月 7日 全体討論
2007年 6月22日 松田清「天明期の通詞蘭学」 栗山茂久「現代日本にひそむ18世紀の身体」
2007年 6月23日 脇田修「近世中期 住友家の経営」 ヘルベルト・ブルチョウ「18世紀後半の旅日記は我々に何を教えてくれるか」
2007年 8月25日 松山壽一「科学と形而上学の合体と離反―ニュートン力学の場合―」 平木實「18世紀朝鮮の実学の概念について」 谷口昭「18世紀の法文化―法化社会の到来(先例から判例集・法典へ)―」
2007年10月26日 林淳「幕府天文方と陰陽道」

	芳賀徹「18世紀日本におけるmodern mind (近代的意識)の発動」 長谷川成一「世界自然遺産・白神(しらかみ)山地の18世紀」
2007年10月27日	横田冬彦「18世紀日本における民衆教育と書物」 上垣外憲一「18世紀フランス・日本の文化相対主義：比較思想の観点から」
2007年12月 7日	森田登代子「18世紀の天皇即位と大嘗会」 平石直昭「江戸後期における徂徠学の影響」
2007年12月 8日	魚住孝至「18世紀における武道文化の展開」 岩下哲典「18世紀の海外情報と蘭学者」
2008年 3月 8日	武内恵美子「近世日本における雅楽と楽の展開」 前田勉「18世紀日本の読書空間」 和田光俊「18世紀日本における天文学」
2008年 4月26日	フレデリック・クレインス「18世紀における西洋の医学と日本の医学―医学者たちによる『実証』の解釈―」 真栄平房昭「近世日本の海外情報と琉球」 松山壽一「安藤昌益とシェリング―『医』の思想をめぐって―」
2008年 6月27日	小林善帆「18世紀のいけばな―『雨中の伽』を端緒として―」 横山輝樹「江戸幕府武芸奨励策と昇進制度―徳川吉宗の事例を中心に―」
2008年 6月28日	芳賀徹「蕪村と秋成―新しい感受性の生成―」 武井協三「初期の歌舞伎と沖縄の組踊」 藤實久美子「メディア世界の秩序化と逸脱―その1 享保の書籍統制令とその影響―」
2008年 8月22日	佐伯順子「忠臣蔵におけるホモ・ソーシャル／ホモ・セクシュアル―その近代への継承―」 長谷川成一「18世紀における新興商人の活動の軌跡―津軽領・足羽次郎三郎の活躍と凋落―」
2008年 8月23日	平石直昭「荻生徂徠の『政談』と『太平策』」 上垣外憲一「富士講と吉宗」 森田登代子「歌舞伎衣装における海外情報の受容―『馬麩つき四天』『小忌衣』『蝦夷線』『厚司』から」
2008年10月24日	平木實「18世紀朝鮮の儒者がみた日本の儒学―朝鮮時代の文化史理解の一環として―」 谷口昭「18世紀日本の法文化―法化社会の熟成―」
2008年10月25日	和田光俊「日本における西洋天文学の受容―『天経或問』の受容をめぐって―」 宮田純「本多利明の経済思想―寛政10年成立『西域物語』を中心として―」 ヘルベルト・ブルチョウ「古川古松軒と啓蒙」
2008年12月 5日	前田勉「国学と蘭学の成立」 脇田修「木村兼霞堂」
2008年12月 6日	佐野真由子「米国使節江戸出府論争と朝鮮通信使―筒井政憲の場合―」
2009年 2月27日	平井晶子「比較史的視点からみた日本の家族―18世紀の農村からみた有賀・喜多野論争―」 宮崎修多「江戸時代中期漢詩文における擬古主義―古文辞学再考―」
2009年 2月28日	高橋博巳「江戸が受容した西洋―江漢の阿蘭茶臼(コーヒー・ミル)と山陽の蘭窓(ワイングラス)―」 真栄平房昭「琉球の朝貢貿易と舶載品について」 辻垣晃一「森幸安の地図作製活動―享保から宝暦まで―」
2009年 4月 3日	笠谷和比古「18世紀の藩政改革と昇進制度―身分主義と能力主義の相剋―」 郡司健「江戸初期・中期における長州藩の大砲技術」

2009年 4月 4日	魚住孝至「18世紀における武芸と武士道」
2009年 6月19日	唐権「曹寅『日本灯詞』について」 フレデリック・クレインス「18世紀における西洋生理学の受容」
2009年 6月20日	小林龍彦「近世日本数学史」 脇田修「住友の歴史」 藤實久美子「メディア世界の秩序化と逸脱(その2 江戸書物問屋仲間の組織・運営)」
2009年 8月20日	横田冬彦「元禄享保期における遺言と書物知」 ヘルベルト・ブルチョウ「18世紀紀行に描かれているアイヌ民俗―異民俗描写に見られる啓蒙―」
2009年 8月21日	金牟湊「日本の家印・屋号について―新潟県村上市小俣村落の事例を中心に―」 原道生「近松の作品に見られる『対異国』」 長谷川成一「出羽国名勝『象潟』の景観保存―18世紀象潟の景観をめぐる諸問題―」
2009年10月16日	武内恵美子「熊澤蕃山と楽―『雅楽解』とその時代背景について―」 谷口昭「延享4年の三方領知替」
2009年10月17日	平木實「18世紀朝鮮における『虎』害の状況とその対策について(1)」 佐伯順子「男色江戸文化―西鶴を中心に―」 岩下哲典「近世日本における西洋的国际慣習の受容―白旗をめぐる諸問題―」
2009年12月 4日	森田登代子「18世紀における天皇即位と大嘗祭(2)」 竹村英二「訓読と翻訳―太宰春臺『倭讀要領』を中心に―18世紀日本における言語習得と思想」
2009年12月 5日	前田勉「『采覧異言』と『訂正増訳采覧異言』との連続・非連続」 和田光俊「近世の中国、朝鮮、日本における天文と暦―西洋天文学の受容をめぐって―」 芳賀徹「文学としての『蘭学事始』」
2010年 3月 7日	岩下哲典「18世紀末～19世紀初頭における英露の接近と日本―英・露船の来航と対応する日本の領主階層と日本社会・文化の変容―」 魚住孝至「18世紀における武芸の再編成とその影響」 小林龍彦「近世日本の数学記号と式」 高橋博巳「東アジアの肥沃半月弧：浪華・ソウル・北京(・ハノイ)」 武内恵美子「熊沢蕃山と楽の思想」 平井晶子「比較史的視点から見た日本の家族―東北農村を中心に―」
2010年 3月 8日	ヘルベルト・ブルチョウ「18th Century Japanese Travel Writing」 森田登代子「18世紀の天皇即位と大嘗祭」 佐野真由子「幕臣筒井政憲における徳川の外交―米国総領事出府問題の対応を中心に―」 笠谷和比古「18世紀日本をめぐる研究課題とその意義」

110 東アジアにおける知的システムの近代的再編成	
●研究域	
第4研究域 文化関係（新交圏）	
●共同研究期間	
2007（平成19）年4月～2010（平成22）年3月	
●研究の概要	
東アジアにおける今日の知のシステムは、19世紀半ばから20世紀を通じて、西洋文化を受け入れ、伝統的なシステムを再編することによって、地域的な違いをもちつつ独自なものを形成してきた。とりわけ、日本で形づくられたシステムが、台湾、朝鮮、中国大陸に伝播し、展開していく様子が観察される。しかし、このことは、今日までよく自覚されてこなかった。	
一例として、宗教の位置を考えてみよう。19世紀のヨーロッパの標準では、キリスト教と人文社会科学および自然科学とは、基本的に別領域に属する知的システムがつくられていたが、日本においては、国立大学文学部の哲学科内に宗教学科を置いた。この編成は東アジアに共有され、今日にいたっている。また、19世紀半ばのイギリスにおいて成立した「工学」を、いち早く組み込んだことも、日本のアカデミズムの特殊性のひとつだった。	
このような編成上の大きな違いに無頓着のまま、知の「近代化」の実態に迫ることはできない。受け入れた「西洋」文化の要素と、それを受けとめた「伝統」的要素との双方を検討し、近代化を推進した価値観とをあわせて、全体の知的システムの編成替えが、どのように進んでいったかを再検討することが不可欠の課題である。	
さらに、工業化にともなう社会問題の発生、都市の膨張、森林の大規模伐採による洪水の多発、公害の発生などなど、近代化の弊害を乗りこえようとするさまざまな営みも、20世紀を通じて行われてきた。それらが、どのような結果を生み、今日にいたっているかの再検討も不可欠である。	
これらの課題に答え、今日、ありうべき知的システムの構築に資すること、その作業を世界に開かれたかたちで展開することをめざした。	
●研究代表者	
鈴木貞美（日文研教授、日本文化思想史）	
●幹事	
劉建輝（日文研准教授、東アジア文化交流史）	
●班員	
浅岡邦雄（中京大学文学部准教授、読書空間論）	
阿毛久芳（都留文科大学文学部教授、近現代史）	
荒川清秀（愛知大学国際コミュニケーション学部教授、中国語学）	
荒木正純（白百合女子大学文学部教授、イギリス文学）	
有馬学（九州大学名誉教授、近現代史）	
池内輝雄（國學院大學文学部教授、日本近現代文学）	
磯部敦（中央大学非常勤講師、明治期出版史）	
井上健（東京大学大学院総合文化研究科教授、文学理論・翻訳）	
今村忠純（大妻女子大学比較文化学部教授、比較文化学）	
岩月純一（東京大学大学院総合文化研究科准教授、ベトナム言語政策）	
王曉葵（愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員、日中比較文化史）	
岡田建志（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授、ベトナム史）	
梶山雅史（岐阜女子大学文化創造学部教授、教育学・日本教育史）	
金子務（大阪府立大学名誉教授、科学史）	
川島真（東京大学大学院総合文化研究科准教授、日中外交史）	
川尻文彦（帝塚山学院大学人間科学部准教授、日中比較歴史）	
衣笠正晃（法政大学国際文化学部教授、日本文学研究史）	
木村直恵（学習院女子大学国際文化交流学部准教授、日本近代史・文化史）	

ロバート・キャンベル（東京大学大学院総合文化研究科教授、東洋言語学）
小谷野敦（評論家、比較文学）
権藤愛順（甲南大学文学部非常勤講師、日本近代文学）
酒井敏（中京大学文学部教授、明治期メディア史）
佐藤一樹（二松学舎大学国際政治経済学部教授、近代日中文化・思想史）
佐藤 パーバラ（成蹊大学文学部特別任用教授、女性史）
鈴木敏昭（金沢大学非常勤講師、応用言語学・翻訳論）
須藤遙子（愛知県立芸術大学非常勤講師、メディア史・映画史）
全美星（同志社大学言語文化教育センター嘱託講師、日本近代文学）
孫安石（神奈川大学外国語学部教授、東アジア・メディア研究）
孫江（静岡文化芸術大学文化政策学部教授、宗教社会学・比較思想史・中国政治論）
高柳信夫（学習院大学外国語教育研究センター教授、中国近代思想）
竹村民郎（元大阪産業大学教授、経済史）
竹本寛秋（金沢大学大学教育開発・支援センター特任教授、日本文学）
田中比呂志（東京学芸大学教育学部教授、東洋史）
陳継東（武蔵野大学人間関係学部准教授、宗教学）
陳捷（国文学研究資料館文学資源研究科准教授、日中比較文化）
陳力衛（成城大学経済学部教授、日本語史・日中対照言語学）
津本信博（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）
寺澤行忠（慶應義塾大学名誉教授、日本中世文学）
十重田裕一（早稲田大学文学学術院教授、近現代文学・映画）
中川成美（立命館大学文学部教授、明治期文学）
中嶋隆（早稲田大学教育・総合科学学術院教授、徳川期文学）
橋本行洋（花園大学文学部教授、言語学）
林正子（岐阜大学地域科学部教授、日本近代文学）
楢垣樹里（早稲田大学国際教養学術院准教授、仏語仏文学）
兵藤裕己（学習院大学文学部教授、語り物）
平野健一郎（人間文化研究機構地域研究推進センター長、国際交流史）
福井純子（立命館大学非常勤講師、芸能史）
星野靖二（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所助教、宗教学）
堀まどか（元総合研究大学院大学院生、比較文学・文芸交流史）
増田周子（関西大学文学部教授、随筆）
松田清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、洋学史・科学技術史）
真鍋昌賢（大阪大学大学院文学研究科助教、大衆演芸）
村田雄二郎（東京大学大学院総合文化研究科教授、中国哲学・東洋史）
目野由希（国士舘大学文学部講師、日本近代文学）
リース・モートン（東京工業大学外国語研究教育センター教授、近現代文学）
茂木敏夫（東京女子大学現代教養学部教授、国際関係論）
安田敏朗（一橋大学大学院言語社会研究科准教授、近代日本言語史）
安野一之（日文研技術補佐員、国文学研究）
八耳俊文（青山学院女子短期大学教授、科学史）
山本美紀（環太平洋大学講師、芸能文化）
吉岡亮（苫小牧工業高等専門学校准教授、文学（演劇））
依岡隆児（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授、比較文化学）
李梁（弘前大学人文学部准教授、中国近代思想）
林少陽（東京大学教養学部特任准教授、表象文化）
新井菜穂子（日文研准教授、情報通信）
磯前順一（日文研准教授、宗教学）
稲賀繁美（日文研教授、美術史・比較文化）
魏大海（日文研国際交流基金フェロー／中国社会科学院国文学研究所研究員、日本文学）
テモテ・カーン（日文研准教授、比較文化論）
郭南燕（日文研准教授、日本近代文学・日中文化交流）
上垣外恵一（日文研客員教授／大手前大学総合文化学部教授、日韓比較文化）
フレデリック・クレインス（日文研准教授、科学史）

小松和彦（日文研教授、文化人類学）
ジェームズ・バスキンド（日文研プロジェクト研究員、宗教学）
マルクス・リュッターマン（日文研准教授、日本中世社会史）
カリン・グニラ・リンドバーク＝ワダ（日文研外国人研究員／ストックホルム大学東洋言語日本研究学科教授、日本文学）
陸留弟（日文研外国人研究員／華東師範大学外国語学院教授、日本語学・日本文化論）
[海外共同研究員]
章清（復旦大学歴史学系教授、中国近代史）
韓東育（東北師範大学歴史文化学院教授、文化交流史）
馮天瑜（武漢大学中国伝統文化研究中心教授、中国史）
黄克武（台湾中央研究院近代史研究所教授、中国近代史）
麻国慶（中山大學人類学系教授、人類学）
王中忱（清華大学人文社会科学院教授、比較文学）
●成果物
〈共同研究報告書〉『日本研究』第40集（日文研、2009年11月）、第42集（日文研、2010年9月）、第43集（日文研、2011年3月）
●研究発表
2007年 5月 12日 孫江「『近代東アジアにおける知の空間』研究会総括と新研究会への提言」 鈴木貞美「東アジアにおける知的システムの近代的再編成―その構想と実践―」
2007年 5月 13日 分科会 金炳辰「『共益貸本社書籍目録』『近世著訳書門―政治書』整理進行状況報告」
2007年 7月 14日 磯前順一「近代日本の宗教言説とその布置―概念史のダイナミックスに向けて―」 孫江「Religion・爾釐利量・宗教―近代中国における『宗教』言説の系譜―」
2007年 7月 15日 分科会『共益貸本社書籍目録』研究会
2007年 9月 15日 大森恭子「『モダニズム』と雑誌『新青年』」 鈴木貞美「『近代』、『近代主義』、『近代の超克』」
2007年 9月 16日 分科会『共益貸本社書籍目録』研究会 新井菜穂子「『自然科学』関連書」
2007年11月 17日 厳平「東アジアにおける『知』的交流とその担い手―留学生の帝国大学入学問題に着手して―」 星野靖二「近代日本における〈信仰〉の位相」
2007年11月 18日 分科会『共益貸本社書籍目録』研究会
2008年 2月 23日 陳継東「章炳麟の宗教理解」 有馬学「良き隣人？―1930～40年代日本における文化表象の中の〈朝鮮人〉―」
2008年 2月 24日 分科会『共益貸本社書籍目録』研究会
2008年 4月 19日 カリン・グニラ・リンドバーク＝ワダ「世界文学史の構想」 上垣外恵一、劉建輝「近代東アジア文学史の再構築」
2008年 4月 20日 安野一之「共益貸本社目録調査報告」
2008年 6月 21日 金炳辰「初期社会主義における進化論受容―幸徳秋水と大杉栄を軸に―」 川尻文彦「明治日本・清末中国における『功利主義』―『概念』連鎖の視点から―」
2008年 6月 22日 『共益貸本社書籍目録』研究会
2008年 9月 13日 喜多千草「イノベーションプロセスの思想的記述モデルについて」 井佐原均「自然言語処理で何が出来るか」 陳力衛「同文同種という陥罠―梁啓超の『和文漢讀法』と『言海』の関係―」
2008年 9月 14日 安野一之「明治貸本社研究報告取り纏め」
2008年11月 18日 第35回国際研究集会「東アジア近代における概念と知の再編成」
2009年 2月 28日 安野一之「明治期貸本屋カタログについて―共同研

	研究会分科会における『共益貸本社書籍目録』調査の成果報告を中心に―
	高柳信夫「中国近代における“科学”観をめぐって―厳復を中心として―」
2009年 4月 18日	橋本行洋「石山福治の中日辞典と『大漢和辞典』―19世紀～20世紀初頭の華英辞典に遡る項目例を中心とする考察―」
	澤田晴美「劇評ジャンルの文化史―近代への転換―」
2009年 4月 19日	鈴木貞美「東アジア近代の知的システムを問いなおす」
2009年 6月 27日	林正子「近代日本の〈民族精神〉による〈国民文化〉の系譜―ドイツとの比較を視座として―」 須藤遙子「『自衛隊協力映画』という新しい系譜 2005年以降の映画を中心に」 李梁「前川國男の建築から見た『モダニティー』問題―津軽・弘前の作品を中心に―」
2009年 9月 19日	王曉葵「近代中国における『民俗』概念の形成とその展開」 木村直恵「〈社会〉が生まれたとき―明治期日本における社会概念の編成―」
2009年 9月 20日	堀まどか「野口米次郎の象徴詩 民族、国家、民族主義との関係」
2009年11月 14日	劉建輝「19世紀上海―雑誌、新聞を中心に―」 増田周子「1930年代における日本文壇の民族・国民・民衆問題―雑誌『文学界』等の言説をめぐって―」
2009年11月 15日	打合せ（今後の予定と論文集刊行に向けて）
2010年 2月 27日	福井純子「演芸・芸能・遊芸」 竹本寛秋「『新体詩以後』はいかにして『日本の詩の系譜』に接合されたか―1920年代における『詩の起源』言説をめぐって―」
2010年 3月 20日	劉建輝「ロバート・モリソンと『華英・英華字典』」 鈴木貞美「『民謡』の収集をめぐって―概念史研究の立場から―」
2010年 3月 21日	衣笠正晃「国文学研究と教員検定―大正中期以降の『文検』国語科をめぐって―」

111 アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に	
●研究域	
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）	
●共同研究期間	
2007（平成19）年4月～2009（平成21）年3月	
●研究の概要	
近年のアジアにおける急速な経済発展と市民社会の成立は、日本論の問題構成を変えた。欧米と日本だけを比べる日本特殊性論を離れ、アジアの近代社会一般のなかで日本社会を論じ、欧米とアジアの両方と比較しながら近代日本を論じることが可能になった。	
本研究は、近現代日本とアジアにおける家族とジェンダーについて、上述のような観点からアプローチを試みた。ひとつの理論的な導き手とするのは、女性近代になって主婦になったという「主婦化」仮説である。これはいまや欧米や日本の家族、およびジェンダー研究の基本的な枠組となったが、アジアはそもそも多様な社会を含み、伝統的なジェンダーのあり方もさまざまである。「主婦化」仮説はアジアでも妥当するだろうか。また、現代のアジアは急速な近代化を経験すると同時にグローバル化にも曝されている	

る。グローバル化は、アジアの家族とジェンダーの変容に、欧米や日本が近代化を経験したときとは異なる条件を与えているのだろうか。

本研究では、歴史的には近代史の全体、地域的には少なくともインド以東のアジアを対象とする広い視野の下に、社会学、歴史学、文学、人類学、教育学などの分野の研究者による学際的研究をすすめた。

取り扱ったトピックスは多岐にわたった。歴史的变化については欧米の近代家族イデオロギーのアジア各地での土着化、「新女性」の誕生、日本で再構築された近代的女性観である良妻賢母主義のアジアへの伝播、家事労働者が果たした役割などを、アジアの各地について比較検討した。（公募研究）

●研究代表者
落合恵美子（日文研客員教授／京都大学大学院文学研究科教授、社会学）

●幹事
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）

●班員
安里和晃（京都大学大学院文学研究科特定准教授、経済学）
粟屋利江（東京外国語大学外国語学部教授、歴史学）
石井正子（大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授、社会学）
石田あゆう（桃山学院大学社会学部講師、社会学）
上野加代子（徳島大学総合科学部教授、社会学）
奥井亜紗子（立命館大学国際文化学部日本学術振興会特別研究員、家族社会学）
押川文子（京都大学地域研究統合情報センター教授、歴史学）
嘉本伊都子（京都女子大学現代社会学部准教授、社会学）
金貞任（東京福祉大学准教授、家族社会学）
小林和美（大阪教育大学教育学部准教授、社会学）
小山静子（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、教育学）
施利平（明治大学情報コミュニケーション学部准教授、家族社会学）
鈴木伸枝（千葉大学文学部教授、文化人類学）
瀬地山角（東京大学大学院総合文化研究科准教授、社会学）
タンタン・アウン（名古屋大学大学院経済学研究科研究員、社会学）
長坂格（新潟国際情報大学情報文化学部准教授、文化人類学）
中谷文美（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授、人類学）
朴宣美（筑波大学大学院人文社会科学研究科講師、歴史学）
橋本泰子（四国学院大学社会学部教授、国際学）
姫岡とし子（筑波大学大学院人文社会科学研究科教授、歴史学）
藤田道代（大手前大学現代社会学部教授、社会学）
宮坂靖子（奈良大学社会学部教授、社会学）
ミン・サン（愛知学院大学総合政策研究科研究員、総合政策学）
大和礼子（関西大学社会学部教授、社会学）
山根真理（愛知教育大学教育学部教授、教育学）
山本理子（京都大学大学院文学研究科博士課程、社会学）
井波律子（日文研教授、中国文学）
パトリシア・フィスター（日文研教授、日本美術史）
劉建輝（日文研准教授、日中比較文学・比較文化）

●成果物
落合恵美子／赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』（京都大学学術出版会、2012年2月）

●研究発表
2007年 5月 11日 姫岡とし子、山本理子「『アジアの家族とジェンダー』（勸草書房）を読む」
タンタン・アウン、橋本泰子「タイにおけるミャンマー移民」
2007年 5月 12日 押川文子、粟屋利江、中谷文美、落合恵美子、橋本泰子「『インド調査報告』―『主婦』の仕事・『母』の仕事―」
上野加代子「シンガポールの外国人家事労働者」
2007年 9月 28日 山根真理「韓国におけるライフコースの変化―2000年代に実現した2つの調査プロジェクトを通して―」
嘉本伊都子「国際結婚と『主婦化』 ―近代化とグロー

バル化の時代に―」
藤田道代「台湾調査報告」
橋本泰子、タンタン・アウン、上野加代子「タイミャンマー移民調査報告」
山根真理、押川文子、落合恵美子「ハルビン調査報告」
2007年 9月 29日 小林和美「韓国における『早期留学』の現状」
中谷文美、押川文子、粟屋利江、姫岡とし子、落合恵美子「インドネシア調査報告」
2008年 1月 26日 上野加代子「シンガポールの外国人家事労働者調査から」
長坂格「フィリピンからの国際移住における家族ネットワーク―出身地社会のフィールドワークから―」
鈴木伸枝「日比結婚―クロス・ボーダーの諸相―」
2008年 1月 27日 瀬地山角「労働力再生産システムの比較社会学―東アジアの少子化・女性労働・高齢者労働―」
2008年 4月 25日 ミン・サン “Cross Border Migration From Myanmar To Thailand: Problems and Prospects”
石井正子「フィリピンの女性労働政策―『海外労働の女性化』があたえる影響について―」
2008年 4月 26日 安里和晃「介護従事者として統合される移住労働者と結婚移民―アジアNIEsの事例から―」
施利平「戦後日本の親子・親族関係の持続と変化―全国家族調査（NFRJ-S01）を用いた計量分析による双系化説の検討―」
金貞任「日韓高齢者の世帯構成」
2008年 7月 25日 朴宣美「トランスナショナルな女性労働者たち―国境を越えた女性達の労働問題―」
奥井亜紗子「農村―都市関係からみる近現代日本の家族変動―日韓比較に向けて―」
2008年 7月 26日 郝洪芳「インタビュー調査から日中国際業者婚の問題を探る ―中国人妻の結婚動機と日本人夫の問題を中心に―」
石川義孝「仲介業者からみた現代日本における国際結婚」
中谷文美「〈主婦〉の仕事、〈母〉の仕事としての家事―オランダ・インドネシアの事例から―」

112 「満州」学の整理と再編

●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅱ）

●共同研究期間
2007（平成19）年4月～2011（平成23）年3月

●研究の概要
ここ数十年、日中両国において、いわゆるコロニアリズムへの関心のもとで、かつて帝国日本最大の「植民地」だった旧「満州」に関する研究が著しく進展し、多くの成果を取めた。それは、史料の調査、整理、復刻等をはじめ、関係者の聞き取り、またそれらを材料とする考証や分析などさまざまなアプローチにわたっており、そしてその多くはイデオロギーや個人の情緒に左右されやすいという従来の「満州」研究にありがちな通弊を克服し、より客観的なものとなっている。

しかし、一方、これらの研究は、往々にしていわゆる「満州国」のそれぞれの領域内に限定して行われ、そこに、「満鉄」付属地時代を含む「植民地」全体としての「満州」を捉える視点や、その関内（中国）をはじめ、内地（日

本）、朝鮮半島、ソ連などとの関連において多角的に検証する姿勢が、いまだに十分に成立したとは決して言い難い。しかも政治や経済、軍事分野への偏重が依然として続いており、いわゆる「日人」「満人」双方の精神活動と行動原理に深く影響を与えた現地社会や文化に関する考察がまだまだ希薄であるのも事実である。そのため、多くの研究成果が生まれたにもかかわらず、「満州」をめぐる全体像がいまだに構築できておらず、ましてやその中国や日本にとっての意味づけがほとんど実現されていないといっても過言ではない。

本研究は、以上に鑑み、先の共同研究「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」の成果を踏まえつつ、可能な限り、構造的かつ多角的な視点を通じて「満州」全体像の構築をめざし、あわせてその存在が中国や日本、また朝鮮半島において果たしてきた歴史的な役割と意味を追究した。

●研究代表者
劉建輝（日文研准教授、日中比較文化）

●幹事
稲賀繁美（日文研教授、比較文学・比較文化・美術史）

●班員
テレント・アイトル（北海学園大学人文学部教授、日中蒙比較文化）
安藤潤一郎（東海大学文学部非常勤講師、宗教学）
井村哲郎（新潟大学人文社会・教育科学系フェロー、日本史）
岡田英樹（立命館大学文学部教授、中国文学）
金子務（大阪府立大学名誉教授、科学史）
川島真（東京大学大学院総合文化研究科准教授、日中外交史）
川尻文彦（帝塚山学院大学人間科学部准教授、日中比較歴史）
貴志俊彦（京都大学地域研究総合情報センター教授、中国史）
岸陽子（中国研究所所員、中国文学）
巖平（日本学術振興会外国人特別研究員、日中教育比較史）
小林善帆（京都女子大学非常勤講師、比較美術史）
島本浣（京都精華大学芸術学部教授、比較美術史）
姜克實（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授、日本史・日中交流史）
戦晓梅（東京工業大学外国語研究教育センター准教授、日中比較文化・美術史）
孫江（静岡文化芸術大学文化政策学部教授、中国近代史・比較社会学）
竹村民郎（元大阪産業大学教授、産業社会史・文化史）
単援朝（崇城大学工学部教授、日中比較文学）
塚瀬進（長野大学環境ツーリズム学部教授、中国経済史）
西原和海（文芸評論家、日本文学）
西村成雄（放送大学教授、日中比較歴史）
バイカル（桜美林大学准教授、日中蒙比較宗教）
平石淑子（大正大学文学部教授、中国近代文学）
平野健一郎（アジア歴史資料センター長、日中比較歴史）
深尾葉子（大阪大学大学院経済学研究科准教授、日中比較経済史）
松宮貴之（佛教大学文学部非常勤講師、書道交流史）
南誠（国立民族学博物館日本学術振興会外国人特別研究員、日中比較歴史）
山田敬三（孫中山記念会参与・理事、中国文学）
李相哲（龍谷大学社会学部教授、社会学）
劉岸偉（東京工業大学外国語研究教育センター教授、日中比較文学）
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）
牛村圭（日文研教授、思想史・文明論）
尾形洋一（日文研特任助教、日中関係史）
小都晶子（日文研機関研究員、中国近代史）
上垣外憲一（日文研客員教授／大手前大学総合文化学部教授、日韓比較文化）
韓東育（日文研外国人研究員／東北師範大学歴史文化学院教授、東アジア思想史）
黄自進（日文研外国人研究員／中央研究院近代史研究所研究員、日中比較歴史）

小松和彦（日文研教授、文化人類学・宗教学）
鈴木貞美（日文研教授、日本文化）
千田稔（日文研教授、歴史地理学）
松田利彦（日文研准教授、近代日朝関係史）
[海外共同研究員]
王中忱（清華大学人文学院教授、日中比較文学）

●研究発表
2007年 7月 27日 劉建輝「『芸文』創刊号について」
鈴木貞美「『芸文』臨時増刊号、第3号について」
単援朝「『芸文』第4号について」
西原和海「『芸文』第5号について」
戦晓梅「『芸文』第7号について」
2007年12月 15日 黄自進「満州事変の再考察：日中関係史における位置づけ」
汪宏倫「国民国家、グローバリゼーションと近代性：制度分析から歴史感情へ」
2008年 3月 29日 総合討論「『満州学辞典』作成の可能性について」
2008年 5月 31日 南誠「帝国の崩壊と『中国残留日本人』の想像」
尾形洋一「『奉天三十年』完訳・漢訳版について」
2008年 8月 9日 劉建輝「1943年の『芸文』」
井村哲郎「アジア太平洋戦争下の満鉄調査組織」
2008年12月 20日 王中忱「19世紀前半の中国東北地方における民族移動と地域社会の再編―『雙城堡屯田記略』を手掛かりとして―」
劉建輝「帝国の交錯―2008年夏研究旅行所感―」
2009年 3月 21日 戦晓梅「『満洲』における民藝運動の内実―『満洲民藝調査報告展覧会』をめぐる―」
稲賀繁美「大連勸業博覧会（1925）から皇紀2600年記念・東亜教育会議（1940）まで―或る教育者のライフ・ヒストリーに沿って：竹村民郎論文のコメントに代えて―」
2009年 5月 22日 小都晶子「『満洲国』の日本人移民政策と中国東北地域社会の変容―『三江省』樺川県の事例を中心に―」
西村成雄「重慶政治空間と『東北要因』」
2009年 5月 23日 総合討論
2009年 7月 25日 深尾葉子「『満洲の成立―森林の消尽と近代空間の形成―』出版にむけて―社会生態史学の試み―」
井村哲郎「『支那慣行調査』経緯」
2009年10月 17日 小林善帆「植民地満州といけばな・茶の湯―台湾・朝鮮・サイパン・樺太の事例をふまえて―」
岡田英樹「1940年代の古丁」
2009年12月 19日 松宮貴之「泰東書道院の満州外交―鄭孝胥と清浦奎吾の遣り取りを中心として―」
バイカル「満州とモンゴル人留学生」
2010年 3月 5日 劉建輝「近代東アジア歴史をめぐる国際、学際的研究の意味―趣旨説明をかねて―」
王希亮「中国東北14年淪陷史研究の若干の問題について」
高曉燕「東北淪陷史実証研究」
金穎「近代東北地方政府抵制日本対水田農業惨透的対策研究：以東北地区馆藏相关资料為中心」
胡玉海「張作霖出身問題考辨」
劉建輝「『満州学事典』の編集・刊行について」
田中宏巳「旧陸海軍資料の行方」
2010年 3月 6日 堀和生、大月健「京都大学農学部図書室所蔵『旧植民地関係資料』」
岡村敬二「関西所在図書館における戦前期東アジア関係資料」
谷合佳代子「大阪産業労働資料館の活動―小規模資料室の一例―」

	劉建輝、小都晶子「日文研日中プロジェクトと中国関係資料」 平井孝典「小樽商科大学の事例―収集資料を活用するための動的『資料集』―」 阿部安成、江竜美子「滋賀大学経済経営研究所の事例―彦根高等商業学校収集資料の画像公開―」 泉沢久美子「アジア経済研究所デジタル・アーカイブ『近現代アジアのなかの日本』」 田村憲一、大沢武彦「アジア歴史資料センターの現状と今後の次期システムについて」
2010年 5月 30日	松村茂樹「日本における呉昌碩の受容」 戦畹梅「『満洲グラフ』に投影された『満洲美術』の諸相」 西原和海「満洲における弘報メディア・『満洲グラフ』への視線」
2010年 5月 31日	劉建輝「可視化された『夢』―『満洲グラフ』にみるモダン満洲の実像と虚像―」 呂元明「『満洲事典』の作成について」
2010年10月24日	武藤秀太郎「協同主義と戦後民主化―初代日本芸術院長・高橋誠一郎を中心に―」 稲賀繁美「白頭山・承德・モノハン―偽『満洲国』の文化象徴とその表像―」
2010年10月25日	劉建輝「承德占領とその後の熱河ブームについて」 伊藤奈保子「承徳の寺院にみる宗教混淆―外八廟を中心に―」 李偉「避暑山荘・承徳の清朝離宮を巡って」
2011年 3月 4日	劉建輝「満洲」学の整理と再編：共同研究班総括【第1セッション 歴史学からのアプローチⅠ】 司会：劉建輝 コメンテーター：西村成雄、姜克實 呉重慶「中国鄉村空心化的反向運動」 焦潤明「1910～1911年東北大鼠疫与国際防疫合作」 王中忱「『禹貢』派の『疆域』観と日本の『満蒙』言説―顧頡剛と馮家昇を中心にして―」 胡玉海「近代日本在東北文化機構的特点」 黄自進「国際公議と国際連盟の脱退」 田中益三「大連日僑学校と清岡卓行」
2011年 3月 5日	【第2セッション 文学からのアプローチ】 司会：山田敬三 コメンテーター：呉京煥、単援朝、劉春英 浦田義和「神保光太郎とアジア」 平石淑子「1930年代哈爾濱における左翼文芸活動について―金劍嘯の活動を中心に―」 竹内清己「保田与重郎と堀辰雄における〈古典〉と〈アジア〉―『日本浪漫派』と『四季』の生き合いから―」 【第3セッション 社会・人類学からのアプローチ】 司会：孫江 コメンテーター：鈴木貞美、安富歩、安藤潤一郎 永井リサ「20世紀初頭における満洲社会と馬車」 韓狄「關於近代達斡爾族の本民族史―學術史視野中的族源探討―」 麻田慶「『満洲』民俗学の成立について」 王明珂「辺縁と辺界研究：以中国西南辺疆為例」 蘭信三「課題としての満洲―社会学は満洲にどう迫れるか―」
2011年 3月 6日	【第4セッション 歴史学からのアプローチⅡ】 司会：井村哲郎 コメンテーター：平野健一郎、王鉄軍、李樺 孫昌武「中国古代北方民族与佛教―文化交流与融合―」

合一」 松重充浩「新たな『満蒙』資料空間の構築―日本大学文理学部アジア歴史資料デジタルアーカイブの試み―」 塚瀬進「マンチュリアの社会変容と地域秩序―明代から国共内戦期にかけての試論的な展望―」 【第5セッション 「満洲事典」作成について】 司会：劉建輝 コメンテーター：西原和海、酒井順一郎、葉彤 川島真「戦前期の『満洲事典』の比較研究」 呂元明「満洲事典の項目について」
--

113 民謡研究の新しい方向

●研究域
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）
●共同研究期間
2007（平成19）年4月～2011（平成23）年3月

●研究の概要
昨今の民謡研究の対象は、かつての詞章の収集や旋律型の分類から、観念や言説、正統性イデオロギーや保存団体の成り立ち、テクノロジーや学問の介入、産業化や政治へと移ってきている。そして、民俗学、民族（民俗）音楽だけでなく、文化史、文学史、社会学、文化政治学などの諸学間が民謡に関するさまざまな局面を解明している。

本研究は、従来、民謡に関しては日本についての研究とそれ以外の研究とが向かい合わぬまま進められてきたが、両者をつなぐ線や面を発見し世界の音楽文化のなかでの日本の民謡を考え、日本の音楽文化に入ってきた世界の民謡を考えた。

民謡の発見と応用は、ちょうど長短音階や西洋楽器やその編成の世界標準化と同じく、19世紀西ヨーロッパが提起した音楽文化の普遍モデルの一角を占めていて、民謡を発掘したり、評価したり、作詞作曲に応用したりして、民謡を都市生活のしかるべき場所に位置づけることは、ほとんどどのこの国づくり、町づくりにも欠かせぬステップだった。

このような民謡をめぐる今では常識となっている俯瞰図を再検討するとともに、民謡概念の輸入、民謡の洗練化、民謡を自演する意味、近代化以前の土着の音楽や思想との衝突、民謡と認可されなかった民の歌…そして、民謡をインスピレーションにした都会の音楽、他文化への移動、新しい音楽語法による再解釈…などなど、民謡をめぐる刺激的な新しい方向を提示した。

●研究代表者
細川周平（日文研教授、音楽史）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、近代文学）
●班員
石橋純（東京大学大学院総合文化研究科准教授、文化人類学）
伊東信宏（大阪大学大学院文学研究科教授、民族音楽学）
井上貴子（大東文化大学国際関係学部教授、インド文化史）
大和田俊之（慶應義塾大学法学部准教授、米文学）
岡田暁生（京都大学人文科学研究所准教授、音楽学）
柿沼敏江（京都市立芸術大学音楽学部教授、音楽学）
倉田量介（東京大学教養学部非常勤講師、文化人類学）
阪井葉子（大阪学院大学非常勤講師、ドイツ文学）
島添貴美子（富山大学芸術文化学部講師、民族音楽学）
高橋美樹（高知大学教育研究部人文社会科学系准教授、民族音楽学）
滝口幸子（城西国際大学非常勤講師、民族音楽学）

竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授、民族音楽学）
武田俊輔（滋賀県立大学人間文化学部講師、社会学）
長尾洋子（和光大学表現学部准教授、社会学）
中原ゆかり（愛媛大学法文学部教授、文化人類学）
藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授、音楽学）
松村洋（共立女子大学文芸学部非常勤講師、音楽評論）
三井徹（金沢大学名誉教授、英米文学）
森博史（第一三共㈱課長、民俗音楽研究）
横井雅子（国立音楽大学音楽学部准教授、民族音楽学）
輪島裕介（国立音楽大学非常勤講師、文化人類学）
早稲田みな子（東京芸術大学音楽学部非常勤講師、民族音楽学）
片山杜秀（日文研客員准教授／慶應義塾大学法学部准教授、政治思想史）
デビッド・ヒューズ（日文研外国人研究員／ロンドン大学SOASシニアレクチャー、日本音楽）
[海外共同研究員]
林慶花（成均館大学校東アジア学術院研究教授、東アジア比較文学（詩歌））
●成果物
細川周平編著『民謡からみた世界音楽―うたの地脈を探る―』（ミネルヴァ書房、2012年3月）
●研究発表
2007年 5月 19日 細川周平「研究会の意図」 高橋美樹「沖縄音楽レコード制作における媒介者の研究―1920～70年代普久原朝喜、喜舎場永珣、竹中労の実践を通して―」 全体討議「民謡研究の経歴と今後の運営について」
2007年 7月 21日 細川周平「ジャズ民謡について」 長尾洋子「近代に棲処を得る―民謡カテゴリー形成期におけるおわら節の改変―」 三井徹「『どうして沖縄ふうなんだろう―英系民謡“Pretty Polly”のヒルビリー化―」
2007年10月 13日 森博史「アイルランド音楽（器楽）における演奏と録音の相互関係を中心に」 柿沼敏江「ローマックス父子の活動―『民謡』概念をめぐる―」 全体討議「英米民謡の研究の概観」
2008年 1月 5日 片山杜秀「日本の“クラシック音楽系作曲家”と民謡―戦時期を中心として―」 井上貴子「インドにおける『フォーク』の概念」
2008年 5月 24日 輪島裕介「戦後日本大衆音楽における『民謡』の地位―昭和30年代を中心に―」 中原ゆかり「ハワイ日系移民の〈ホレホレ節〉について」
2008年 7月 26日 倉田量介「キューバの音楽に関する『ジャンル』の形成論理：『農民音楽』から『クバトン』まで」 松村洋「〈民謡〉から流行歌へ―タイのラムウォン歌を中心に―」
2008年 9月 2日 長尾洋子「八尾おわら風の盆について」 実態調査（おわら演舞会、町流し）
2008年 9月 3日 調査（曳山展示館、おわら資料館） 実態調査（町流し、輪踊り）
2008年 9月 4日 実態調査（見送りおわら）
2008年11月 1日 大和田俊之「戦前ブルース史再考―W・C・ハンディを中心に―」 デビッド・ヒューズ「日本民謡研究を振り返って」
2009年 1月 31日 林慶花「植民地朝鮮の『民謡』言説と『郷土』の発見をめぐる」 滝口幸子「音楽創作における民族的音楽要素の取捨

	選択について―オーストリアのロマ民族の事例から―」
2009年 2月 1日	横井雅子「都市生活者のための音楽と“民謡”―19世紀ハンガリーを例に―」
2009年 4月 25日	早稲田みな子「ハワイの『福島音頭』の成立と展開―ホノルル、エヴェア、マワイの事例から―」 阪井葉子「ドイツ語圏における『フォルク』と民謡収集の歴史」
2009年 6月 20日	伊東信宏「バルトークの民謡音楽編曲―原曲特定、編曲過程、ストラヴィンスキーとの関係―」 石橋純「『ホローボ』はいかにして国民舞踊となったか―20世紀ベネズエラにおけるナショナリズムと音楽―」
2009年 6月 21日	岡田暁生「三輪眞弘『東の唄』とありえたかもしれない民謡の虚実」
2009年 9月 19日	調査：江差町文化会館、江差追分会館
2009年 9月 20日	調査：江差町文化会館、江差町郷土資料館
2009年11月 28日	藤田隆則「日本の民謡の旋律における言語規範―兼常の民謡論ほかを読む―」 武田俊輔「祝島神舞と反原発運動」 江差追分全国大会調査の報告と質疑応答
2009年11月 29日	島添貴美子「奄美シマウタの再生―定義と範囲―」
2010年 2月 6日	竹内有一「かっぱれの謎―ナンセンスの演出―」 早稲田みな子「ハワイと日本の岩国音頭―移民文化とそのルーツの変容をめぐる―」
2010年 2月 7日	総合討議
2010年 9月 25日	論集出版をめぐる全体会議
2010年12月 4日	報告書出版論文に関する全体討議 シンポジウムに関する打合せ

114 戦後政治・外交政策の検証と再定義

＊本研究会は研究班編成後に代表者が急遽他機関へ異動したため、実際には研究会の開催には至らなかった。

●研究域
第1研究域 動態研究（現代）
●共同研究期間
2008（平成20）年4月～2010（平成22）年3月

●研究の概要
本研究は、戦後日本の政治・外交の主要問題をめぐるさまざまな政策的選択肢や、実施された政策を、歴史的・国際的視野のもとで再検討・評価することが目的である。国際政治や外交史、地域研究に加え、財政政策や日本思想史などの幅広い分野の研究者が集まり、政策と政策論の批判的検討をすすめつつ、その根底にある理論的・思想的課題の抽出をめざす。そのため、具体的には、以下の6分野の検討を行う。

安全保障政策の再検討：戦後日米関係の検証と評価が中心課題となる。日米安保条約に大きく依存した戦後の安全保障体制が、日本の政治・経済・社会・文化の諸側面に及ぼした影響について検討するとともにグローバルな米軍の再編や、中国の台頭といった要素によって変容する東アジア安全保障システムの現状の把握や日本の取り得る選択肢について。

東・東南アジア政策：その戦後における推移を検討するとともに、それが東アジア・東南アジア地域の形成に及ぼした影響と寄与の度合いを検証する。「脱亜入欧」と「アジア主義」のせめぎ合う日本近代思想史の再検討も。国連政策：常任理事国入りをめぐる日本の動きの検証や、戦後を通じて果たしてきた国連への非軍事的な貢献の検証・評価。
中東政策：日本の対外政策において最も関与の度合いが低く、不得手

な分野とされているが、同時に独自の立場を確保できる領域とも期待されている。中東和平への日本の関与の歴史と現状を再検討し、今後の可能性を探る。

経済・財政政策：経済大国としての自己認識・対外イメージと、背後にある経済・財政政策との関連を検証。

教育・文化政策：文化政策の影響と文化外交の内実や効果の検証。ポピュラー・カルチャーの海外普及の推進をめざす国家の政策的関与がもたらす正負の影響など。

●研究代表者
池内恵（日文研准教授、イスラーム政治思想史）
●幹事
瀧井一博（日文研准教授、比較法史）
●班員
五百旗頭薫（東京大学社会科学研究所准教授、近代日本政治外交史）
宇野重規（東京大学社会科学研究所准教授、フランス政治思想史・政治哲学）
遠藤乾（北海道大学法学部公共政策大学院教授、政治学・EU研究）
岡本隆司（京都府立大学文学部准教授、中国近世・近代外交史）
荻部直（東京大学法学部政治学研究科教授、日本政治思想史）
川島真（東京大学総合文化研究科准教授、東アジア国際関係史・中国外交史）
黒崎輝（立教大学法学部兼任講師、国際政治史）
篠田英朗（広島大学平和科学研究センター准教授、政治学・平和構築）
鈴木一人（筑波大学人文社会科学研究所准教授、国際政治経済学・EU研究）
土居丈朗（慶應義塾大学経済学部准教授、財政学・公共経済学）
中山俊宏（津田塾大学学芸学部国際関係学科准教授、現代アメリカ政治）
間草（日本貿易振興機構アジア経済研究所中東研究グループ長、現代トルコ政治）
潘亮（筑波大学人文社会科学研究所専任講師、日本政治外交史）
細谷雄一（慶應義塾大学法学部准教授、国際関係史・外交史）
待鳥聡史（京都大学法学研究科教授、政治学・アメリカ政治）
簗原俊洋（神戸大学法学研究科教授、日本政治史・日米関係史）
宮城大蔵（政策研究大学院大学政策研究科助教授、東アジア国際関係史）
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）

115 仏教からみた前近代と近代

●研究域
第1研究域 動態研究（伝統）
●共同研究期間
2008（平成20）年4月～2012（平成24）年3月
●研究の概要
従来の仏教研究は、古代・中世が中心であった。とりわけ、中世の鎌倉新仏教を最高峰とみて、それ以降は次第に墮落していく過程とするものである。しかし、顕密体制論を経て、中世仏教が必ずしも新仏教中心ではなかったことが明らかになった。この中世と対比することで、近世や近代の仏教の重要性も再認識され、さらには仏教史を孤立したものと見なすことの限界も指摘されている。
本研究は、焦点を近世（江戸時代）に合わせて、否定的にしか見られてこなかったこの時期の仏教の実態の解明を行った。近世の仏教は、政治権力に屈服し、創造的なものをもたない「近世仏教墮落論」という見方に支配されてきたが、最近になってこうした見解は退けられつつある。
本研究では、前近代仏教の専門家と近代仏教の専門家の双方に加え、

宗教学の専門家にも参加してもらった。、そして、まずテキストの会読、メンバー相互の発表・討論とを組み合わせながら、近世仏教の流れや、他の思想・宗教との関係を明らかにし、近世仏教の理解に一定の方向性を見出していった。それを通して、より大きな課題である、古代・中世仏教が、近世を媒介にどのようにして近代へと転化するかという問題への見通しを得ようとした。

●研究代表者
末本文美士（日文研教授、仏教学・仏教史）
●幹事
井上章一（日文研教授、建築史・風俗史）
磯前順一（日文研准教授、宗教学・宗教史）
●班員
阿部仲麻呂（上智大学神学部非常勤講師、キリスト教神学）
ゲイレン・アムスタッツ（龍谷大学国際文化学部客員教授、日本宗教・日本史）
新井菜穂子（元日文研准教授、科学史）
池内恵（東京大学先端科学技術研究センター准教授、イスラム学）
シルヴィオ・ヴィータ（イタリア国立東方学研究所長、仏教学）
魚川祐司（日本学術振興会特別研究員、仏教学）
大谷栄一（佛教大学社会学部准教授、社会学・仏教史）
神田英昭（高野山大学大学院文学研究科博士後期課程、密教学）
金泰勲（立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー、日韓近代宗教史）
オリオン・クラウタウ（日本学術振興会特別研究員（PD））
田中悟（神戸大学大学院国際協力研究科助教、政治学）
陳継東（青山学院大学国際政治経済学部教授、仏教学）
中島岳志（北海道大学公共政策大学院准教授、アジア政治・近代日本政治思想史）
西村玲（（財）東方研究会研究員、日本思想史）
ジェームズ・バスキンド（九州工業大学情報工学研究院人間科学系准教授、仏教史）
藤井淳（駒澤大学仏教学部専任講師、仏教学）
藤本龍児（日本学術振興会特別研究員（PD）、宗教思想）
前川健一（元東京大学大学院医学系研究科GCOE特任研究員、仏教学）
吉永進一（舞鶴工業高等専門学校准教授）
米田真理子（神戸学院大学法学部准教授、中世文学）
稲賀繁美（日文研教授、美学）
小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学・口承文芸論）
ファム・ティ・トゥ・ザン（日文研外国人研究員／ハノイ国家大学付属人文科学大学専任講師、仏教史）
林淳（日文研客員教授／愛知学院大学文学部教授、宗教学）
山田奨治（日文研教授、情報学・文化交流史）
徳永誓子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、仏教史）
●研究発表
2008年 4月 28日 フレデリック・ジラルール「日本仏教の語彙と概念」
全員討議「日本仏教における前近代・近代と近世」
2008年 4月 29日 全員討議「今後の研究会の進め方について」
2008年 6月 21日 西村玲「『儒仏問答』を読む前に―日本近世の儒教と仏教―」
ブライアン・ルバート「寺院聖教の変遷―中世後期から近世・近代へ―」
2008年10月 17日（南山宗教文化研究所）
大谷栄一「近代日本仏教史研究は何を問わなかったのか？」
James HEISIG「英文日本哲学資料集の作成について」
2008年11月 8日 徳永誓子「『儒仏問答』研究―儒仏問答の周辺―」
林淳「近世宗教史から見た近代」
2008年12月 13日 ジェームズ・バスキンド「『儒仏問答』研究―第2章因果論を中心に（因果論と排耶書）―」

	ゲイレン・アムスタッツ「分化（differentiation）から見た浄土真宗―心理分化と内面性、長期に渡る革命、組織の機能分化、近代化の位相は変化か?―」
2009年 5月 16日	藤井淳「『儒仏問答』聖徳太子関連箇所について」
	シルヴィオ・ヴィータ「明治初期の欧州視察から見た日本仏教の近代」
2009年 7月 4日	全員発表「研究の現状と今後の計画」
	全員討議「共同研究の今後の進め方」
2009年 9月 5日	阿部仲麻呂「不干斎ハビアンの思想構造のキリスト教神学的理解―『妙貞問答』および『破提字子』の有機的関連性に関する一考察―」
	磯前順一「『固有名のもとに―多重化する近代仏教―』における論点整理」
	藤本龍児「『固有名のもとに―多重化する近代仏教―』へのコメント〈外部性〉を手がかりに」
2009年11月 7日	阿部仲麻呂「不干斎ハビアンの思想構造のキリスト教神学的理解（続）―『妙貞問答』および『破提字子』の有機関連性に関する一考察―」
	大谷栄一、田中悟「末本文美士氏が近代日本仏教史研究にもたらしたもの」
2010年 1月 9日	フレデリック・ジラルール「エミール・ギメと日本の僧侶・神主との問答―明治初期の仏教・神道―」
	前川健一「『妙貞問答』現代語訳について」
	ファム・ティ・トゥ・ザン「肉食妻帯―近世から近代への展開―」
	吉永進一「近代日本宗教における西欧秘教思想の影響―神智学と仏教を中心に―」
2010年 5月 8日	米田真理子「『妙貞問答』訳注研究（1）」
	新井菜穂子「『妙貞問答』現代語訳について」
	藤本龍児「近代社会と公共宗教：社会哲学の視点から」
	大谷栄一「『日本の近代化と仏教』の問題系を再考する」
2010年 7月 3日	西村玲「『妙貞問答』訳注研究（2）」
	前川健一「仏教史からみた『妙貞問答』」
	陳継東「中国仏教の近代化と日本―清末を中心として―」
	金泰勲「日韓併合前後の宗教状況と朝鮮仏教」
2010年 9月 18日	藤井淳「『妙貞問答』訳注研究（3）」
	前川健一「『妙貞問答』訳注研究（4）」
	朴澤直秀「近世社会と寺社制度」
	谷川譲「近代日本の学校教育と仏教―明治前期を中心として―」
2010年11月 6日	桂島宣弘「民衆宗教の死生観と近代仏教」
	池上良正「『死者供養』から見た近代仏教」
2010年11月 7日	西村玲「近世仏教におけるキリシタン批判」
	藤井淳「『妙貞問答』訳注研究（5）」
2011年 1月 8日	陳継東「明清時代におけるキリスト教宣教師の仏教批判」
	ジェームズ・バスキンド「『妙貞問答』の英訳の問題点―『禅宗の事』を中心として―」
	神田英昭「近代仏教史上における土宜法龍―主に1893～1894年における世界一周旅行を中心に―」
	中島岳志「明治期仏教者のインド体験」
	井上章一「総評・3年間の共同研究を振り返って」
2011年 5月 14日	西村玲、藤井淳、前川健一、米田真理子「『妙貞問答』答」訳注について」
	鈴木広光「国語学からみた『妙貞問答』」
	吉永進一「Thomas A. Tweedのアメリカ仏教史研究」
	林淳「ソノドグラスの近代仏教論について」
	国際研究集会について

2011年 7月 2日	西村玲、藤井淳、前川健一、米田真理子「『妙貞問答』訳注について」
	シルヴィオ・ヴィータ「世界の『妙貞問答』 ―Urs App氏の近刊書の紹介を中心に―」
	林淳、大谷栄一「David McMahan著作研究」
	末本文美士、マイカ・アワーバック「Donald Lopez, Jr. 著作研究」

116 植民地帝国日本における支配と地域社会

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）
●共同研究期間
2008（平成20）年4月～2011（平成23）年3月
●研究の概要
本研究は、先行した「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」（2004～2006年度）を継承発展しつつ、その視座を各植民地の地域社会により密着した方向に展開することを企図したものであった。
「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」において、共同研究員の関心が最も集中したのは、植民地官庁の各部門における個別具体的な官僚（あるいは官僚群）のプロフィールと政策構想という問題だった。その結果、法務・財務・土木・技術・通信・警察・教育・鉄道・宗教など多様な分野に即して、どのような官僚がいかなる政策思想をもち、それがどのように実際の政策に結びついたかについて、多くの事実を明らかにすることができた。しかし反面、官僚によって導入された政策が現地社会とどのように切り結んだのか、という問題には十分に切り込むことができなかった。このような反省から、今回の「植民地帝国日本における支配と地域社会」では、支配政策の実施過程において、現地の朝鮮人・台湾人、あるいは在住日本人などからどのような抵抗・非協力・協調などの反応が生じたのか、という局面に視点を下降させたのである。
本研究の設定している対象は、近年の植民地史研究において活発に論議されている諸理論と多くの接点をもつ。たとえば、権力による規律の内面化のような負の側面から近代を捉えようという問題意識に発し、近年の植民地史研究に影響を及ぼしている「植民地近代（Colonial Modernity）論」（鄭根植・松本武祝ら）、官僚の支配政策の実施と朝鮮地域社会の間に両者を媒介した「有志」の存在を措定しようとする「官僚―有志支配体制論―」（池秀傑ら）などは、いずれも植民地権力と現地社会の関係性に着目した議論といえることができる。しかし、本研究は特定の理論に立って歴史を跡づけようとする立場とは一線を画したい。こうしたさまざまな視角の探るべき点とはとりいれつつも、実事求是によって、特定の理論からはこぼれ落ちてしまいがちな事象をも拾い上げていくことを本研究の基本的スタンスとした。
●研究代表者
松田利彦（日文研准教授、近代日朝関係史）
●幹事
マルクス・リュッターマン（日文研准教授、日本中世社会史）
●班員
青野正明（桃山学院大学国際教養学部教授、近代朝鮮宗教史）
庵道由香（立命館大学文学部准教授、近代朝鮮政治史）
李鐘旼（中央大学総合政策学部兼任講師、韓国近代社会史）
李昇燁（京都大学人文科学研究所助教、近代朝鮮社会経済史）
板垣竜太（同志社大学社会学部准教授、近代朝鮮社会史）
梅森直之（早稲田大学政治経済学術院教授、近代日本政治思想史）
大浜郁子（琉球大学法文学部講師、近代台湾教育史）
小川原宏幸（明治大学文学部兼任講師、近代朝鮮政治史）

	金貞蘭（神戸大学大学院人文学研究科博士課程、朝鮮医療史） 胎中千鶴（日白大学外国語学部教授、台湾社会史） 崔眞善（滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士後期課程、朝鮮近代女性史） 陳宛好（京都大学大学院法学研究科博士後期課程、台湾近代法制史） 長沢一恵（奈良大学非常勤講師、近代日本外交史） 永島広紀（佐賀大学文化教育学部准教授、近代朝鮮社会思想史） 野口真広（早稲田大学アジア研究機構アジア研究所客員研究員、台湾植民地政治史） ジェームズ・バクスター（桜美林大学国際戦略本部国際交流センター教授、日本近代経済史） 春山明哲（早稲田大学台湾研究所客員上級研究員、台湾政治史） 樋口雄一（特定非営利活動法人高麗博物館長、近代朝鮮支配政策史） 広瀬貞三（福岡大学人文学部教授、近代朝鮮社会経済史） 藤永壯（大阪産業大学人間環境学部教授、近現代朝鮮社会史） 水野直樹（京都大学人文科学研究所教授、近代朝鮮政治社会史） 宮崎聖子（福岡女子大学文学部准教授、台湾社会史） 李相燦（日文研外国人研究員／ソウル大学校助教授、韓国近代史・文書学） 瀧井一博（日文研准教授、日本法制史） 趙政男（日文研外国人研究員／高麗学校政経大学教授、韓国現代政治） 蔡慧玉（日文研来訪研究員／中央研究院台湾史研究所研究員、日本帝国植民行政の比較研究） 尹海東（日文研外国人研究員／成均館大学校東アジア学術院研究教授、韓国近代史） 劉建輝（日文研准教授、日中比較文化論） 〔海外共同研究員〕 李炯植（国民大学校日本学研究所専任研究員、近代朝鮮・日本政治史） 田中隆一（東亜大学校招聘教授、近代東アジア史） 福井譲（仁済大学校人文学社会科学大学専任講師、在日朝鮮人史） 陳延媛（中央研究院台湾史研究所副研究員、台湾史）
	●研究発表
2008年 4月 20日	松田利彦「『植民地帝国日本における支配と地域社会』の狙い」と関連研究の状況」
2008年 7月 20日	陳延媛「帝国史の視座から地域社会研究の可能性を再考する：台湾における地方エリート（地方精英）の研究トレンドと関連して」 金貞恵「カン・ギョンエ（姜敬愛）の小説に見られる植民地時代の下層女性」 水野直樹「植民地期朝鮮における民籍・戸籍制度と朝鮮人の対応」 大浜郁子「書房義塾参考書の制定過程にみる台湾の植民地的近代教育の形成―地域社会における『植民地的近代教育』と伝統的教育の相克―」 野口真広「下村宏民政長官の台湾社会認識と統治策について」
2008年 9月 29日	金貞蘭「開港期釜山に於ける朝鮮牛の輸出と『輸出牛検疫所』の設置」 李昇燁「最初の在朝日本人衆議院議員・大池忠助について」 永島広紀「〈朝鮮総督府中枢院〉研究の方向とその課題」 板垣竜太「植民地期朝鮮の酒造・酒造業（1）」 青野正明「植民地期朝鮮の宗教運動と『中堅人物』を見る視点（1）―農村社会の変動を軸に―」
2008年11月 24日	崔眞善「植民地期朝鮮の婦人啓蒙運動と『中堅婦人』の役割―『国語普及運動』を中心として―」 宮崎聖子「植民地期台湾における女子青年団」 広瀬貞三「植民地期朝鮮における羅津港建設と土地収用令」

	樋口雄一「朝鮮に於ける小学校生徒の食事と栄養状態―日本人生徒と朝鮮人生徒の差異について―」
2008年11月 25日	松田利彦「韓国『併合』直前の民心状況―伊藤博文被害事件と一進会請願を中心に―」 福井譲「朝鮮簡易生命保険と村落社会（1）」 長沢一恵「新『朝鮮鉱業令』下における民間鉱業と地域社会―朝鮮人民間鉱業者の動向を中心に―」
2009年 2月 7日	庵造由香「朝鮮における総動員体制の構築と朝鮮民衆」 藤永壯「戦時期朝鮮における『慰安婦』動員の『風聞』」 李鐘旼「朝鮮における『犯罪即決例』の研究やその課題」 李炯植「阿部充家と朝鮮統治」
2009年 2月 8日	ジェームズ・バクスター「朝鮮殖産銀行と日本支配下の地域社会」 小川原宏幸「韓国皇帝巡幸と朝鮮民衆」 梅森直之「比較帝国研究の問題設定：保甲制度を手がかりに」
2009年 5月 17日	松田利彦「植民地期朝鮮における消防組について」 大浜郁子「『琉球教育』と台湾における植民地教育の比較史的考察―授業料徴収の問題を中心に―」 春山明哲「黄欣―台南・固園主人―植民地近代を生きたある台湾人の肖像―」
2009年 6月 20日	胎中千鶴「植民地社会と相撲―八尾秀雄の活動を中心に―」 金貞蘭「開港期釜山における梅毒管理」 李昇燁「在朝日本人衆議院議員・大池忠助について」 板垣竜太「戦時下ソウルの職工日記（1941年）について」
2009年 9月 27日	陳宛好「植民地台湾における旧慣の胎について（1895～1922年）」 野口真広「治安警察法違反事件を通じて見る台湾社会の総督府認識」 藤永壯「15年戦争期・台湾の接客業―『台湾日日新報』の記事から―」 青野正明「植民地期朝鮮の宗教運動と『中堅人物』を見る視点（2）―農村社会の変動を軸に―」 永島広紀「朝鮮総督府中枢院―朝鮮総督府学務局―経学院間相互の人事慣行形成について」
2009年11月 21日	宮崎聖子「台湾人における陸軍士官学校の経験―個人のライフ・ヒストリーから―」 蔡慧玉「驚異敦哉の植民地世界―《警察生活の打明け物語》を中心として―」 崔眞善「植民地期朝鮮の婦人啓蒙運動と『中堅婦人』の役割―『国語普及運動』を中心として―」
2009年11月 22日	広瀬貞三「植民地の南鮮鉄道工事と土地収用令」 何義麟「日本統治期の台湾人の教育要求―台陽中学校設立運動を中心にして―」
	樋口雄一「植民地期末期の朝鮮農民と食―江原道農民を事例として―」
2010年 1月 31日	李炯植「阿部充家と朝鮮統治」 李鐘旼「1910年代朝鮮の刑事処罰構造と『犯罪即決』」 水野直樹「1930年代咸鏡南北道の『思想浄化工作』」 梅森直之「植民地統治の重層性をめぐって：戦後日本思想史をめぐる認識論的考察」
2010年 3月 13日	松田利彦「台湾総督府覆審法院檢察官長・手島兵次郎関係文書 簡介」 尹海東「不作為的な立法機構としての朝鮮総督府中枢院」 庵造由香「植民地下咸鏡北道の軍事都市と日本軍・『遊郭』・『慰安所』」

	陳延媛「植民地台湾の地方行政制度と公娼制度―台湾各県庁州報、台湾総督府公文類纂、台湾各州警察法規を資料に―」
2010年 4月 24日	松田利彦「共同研究『植民地帝国日本における支配と地域社会』（2008～2010年度）最終年度を迎えるにあたって」 王泰升「植民地台湾と西方式法院の初次接觸（The Initial Encounter with Western-style Courts of Colonial Taiwan）」 小川原宏幸「日本の朝鮮統治初期の地方制度改革―府政導入における総督府の在朝鮮各国居留地の撤廃交渉過程―」 松田利彦「1920年代朝鮮における『地方改良運動』」 長沢一恵「1920～30年代における朝鮮鉱業の地域動向―朝鮮での『鉱業警察』設置を中心に―」
2010年 7月 4日	田中隆一「『満洲国』警察と地域社会」 李相燦「朝鮮総督府の朝鮮時代歴史記録の管理」 広瀬貞三「植民地期朝鮮の水道事業―仁川水道を中心に―」
2010年 9月 23日	金貞蘭「開港期釜山におけるコレラ流行とその対応―日本のコレラ対策を中心に―」 陳宛好「植民地台湾における担保法制と民衆社会」 青野正明「植民地期朝鮮の宗教運動と『中堅人物』を見る視点（3）―『類似宗教』について―」 福井譲「通信政策と村落社会の対応―『簡易生命保険模範部落』を中心に―」
2010年 11月 28日	藤永壯「在日济州島出身女性の労働について」 宮崎聖子「日本植民地期台湾における青年団の中間指導者横尾広輔について」 大浜郁子「台湾公学校令（勅令）の制定過程にみる植民地帝国日本の支配と地域社会」 崔眞善「植民地朝鮮農村の中堅婦人に関する一考察」
2010年 11月 29日	李鐘旼「1910年代の処罰権力と答刑」 樋口雄一「1945年の朝鮮農業・農政と社会状況―新聞資料から読み取る―」
2011年 1月 22日	永島広紀「朝鮮総督府学務局の『社会教育』と地域社会」 小林善帆「植民地朝鮮の女学校と日本の伝統的文化の受容」 春山明哲「黄欣―植民地近代を生きたある台湾人の肖像（その2）―」 李炯植「1910年代朝鮮における衛生行政と地域社会」 崔眞善「植民地朝鮮の『国語普及運動』の展開と朝鮮女性の対応」
2011年 1月 23日	胎中千鶴「相撲指導者八尾秀雄の植民地経験」 板垣竜太「創氏改名時代の族譜について」
2011年 3月 13日	庵造由香「朝鮮総動員体制における労働力動員と地方行政」 陳延媛「台湾人医師の朝鮮留学」 水野直樹「思想浄化工作・郷約・自衛団」

	陳延媛「植民地台湾の地方行政制度と公娼制度―台湾各県庁州報、台湾総督府公文類纂、台湾各州警察法規を資料に―」
2010年 4月 24日	松田利彦「共同研究『植民地帝国日本における支配と地域社会』（2008～2010年度）最終年度を迎えるにあたって」 王泰升「植民地台湾と西方式法院の初次接觸（The Initial Encounter with Western-style Courts of Colonial Taiwan）」 小川原宏幸「日本の朝鮮統治初期の地方制度改革―府政導入における総督府の在朝鮮各国居留地の撤廃交渉過程―」 松田利彦「1920年代朝鮮における『地方改良運動』」 長沢一恵「1920～30年代における朝鮮鉱業の地域動向―朝鮮での『鉱業警察』設置を中心に―」
2010年 7月 4日	田中隆一「『満洲国』警察と地域社会」 李相燦「朝鮮総督府の朝鮮時代歴史記録の管理」 広瀬貞三「植民地期朝鮮の水道事業―仁川水道を中心に―」
2010年 9月 23日	金貞蘭「開港期釜山におけるコレラ流行とその対応―日本のコレラ対策を中心に―」 陳宛好「植民地台湾における担保法制と民衆社会」 青野正明「植民地期朝鮮の宗教運動と『中堅人物』を見る視点（3）―『類似宗教』について―」 福井譲「通信政策と村落社会の対応―『簡易生命保険模範部落』を中心に―」
2010年 11月 28日	藤永壯「在日济州島出身女性の労働について」 宮崎聖子「日本植民地期台湾における青年団の中間指導者横尾広輔について」 大浜郁子「台湾公学校令（勅令）の制定過程にみる植民地帝国日本の支配と地域社会」 崔眞善「植民地朝鮮農村の中堅婦人に関する一考察」
2010年 11月 29日	李鐘旼「1910年代の処罰権力と答刑」 樋口雄一「1945年の朝鮮農業・農政と社会状況―新聞資料から読み取る―」
2011年 1月 22日	永島広紀「朝鮮総督府学務局の『社会教育』と地域社会」 小林善帆「植民地朝鮮の女学校と日本の伝統的文化の受容」 春山明哲「黄欣―植民地近代を生きたある台湾人の肖像（その2）―」 李炯植「1910年代朝鮮における衛生行政と地域社会」 崔眞善「植民地朝鮮の『国語普及運動』の展開と朝鮮女性の対応」
2011年 1月 23日	胎中千鶴「相撲指導者八尾秀雄の植民地経験」 板垣竜太「創氏改名時代の族譜について」
2011年 3月 13日	庵造由香「朝鮮総動員体制における労働力動員と地方行政」 陳延媛「台湾人医師の朝鮮留学」 水野直樹「思想浄化工作・郷約・自衛団」

	117「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題
	●研究域
	第3研究域 文化比較（思想）
	●共同研究期間
	2008（平成20）年4月～2012（平成24）年3月
	●研究の概要
	東アジア文化圏が、西欧との対比において自らを意識し、それを「アジア」として括るにいたるのは、おおよそ1930年代のこととみてよいだろう。そしてそれは、ほかのさまざまな領域とならんで、東洋の美と思想をめぐり突出した思索表現をみせてきた。では、東洋の美意識は、（アフリカや南米とともに）これから将来、人類の文明の将来にとっていかなる位置を占め、いかなる貢献を求められているのか。
	本研究では、このような問いに検討をを加えるため、狭義の美術史や美学、思想史に限定することなく、文学、宗教、政治など隣接領域からの参画を得て学際的な接近を試み、また韓国、中国のみならず、イスラーム圏を含め、アジア意識の帰趨を国際的な視野のもとに考察した。さらに、第一次世界大戦を経た時期の欧米では、西欧の行き詰まりを打開するための方策を東洋に求める思想家たちも登場させた。かれらの思索の可能性を再検討するため、西洋思想史をはじめとする分野の専門家の参加も得て、世界文化・文明史における「東洋」の命運と将来への課題について、総合的な見通しも探った。
	1930年代に模索された東洋の美と思想をめぐる思索は、西欧側からの期待に応答する性格を宿していた。西欧内部での知的な需要に応じるかぎりで、東方からの供給は歓迎された。だが期待に反する異質性は受け入れを拒絶された。東洋に期待される異質性とは、西欧の許容範囲という均質性の限界を超えない限りでしか有効でない。それを超えた異質性は無効なものとして排除された。いわゆる東西の知的対話は、この需要・供給関係に抵触しない範囲に自己限定されている。この枠組みをいかにして脱却できるか。この課題には重大な知的挑戦が秘められている。
	●研究代表者
	稲賀繁美（日文研教授、比較文化史）
	●幹事
	瀧井一博（日文研准教授、比較法史・国制史）
	●班員
	テレント・アイトル（北海学園大学人文学部教授、日中蒙比較文学） 足立元（日本学術振興会特別研究員（PD）、近代日本美術史・建築史） 伊藤奈保子（広島大学大学院文学研究科准教授、仏教美術・アジア工芸史） 今井祐子（福井大学教育地域科学部准教授、近代工芸史） 鶴飼敦子（東京大学東洋文化研究所特任研究員、フランス近代美術史） 小田部胤久（東京大学大学院人文社会系研究科教授、美学） 金田晉（広島大学名誉教授、美学） 河田明久（千葉工業大学教育センター准教授、日本近現代美術史） 衣笠正見（法政大学国際文化学部教授、比較文学） 木下長宏（元横浜国立大学教授、美術史） 金恵信（学習院大学文学部非常勤講師、美術史・表象文化論） オリヴィエ・クリシャー（筑波大学大学院人間総合科学研究科助教、美術史） 呉孟晋（京都国立博物館学芸部美術室研究員、美術史） 佐々木健一（日本大学文理学部教授、美学） 高本澐（京都精華大学芸術学部教授、西洋美術史） 鈴木禎宏（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授、比較文学・比較文化・生活造形論）

クリストファー・W・A・スピルマン（九州産業大学国際文化学部教授、日本近代政治思想史）
戦畧梅（東京工業大学外国語研究教育センター准教授、比較文学・美術史）
ミシュエル・ダリシエ（同志社大学文学部准教授、現代日本哲学）
礪波護（京都大学名誉教授、東洋史）
西原大輔（広島大学大学院教育学研究科准教授、比較文学・美術史）
西横偉（熊本大学文学部准教授、比較文学）
芳賀徹（東京大学名誉教授、比較文学・比較文化）
畠山香織（京都産業大学外国語研究学部准教授、比較文学・比較文化）
濱下昌宏（神戸女学院大学文学部教授、美学）
林洋子（京都造形芸術大学芸術学部准教授、日仏近代美術）
範麗雅（㈱読売日本テレビ文化センター講座本部非常勤中国語講師、比較文学・現代中国都市文化史）
檜垣樹理（早稲田大学国際教養学術院准教授、フランス宗教思想・比較文学）
平川祐弘（東京大学名誉教授、比較文学・国際文化関係論）
平松秀樹（大阪大学外国語学部非常勤講師、比較文学・比較文化）
藤原貞朗（茨城大学人文学部准教授、美学・美術史）
マリア＝ヘススデ・プラダ＝ピセンテ（福岡大学人文学部非常勤講師、比較文学）
松原知生（西南学院大学国際文化学部准教授、美術史・陶磁文化論）
武藤秀太郎（復旦大学高級進修生、経済思想史）
村井則子（テンプル大学ジャパンキャンパス学部課程准教授、美術史）
梅定観（元日文研プロジェクト研究員、近代北東アジア文学史）
安松みゆき（別府大学文学部教授、美術史）
横山輝樹（元総合研究大学院大学文化科学研究科院生、近代アジア武芸史）
李建志（関西学院大学社会学部准教授、比較文学比較文化・朝鮮文学朝鮮文化）
陸偉榮（早稲田大学法学部非常勤講師、美術史）
劉岸偉（東京工業大学外国語研究教育センター教授、比較文学）
李偉（日本学術振興会外国人特別研究員、中日庭園史）
新井菜穂子（日文研准教授、科学史）
磯前順一（日文研准教授、近代宗教史）
井上章一（日文研教授、建築史・意匠史）
牛村圭（日文研教授、近現代日本思想史）
大嶋仁（日文研客員教授／福岡大学人文学部教授、比較文学・比較思想）
古田島洋介（日文研客員教授／明星大学人文学部教授、漢文学・韓日文化史）
佐野真由子（日文研准教授、文化交流史・文化政策）
鈴木貞美（日文研教授、近代文学・思潮史）
ヨナ・シゲラー（日文研外国人研究員／エルサレム・ヘブライ大学東アジア学科シニアレクチャー、日本科学技術史）
アス・ジンダル（日文研外国人研究員／画家／日本美術史研究家、日本美術史・メディア・アート理論ユニケーション）
千葉慶（日文研客員准教授、明治大学文学部非常勤講師、日本近代美術史）
陳玲（日文研外国人研究員／清華大学ジャーナリズム&コミュニケーション学部准教授、メディアアート理論・ビジュアルコミュニケーション）
蔡慧玉（日文研来訪研究員／中央研究院台湾史研究所副研究員、日本の台湾支配）
朴美貞（日文研プロジェクト研究員、芸術史・美術史・植民地問題・戦後の日韓問題）
橋本順光（日文研客員准教授／大阪大学大学院文学研究科准教授、英文学・比較文学）
デヴィッド・ハバート（日文研外国人研究員／シベリウス音楽院教授、音楽学・教育政策）
平野共余子（日文研客員准教授／フリーランスライター、映画史）

パトリシア・フィスター（日文研教授、美術史）
細川周平（日文研教授、大衆音楽史と文化交流）
堀まどか（日文研機関研究員、比較文学・文芸交流史）
ミュリエール・ラディック（日文研外国人研究員／サンテチエンス国立高等建築学校准教授、美学・建築思想）
山田奨治（日文研准教授、技芸の伝承と情報学）
劉建輝（日文研准教授、近代東アジア文学・文化史）
マルクス・リュッターマン（日文研准教授、ドイツ日本文学）
王中忱（日文研外国人研究員／清華大学人文社会科学院教授、比較文学・近代中国比較文化史）
大塚絢子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、日本美術史）
岡本貴久子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、環境問題）
韓玲玲（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、日本近代文学・満州文学）
金炳辰（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、近代アジア思想史）
小山周子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、近代版画史）
コルネーエヴァ・スヴェトラナ・アレクサンドロヴナ（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、東欧におけるアジア文化観）
陳凌虹（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、日中近代演劇史）
徳永誓子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、民俗学）
戸矢理衣奈（総合研究院大学院大学文化科学研究科博士後期課程、広告戦略史）
長門洋平（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、日本映画史）
吉本弥生（総合研究大学院大学文化科学研究科研究生、近代日本芸術思想史）
李ユンヒ（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、東アジア近代美術史）
[海外共同研究員]
李応寿（世宗大学校人文科学大学教授、韓日比較演劇学）
大橋良介（ケルン大学客員教授、哲学・美学）
厳安生（北京外国語大学北京日本学研究中心専任教授、比較文学）
酒井順一郎（東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校副教授、近代東亜教育史）
徐蘇斌（天津大学建築学院特聘教授、近代中国建築・都市計画史）
ハイエク・マティアス（パリ第7大学MSF（准教授相当）、日本民俗学）
クリストフ・マルケ（フランス国立東洋言語文化研究学院教授、日本美術史）
柳瀬善治（静宜大学外語学院日本語文学系専任助理教授、日本近代文学思想史・比較文化・文化理論）
●研究発表
2008年 4月25日 劉建輝「近代東アジア文化史の再構築」 全体討論「今後の発表予定・運営方針について」
2008年 4月26日 稲賀繁美「『東洋美学』の濫觴と障害：問題提起にかえて」
2008年 5月23日 木下長宏「〈アジアは一つ〉神話の形成をめぐる」 西横偉「豊子愷における中国美学の自己主張―『草枕』（1906）との関連を中心に―」 総合討論「研究会の方向について」
2008年 5月24日 藤原貞朗「日本の東洋美術史観の変化（1920～1930年代を中心に）―欧米との競合のなかで―」
2008年 6月27日 平川祐弘「Arthur Waleyの『源氏物語』評価について」 稲賀繁美「『東洋』像の刷新：近代インドと日本の藝術的交流―タゴール・荒井寛方・ノンドロル・ボース―」 総合討論「研究会の方向について」

2008年 6月28日	速水豊「近代洋画と南画―関係の三つの様相―」 飯尾由貴子「近代における南画―再評価の動きをめぐる―」
2008年 7月25日	陸偉榮「陳之佛研究序説―装飾・装幀（装丁）にみる日本美術の影響―」 朴允姫「呉相淳の東アジア的世界―民芸運動、バハイ教、エスベラント、アナキズム―」 総合討論「研究会の方向について」
2008年 7月26日	松原知生「文士たちの骨董愛好とその（反）美学―小林秀雄と川端康成を中心に―」
2008年10月27日	斎藤稔「西洋のアルスと日本諸芸・芸道」 朴美貞「植民地都市の造形―群山・木捕の残映から―」
2008年10月28日	橋本順光「『源義経はジンギスカンなり』 ―『大東亜』幻想探訪―」
2008年11月24日	河田明久「日中戦争と美術の『分際』」 新井菜穂子「『電気』という漢語―東洋の意識の中でのずれ―」
2008年11月25日	鶴飼敦子「近代日本画の精神と西洋―高島北海の芸術論をとおして―」
2009年 4月24日	瀧井一博「伊藤博文の文明観―韓国統監期の思想を素材にして―」
2009年 4月25日	林洋子「パリ・東京・仏領インドシナ：親仏派日本人芸術家の動線―黒田清輝と藤田嗣治を中心に―」
2009年 5月29日	稲賀繁美「華厳思想と現代美術：方法論的提案」 劉建輝「〈帝國的記憶〉確認の旅：対馬／ウラジオストク／青島／大連／瀋陽／台北／京都」
2009年 5月30日	大嶋仁「小林秀雄におけるランボーと日本」
2009年 6月26日	朴美貞「朝鮮博覧会（1929年）―植民地都市の物語―」 井上章一「近著『伊勢神宮』をめぐる」
2009年 6月27日	西原大輔「橋本閑雪と中国」
2009年 7月 6日	ダリオ・ガンボニー「ジャポニズムと潜在的イメージ」 藤原貞朗「美的コミュニケーションとしての極東芸術鑑賞―D・ガンボニー著『潜在的イメージ』への問題提起―」 ミュリエール・ラディック「日本美学 時の跡」 西田雅嗣「仏・日の宗教建築と時間性」
2009年 7月 7日	討論 ダリオ・ガンボニー ミュリエール・ラディック
2009年 7月24日	千葉慶「《八紘一宇の塔》とは何だったのか」 平野共余子「小津安二郎における京都」
2009年 7月25日	李建志「李王の外遊」 徐蘇斌「1929年西湖博覧会の『美術建築』について」 鈴木禎宏「近代日本における現実制御のための言語戦略：『東洋・西洋』と『和風・洋風』」
2009年10月 2日	金田晉「鼓常良における日本的様式としての『Rehmenlosigkeit』その比較美学的可能性」 戦畧梅「近代漢学史の文脈から見る富岡鉄斎の晩年美術―京都学派・長尾雨山との交遊を中心に―」
2009年10月 3日	濱下昌宏「国学からの美学―洋学美学の助けなしに日本美学の学制的成立の可能性に関する序論―」 劉岸偉「周作人晩年の小品を読む―東洋近代知識人の二種の選択―」
2009年10月30日	安永幸史「1876年フィラデルフィア万国博覧会での日本の出展について」 安松みゆき「1939年伯林日本古美術展覧会と開催経費―東アジア美術との関係から―」
2009年10月31日	畠山香織「華鴻銘の日露戦争をめぐる発言について」 吉本弥生「1910年代の日本における美術批評―批評

	の転換期をめぐる―」 クリストフ・マルケ「中村不折による江戸絵画の再評価について―『畫界漫語』所収の日本絵画論を中心に―」
2010年 4月23日	近藤高弘「イラン古陶の村ラレージを訪ねる：染付の源流―ベルジャから日本へ、近藤高弘の作品との関連で―」 佐々木健一「遠近法の東西」
2010年 4月24日	稲賀繁美「セザンヌと東洋：藝術の革命から東洋の求道者へ」
2010年 5月30日	松村茂樹「日本における呉昌碩の受容」 戦畧梅「『満洲グラフ』に投影された『満洲美術』の諸相」 西原和海「『満洲グラフへ』への視線」
2010年 5月31日	劉建輝「中国東三省の近代性を考える―鉄道・都市・移民―」 呂元明「『満州事典』の作成について」
2010年 6月25日	Andre R. HAAG “The Contested ‘Images’ and Discourse of Futei Senjin: Representations of Rebellious Koreans and the Consciousness of Anti-Colonialism in Taisho-era Media and Culture” ブリッジ・タンカー “Nationalism and Salvation: Religious Reforms in Meiji Japan”
2010年 6月26日	古田島洋介「潘飛声をめぐる」
2010年 7月25日	衣笠正晃「1930年代の国文学者群像―文芸学論争・風景景次郎を中心に―」 小田部胤久「カール・レーヴィットと『二階建て』の日本―間文化性への一つの寄与―」
2010年 7月26日	木下長宏「『仮名』書の磁場―その誕生と歴史的展開―」
2010年10月24日	武藤秀太郎「協同主義と戦後民主化―初代日本芸術院長・高橋誠一郎を中心に―」 稲賀繁美「白頭山・承德・ノモンハン―偽『満洲国』の文化象徴とその表象―」
2010年10月25日	劉建輝「承德占領とその後の熱河ブームについて」 伊藤奈保子「承徳の寺院にみる宗教混淆―外八廟を中心に―」 李偉「避暑山莊：承徳の清朝離宮を巡って」
2010年11月 8日 ～10日	第38回国際研究集会「東洋美学と東洋の思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像」
2011年 7月23日	前田憲二（特定非営利活動法人ハヌルハウス代表理事）制作長編記録映画「月下の侵略者―文禄・慶長の役と（耳塚）―」DVD上映 劉建輝「可視化される『帝国』・パッケージされる『外地』―日文研所蔵外地関連絵葉書について―」 樋口穰「古都の変遷―景観変化の解説への古写真絵葉書等の応用に関する研究序章―」
2011年 7月24日	範麗雅「林語堂のMoment in Pekingで描かれた『中国』」 樋口とも子「日本近代における朝鮮陶磁研究―〈朝鮮陶磁史〉の成立を中心に―」 井上章一「20世紀のアラベスク―伊東忠太、ジョサイア・コンドル、ミノル・ヤマザキ―」
2011年 9月30日	〈第103回シンポジウム「万国博覧会とアジア―上海から上海へ、そしてその先へ―」〉 【第1セッション：アジアと万博―上海からの出発―】 司会：鶴飼敦子 中牧弘允「上海万博2010―中華思想と日中合作言説―」 佐野真由子「上海からロンドンへ、第1回（1851）・第2回（1862）ロンドン万博と中国・日本」

		金英那（「シカゴ万博（1893）、パリ万博（1900）における韓国展示」 【第2セッション：万博参加を契機として—その後の展開—】 司会：林洋子 鶴飼敦子「ジャポニスム再考—セントルイス万国博覧会（1904）の日本人をとおして—」 許馨珠「東アジアの覇権をめぐる角逐—1851年から1910年に至る国際博覧会を舞台として—」
2011年 10月 1日	徐蘇斌「天津勸業会（1906）からパナマ万国博覧会（1915）へ」 朴美貞「朝鮮博覧会（1929）と京城の空間形成—文化住宅展示—」 オリヴィエ・クリシャー、劉建輝 討論 【第3セッション：万博開催地としてのアジアとこれからの万国博】 司会：青木信夫 橋爪紳也「万国博覧会のアジア—大阪（1970）から上海（2010）へ—」 岩田泰「東アジアでの万博—愛知（2005）、上海（2010）、そして麗水（2012）」 グエン・ティ・タン・タム「ベトナムにおける展覧会の動向と万国博覧会の展望」 白幡洋三郎、川口幸也 討論 【第4セッション：総合討論】 司会：佐野真由子 稲賀繁美、ロー・ダニエル、江原規由 総合討論	

118 文明と身体
●研究域
第1研究域 動態研究（現代）
●共同研究期間
2009（平成21）年4月～2012（平成24）年3月
●研究の概要
野蛮から文明へといたる人類の歴史の流れのなかで、人の自らの身体へのまなざしは、いかなる変貌を遂げてきたのであろうか。古代において既に高度な文明を有していた地中海地域、あるいは独自の文明を発達させた中南米において、身体はどのような解釈を受けていたか。また、文明化の過程が遅れた地域においては、進んだ異文化・異文明という他者との出会いのなかで、それまでの身体観にいかような変化が生じたのか。他方、進んだ他者として臨んだ者にも異文化から受けた衝撃はあったのだろうか。
本研究は、古今東西の身体へのまなざし考えるのに相応しい事例を、文明という文脈のもとでまず考察を加え、そしてそのような歴史上の諸事例を参考にしつつ、最終的には近代日本の文明観を、身体をひとつの切り口にして再検討する。
●研究代表者
牛村圭（日文研教授、比較文化論・文明論）
●幹事
劉建輝（日文研准教授、日中比較文学）
●班員
岩崎徹（横浜市立大学国際総合科学部准教授、英文学・演劇文化論） 大東和重（関西学院大学法学部准教授、日中比較文学・日本近代文学） 加藤めぐみ（明星大学人文学部教授、日豪比較文化）

川本玲子（一橋大学大学院商学研究科准教授、英文学） 小堀馨子（成城大学非常勤講師、古代宗教史・宗教学） 佐伯順子（同志社大学社会学部教授、比較文化） 竹村民郎（元大阪産業大学教授、近代日本文化論） 永井久美子（東京大学特任助教、日本近世美術史） 西原大輔（広島大学大学院教育学研究科准教授、比較文学・近代日本文学） 平松隆円（名古屋文化短期大学講師、近代日本化粧史） 古川優貴（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、人類学） 山中由里子（国立民族学博物館民族文化研究部准教授、オリエント学） 稲賀繁美（日文研教授、比較文学） 井上章一（日文研教授、近代日本文化史） 郭南燕（日文研准教授、日本近代文学） フレデリック・クレインス（日文研准教授、日欧交流史・科学史） 古田島洋介（日文研客員教授／明星大学人文学部教授、比較文学・漢文学） 白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史） 堀まどか（日文研機関研究員、日本文学・比較文学） 楊爽（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、近代日本文学） 【海外共同研究員】 眞嶋亜有（ハーバード大学ライシャワー日本研究所ポストドクトラルフェロー、比較文化・身体文化論）	●研究発表
2009年 7月 4日	郭南燕「西洋人と東洋人の体型に象徴される精神の相違—遠藤周作『海と毒薬』と『悲しみの歌』を中心に—」
2009年10月 10日	古川優貴「体感するリズム、同期してゆくリズム：ケニアの聾学校の子供たちによる歌と踊りの事例から」 眞嶋亜有「〈肌色〉の憂鬱—近代日本の人種体験—」
2010年 1月 30日	加藤めぐみ「日本という『他者』：オーストラリア文学に見る日本人描写変遷」 平松隆円「摩登少女とモダンガール」
2010年 3月 27日	小堀馨子「古代ローマ人の葬送儀礼に見られる身体観とその変遷」 楊爽「谷崎文学における神経衰弱」
2010年 7月 31日	古田島洋介「纏足の再把握—身体論としての視点を求めて—」
2010年 11月 27日	堀まどか「大正から昭和期の日本詩歌のなかの身体」 川本玲子「共感とシステム化—自閉症から考える物語論—」
2011年 1月 8日	フレデリック・クレインス「蘭学者の身体観」 竹村民郎「公衆衛生と『花苑都市』の形成」
2011年 3月 5日	徐載坤「萩原朔太郎と文明」 評者：牛村圭 対論者：平松隆円「文明と身体の視点から読む『メレル・ヴォーリズと—柳満喜子—愛が架ける橋』」
2011年 7月 22日	牛村圭「3年目の共同研究会展望と今後の課題」 2年目を振り返って（既発表者による報告を中心に） 大東和重「中国人留学生の見た日本文学—明治から大正にかけて—」

119 日本の近代化とプロテスタンティズム
●研究域
第2研究域 構造研究（社会）

●共同研究期間
2009（平成21）年4月～2011（平成23）年3月
●研究の概要
開国＝明治維新により、日本の近代化は急速にすすんだ。欧米の科学技術を中心とした物質文明の受容、さらには、文学、哲学、教育、音楽等の文化面も、日本の社会構造に大きく影響を及ぼした。——しかし、キリスト教に関しては、「質的」にはともかく「量的」には、浸透するまでにはいなかった。
本研究は、日本の近代化過程におけるキリスト教、とくにプロテスタンティズムの果たした役割について、神学的考察からではなく、歴史的、文化的考察によって再確認しつつ、社会構造としての位置づけを検証した。
そのために、まずは日本における近代化とは何であったかを、江戸末期から歴史的、思想的、文化的見地から具体的に跡づけた。そして、いわゆる鎖国時代に培われた日本人の精神性、いわゆる「武士道精神」がいかんして形成され、それが明治以降にどのように影響を及ぼしたかを分析した。札幌、横浜、熊本に代表される「バンド」の形成は、ほかならぬ旧土族の子弟を中心としていた。そして、明治初期から中期にかけて、プロテスタンティズムを受容したのか内村鑑三、新渡戸稲造、植村正久ら、同じ旧土族階級が中心であったのはなぜか。さらに、最終的には、なにゆえに日本の近代化は、プロテスタンティズムの「量的」拡大を拒んだのか（日系ハワイ人には受容されたにもかかわらず）について考察した。（公募研究）
●研究代表者
上村敏文（日文研客員准教授／ルーテル学院大学総合人間学部准教授、比較文化論）
●幹事
笠谷和比古（日文研教授、歴史学）
●班員
石居基夫（ルーテル学院大学総合人間学部准教授、神学） 稲垣俊也（東京キリスト教学園講師、西洋音楽・オペラ歌手） 植木献（明治学院大学教養教育センター准教授、神学） 魚住孝至（国際武道大学体育学部教授、日本思想・実存思想・身体文化） 雲龍（Shana Recrords主催者、笛奏者） 小田淳一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター准教授、比較民話） 北原かな子（秋田看護福祉大学教授、国際文化） 黒住真（東京大学大学院総合文化研究科教授、倫理） 小林善帆（京都女子大学非常勤講師、美術） 佐治晴夫（鈴鹿短期大学長、量子論・宇宙創生論） 武内恵美子（秋田大学教育文化学部准教授、音楽学（日本音楽史）） 竹村英二（国士舘大学21世紀アジア学部教授、日本思想史） 谷口昭（名城大学法学部教授、日本法制史） 豊田俊雄（東京国際大学名誉教授、教育社会学・アフリカ） 仲秀和（大阪樟蔭女子大学学芸学部教授、近代日本文学） 中東弘（元春日大社権宮司） 西井麻美（ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授、ブラジルの教育） 西江雅之（財）アジア・アフリカ文化財団アジア・アフリカ図書館長、文化人類学） 長谷川（間瀬）恵美（南山大学宗教文化研究所非常勤研究員、宗教学（キリスト教）） 長谷川成一（弘前大学人文学部教授、日本近世史） 林香純（薫香香雅流宗匠、薫香香雅流） 平石直昭（帝京大学文学部教授、日本政治思想史） 平木實（京都府立大学文学部非常勤講師、韓国・朝鮮文化史） 深井智朗（聖学院大学総合研究所教授、宗教社会学・思想史） 古屋安雄（聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科教授、神学） 前田勉（愛知教育大学教育学部教授、日本思想史） 前田ひとみ（目白大学外国語学部専任講師、国際理解教育（移民）） 間瀬啓允（東北公益文科大学公益学部非常勤講師、宗教哲学）

松山壽一（大阪学院大学経営学部教授、哲学） 森田登代子（桃山学院大学文学部非常勤講師、近世庶民文化史） 山根一城（山根折形礼法教室主宰、伊勢流礼法） 佐野真由子（日文研准教授、文化交流史） ジョン・ブリーン（日文研准教授、日本の近世・近代史） 【海外共同研究員】 Daniel KIKAWA（Aloha Ke Akua, President、Anthropology） George PINDUA（ELCT Kilosa Church, District Pastor（牧師）、Theology） Fadhili SAGA（International Rescue Committee（Tanzania Program）委員、Youth Education） Mufwimi SAGA（ELCT Assistant、公衆衛生）	●研究発表
2009年 3月 13日	雲龍「言祝ぎの笛」 中東弘「日本文化の基層として神道」 佐治晴夫「日本の宗教風土とプロテスタンティズム」
2009年 3月 14日	黒住真「日本近世以後の思想宗教とキリスト教」 間瀬啓允「宗教的多元社会の成熟に向けて—ブルーリズムの立場から—」 西江雅之「文化の翻訳」
2009年 4月 10日	笠谷和比古「武士道のエートスと日本の近代化」
2009年 4月 11日	長谷川（間瀬）恵美「日本におけるキリスト教の受容と理解—根獅子キリシタンの場合—」 黒住真「日本の近代化と思想 宗教の組織化」
2009年 7月 10日	全体発表と質疑（1）
2009年 7月 11日	全体発表と質疑（2） 分科会
2009年 9月 18日	上村敏文「『タンザニアルーテル教会』現地ビデオ上映と報告」 古屋安雄「アフリカのキリスト教」
2009年 9月 19日	前田勉「近世国学とキリスト教」 間瀬啓允「福沢諭吉と英国国教会宣教師ショーとの交流の軌跡」
2009年11月 13日	北原かな子「明治9年天皇奥羽巡幸と東奥義塾生天覧授業—宣教師による文化伝達の一例として—」 西井麻美「ブラジル社会と日系人—教育・言語・宗教—」
2009年11月 14日	全体討論
2010年 1月 22日	小林善帆「キリスト教系女子校といけばな・茶の湯—福沢諭吉の言説とともに—」 上村敏文「日本の近代化と伊勢流礼法と香の世界」
2010年 1月 23日	前田ひとみ「質的・量的分析による日系ブラジル人移民の社会的統合のアイデンティティ—因子分析による社会的統合指標の算出—」 武内恵美子「近代日本の音楽観と賛美歌」 佐野真由子「勝海舟における異文化」
2010年 3月 12日	竹村英二「儒学の素養と企業者理念：荘田平五郎を題材に」 石居基夫「日本における『近代的個』と武士道的キリスト教」
2010年 3月 13日	平木實「韓国の民族主義とはがざまで—1964年～1966年代のキリスト教と大韓天理教のかかわり—」 森田登代子「近代大阪におけるキリスト教（的）文化的活動の形態—友の会活動を通して—」 魚住孝志「明治後期の青年におけるキリスト教理解—魚住折蘆の場合—」
2010年 5月 14日	根川幸男「日本のプロテスタンティズムとブラジル移民—小林美登利と聖州義塾を事例に—」 笠谷和比古「武士道の展開と忠誠観の変容」
2010年 5月 15日	古屋安雄「武士道について」

		仲秀和「漱石とキリスト教」
2010年	10月 8日	上村敏文「景教研究と稲荷信仰」
2010年	10月 9日	柚浩二「何故日本にキリスト教が定着しないのか」 ケン・ジョセフJr.「景教の歴史的研究と日本のキリスト教」
2011年	2月12日	編集会議
2011年	2月13日	編集会議

120 日本における翻訳の文化史

●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）
●共同研究期間
2009（平成21）年8月～2010（平成22）年8月
●研究の概要
近世から現代にかけて、日本では翻訳は非常に重要な役割を演じてきた。翻訳というのは、ある文化における概念を言葉のレベルで変容して他文化にも通じるようにする機能をもつものであるから、ある文化と異なる文化が通じ合う境目といっていい。その上、文化的、そして文学的な発展に、翻訳は大きな役割を果たす。しかし、翻訳というプロセスの文化的な意義は、十分研究されているとは言い難い。
これまでの翻訳の研究の大多数は、ある小説はいつ翻訳されたか、ある言葉あるいは概念はどのように翻訳されて日本語に入ったか、西洋の言語が日本語に翻訳されると日本語自体がどのように変わったかという程度である。また、フランス、ロシア、英語圏の文学が近現代の日本文学の発展に大きな影響を及ぼしたため、西洋の言語からの翻訳を強調する傾向があり、中国語などからの翻訳は見落とされがちである。これらの問題を乗り越えるため、翻訳そのものを歴史的な現象として扱い、その文化史も探るべきである。
最近、西洋では翻訳の文化的な意義を論じる研究が盛んになりつつある。これらを参考にしながら、本研究では次の3点を重要課題として取り組んだ。
(1) 作家の翻訳と翻訳論：つまり、翻訳についての随筆と論文と感想文などを参考にしたり、知られざる翻訳論を掘り出したりしながら、幕末から現代まで、それぞれの時代の翻訳論や訳のやり方の歴史を明らかにする。
(2) 時代が変わると、翻訳家の仕事かどのように変わったかと考えながら、職業としての翻訳の歴史を検証する。
(3) 翻訳家の仕事によって、日本での文学がどのように変わってきたかを論証する。
このようにして、日本の立場から、新しい翻訳の論理と実践の歴史を掘り起こした。（公募研究）
●研究代表者
ジェフリー・アングルス（日文研外国人研究員／ウェスタン・ミシガン大学准教授、近・現代日本文学翻訳論）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、近・現代日本文学）
●班員
安藤恭子（大妻女子大学准教授、近・現代日本文学・ジェンダー研究）
伊井春樹（元国文学研究資料館長、近・現代日本文学）
飯田（佐藤） 祐子（神戸女学院大学大学院文学研究科教授、近・現代日本文学・ジェンダー研究）
井上健（東京大学大学院総合文化研究科教授、比較文学）
江藤裕之（東北大学大学院国際文化研究科准教授、言語学史・英語学史）
大村梓（東京工業大学大学院社会理工学部研究科博士課程、比較文学）
ヒュー・クラーク（早稲田大学法学部客員教授、日本近代文学）
鴻巣友季子（翻訳家・作家、翻訳・英米文学）

佐藤＝ロスベアグ・ナナ（立命館大学衣笠研究機構ポスドクトラル研究員 翻訳・異文化間研究）	
澤田敬司（早稲田大学法学学術院教授、演劇学）	
全美星（神戸大学大学院人文学研究科講師、日本近代文学）	
高橋陸郎（詩人・評論家、近・現代日本文学）	
沼野充義（東京大学大学院人文社会系研究科教授、東欧文学）	
宮下恵美子（翻訳家、日本文学の英訳）	
リース・モートン（東京工業大学外国語研究教育センター教授、近・現代 日本文学・翻訳家）	
石川肇（日文研プロジェクト研究員、日本近現代比較文学）	
稲賀繁美（日文研教授、近・現代文化史・美術史）	
堀まどか（日文研機関研究員、日本文学・比較文学）	
劉建輝（日文研准教授、近・現代文化史・日中文化史）	
〔海外共同研究員〕	
インドラ・リービ（スタンフォード大学東アジア言語文化学部助教授、近・ 現代日本文学・日本における翻訳史）	
●研究発表	
2009年10月 3日	ジェフリー・アングルス「翻訳という領域：新しい問題意 識を目指して」 リース・モートン「坪内逍遙によるシェークスピアの翻訳」
2009年12月 12日	読書会：G・スタイナー『バベルの後に』George Steiner <i>After Babel</i> （「第五章：解釈の運動 The Hermeneutic Motion」の抜粋） 鈴木貞美「翻訳の文化史のために（1）明治期における翻 訳の諸問題を論じるために前提となることも」 キャロル・ヘイズ「萩原朔太郎のポー」 宮下恵美子「英語ハイクの和訳『新しい池』をめぐって」
2010年 2月 6日	読書会：Lawrence Venuti “ <i>The Scandals of Translation Chapter 5: The Formation of Cultural Identities</i> ” 堀まどか「野口米次郎のSelf-translation：20世紀初頭 の日英両言語による象徴詩」 大村梓「大正文壇におけるボオル・モオランの影響と受 容」 石川肇「戦後国語教科書の中の翻訳―翻訳の受容とそ の文化的影響―」
2010年 4月 3日	読書会：ジェレミー・マンディ『翻訳学入門』（第八章： 文化的・イデオロギー的回転、第九章：翻訳者の役割、 可能性、倫理、社会学） 佐藤＝ロスベアグ・ナナ「知里真志保のアイヌ神謡訳 1950年代の詩人たちとの関係の中で」 井上健「大正作家は何を翻訳しようとしたのか：谷崎潤 一郎、佐藤春夫、芥川龍之介の場合」
2010年 6月 5日	読書会：ロマン・ヤコーブソン「翻訳の言語学的側面 について」 鴻巣友季子「翻訳における操作 異化と馴化 実践現 場からの2、3の報告」 江藤裕之「国学、フィロロギー、そして翻訳」
2010年 7月 3日	梅定娥「大内隆雄の翻訳：『原野』と『緑なす谷』を例に」 ヒュー・クラーク「沖縄と翻訳―受容と排除―」 安藤恭子「アイヌの伝承の翻訳、引用をめぐって―近代 における『コロボックル』の変遷―」 鈴木貞美「翻訳の文化史のために―野上豊一郎『翻訳 論』をめぐって―」
2010年 8月 7日	全美星「黒岩涙香と翻訳」 澤田敬司「演劇の翻訳をめぐって―これまでの争点とい まの課題―」 高橋陸郎「こんな翻訳者がいた：西洋古典学者呉茂一 の場合」

121 怪異・妖怪文化の伝統と創造 ―研究のさらなる飛躍に向けて―

●研究域
第1研究域 動態研究（基層）
●共同研究期間
2010（平成22）年4月～2013（平成25）年3月
●研究の概要
本研究は、これまで継続的に行ってきた共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造」等の一連の成果を継承・発展させるとともに、これまでの研究蓄積を整理し、今後の研究をいっそう学際的・総合的に進展させることを目的とした。
本研究では、主として次の課題を検討する。
近年、怪異・妖怪文化に関する研究は飛躍的に進展してきている。しかしながら、怪異・妖怪は、多様な表現媒体に登場するため、必然的に従来の学問的枠組みのみでは捉えられない性格をもっている。とくに従来から、それぞれの学問分野で用語・概念がことなっているため学際的研究の進展を妨げる要因となっている。そこで、本研究では、諸分野の概念や方法論について整理し、学際的研究の促進をはかる。
妖怪研究は、前史的な研究である江戸時代の随筆家や国学者の研究から始まって、現在までかなりの蓄積がある。これらの学史的整理・検討を行う。
これまでは、日本の怪異・妖怪に関する研究であったが、本研究では、ゲスト・スピーカーを多く招いて、外国の類似対象にも視点を広げ、世界比較も試みる。
本研究の最終年度には、海外の妖怪研究者を交えた国際研究会を予定している。
●研究代表者
小松和彦（日文研教授、文化人類学・民俗学）
●幹事
山田奨治（日文研教授、情報学）
●班員
今井秀和（大東文化大学非常勤講師、近世文学）
香川雅信（兵庫県立歴史博物館主査（学芸員）、民俗学・遊戯論）
アダム・カバット（武蔵大学人文学部教授、近世文学・戯作論）
木場貴俊（関西学院大学非常勤講師、近世史）
佐々木高弘（京都学園大学人間文化学部教授、人文地理学）
小林健二（国文学研究資料館研究主幹・教授、国文学）
近藤瑞木（首都大学東京都市教養学部助教、近世文学・絵画論）
齋藤真麻里（国文学研究資料館准教授、国文学）
清水潤（泉鏡花研究会会員、近代文学）
志村三代子（早稲田大学演劇博物館研究員、映画史）
高橋明彦（金沢美術工芸大学美術工芸学部准教授、近世文学・漫画論）
堤邦彦（京都精華大学人文学部教授、近世宗教文学）
常光徹（国立歴史民俗博物館教授、民俗学・口承文芸論）
徳田和夫（学習院女子大学国際文化交流学部教授、中世文学・お伽草子）
永原順子（高知工業高等専門学校准教授、宗教学・中世演劇論）
正木晃（慶應義塾大学非常勤講師、宗教学）
安井眞奈美（天理大学文学部教授、文化人類学・民俗学）
横山泰子（法政大学工学部教授、近世演劇史・映画論）
飯倉義之（日文研機関研究員、口承文芸論）
ブラットゥ・アブラハム・ジョージ（日文研外国人研究員／ネルー大学教授、日本近代文学）
中野洋平（日文研技術補佐員、歴史民俗学）
徳永誓子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、中世史・民俗学）

[海外共同研究員]	
マーク・オンブレロ（グアム大学歴史学部専任講師、日本近現代史）	
魯成煥（蔚山大学校人文大学教授、比較民俗学）	
朴鎰烈（中央大学校文科大学教授、民俗学・韓日比較文化論）	
マティアス・ハイエク（バリ第7大学准教授、歴史社会学）	
●研究発表	
2010年 9月 18日	伊藤慎吾「お伽草子・仮名草子の挿絵に見る擬人化表現—現代視覚文化を視野にいれて—」
2010年12月19日	李松姫「『妖怪図巻』に現れた日本妖怪の形態分類—発明理論トゥリーズ（TRIZ）を中心に—」 齋藤真麻理「吉野の化け蟹—室町物語『岩竹』を読む—」 川田順造「西アフリカ・サバンナのモシ社会における異界とそこに棲むモノたち」
2011年 3月 12日	橋本（関） 泰子「東南アジアにおける異界と精霊信仰」
2011年 5月 7日	ブラットゥ・アブラハム・ジョージ「インド・ケーララ地方の妖怪：エクシ（Yakshi/女性夜叉）について」 井上嘉孝「臨床心理学の視点からみる吸血鬼イメージと現代意識」 佐々木高弘「『聖城怪談録』と『大聖寺町絵図』」
2011年 5月 7日	郷堀ヨゼフ「生者と死者を結ぶ異界とのネットワーク—チェコと日本との比較からみた終末高齢期の生き方について—」 飯倉義之「妖怪の造形化における〈異形の部位〉：妖怪の擬人化をてがかりとして」
2011年 9月 17日	堤邦彦「鬼人成仏証拠之角縁起の位相：〈女房のつめをめぐる説教と江戸怪談〉」 今井秀和「マンガ表現における〈口寄せ〉・〈イタコ〉像の変容」

122 生命文明の時代を創造する

●研究域
第2研究域 構造研究（自然）
●共同研究期間
2010（平成22）年4月～2012（平成24）年3月
●研究の概要
先の共同研究「日本文明史の再建」は、研究会、シンポジウム、実地調査などの精力的な活動により、日本文明史の再建についての討論内容の深化が達成され、日本文明の根幹を形成する森・里・海の思想やライフスタイルの重要性、日本神話のルーツ、とりわけ南方文化の影響について、きわめて新しい成果を得ることができた。
今回の研究では、森・里・海の連環のライフスタイルと稲作漁労民の心を基本とする具体的な地域再生の街づくり実施プランを作成し、地域の活性化に応用していく。このため、産官学連携のもとに共同研究を行うことによって、21世紀の日本のグランドデザインとしての生命文化の構築をめざす。
●研究代表者
安田喜憲（日文研教授、環境考古学）
●幹事
フレデリック・クレインス（日文研准教授、日本文明史）
●班員
赤池学（㈱ユニバーサルデザイン総合研究所代表取締役所長、産業論・ユニバーサルデザイン論）
石田秀輝（東北大学大学院環境科学研究科教授、ネイチャーテクノロジー）

石原三千代（ロータスブルーム代表、アナウンサー食育アドバイザー）
岩田泰（経済産業省博覧会推進室長、中国经济・博覧会行政）
上田善隆（オフィスゼンリユウ（コンサルティングオフィス）代表、広告細作）
上野景文（杏林大学外国語学部客員教授、外交・文明論）
戎見司（イービーエス産興㈱代表取締役、樹木治療師）
遠藤正俊（王子製紙㈱資源戦略本部植林部グループマネージャー、植林）
大熊一寛（環境省総合環境政策局企画調査室長、環境学）
大塚邦明（東京女子医科大学東医療センター教授、医学博士・内科学）
大橋力（財国際科学振興財団主席研究員、情報環境学・サウンドエコロジ―）
小佐野峰忠（会津大学コンピューター理工学部名誉教授、情報科学）
加藤忠哉（三重大学名誉教授、地域活性化論）
神谷昌岳（㈱マキノ技術部長、無機材質化学）
河合徳枝（財国際科学振興財団主任研究員、精神生理学・情報環境学）
岸本吉生（愛媛県警察本部総務課長、環境経済学）
北島正一（㈱電通コミュニケーションプランニング局コンサルティングディレクター、マーケティング・コミュニケーション学）
熊野英介（アマタホールディングス㈱代表取締役兼社長、環境経営）
河野博子（読売新聞東京本社編集委員、国際開発論・情報メディア論）
小林俊安（㈱積水インテグレートリサーチ副社長、環境経営）
小林正明（環境省大臣官房審議官、環境学）
佐藤文一（中小企業庁創業・技術課長、産業経営労働）
佐藤真弓（NPO法人バードライフインターナショナルアジアディビジョン研究員、生物学・生態学）
椎川忍（総務省財務局長、地域政策）
塩谷崇之（真和総合法律事務所弁護士、法律）
塩谷治子（秩父今宮神社前官司）
篠上雄彦（新日本製鐵㈱環境部環境リレーションズグループグループマネージャー、資源エネルギー）
清水昭（エミリオ森口クリニック院長、脳神経外科・産業医）
下原勝憲（同志社大学理工学部教授、情報科学）
菅節子（日本文理大学入試広報サービス部長、キャリア教育）
杉田定大（日本商品委託者保護基金専務理事、経済学）
園部信幸（元財国際環境技術移転研究センター企画広報部長、高分子化学・環境技術移転）
竹林征三（富士常葉大学名誉教授、風土工学）
竹林征雄（アマタホールディングス㈱取締役、環境と産業）
田中章義（アジア国際支援財団理事・作家、環境と人間）
田中克（京都大学名誉教授、応用生物科学）
谷口正次（資源・環境戦略設計事務所代表、鉱産資源学）
嶋謙一（会宝産業㈱国際リサイクル教育センター長、静脈産業論・環境マネージメントシステム論）
十市勉（財日本エネルギー経済研究所常務理事、エネルギー資源学）
中井徳太郎（環境省総合環境政策局総務課長、経済学）
永里善彦（㈱旭リサーチセンター代表取締役社長、エネルギー科学）
永野博（政策研究大学院大学教授、科学政策）
長野麻子（内閣府食品安全委員会事務局総務課長補佐、農林水産行政）
中山厚（北海道財務局長、国土保全）
名越万里子（元立命館大学客員研究員、人類学）
新妻弘明（東北大学大学院環境科学研究科教授、環境工学）
仁科エミ（放送大学ICT活用遠隔教育センター教授、情報環境学・都市計画）
羽田肇（㈱物質・材料研究機構企画部門長、物質材料科学）
秦陽一（ものづくり生命文明機構理事、物質材料科学）
畠山重篤（京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授、水産学）
平川新（東北大学東北アジア研究センター教授、歴史学）
平野英樹（㈱森林総合研究所理事、森林セラピー）
藤崎憲治（京都大学大学院農学研究科教授、昆虫生態学）

古沢広祐（國學院大學経済学部教授、環境経済学）
本田学（国立精神・神経医療研究センター疾病研究第7部部长、生命科学）
前田泰宏（経済産業省商務情報政策局サービス政策課長、ものづくり政策）
真下正樹（日本経団連自然保護協議会顧問、森林経営）
松田美夜子（生活環境評論家、生活環境論）
南敦資（ものづくり生命文明機構事務局事務局次長、地域政策論）
三宅曜子（㈱クリエイティブ・ワイズ代表取締役社長、マーケティングコンサルタント）
宮本昌宏（JSR㈱知的財産部主事、生物学・高分子化学・知的財産権）
村田泰夫（ジャーナリスト、メディア情報）
村山茂樹（日刊工業新聞社モノづくり推進会議実行委員会委員・記者、新聞情報学・モノづくり学）
森鐘一（モリエコロジー㈱代表取締役、水産学）
森本英香（内閣官房内閣審議官、環境学）
山根正義（㈱アグリボビュレイションジャパン代表取締役社長、農業・酪農・畜産）
吉澤保幸（びあ㈱顧問、場所文化の発見と地域の創造）
笠谷和比古（日文研教授、近代史）
森勇一（日文研客員准教授／金城学院大学薬学部非常勤講師、環境考古学・環境史学・昆虫生態学）
●研究発表
2010年 5月 15日 公開講演会「環太平洋の生命文明」
2010年 5月 16日 青山和夫「環太平洋の環境文明史」
坂井正人「ナスカの地上絵とアンデス文明の盛衰：2009年度の現地調査より」
阿子島功「ペルー、ナスカ台地とその周辺の雨・水・耕地―課題の整理―」
本多薫「ナスカ台地におけるラインセンターのネットワーク構造」
高宮広土「沖縄諸島先史時代におけるヒトと動物資源環境」
マーク・ハドソン「琉球列島における環境変動とレジリエンス」
黒住耐二「貝類からみた琉球列島の環境変遷」
新里貴之「フェンサグスク貝塚発掘調査概要」
青山和夫「メソアメリカの環境文明史とセイバル遺跡の発掘調査」
井関睦美「アステカ王国主神殿出土遺物の分析法」
井上幸孝「植民地時代メキシコ中央部の先住民村落―歴史文書から見る世界観・文化的諸概念―」
本谷裕子「近代を飲み込む『マヤ』、近代が生み出す『マヤ』 ―グアテマラ高地マヤの民族衣装の世界―」
米延仁志「活動報告と研究計画」
篠塚良継「小川原湖ボーリング調査」
安田喜憲、北川淳子、藤木利之、Xun LI、山田和芳「エジプト・カルーン湖ボーリング調査」
那須浩郎「グアテマラ・ペルー考古植物及び花粉調査」
奥野充「グアテマラ・ペルー湖沼予備調査」
2010年 6月 12日 【講演会「森里海連環とネイチャーテックによる持続可能な社会を考える」】
総合司会：中井徳太郎
畠山重篤「生命文明と『森里海連環』による国土の創生」
前田泰宏「逆ビジョン―生命文明への途―」
【シンポジウム第1部】
石田秀輝、小幡章 対談「トンボの飛翔メカニズム研究とネイチャーテック」
【シンポジウム第2部】
「森里海連環の取組みによる地域社会と国土の創生」
モデレータ：岸本吉生

	パネリスト：田中克、畠山重篤、篠上雄彦、磯部時男、田島信太郎
2010年 9月 18日	小佐野峰忠「京都クラブモデルの構築の歩みと展望」 谷口正次「西瓜縦割り理論」 竹林征雄「サステイナビリティ・サイエンス」 園部信幸「『国際環境技術移転』について」 中山厚「小さな政府と市場原理主義について」
2010年 11月 30日 ～12月 3日	第39回国際研究集会「環境と文明：過去・現在・未来」
2011年 1月 15日	司会：長野麻子 十市勉「エネルギーと地球温暖化問題の行方」 森鐘一「日本の漁業は存続するか」 森本英香「COP10（第10回生物多様性条約締約国会議）以降の取り組みについて」
2011年 1月 16日	司会：塩谷崇之 竹林征三「災い防ぎ文化をつくる。―環境防災と風土工学の思想―」 上野景文「パチカンで考えたこと」 司会：清水昭 田中克「日本列島魚附き林構想―森里海連環の原点―」 大塚邦明「生体リズムが奏でる神秘―健康の極意が隠されていた―」
2011年 3月 12日	永野博「世界の人材戦略競争」 藤崎憲治「地球温暖化の生物多様性に対するインパクト―昆虫を例にして―」
2011年 6月 25日	田中章義「『東日本に再びの『歌枕』を』―震災後のこどもたちのケアにも想いを馳せながら―」 黒坂三和子「『3.11天の啓示』―大地震・大津波・原発事故―から何を学ぶのか（Japan Report 〈3.11天の啓示：「持続可能な未来への道」：1年目報告〉プロジェクト準備中）」 山本裕「『放射性物質が与える鳥類への影響』―チェルノブイリ原発事故後にわかってきたこと―」
2011年 6月 26日	長野麻子「放射能と食の再生」 十市勉「東日本大震災と今後の日本のエネルギー政策」 谷口正次「『Good-bye! Uranium』 ―トリウム原子力という選択肢―」
2011年 9月 3日	司会：中山厚 竹林征雄「震災による伊里前集落の創成支援」 上野景文「震災に思う：日本人にとって『過去』とは？」 森鐘一「海から見た東日本大震災と今後の復興について」
2011年 9月 4日	司会：塩谷崇之 新妻弘明「震災で何が見え、将来に何を見るか」 竹林征三「1. 日本文明崩壊の岐路 2. 東日本大震災・大津波からの教訓 3. 福島第1原発事故からの教訓」 中山厚「震災後の北海道経済」

123 近代日本における指導者像と指導者論

●研究域
第3研究域 文化比較（制度）
●共同研究期間
2010（平成22）年4月～2013（平成25）年3月
●研究の概要
指導者とはどうあるべきか。指導者に期待される役割とは何か、そうした役割を果たすべき指導者に必要とされる資質とはどのようなものか。そのような資質を備えた指導者を、どのようにしたら育てることができるのか。このような問いは、古くから多くの人によって投げかけられ、さまざまな答えが示された。その問いかけと、答えの出し方は、その国の政治文化の重要な部分を構成するといえる。
本研究は、幕末維新期から現代までを射程に収め、近代以降の日本人が、どのような指導者像を描き、いかなる指導者論を語ってきたかを考察し、日本の政治文化の重要な一面を明らかにしたい。政治文化といっても、政治指導者に関わるイメージや言説だけを対象とするのではない。政治の世界だけではなく、官界、経済界、メディア界、文芸界などにも視野を広げ、分野によって指導者のあり方に変化があるかどうか、また同じ分野でも時代によって変化したのかどうか、を検討する。
この研究を通して、たとえば次のような問題の解明が試みられるだろう。―1930年代に、日本の政治は「下克上」と呼ばれる悪弊に煩わされ、意思決定の分裂症状が発現したが、なぜそのような現象が生じたのだろうか。その原因には、政治権力の構造分析からだけでなく、指導者のあり方をめぐるイメージや意識の面からも明らかにできるところがある。また、指導者不在と言われる時代には、どのような意味での指導者が不在であると考えられたのか、そのとき指導者に期待された役割、能力、資質はどのようなものであったのか、といった問題と取り組むことになるだろう。
●研究代表者
戸部良一（日文研教授、日本近現代史）
●幹事
瀧井一博（日文研准教授、比較法制史・国制史）
●班員
五百旗頭薫（東京大学社会科学研究所准教授、日本政治史）
河野仁（防衛大学校人文社会科学群公共政策学科教授、社会学・軍事社会学）
楠綾子（関西学院大学国際学部准教授、戦後日本外交史）
黒沢文貴（東京女子大学現代教養学部教授、日本近現代史）
佐古丞（大阪学院大学国際学部教授、国際政治学）
佐藤卓己（京都大学大学院教育学研究科准教授、教育社会学・メディア史）
庄司潤一郎（防衛省防衛研究所戦史研究センター長、日本近現代史）
武田知己（大東文化大学法学部准教授、日本政治史）
フレドリック・ディキンソン（ペンシルベニア大学大学院歴史学研究科准教授、日本近現代史）
中西寛（京都大学大学院法学研究科教授、国際政治学）
奈良岡聡智（京都大学大学院法学研究科准教授、日本政治史）
野中郁次郎（一橋大学名誉教授、経営学・組織論）
畑野勇（財東京市政調査会研究員、日本近現代史）
波多野澄雄（筑波大学大学院図書館長兼教授、日本政治外交史）
猪木武徳（日文研所長、労働経済学・現代経済史）
牛村圭（日文研教授、日本近現代史・思想史）
小川原正道（日文研客員准教授／慶應義塾大学法学部政治学科准教授、日本政治史）
鈴木貞美（日文研教授、日本近現代文芸史）

松田利彦（日文研准教授、植民地期朝鮮史） 〔海外共同研究員〕	
黄自進（台湾中央研究院近代史研究所研究員、近代日中関係史）	
●研究発表	
2010年 4月 17日	瀧井一博「伊藤博文―知の政治家―」
2010年 4月 18日	奈良岡聡智「1927年幻の衆議院解散―若槻礼次郎首相のリーダーシップ―」 小川原正道「明治期における『西郷隆盛』像の形成過程―名誉回復から理想的指導者へ―」
2010年 7月 10日	佐藤卓己「スキヤンダル・ジャーナリズムの指導者像―野依秀市のメディア史―」 古川貞二郎「総理官邸におけるリーダーシップ」
2010年 7月 11日	フレドリック・ディキンソン「昭和初期、『大正天皇』像の形成過程：20世紀日本の元首から『悪い』のシンボルへ」 畑野勇「太平洋戦争期の東条内閣における経済政策―総力戦時代の軍人政治家の政治基盤とその喪失―」
2010年 10月 2日	黒沢文貴「鈴木貫太郎―その人と生涯―」 楠 綾子「吉田茂の政治指導」
2010年 10月 3日	番匠幸一郎「軍事組織におけるリーダーシップ」 武田知己「日本外務省の国際戦略―1930年代を中心―」
2010年 1月 29日	野中郁次郎“Phronetic Leadership” 五百旗頭薫「表象の時代―福地源一郎―」
2010年 1月 30日	中西寛「昭和期日本の体制問題と近衛上奏文への道」 庄司潤一郎「朝鮮戦争と山口県―田中龍夫知事を中心として―」
2011年 4月 16日	赤木完爾「戦争指導者としてのフランクリン・D・ローズヴェルト」 波多野澄雄「靖国問題と政治指導者―一生者と死者の間―」
2011年 4月 17日	河野仁「戦場における戦闘指揮官像の日米比較―第2次世界大戦時のコンバット・リーダーシップ論―」 佐古丞「有田八郎―社会党顧問となった元外相―」
2011年 7月 9日	戸部良一「軍政指導者としての宇垣一成」 奈良岡聡智「外交指導者としての加藤高明―21カ条要求問題を中心として―」
2011年 7月 10日	細谷雄一「ベヴィンとイーデン―階級・教養・外交指導―」 小川原正道「社会改良運動指導者としての板垣退助」

124 帝国と高等教育―東アジアの文脈―	
●研究域	
第4研究域 文化関係（旧交圏Ⅰ）	
●共同研究期間	
2010（平成22）年4月～2012（平成24）年3月	
●研究の概要	
本研究は、日本の植民地大学の制度・機能・遺産を、東アジア史の文脈を踏まえながら解明しようとするものである。	
日本の植民地における高等教育機関については、これまでも散発的な言及はなされてきたものの、まとまった本格的研究はほとんどない。その意味では、本研究が、歴史的評価の難しい日本の植民地高等教育機関に関し	
ては、初の体系的、本格的国際共同研究となる。	
本研究は、以下の3部構成で計画された。	

第1部：植民地大学の制度と理念――ここでは、植民地高等教育機関の制度とそれを支えた理念を、欧米の事例との比較をまじえつつ考察する。	
第2部：植民地大学の学知と機能――植民統治構造における植民地大学の位置づけを分析したうえで、人文・社会・自然科学が帝國的認識空間のなかで果たした機能について解明する。	
第3部：植民地大学の遺産――第二次世界大戦終結後の韓国・台湾における高等教育への影響や、技術移転・文化蝕変など地域形成に関わる知的インフラの形成に与えた影響を考察する。（公募研究）	
●研究代表者	
酒井哲哉（日文研客員教授／東京大学大学院総合文化研究科教授、日本政治外交史）	
●幹事	
松田利彦（日文研准教授、近代日朝関係史）	
●班員	
浅野豊美（中京大学国際教養学部教授、国際関係史）	
飯島渉（青山学院大学文学部教授、中国近代史）	
石川健治（東京大学大学院法学政治学研究科教授、憲法）	
石川裕之（畿央大学教育学部助教、比較教育史）	
馬越徹（名古屋大学名誉教授、比較教育史）	
片岡龍（東北大学大学院文学研究科准教授、日本思想史）	
川尻文彦（愛知県立大学外国語学部准教授、中国近現代思想文化史）	
通堂あゆみ（東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室調査員、朝鮮近代史）	
中生勝美（桜美林大学人文学系教授、文化人類学）	
松田吉郎（兵庫教育大学学校教育研究科教授、台湾教育史）	
米谷匡史（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授、社会思想史）	
瀧井一博（日文研准教授、法制史）	
〔海外共同研究員〕	
呉密察（国立成功大学台湾文学系教授、台湾史）	
金昌祿（慶北大学校法学専門大学院教授、韓国法制史）	
崔鍾庫（ソウル大学校法科大学院教授、韓国法制史）	
白永瑞（延世大学校歴史学科教授、東アジア近現代史）	
劉書彦（清雲科技大応用外国語学科助理教授、日本植民地教育史）	
●研究発表	
2010年 4月 3日	崔鍾庫及び班員「ソウル大学法学大学史」編纂をめぐる懇談会
2010年 4月 4日	崔鍾庫「ソウル大学校の歴史と京城帝国大学の問題」
2010年 6月 5日	瀧井一博「国制知としての帝国大学」 石川健治「コスモスその後」
2010年 7月 31日	飯島渉「植民地科学と帝国の学知」
2010年 10月 2日	酒井哲哉「趣旨および今年度研究会の予定について」
2010年 12月 4日	川尻文彦「近代東アジアにおける『学知』の連鎖」
2011年 2月 4日	尾高文庫の調査
2011年 2月 5日	片岡龍「植民地大学の学術の特色をどのように捉えるか―京城帝国大学法文学部の朝鮮文化研究を一例として―」 劉書彦「台湾総督府における農業研究体制の『適地化』展開過程―台北帝国大学理農学部を中心に―」
2011年 4月 2日	米谷匡史「京城帝大の『朝鮮社会経済史』研究と『東亜協同体』論」
2011年 6月 4日	全京秀「京城學派の人骨研究と戦時人類学：今村豊の南柯一夢（？）」 中生勝美「台北帝国大学土俗・人種学研究室の研究活動」
2011年 7月 30日	飯島渉「動植物の交換をめぐる帝国の学知、あるいは生態学の系譜について」 長沢一恵「京城帝国大学における理工学部の成立とその背景」

125 「日本浪漫派」とアジア	
●研究域	
第4研究域 文化関係（新交圏）	
●共同研究期間	
2010（平成22）年4月～2011（平成23）年3月	
●研究の概要	
本研究の第一の目的は、これまでの「日本浪漫派」に関する研究を踏まえて、その未解決の部分を問題点として確定することである。	
第二の目的は、「日本浪漫派」研究の外延を拡げて、中国と韓国の近代文学における近代意識を「日本浪漫派」のアナロジーのうえで研究することである。具体的に示せば、	
(1) 保田与重郎のイロニー観を批評理論として定着させる。	
(2) 文学における伝統の意義を保田与重郎の古典文芸観のなかで具体化する。	
(3) 「近代の超克」の思想を、中国と韓国というアジアの共通意識として究明する。	
これらによって、従来接点が見出しにくかった「日本浪漫派」とアジア世界を結びつけることをめざしたい。（公募研究）	
●研究代表者	
呉京煥（日文研外国人研究員／釜山大学校人文学日語日文学科教授、日本近代文学）	
●幹事	
劉建輝（日文研准教授、日本近代文学）	
●班員	
浦田義和（佐賀大学文化教育学部教授、日本近代文学）	
奥山文幸（熊本学園大学経済学部教授、日本近代文学）	
川口隆行（広島大学大学院教育学研究科准教授、日本近現代文学）	
河田和子（九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者、日本近代文学）	
五味潤典嗣（大妻女子大学文学部専任講師、日本近代文学）	
坂元昌樹（熊本大学文学部准教授、日本近代文学）	
佐野正人（東北大学大学院国際文化研究科准教授、日本近代文学）	
竹内清己（東洋大学文学部教授、日本近代文学）	
田中益三（法政大学文学部専任講師、日本近代文学）	
長澤雅春（佐賀女子短期大学キャリアデザイン学科教授、日本近代文学）	
西原和海（文芸評論家、日本近代文学）	
西村将洋（西南学院大学国際文化学部准教授、日本近代文学）	
野坂昭雄（大分県立芸術文化短期大学国際文化学科准教授、日本近代文学）	
山崎義光（大阪府立工業高等専門学校准教授、日本近代文学）	
山本直人（東洋大学非常勤講師、日本近代文学）	
Ryan MORRISON（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、Japanese Literature）	
稲賀繁美（日文研教授、比較文化史）	
上垣外憲一（日文研客員教授／大手前大学総合文化学部教授、比較文化）	
鈴木貞美（日文研教授、日本文化思想史）	
●研究発表	
2010年 5月 22日	呉京煥「研究の展望」
2010年 7月 24日	呉京煥「初期作品における保田与重郎のイロニーの発生」 劉建輝「保田與重郎と蒙疆」 鈴木貞美「『近代の超克』思想の展開と保田與重郎『近代の終焉』」

2010年 9月 25日	山崎義光「林房雄における1930年代の浪漫主義的転回―『青年』前後―」 河田和子「戦時下の朝鮮・大陸の旅と〈世界交通路〉―保田與重郎の『蒙疆』―」
2010年 11月 27日	長澤雅春「親日“朝鮮文学”と日本浪漫派」 坂元昌樹「〈文学史〉の政治学―保田與重郎とその古典批判の位置」
2011年 1月 29日	西村将洋「保田与重郎とセカイ」 野坂昭雄「1933年の保田與重郎とイロニー」 奥山文幸「蓮田善明の昭和16年―『鴨長明』と『有心』を中心に―」
2011年 3月 26日	田中益三「檀一雄の戦前・戦後―中国との関連で―」 五味潤典嗣「敗北への想像力（保田与重郎の敗戦前夜）」 佐野正人「戦争期の言語的抗争（帝国の言語vs抵抗の言語）」

126 東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に―	
●研究域	
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）	
●共同研究期間	
2010（平成22）年4月～2013（平成25）年3月	
●研究の概要	
東アジアにおいては、文化のグローバル化や地球環境問題など、21世紀に対応しようように知のシステムを根本的に再編することが問われている。各国それぞれ違いをもつが、それらの基盤をなしたのは、19世紀半ばに「西洋」文化を受け入れ、伝統的なシステムの近代的再編にいち早く着手し、ヨーロッパやアメリカとは相対的に独自なものを形づくった日本の制度が、台湾、朝鮮、中国大陸に伝播していったものである。	
顕著な例として、大学の学部編成に示される知的システムにおいて、宗教の占める位置をあげることができる。19世紀のヨーロッパの標準では、宗教学は、キリスト教神学に付随するものとされ、人文社会科学および自然科学は基本的に別領域とする知的システムがつくられていた。だが、日本においては、神学部にあたるものはつくらず、国立大学文学部の哲学科内に宗教学科が置かれた。また、19世紀半ばのイギリスにおいて成立した工学を、世界にはるかに先駆けて総合大学の一学部として組み込んだ。これらには、さまざまな歴史的文化的条件が働いているが、この編成は20世紀を通じて東アジアに共有された。	
このよう東アジアに独自な知的近代化の様相は、受け入れた「西洋」文化の要素と、それを受けとめた「伝統」的要素、そして歴史的条件、近代化を推進した価値観を検討することによって、はじめて明らかにしうる。それらが、どのような結果を生み、今日に至っているかの再検討が、東アジアの将来を展望するうえで不可欠である。とりわけ、工業化にともなう社会問題の発生、都市の膨張、森林の大規模伐採による洪水の多発、公害などの近代化の弊害を乗り越え、克服しようとしてきたさまざまな営みも再検討することが、今日、問われているだろう。	
この課題については、国際シンポジウムも含めて、共同研究として6年間取り組んできたが、知的システムの根幹をなす諸概念とその組織（編成）のあり方への関心は、東アジアで急速に高まっている。これまでの成果を集約し、今日、ありうべき知的システムの構築に資する国際的研究の気運をいっそう高め、展開することが本研究の目的である。	
●研究代表者	
鈴木貞美（日文研教授、日本文化思想史）	

●幹事
伊東貴之（日文研教授、中国思想史・日中比較文学・思想）
●班員
浅岡邦雄（中京大学文学部准教授、読書空間論）
阿毛久芳（都留文科大学文学部教授、近現代史）
荒川清秀（愛知大学国際コミュニケーション学部教授、中国語学）
荒木正純（白百合女子大学文学部教授、イギリス文学）
有馬学（九州大学名誉教授、近現代史）
磯部敦（奈良女子大学文学部准教授、明治期出版史）
井上健（東京大学大学院総合文化研究科教授、文学理論・翻訳）
今村忠純（大妻女子大学比較文化学部教授、比較文化学）
岩月純一（東京大学大学院総合文化研究科准教授、ベトナム言語政策）
王晓葵（愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員、日中比較文化史）
岡田建志（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授、ベトナム史）
梶山雅史（岐阜女子大学文化創造学部教授、教育学・日本教育史）
金子務（大阪府立大学名誉教授、科学史）
上垣外憲一（大手前大学総合文化学部教授、日韓比較文化）
川島真（東京大学大学院総合文化研究科准教授、日中外交史）
川尻文彦（愛知県立大学外国語学部准教授、日中比較歴史）
衣笠正晃（法政大学国際文化学部教授、日本文学研究史）
木村直恵（学習院女子大学国際文化交流学部准教授、日本近代文化史）
小谷野敦（比較文学者、比較文学）
権藤愛順（甲南大学文学部非常勤講師、日本近代文学）
佐藤一樹（二松学舎大学国際政治経済学部教授、中国思想史）
佐藤バーバラ（成蹊大学文学部非常勤講師、女性史）
澤田晴美（群馬県立女子大学非常勤講師、演劇史・文化史）
全美星（神戸大学大学院人文学研究科講師、日本近代文学）
須藤遙子（愛知県立芸術大学非常勤講師、メディア史・映画史）
孫安石（神奈川大学外国語学部教授、東アジア・メディア研究）
孫江（静岡文化芸術大学文化政策学部教授、宗教社会学・比較思想史・中国政治論）
高柳信夫（学習院大学外国語教育研究センター教授、中国近代思想）
竹村民郎（元大阪産業大学教授、経済史）
竹本寛秋（北海道大学高等教育推進機構科学技術コミュニケーション教育研究部門特任助教、日本文学）
田中比呂志（東京学芸大学教育学部教授、東洋史）
陳継東（青山学院大学国際政治経済学部教授、宗教学）
陳捷（国文学研究資料館准教授、日中比較文化）
陳力衛（成城大学経済学部教授、日本語史・日中対照言語学）
寺澤行忠（慶應義塾大学名誉教授、日本中世文学）
十重田裕一（早稲田大学文学学術院教授、近現代文学・映画）
中川成美（立命館大学文学部教授、明治期文学）
中嶋隆（早稲田大学教育・総合科学学術院教授、徳川期文学）
野網摩利子（東京大学大学院総合文化研究科助教、日本近代文学）
橋本行洋（花園大学文学部教授、言語学）
林正子（岐阜大学地域科学部教授、日本近代文学）
兵藤裕己（学習院大学文学部教授、語り物）
平野健一郎（アジア歴史資料センター長、政治学・国際交流史）
福井純子（立命館大学非常勤講師、芸能史）
星野靖二（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所助教、宗教史）
増田周子（関西大学文学部教授、随筆）
松田清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、洋学史・科学技術史）
真鍋昌賢（北九州市立大学文学部准教授、大衆演芸）
村田雄二郎（東京大学大学院総合文化研究科教授、中国哲学・東洋史）
日野由希（国士館大学文学部講師、日本近代文学）
リース・モートン（東京工業大学外国語研究教育センター教授、近現代文学）
茂木敏夫（東京女子大学現代教養学部教授、国際関係論）
安田敏朗（一橋大学大学院言語社会研究科准教授、近代日本語史）

安野一之（元日文研技術補佐員、国文学研究）
八耳敏文（青山学院女子短期大学教授、科学史）
山本美紀（環太平洋大学次世代教育学部准教授、芸能文化）
吉岡亮（苫小牧工業高等専門学校准教授、文学（演劇））
李梁（弘前大学人文学部教授、中国近代思想）
磯前順一（日文研准教授、宗教学）
稲賀繁美（日文研教授、美術史・比較文化史）
郭南燕（日文研准教授、日本近代文学・日中文化交流）
金哲（日文研外国人研究員／延世大学校教授、韓国近現代文学）
フレデリック・クレインス（日文研准教授、科学史）
小松和彦（日文研教授、文化人類学）
多田伊織（日文研客員准教授／京都大学人文科学研究所非常勤講師、日中文化交流史・東アジアの出土文物（おもに木簡）研究・印度学・中国学・日本学）
韓東育（日文研外国人研究員／東北師範大学歴史文化学院教授、文化交流史）
堀まどか（日文研機関研究員、日本文学・比較文学）
依岡隆児（日文研客員教授／徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授、比較文化学）
劉建輝（日文研准教授、東アジア文化交流史）
〔海外共同研究員〕
章清（復旦大学歴史学系教授、中国近代史）
馮天瑜（武漢大学中国伝統文化研究中心教授、中国史）
黄克武（台湾中央研究院近代史研究所教授、中国近代史）
麻国慶（中山大学人類学系教授、人類学）
王中忱（清華大学人文社会科学学院教授、比較文学）
●研究発表
2010年 5月 15日 鈴木貞美「概念編成史研究と文化史の書き換え」 ローマン・ローゼンバウム「日本における『戦後』という概念」
2010年 5月 16日 ジェフリー・アングルス「文学作品の『翻訳』をめぐる」
2010年 7月 16日 〈第94回シンポジウム「東アジアにおけるトランスナショナル ～ 18日 人文学の可能性」〉
【第1セッション】 司会：松田利彦 林志弦「トランスナショナル人文学―何をなさぬべきか―」 指定討論：有馬学 鈴木貞美「東アジア人文学の特殊性を考える」 指定討論：尹相仁 黄静雅「文学におけるトランスナショナル・パラダイム―争点と課題を中心に―」 指定討論：鈴木貞美
【第2セッション】 司会：三谷博 瀧井一博「伊藤博文のナショナリズム観」 指定討論：朴煥斌 李成市「国境を越えるマルクス主義史学―白南雲の歴史的叙述を中心に―」 指定討論：鄭多函
【第3セッション】 司会：有馬学 松田利彦「日中戦争期における東亜聯盟運動と朝鮮・朝鮮人」 指定討論：Michael 金 李文令「地域研究とトランスナショナル・パラダイム」 指定討論：小山哲 関佳英「不均等な相互借用の過程―多文化政策と結婚移民者女性間の相互借用過程―」 指定討論：山下英愛

【第4セッション】 司会：呉京煥 河栄俊「植民主義から植民的な遭遇へ―フランス革命とハイチ革命を一緒に読む方法―」 指定討論：稲賀繁美 坪井秀人「近代への従属と抵抗―トランスナショナルリズムのなかの李箱―」 指定討論：金京媛 司会：鈴木貞美、林志弦 総合討論
2010年 10月 16日 伊東貴之「近代日本における中国学・東洋学の成立と概念編成」 石川肇「戦後国語教科書における『戦争』概念の変化」
2010年 10月 17日 堀まどか「20世紀前半期の日本の芸術芸能の国外発信と芸術概念の編成」
2010年 12月 18日 〈第99回シンポジウム「日韓相互認識―移動と視線～ 20日 1910 - 2010―」〉 【セッション1 古代史をめぐる認識】 座長：尹相仁 吉井秀夫「朝鮮総督府古蹟調査と『日本』考古学の形成―京都帝国大学考古学研究室の場合―」 延敏洙「神功皇后伝説と近代日本の韓国支配」 指定討論：李宇泰
【セッション2 韓国社会と儒教】 座長：鄭在貞 金度亨「韓末・日帝初期の儒学知識人の日本観」 邊英浩「朝鮮儒者の思想構造・対外観・日本観」 指定討論：金攸奎
【セッション3 知識人・文学者の視線】 座長：呉京煥 李惠鈴「植民者は語られ得るのか―廉想渉の小説における日本人、その表象（不可能性）―」 尹大石「李光洙の日本―日帝末期を中心に―」 指定討論：南相九
【セッション4 朝鮮植民地支配と「近代性」】 座長：鈴木貞美 上垣外憲一「自叙伝における自己弁護の構造―金素雲の場合―」 瀧井一博「伊藤博文と高宗」 浜口裕子「朝鮮半島と『満洲国』との間の人の移動」 韓錫政「植民地時代、あるいは東アジアのHigh Modernの拡散」 指定討論：尹相仁
【セッション5 戦後の日韓関係と相互認識】 座長：松田利彦 太田修「戦後日韓交渉における植民地支配問題―『null and void』論を中心に―」 黄鎬德「日本、それでもなお世界の入り口、あるいは透明な壁―李御寧と金洙暎、日本観からみた後期植民地人の二つの肖像―」 指定討論：崔在喆
【セッション6 歴史資料の有効活用にむけて】 座長：戸部良一 木村健二「植民地朝鮮における地方行政当局・団体による刊行物の残存状況とその利用について」 広瀬玲子「植民地朝鮮における行政当局刊行物から在朝日本人女性史の可能性を探る」 辛珠栢「朝鮮における高等教育と在朝日本人に関する資料調査」 加藤聖文「国文学研究資料館における東アジア関係資

	料の調査と収集―守屋栄夫文書の紹介―」 指定討論：松田利彦 【セッション7 総合討論】 座長：劉建輝
2011年 3月 19日	東晴美「二代目市川左团次の訪欧と『鳴神』」 野網摩利子「具体物への感情移入―漱石『門』の生成方法として―」
2011年 3月 20日	権藤愛順「明治期における感情移入美学の受容と展開―『新自然主義』から象徴主義まで―」 吉本弥生「感情移入美学と人格主義―阿部次郎のリップス受容―」
2011年 5月 21日	金哲「抵抗と絶望―親日派の言説をめぐる韓国民族主義のある断面」 楊偉「日本を方法とする日本学の新展開」
2011年 5月 22日	ロー・ダニエル「地政心理学への挑戦―国民性、国柄、そして人類文化論を超えて―」
2011年 7月 16日	東晴美「越境する歌舞伎：『鳴神』とロシア・新劇・石川淳」 鈴木貞美「文学概念二題 ①明治期『北欧文学』概念と日本近代文藝史の再編 ②トランス・ナショナル文化研究の進め方」
2011年 7月 17日	日中戦争ドキュメンタリーフィルム5本（蒋介石軍側フィルムを含む）上映会 解説：戸部良一
2011年 9月 17日	林正子「〈民間伝承〉から〈民族文化〉へ―柳田民俗学のハイネ受容と近代日本の自己探究―」 鍋本政彦「『Kultur』概念編成の一断面―西欧化＝グローバル化に対峙する『生の哲学』―」

127 日記の総合的研究
●研究域 第5研究域 文化情報（日本における日本研究）
●共同研究期間 2010（平成22）年4月～2013（平成25）年3月
●研究の概要 人は何故、日記を記すのであろうか。言い換えれば、日記を記すことによって、日本人はいったい、何を得ようとしていたのであろうか。 また、文学者たちは何故、日記という形式を用いて、自己の作品を世に問うたのであろうか。さらに、貴族たちは、何故にあのように膨大な日記（古記録）を記し続けたのであろうか。 本研究においては、各時代の日本史学、日本文学の専門家はもちろんのこと、心理学なども含め、それぞれの分野の第一線の研究者を一堂に会して、研究会における議論を集積することによって、日記と日本人との関わりを、総合的に究明しようとするものである。 それぞれの記主の立場と記載目的、記述の内容と意義を読み解きながら、時代の特質と変化、また作品の本質を探り出し、さらには「日記」と呼ばれるものの分類や、その評価、享受史の観点など、既往の研究を超える角度からの解明も行う。 その際、それぞれの研究発表を超えて、異なる分野の研究者が複数の研究発表と交わってどのような化学変化が生じることになるのか、本研究はそうした実験的な試みを視野に入れている。
●研究代表者 倉本一宏（日文研教授、日本古代史（政治史・古記録学））

●幹事
テモテ・カーン（日文研助教、比較文化論）
佐野真由子（日文研准教授、外交史）
●班員
蘭香代子（駒沢女子大学人文学部教授、臨床心理学）
有富純也（東京大学大学院人文社会系研究科助教、日本古代史）
池田節子（駒沢女子大学人文学部教授、日本中古文学）
石田俊（元京都大学大学院文学研究科研究員、日本近世史）
板倉則衣（元中央大学大学院院生、日本古代史）
井原今朝男（国立歴史民俗博物館歴史研究部教授、日本中世史）
今谷明（帝京大学文学部特任教授／日文研名誉教授、日本中世史）
磐下徹（関東学園大学経済学部講師、日本古代史）
上野勝之（元京都大学大学院生、日本古代史）
上島享（京都府立大学文学部准教授、日本中世史）
小倉久美子（万葉古代学研究所研究員、日本文化史）
小倉慈司（国立歴史民俗博物館准教授、日本古代・中世・近世史）
尾上陽介（東京大学史料編纂所准教授、日本中世史）
久富木原玲（愛知県立大学日本文化学部教授、日本中古文学）
小嶋菜温子（立教大学文学部教授、日本中古文学）
古藤真平（古代学協会非常勤研究員、日本古代史）
佐藤全敏（信州大学人文学部准教授、日本古代・中世史）
佐藤泰弘（甲南大学文学部教授、日本中世史）
シャバリナ・マリア（京都大学大学院文学研究科博士後期課程、日本古代史）
下郡剛（沖縄工業高等専門学校総合科学科准教授、日本中世史）
末松剛（京都造形芸術大学芸術学部准教授、日本中世史）
菅原昭英（元東京大学史料編纂所教授、日本中世史）
瀬田勝哉（武蔵大学人文学部教授、日本中世史）
曾我良成（名古屋学院大学人間健康学部教授、日本古代史）
富田隆（駒沢女子大学人文学部教授、心理学、日本古代史）
中町美香子（東京大学／花園大学非常勤講師）
中村康夫（国文学研究資料館教授、日本中古文学）
中西和子（京都橋大学非常勤講師、歴史地理学）
名和修（陽明文庫文庫長、日本文化史）
西村さとみ（奈良女子大学文学部助教、日本古代史）
畑中彩子（学習院大学文学部非常勤講師、日本古代史）
藤本孝一（龍谷大学客員教授、日本文化史）
堀井佳代子（同志社大学文学研究科博士後期課程、日本古代史）
松園斉（愛知学院大学文学部教授、日本中世史）
松田泰代（山口大学大学院人文科学研究科准教授、図書館学）
三橋順子（東京経済大学非常勤講師、日本文化史）
三橋正（明星大学人文学部教授、日本古代史）
森公章（東洋大学文学部教授、日本古代史）
山下克明（大東文化大学東洋研究所研究員、日本文化史）
横山輝樹（元総合研究大学院大学院生、日本近世史）
吉川真司（京都大学大学院文学研究科教授、日本古代史）
吉川敏子（東海大学文学部教授、日本古代史）
カレル・フィアラ（福井県立大学学術教養センター教授、国語学・言語学）
荒木浩（日文研教授、日本文学）
稲賀繁美（日文研教授、比較文学・比較文化）
井上章一（日文研教授、建築史・意匠論）
榎本涉（日文研准教授、日本中世史（外交・国際交流））
笠谷和比古（日文研教授、日本近世史・武家社会論）
近藤好和（日文研客員教授／國學院大學文学部兼任講師、有職故実）
鈴木貞美（日文研教授、近現代文芸・思想・文化）
瀧井一博（日文研准教授、国制史・比較法史）
マルクス・リュッターマン（日文研准教授、日本史・近世史（社会史・文化史・古文書学））
門脇朋裕（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、日本法

制史）	
吉田小百合（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程、日本中古文学）	
[海外共同研究員]	
呉海航（北京師範大学法学院教授）	
●研究発表	
2010年 5月 8日	史料調査『御堂閔白記』『小右記』『権記』『栄花物語』～9日 など
2010年 7月 17日	松園斉「中世人と日記―その発生をめぐって―」 板倉則衣「古記録から見える儀式観―斎王卜定を中心として―」 三橋順子「『台記』に見る藤原頼長のセクシュアリティの再検討（序説）」 井原今朝男「日記にあらざる古記録―日記拔書・古文書・書面・帳簿類をまとめた『申沙汰記』―」
2010年 7月 18日	磐下徹「日記と指図」 有富純也「清涼殿の出入方法」 倉本一宏「『御堂閔白記』自筆本の裏書について」 近藤好和「儀礼にみる公家と武家―『建内記』の事例から―」
2010年 9月 11日	池田節子「『紫式部日記』・『栄花物語』・『御堂閔白記』の比較検討」 末松剛「儀礼運営における故実情報の従来―儀礼・故実資料としての書状―」 上野勝之「古記録における宗教習俗の記載」 荒木浩「『日藏夢記』の『具迎來僧侶五箇人日記也』について」 石田俊「『勸修寺家文庫における日記』 ―『三長記』を事例にして―」
2010年 9月 12日	森公章「遣外使節と求法・巡礼僧の日記」 門脇朋裕「盛岡藩家老執務日記からみた幕府法の執行状況―生類憐み令を中心に―」 鈴木貞美「『日記文学』とは何か」 藤本孝一「日記は第一次史料か―『明月記』卷子本の継なぎ方―」
2010年 10月 23日	中町美香子「『清懈眼抄』にみる空間意識―『内裏三町』について―」 吉田小百合「古記録から物語へ―『小右記』長徳元年から長保元年の記事を軸として―」 榎本涉「日記と僧伝の間」 シャバリナ・マリア「撰関記における有職故実の相伝に関する一考」
2010年 10月 24日	富田隆「日記の心理分析における認知的不協和理論の応用」 中村康夫「日記について」 山下克明「『陰陽家安部氏・賀茂氏の記録』―家本と日記―」 西村さとみ「故実・先例と時代認識」
2010年 12月 18日	下郡剛「日記に見える院宣について」 吉川真司「『類聚世要抄』と興福寺古記録」 上島享「仏教史を語る時代の到来」
2010年 12月 19日	尾上陽介「日記翻刻の問題点」 横山輝樹「公式史書・記録よりみた江戸幕府武芸奨励」 畑中彩子「日記に見る『叙位』の意識」 蘭香代子「日記に内在する無意識の心理の考察―御堂閔白記における「雨」の記述を中心にして―」
2011年 2月 19日	佐藤全敏「宇多天皇の文体」 名和修「『御堂閔白記』古写本について」 古藤真平「『政事要略』阿衡事所引の『宇多天皇御記』

	―その基礎的考察― 佐藤泰弘「『京大本兵範記紙背文書』について」
2011年 2月 20日	吉川敏子「藤原道綱の評価―古記録の主観と客観―」 久富木原玲「13、14世紀の日記――人称かな日記の成立について―」 曾我良成「心の記録としての日記―喜怒哀楽、花鳥風月、羨望・嫉妬―」 小倉慈司「禁裏本と書陵部蔵書」
2011年 4月 16日	瀧井一博「『明治天皇記』の世界―近代的立憲君主の誕生―」 中西和子「『駒井日記』にみる伏見築城と大和豊臣家」
2011年 4月 17日	菅良樹「嘉永・安政期の大坂町奉行・川村修就によるロシア軍艦ディアナ号来航問題と安政の南海地震への対応―新潟市歴史文化課所蔵『日新録』の翻刻をとおして―」 佐野真由子「アメリカ使節の將軍拝謁儀礼をめぐる文化摩擦と交流―ハリス日記を中心に―」
2011年 7月 16日	小倉久美子「『万葉集』における日付の役割」 カレル・フィアラ「『平家物語』の『本筋』の始まりの問題」
2011年 7月 17日	古藤真平「延喜二年三月の飛香舎藤花宴」 今谷明「政変・事件と日記」

128

文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅱ）
●共同研究期間
2010（平成22）年6月～2011（平成23）年5月
●研究の概要
本研究がめざすところは、宮沢賢治の童話作品と詩を、宗教（主に仏教）の教えと民間伝承の双方から再検討し、賢治作品に顕現されている「日本性と和心」、「普遍性と平等精神」を引き出し、確定するとともに、従来のステレオタイプな賢治像を書き換えることである。
賢治の散文作品は、幻想とファンタジーに基づいた単なる童話に過ぎないと以前から軽視され、これまでの賢治研究もこうした観点からなされてきた。しかし、賢治作品の愛読者は非常に多数に及んでいる。彼らを賢治に惹きつけている見えざる力は、（単なるファンタジーではなく）おそらく彼独自の宇宙観とビジョンにほかならない。本研究では、賢治のこの側面―「世界が全体として幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」という賢治の思想の底を流れている観念と哲学を明確にすることをめざした。（公募研究）

●研究代表者
ブラットゥ・アブラハム・ジョージ（日文研外国人研究員／ジャワハルラル・ネルー大学教授、日本文学・宮沢賢治研究）
●幹事
小松和彦（日文研教授、日本民俗学・妖怪学・文化人類学）
●班員
青木美保（福山大学人間文化学部教授、日本近現代文学・宮沢賢治の文学と思想・井伏鱒二の文学・村上春樹の文学）
牛崎敏哉（宮沢賢治記念館副館長、宮沢賢治研究）
鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、宗教学・哲学）
黒澤勉（岩手医科大学大学院共通教育センター教授、日本文学・宮沢賢治研究）

杉浦静（大妻女子大学文学部教授、宮沢賢治研究）	
鈴木健司（文教大学大学院言語文化研究科教授、日本文学・宮沢賢治研究）	
中地文（宮城教育大学教授、教育学・日本文学）	
萩原昌好（十文字学園女子大学人間生活学部教授、現代児童文学・宮沢賢治研究）	
森三紗（岩手大学宮沢賢治センター副代表、宮沢賢治研究・石川啄木研究）	
望月善次（盛岡大学長、岩手大学名誉教授、宮沢賢治・石川啄木研究、教育学）	
山根知子（ノートルダム清心女子大学文学部教授、日本文学）	
荒木浩（日文研教授、日本文学）	
稲賀繁美（日文研教授、比較文学・比較文化・文化交流史）	
鈴木貞美（日文研教授、日本近現代文芸・思想史、日本近現代文化史）	
●成果物	
ブラットゥ・アブラハム・ジョージ/小松和彦編『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』（法蔵館、2012年3月）	
●研究発表	
2010年 7月 3日	打合せ
2010年 7月 4日	鈴木貞美「宮澤賢治研究の現在―『宮澤賢治イーハトーヴ学事典』思想文化を担当して―」 萩原昌好「宮澤賢治における時間と空間」
2010年 9月 5日	栗原敦「宮澤賢治の仏教とはどのようなものであったか」 稲賀繁美「星と修羅と自己犠牲：宮澤賢治（1896年8月27日～1933年9月21日）の心象へのいくつかの補助線」
2010年 9月 6日	望月善次「賢治短歌にみる宗教意識」 鎌田東二「宮澤賢治と明治・大正・昭和初期の霊性運動」
2010年 11月 6日	牛崎敏哉「童話『ざしき童子（ぼっこ）のはなし』をめぐって」 正木見「賢治と法華経信仰―なぜ浄土真宗から日蓮宗へ改宗したのか?―」
2010年 11月 7日	石井正巳「民間伝承と宮沢賢治」 黒澤勉「岩手の自然・文化からイーハトボ芸術の創造へ」
2011年 1月 8日	青木美保「宮澤賢治世界観の展開―詩『春と修羅』、童話『土神ときつね』、詩集『春と修羅』序―」 山根知子「『或る心理学的な仕事の支度』について」
2011年 1月 9日	西成彦「宮沢賢治と擬人法」 中地文「児童文学と民間伝承―賢治童話の場合―」
2011年 3月 5日	天沢退二郎「『書く人・宮沢賢治』とは何か」 鈴木健司「『銀河鉄道の夜』論・パート5―カムパネルラの母を補助線に―」
2011年 3月 6日	杉浦静「『春と修羅 第二集』における（民間）信仰」 荒木浩「釈教歌と石嶽―宮沢賢治の〈有明〉再読―」
2011年 5月 14日	小松和彦「賢治童話における『童子』をめぐって」 森三紗「宮澤賢治の宗教と民間伝承の融合：世界観の再検討―童話『祭りの晩』考―」 ブラットゥ・アブラハム・ジョージ「賢治作品に投影しているキリスト教的表象：偶然かそれとも意図的か」
2011年 5月 15日	最終まとめ及び論文提出・編集・出版に関する打ち合わせ

129 夢と表象 ―メディア・歴史・文化―

●研究域
第2研究域 構造研究（人間）
●共同研究期間
2011（平成23）年4月～2014（平成26）年3月
●研究の概要
夢と文化現象の関係は根深く強く、その全体像もおよそ広大かつ多様である。本研究は、日本文化研究におけるこの問題の概観を獲得しつつ、個別研究の推進と総合研究への展開を目指して組織された。
本プロジェクトでは、「夢」をキーワードに、日本の古代から現代まで、また、東アジアやヨーロッパまで視野を拡げて、文学、歴史、美術、宗教、時間論など、研究者それぞれが専門的に推進するディシプリンに立脚しつつ、同時に比較文化史的な、また領域横断的な視点を取り入れて研究交流を行い、その表現や認識の在処を考究しようとするものである。たとえば、いろいろな文化的コンテクストの中で、夢がヴィジュアルに表象される場合に、その表象が、さまざまな表現様式やメディアに移入され、また歴史的に推移したりする様態の分析などを、研究上の一つの骨格として構想したい。
一方で、「〈心〉と〈外部〉―表現・伝承・信仰と明恵『夢記』―」などの具体的な文献解読を、共同研究員、既存のグループや海外共同研究員等とも連携しつつ進行させることも計画している。また、近年、「私」に関心を深めるユメ・コトバ・フキダシ―それは、現代文化の顕著な表徴である―相互の文化的関連について、通史的、かつグローバルな研究展開として追いかけてみたい。
スピリチュアリティなど、人間の思考の外部性に対する関心も高く、夢はその問題に深く関わる。またモノと心性と文化表象の在処というのも、重要な関連テーマである。本研究では、こうした周辺の問題へも、広く関心を及ぼしていく。
●研究代表者
荒木浩（日文研教授、日本文学）
●幹事
マルクス・リュッターマン（日文研准教授、中・近世の日本社会史・文化史・古文書学）
●班員
安東民兒（羽衣国際大学産業社会学部教授、絵巻研究、時間表現論）
池田忍（千葉大学普遍教育センター教授、日本美術史（中世絵画史））
入口敦志（国文学研究資料館研究部助教、日本近世文学）
上野勝之（京都大学総合人間学部非常勤講師、日本古代史、宗教史）
加藤悦子（玉川大学芸術学部教授、日本古代・中世絵画史）
河東仁（立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科教授、宗教史）
高橋文治（大阪大学大学院文学研究科教授、中国文学）
丹下暖子（摂南大学非常勤講師、日本文学（和歌文学、日記文学））
中川真弓（日本学術振興会特別研究員（RPD）、日本文学（中世文学））
林千宏（大谷大学／神戸女学院大学非常勤講師、フランス文学（16世紀フランス文学））
平野多恵（十文字学園女子大学短期大学部准教授、中世文学、和歌文学、仏教文学）
福島恒徳（花園大学文学部教授、美術史（日本・東洋絵画史、禪宗美術史、室町水墨画史））
藤井由紀子（清泉女子大学文学部専任講師、日本中古文学、物語文学）
松園斉（愛知学院大学文学部歴史学科教授、日本古代・中世文化史）
松本郁代（横浜国立大学国際総合科学部准教授、日本文化史・日本中世史）

室城秀之（白百合女子大学文学部国語国文学科教授、日本文化史・日本中世史）
伊東貴之（日文研教授、中国近世思想史、日中比較文学・思想）
榎本渉（日文研准教授、日本中世史）
郭南燕（日文研准教授、日本近代文学、環境文化、日中文化交流、言語教育）
木村朗子（日文研客員准教授／津田塾大学学芸学部国際関係学科准教授、日本文学（平安鎌倉期））
倉本一宏（日文研教授、歴史学（日本古代政治史、古記録学、平安貴族の精神世界、天皇論））
早川闊多（日文研教授、美術史学、文化史学）
箕浦尚美（日文研プロジェクト研究員／大谷大学非常勤講師、日本中世文学）
楊曉捷（日文研外国人研究員／カルガリー大学教授、日本文学）
[海外共同研究員]
李育娟（国立台湾師範大学国際華語與文化学系助理教授、中日比較文学、日本漢文学、東アジア文化関係）
Ive COVACI（Fairfield University ASIANetwork-Luce Foundation Post-Doctoral Fellow in Japan Studies、日本美術史（中世を中心として））
Jörg B. QUENZER（ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所教授、日本学、日本文学（中近世））
●研究発表
2011年 5月 14日 荒木浩「共同研究『夢と表象―メディア・歴史・文化―』についての趣旨と展望」
2011年 5月 15日 入口敦志「夢の変容―下天托胎場面における吹き出し型の夢―」
上野勝之「貴族社会における悪夢観念―宗教的表象の受容―」
2011年 7月 23日 郭南燕「志賀直哉の文学：夢を見る、夢に見られる」
2011年 7月 24日 藤井由紀子「〈懷妊に関わる夢〉の諸相―『源氏物語』柏木の猫の夢を起点として―」
高橋文治「神仙の夢―吹き出しと雲―」
2011年 9月 17日 笹生美貴子「中国語訳『源氏物語』について―霊夢描写を中心に―」
荒木浩「夢と対話―想像力としての夢、眼を開ける、眼を閉じる―」
2011年 9月 18日 河東仁「聖書における夢とヴィジョン」

130 徳川社会と日本の近代化―17～19世紀における日本の文化状況と国際環境―

●研究域
第3研究域 文化比較（制度）
●共同研究期間
2011（平成23）年4月～2014（平成26）年3月
●研究の概要
日本の近代化は、嘉永6（1853）年、ペリーが東印度艦隊を率いて来日し、米国大統領の親書を手渡すとともに開国通商を求めたという衝撃的な事態の到来から始まると一般には理解されている。その翌年に日米和親条約を締結して開国に踏み切ったのちは、ヨーロッパ諸国と相次いで和親条約を締結し、さらに米国と通商条約を結んで本格的な開国の態勢に入り、その後は一連の条約をめぐる政争から内乱に発展し、明治維新によって天皇を中心とする統一国家が成立し、近代日本が形成されていった、云々。日本人は徳川時代から明治時代に至る歴史のプロセスを、このような形で捉えている。それは紆余曲折とダイナミックな政治ドラマを伴うものではあるが、明

治の日本が最終的にそうした姿をとるに至ったことは、別に不思議であるとも思わない。
しかし、目を転じて日本以外の国々を眺めやるならば、この日本が経験した歴史的プロセスが決してあたりまえでないことが理解できる。同時代のアジア諸国は、そのほとんどが欧米列強の植民地に編入されるか、蚕食の危機にさらされていた。このような19世紀のアジア情勢（それは世界情勢でもあるのだが）を見ると、日本が独立を堅持したうえで、資本主義的経済発展を遂げ、社会の近代化を達成しえたことの文明史的な意義は少なくない。では、それが何故に可能であったのかと問うとき、明治政府が採用した近代化政策を持ち出すだけでは、説明は到底不可能であろう。明治国家に先行して存在し、欧米列強のアジア進出を予見し、国家的規模でその対策を講じ、そして彼らに互しうだけの力を蓄えていた徳川日本の文明史的力量に、自ずから着目せざるをえないであろう。
徳川日本の社会はどのようにして、このような力量を備えるに至ったのか。本研究のテーマはここにある。研究代表者が主宰した前回の「18世紀日本の文化状況と国際環境」では、徳川日本の18世紀に焦点をあて、その社会に胚胎していた新しい文化的動向を広範な分野にわたって解明した。今回は対象を拡大して、17世紀から19世紀に及ぶ徳川社会全般を取り扱い、日本の近代化にとって徳川社会はどのような力=Powerを、いかんにして形成しえたのか、これを多分野の研究者とともに総合的に究明する。
●研究代表者
笠谷和比古（日文研教授、政治史）
●幹事
佐野真由子（日文研准教授、文化交流史）
●班員
伊藤奈保子（広島大学大学院文学研究科准教授、日本工芸史）
岩下哲典（明海大学ホスピタリティーズム学部教授、海外交流論）
上村敏文（ルーテル学院大学准教授、宗教学）
魚住孝至（国際武道大学体育学部教授、武道史）
加藤善朗（京都西山短期大学教授、仏教美術）
上垣外憲一（大手前大学総合文化学部教授、比較文化論）
郡司健（大阪学院大学企業情報学部教授、日本軍事史）
小林龍彦（前橋工科大学大学院工学研究科教授、数学史）
小林善帆（京都女子大学非常勤講師、華道史）
高橋博巳（金城学院大学文学部教授、文化史）
武内恵美子（秋田大学教育文化学部准教授、音楽史）
竹村英二（国士舘大学21世紀アジア学部教授、思想史）
谷口昭（名城大学法学部教授、法制史）
芳賀徹（東京大学名誉教授、文化史）
長谷川成一（弘前大学人文学部教授、日本近世史）
原道生（元明治大学教授、日本演劇史）
平井晶子（神戸大学大学院人文学研究科准教授、歴史人口学）
平木實（京都府立大学文学部非常勤講師、朝鮮史）
平松隆円（名古屋文化短期大学講師、化粧心理学）
藤實久美子（ノートルダム清心女子大学文学部准教授、出版文化史）
前田勉（愛知教育大学教育学部教授、日本思想史）
真栄平房昭（神戸女学院大学文学部教授、海外交流史）
宮崎修多（成城大学文芸学部教授、日本近世文学）
宮田純（関東学院大学非常勤講師、経済思想史）
森田登代子（桃山学院大学国際教養部非常勤講師、比較文化史）
横谷一子（大阪医療福祉専門学校非常勤講師、日本文化史）
脇田修（大阪歴史博物館長、経済史）
和田光俊（科学技術振興機構知識基盤情報部調査役、科学思想史）
フレデリック・クレインス（日文研准教授、文献学）
瀧井一博（日文研准教授、政治思想史）
辻垣見一（日文研客員准教授／京都府立東舞鶴高等学校教諭、地理学）
●研究発表
2011年 4月 9日 笠谷和比古「17～19世紀日本をめぐる研究課題とその意義―共同研究会の趣旨説明―」

		共同研究会運営方針の検討Ⅰ
2011年 4月 10日		共同研究会運営方針の検討Ⅱ
2011年 6月 4日		フレデリック・クレインス「オランダ人による絵踏みの真偽―イメージと実態―」
		前田勉「19世紀日本の読書と政治」
2011年 6月 5日		魚住孝至「近世武士にとっての刀と剣術修行」
		岩下哲典「幕末の尾張藩主徳川慶勝と写真」
2011年 8月 21日		加藤善朗「独湛（黄檗宗）と忍激（浄土宗）」
		郡司健「江戸後期における大砲技術と近代化―ベキサンス（ベクサン）砲の衝撃と西洋兵学の受容―」
		平木實「朝鮮時代後期の身分制度―奴婢制論議を中心に―」
		藤實久美子「江戸文化と木版刊行物―作成工房の様相から流通と顧客まで―」

131 「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的 概念の再検討とその普遍化の試み―

●研究域
第4研究域 文化関係（新交圈）
●共同研究期間
2011（平成23）年4月～2014（平成26）年3月
●研究の概要
日本でも馴染みの深い、「天」「道」「理」「氣」「性」「心」「情」「欲」「礼」といった、儒教思想上の主要概念は、元来、漢語のごく日常的な語彙であったものが、中国思想史の展開において、道家系の諸思想や道教・仏教などとの接触や競合のなかで、次第に洗練の度を加え、宋代に至り、とりわけ朱子学の体系の確立とともに、ほぼ最終的な定式化を見た。次いでそれが、その後の前近代の長い期間にわたって、中国はもとより、朝鮮・韓国、日本、ヴェトナムなど、東アジアの広範な地域に深甚な影響をもたらし、共通の知的な枠組みや世界観、概念上の語彙を提供した。
こうした概念は、同時に、それらが強ち漢字で表記され、日常的な含意とも重複する部分が多々あるがために、道教や仏教における使用例との差異の確認はもとより、儒教思想の内部にあっては、時代や地域、思想家による異同が、ややもすれば等閑視され、先入見によって理解されがちな傾向が存していた。これは、江戸期の儒学をはじめとする、日本思想の理解や日中の思想文化の比較においても、大きな問題点であると言えよう。
加えて、これらの語彙や概念は、前述したように、前近代の東アジアの知識人に共有される、一定の教養の基盤ともなっていたが故に、アリストテレスの哲学やキリスト教の教理、イスラームの諸概念などを理解し、説明する際にも、しばしば参照され、利用された。
本研究では、西洋哲学や日本思想、インド哲学・仏教学、イスラームなどの専門家の知見をも活用しながら、近代的な思惟様式の再検証とともに、安易な比較研究を廃しつつ、現代において、東アジアの伝統思想を普遍化する方途を探ることを最終的な目標とする。
具体的には、朱熹（朱子）の思想体系はまた、万物を生み出す天地のはたらきであると同時に、人間の共感能力とも言える「仁」の概念を媒介に、「心身／身心」の相関を説き、人間の存在についても、周囲の環境である「天地自然」とも共生しつつ、そこに予め埋め込まれた有り様を前提とするなど、精神と身体、主観と客観の二元論など、近代以降の常識的・通俗的な見解とは、大いに異なる様相を見せる。翻って、現代哲学の分野でも、環境倫理学や身体論に加え、現象学や科学哲学の影響下に生態学的な「心」の哲学といったことも論じられるようになった。本研究では、こうした流れにも倅さしつつ、共同研究の実を挙げることをめざす。

●研究代表者	
伊東貴之（日文研教授、中国近世思想史）	
●幹事	
榎本渉（日文研准教授、日本中世史）	
●班員	
青木隆（日本大学文学部中国語中国文化学科准教授、中国思想文化）	
恩田裕正（東海大学清水教養教育センター教授、中国近世思想）	
垣内景子（明治大学文学部教授、近世儒学）	
片岡龍（東北大学大学院文学研究科准教授、日本思想史）	
河野哲也（立教大学文学部教育学科教授、哲学）	
黒住真（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本思想史）	
桑子敏雄（東京工業大学大学院社会理工学研究科教授、哲学）	
小島毅（東京大学大学院人文社会系研究科准教授、儒教史）	
関智英（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程、中国近現代史）	
銭国紅（大妻女子大学比較文化学部・大学院人間文化研究科教授、比較思想史）	
高橋博巳（金城学院大学文学部教授、日本文化・18世紀の東アジア）	
田尻祐一郎（東海大学文学部教授、近世日本思想史）	
陳継東（青山学院大学国際政治経済学部教授、中国近現代仏教史）	
土田健次郎（早稲田大学文学学術院教授、宋代思想史）	
手島崇裕（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻研究生、平安時代対外関係史）	
永富青地（早稲田大学創造理工学部教授、陽明学を中心とする宋明理学の文献学的研究）	
西澤治彦（武蔵大学人文学部教授、文化人類学）	
長谷部英一（横浜国立大学教育人間科学部・大学院環境情報研究院准教授、中国科学史）	
林文孝（立教大学文学部文学科教授、中国近世思想）	
松下道信（皇學館大学文学部講師、中国近世の道教思想史）	
水口拓寿（武蔵大学人文学部准教授、風水文化論）	
横手裕（東京大学大学院人文社会系研究科准教授、中国思想史）	
李梁（弘前大学人文学部教授、中国思想史）	
末本文美士（日文研教授、仏教学）	
鈴木貞美（日文研教授、日本近現代における文芸・思想・文化）	
ジョン・グリーン（日文研教授、近世・近代の神社史・皇室史）	
劉建輝（日文研准教授、日中比較文学）	
[海外共同研究員]	
フレデリック・ジラルー（フランス極東学院教授、仏教学）	
張翔（復旦大学歴史系教授・日本研究センター研究員、日本史）	
陳健成（香港理工大学中国化学系研究助理、中国近世思想史）	

●研究発表	
2011年 6月 4日	伊東貴之 共同研究の趣旨説明
2011年 7月 23日	伊東貴之「朱熹の思想と朱子学における理気（論）の世界観・再探」 恩田裕正「『朱子語類』全巻訳注刊行に向けて」
2011年 9月 24日	青木隆「清朝中国ムスリム・劉智の小世界と大世界」 ロー・ダニエル「自然・人間・欲望の政治経済学：『地政心理（Geopolitical Psychology）』の概念化の試み」
2011年 9月 25日	松下道信「全真教における機根意識と身体について」

●研究域	
第5研究域	文化情報（外国における日本研究Ⅱ）

●共同研究期間	
2011（平成23）年4月～2012（平成24）年3月	
●研究の概要	
本研究は、南北アメリカ大陸に渡った日本移民とその子孫の歴史と文化に関して、多分野にわたる研究者の討論の場を提供することを目的とする。特に英語圏とスペイン語・ポルトガル語圏の間で分断されていたテーマを共有し、別の文化的・歴史的文脈で考え直すきっかけを与えることを長期的な目的としている。	
新大陸（ハワイも含む）への日本移民は明治とともに開始され、近代史の一側面として重要な役割を果たしてきた。彼らは日本と受入国の経済状況に左右されつつ、外交的な課題、政治的な包摂や排除の対象としての歴史を歩んできた。日本史や文化研究の一部であると同時に、受入国の歴史や文化のなかで少数民族としての位置を確かめる必要があることは、移民研究の端緒から指摘されている。しかし北米の日本移民禁止法（1924年）が南米諸国への移民の増加を招いた例からわかるように、あるいは北米から南米、南米の国から国への再移住者の存在が示すように、国別の移民研究には限界がある。どの国へ渡った集団にも帰国者が存在するが、その行方、日本の歴史や文化への影響はつかみかたい。これらについて、他国の例、他の民族移動の例を引きつつ、日本移民の特徴を捉えていく必要がある。昨今は、ヒト・モノ・情報の流動性が高く、既存の地理的な参照点について柔軟に考察することはいうまでもない。移民研究の幅が広がると同時に、その輪郭があいまいになっていく。それは、学問の進む道であろう。	
移民研究のさまざまな対象のなかで、本研究班は「歴史」と「文化」に集中する。歴史に関しては、19世紀後半から現代までを含む。文化は、幅広く、習慣、生活様式、思想、文物の生産、社会組織、イベント、メディア、言語、行動、芸能、芸術などを含む。主に、移民集団を通した日本文化の海外での適応や変容も含む。つまり、文化の生産者、媒介者、受容者としての移民集団の歴史的な流れ、受入国の歴史と文化、また日本の近代史と文化のなかで、総合的に理解することを模索する。移民（移動民）の研究は政策提言や社会運動と結びついて活性化されてきた経緯があるが、本研究ではそれよりも生活、表現、感情を視野に入れた方向を打ち出したい。	
●研究代表者	
細川周平（日文研教授、日系ブラジル史）	
●幹事	
瀧井一博（日文研准教授、近代政治史）	
●班員	
赤木妙子（目白大学社会学部地域社会学科准教授、日系移民史）	
アンジェロ・イン（武蔵大学社会学部教授、移民研究）	
糸井輝子（白百合女子大学文学部英語英文学科教授、北米移民研究）	
栗山新也（日本学術振興会特別研究員（PD）、民族音楽学）	
小嶋茂（早稲田大学移民エスニック文化研究所客員研究員、日系移民研究）	
佐々木剛二（日本学術振興会特別研究員（PD）、文化人類学）	
滝田祥子（横浜市立大学国際総合科学部准教授、社会学）	
日比嘉高（名古屋大学大学院文学研究科准教授、日本文学）	
松岡秀明（淑徳大学国際コミュニケーション学部教授、宗教人類学）	
物部ひろみ（同志社大学言語文化教育研究センター准教授、移民研究）	
森本豊富（早稲田大学人間科学学術院教授、移民研究）	
守屋友江（阪南大学国際コミュニケーション学部教授、移民研究）	
柳田利夫（慶応義塾大学文学部教授、ヒスパニック文化）	
渡会環（愛知県立大学外国語学部専任講師、移民文化）	
根川幸男（日文研来訪研究員／ブラジリア大学准教授、移民史）	
●研究発表	
2011年 5月 14日	研究班の趣旨説明と班員紹介 今後の開催予定と方針についての討議

●研究域	
第5研究域	文化情報（外国における日本研究Ⅱ）

133 仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論

●研究域	
第3研究域	文化比較（生活）
●共同研究期間	
2011（平成23）年6月～2012（平成24）年5月	
●研究の概要	
本研究は、日本とフランスとの、空間を構成する「仕掛け」や「道具立て」に関する観念について、比較分析をすることを目的とする。これら2カ国の空間文化を対立させるのは、今日でははや不毛である。不可欠で、かつ可能なのは、こうした空間性の「核」を見定めることであり、それらを自己言及的な説明から開放し、共有可能なものへと操作してゆくことである。	
この作業の導きの糸となるのは、注がれる視線の複数性を考慮にいれ、そこから明らかになる本質的な差異に注目することである。参加する研究者は、空間におけるひとつの要素（観念なり、コンセプトなり、紋章となる仕掛けなど）を、いかに自らの言語で解釈するかを各自表明する。こうした厳密な作業に立脚しつつ、またそれぞれの文化に固有な抽象化の特性にも気配りしながら、分析される基本概念にみられる違いのみならず、それらを研究する科学的なアプローチにおける方法論そのものの分岐を議論の対象としていく。ここでは、日仏に二極化して準備された発言は、とりわけ歓迎される。	
住まうこと、さらに空間性について、日仏との認識論的・概念的な差異に注目するには、歴史的な厚みを見込んで研究し、同時に将来にむけていかに実現してゆくかを見極めることとなる。個々の研究発表では、対象となる空間概念の初出状況を歴史的に辿り直し、その語源を確認するとともに、それが後世いかに展開したか、いかなる空間や建築において最も顕著な事例を提起しているのか、地理・歴史を含めて視覚的に確かめ、その現状と将来を探ることとなる。	
交差する視線とは、単純な比較万能でもなければ、晦渋な混濁や文化の翻訳不可能性への退却でもない。このため、日仏で必ずしも等価性のない用語をめぐって、両言語並用の研究が要請される。ふたつの言語は意思疎通の媒体であるのみならず、その内部から新たな概念を生み出すための道具となる。真実は単一でも白濁したものでもない。日仏のおのおの研究者の辿ってきた知的背景に反省を加え、両者の思考方式の違いそのものを受け入れ、それに注目することが肝要となる。（公募研究）	
●研究代表者	
フィリップ・ボナン（日文研外国人研究員／フランス国立科学研究センター教授、建築学・人類学）	
●幹事	
稲賀繁美（日文研教授、比較文学）	
●班員	
阿部順子（相山女学園大学生生活科学部准教授、建築史）	
江口久美（東京大学大学院博士課程、建築学）	
加藤邦男（助建築研究協会理事長、建築・デザイン）	
千代章一郎（広島大学大学院工学研究院准教授、建築史）	
田路貴浩（京都大学大学院工学研究科准教授、建築論）	
土居義岳（九州大学大学院芸術工学研究院教授、西洋建築史）	
西田雅嗣（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科准教授、西洋建築史）	
松原康介（筑波大学システム情報工学研究科助教、都市保全計画都市計画史）	
松本裕（大阪産業大学工学部建築環境デザイン学科准教授、建築・工学デザイン）	
三宅理一（藤女子大学人間生活学部教授、建築史）	

渡邊一正（NPO市民文化財ネットワーク鳥取理事長、建築・設計士）	
Cécile ASANUMA-BRICE（フランス外務省国立科学研究センター在外共同研究所UMIFRE19博士課程、人類学）	
Sylvie BROSSÉAU（早稲田大学政治経済学術院准教授、建築家）	
Jennifer HASAE（フランス外務省国立科学研究センター在外共同研究所UMIFRE19研究員、人類学）	
Benoît JACQUET（フランス極東学院准教授、建築家）	
Jacques PEZEU-MASSABUAU（元奥羽大学文学部教授、極東地理学）	
Manuel TARDITS（ICSカレッジオブアーツ副校長、建築家）	
Christine VENDREDI-AUZANNEAU（慶應義塾大学教授、建築・美術史学）	
朴美貞（日文研機関研究員、芸術学）	
[海外共同研究員]	
Marc BOURDIER（パリ・ラヴィレット国立高等建築学校教授、建築）	
Nicolas FIEVE（フランス国立高等研究院教授、建築史）	
Corinne TIRY（リール国立高等建築学校文化省研究技官、建築学）	
●研究発表	
2011年 6月 25日	フィリップ・ボナン「日本の空間性語彙研究計画への導入」 西田雅嗣「建築という言葉の翻訳とその含意するところについて」 稲賀繁美「移ろいゆく形の生命：伊勢神宮における時間性をめぐって」
2011年 9月 10日	フィリップ・ボナン「空間語彙とはなにか？」 エマニュエル・マレス「日本的空間性における、庭園語彙のいくつかについて」 【語彙注釈についての3つの企画報告】 ウルスラ・ヴィーゼル「ひもろぎ」 セシル・ピリース「社宅・長家」 フィリップ・ボナン、西田雅嗣「母屋・庇」

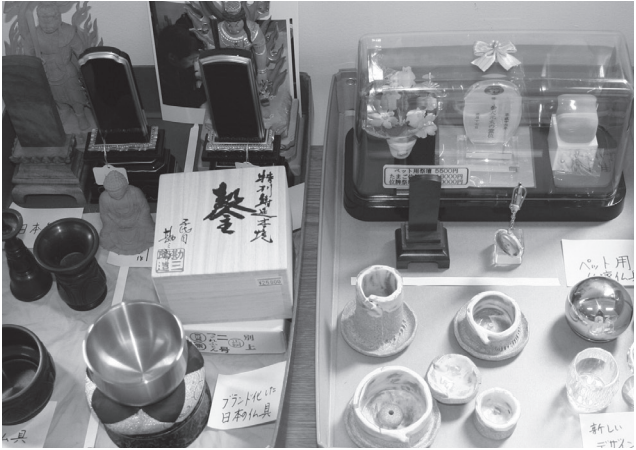
134 デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代

●研究域	
第2研究域	構造研究（社会）
●共同研究期間	
2011（平成23）年7月～2012（平成24）年6月	
●研究の概要	
めざましく発展するデジタル環境において、日本の古典、とりわけ中世の絵巻、お伽草子、近世の浮世絵などを代表とする画像資料を対象とする諸研究が迎える新しい時代をめぐり、中世・近世の学者をはじめ、デジタル技術の開発者、図書館など情報の構築・発信する組織、出版業界など異なる分野の人々が集まり、共同研究を行う。これを通じて、お互いの研究課題や方法を共有し、画像研究とデジタル環境の現状、理想とする発展のあり方を多面からアプローチし、学術研究の新時代に寄与することを目指したい。（公募研究）	
●研究代表者	
楊曉捷（日文研外国人研究員／カルダリー大学教授、日本中世文学）	
●幹事	
小松和彦（日文研教授、文化人類学）	
●班員	
赤間亮（立命館大学文学部日本文学専攻教授、日本文学）	
石川透（慶応義塾大学文学部国文学専攻教授、日本文学）	
海野圭介（国文学研究資料館研究部准教授、日本文学）	
大谷節子（神戸女子大学文学部日本語日文学科教授、日本文学）	

大場利康 (国立国会図書館関西館電子図書館課長、図書館学)
大向一輝 (国立情報学研究所コンテンツ科学研究系准教授、情報学)
小峯和明 (立教大学文学部文学科日本文学専修教授、日本文学)
田良島哲 (東京国立博物館調査研究課調査研究課長、中世史)
千本英史 (奈良女子大学日本アジア言語文化学科教授、日本文学)
藤原重雄 (東京大学史料編纂所古代史料部助教、日本文学)
荒木浩 (日文研教授、日本文学)
早川聞多 (日文研教授、美術史)
ギャリー・ジェイムズ・ヒッキー (日文研外国人研究員／クイーンズランド大学英語・メディア研究・美術史学科美術館研究主査、日本美術史)
森洋久 (日文研准教授、情報工学)
山田奨治 (日文研教授、情報学)
●研究発表
2011年 9月 3日 楊曉捷「デジタル環境と古典画像研究―その現状と展望―」 関連研究のハイライトや現在の課題―自己紹介に代えて―
2011年 9月 4日 石川透「奈良絵本・絵巻のデジタル化と研究」



共同研究の成果をまとめた出版物(第3期)



「京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来」共同研究会にて伝統工芸の技術を活かした仏具の研究(2005年)



「『文明交流圏』としての『海洋アジア』」共同研究会風景(2005年)

第2章

研究活動②

国際研究集会／海外活動

20世紀後半、驚異的な経済成長が引き金の一つとなって、日本の社会、文化に対する世界各国の関心はますます高まり、海外における日本研究者の数も急激に増加していた。国際日本文化研究センター（以下、日文研と略称）の研究と研究協力活動の当面の重要な目的は、こうした変化に対応しつつ、日本文化研究を国際的な視野の下で実施することであった。したがって、「世界の中の日本」という自己認識こそが、その出発点でなければならなかった。このため、研究自体に国際的な視点を注入するだけでなく、その方法や成果の公開、研究協力の対象者、研究者間の交流などの幅広い分野にわたって「国際性」が求められたのである。

そうした活動を強力に推し進める舞台として特に設定されたのが、日本に海外の日本文化研究者を招いて実施する「国際研究集会」と、海外に日文研研究者が出向いていて、現地をはじめとする外国人研究者と共同で行った「海外シンポジウム」等の海外活動であった。

1 国際研究集会

●「世界の中の日本」を統一テーマに

そもそも国際研究集会は、日文研の「共同研究」の成果発表を、外国人研究者も交えた国際的な舞台で実施する主旨で設定されたものであった。しかし、共同研究は数年単位で計画されており、最初の成果を獲得するには最低3カ年は必要であった。そこで、日文研創設初年度から3カ年の国際研究集会は、共同研究の成果発表の場ではなく、「世界の中の日本」という統一テーマの下に、そもそも国際的な日本研究とはどのようなものかを問いつつ日本研究の方法や問題点を検証する場であると、日文研創設以前の準備委員会段階ですでに決定されていた。「世界の中の日本」をシリーズタイトルとして開催された第1回から3回までは、文字通りの日本研究、日本文化研究に関する、世界中の日本研究者を一堂に会した国際研究集会（一般公開講演会と国際シンポジウム）となった。

第1回国際研究集会は1988（昭和63）年3月9日～12日の4日間行われた。初日は京都会館において公開講演会が開催された。構造主義の主唱者である世界的な碩学クロード・レヴィ＝ストロース氏が「世界の中の日本文化」と題して日本文化の普遍的側面を強調した講演を行ったほか、ドナルド・キーン日文研教授は「世界の中の日本文学」と題してラフカディオ・ハーンを論じ、さらに梅原猛所長は「世界の中の日本の宗教」と題して仏教伝来以前の日本の宗教風土について講演した。

翌日からの3日間は、都ホテルにおいて国際シンポジウムが実施された。テーマは「日本研究のパラダイム—日本学と日本研究—」とされ、国内外36人の研究者の発表とその他数十名の討論者が参加した（発表者10人、コメンテータ11人、総括報告者1人）。シンポジウムでは、世界各地で行われている日本研究の現状の報告と、それぞれの国の日本研究がかかえている方法論上の問題点を検討し、あわせていくつかの日本文化解釈を提示してもらい、それらが方法論で指摘された問題点とどのように関連するかを集中的に議論し、実りある国際研究集会となった。

以下、第2回、第3回の概要を略記しておこう。

●第2回 1989（平成元）年3月14日～17日〈世界の中の日本Ⅱ〉（於：都ホテル）

「対象と方法—各専門から見た日本研究の問題点—」

公開講演「世界の中の日本の役割」ポール・ケネディ

「日本の立場—内なるものの視座—」高坂正堯

国際シンポジウム発表者8人、コメンテータ8人、総括討論発表者2人

●第3回 1990（平成2）年3月5日～10日〈世界の中の日本Ⅲ〉（於：京都エミナース、都ホテル）

「文化研究という視点—日本研究の総合化について—」

公開講演「中国の中の日本像」陳舜臣

「日本の伝説—救い主としての来訪者」カーメン・ブラッカー

「言語の自然、自然の言語」中西進

国際シンポジウム発表者10人、コメンテータ10人、総括報告者1人

これらの国際研究集会の公開講演や国際シンポジウムでの討議内容を含む全容は、それぞれ報告集としてまとめられ、研究者に公開されている。

●「共同研究」成果発表の場としての国際研究集会

国際研究集会は、第4回を迎えた1990（平成2）年9月以降は、本来の目的であった「共同研究」の成果発表の場として実施されている。

第4回国際研究集会は、共同研究「日本文化の基本構造とその自然的背景」（代表者：埴原和郎）の成果をベースにしたもので、主として自然人類学および考古学に関連する諸分野の立場から、アジア・太平洋地域を視野に入れつつ、この地域における民族と文化の移動・交流、日本人と日本文化の形成過程、小進化、近隣諸集団との近縁関係などの諸問題について集中的に討議した（テーマ「アジア・太平洋諸民族の一員としての日本人」、実施期間：1990（平成2）年9月25日～29日）。この研究集会は、自然科学者の参加も多かったことなどから公用語には英語が採用された。

第5回国際研究集会は、共同研究「日本文学と『私』」（代表者：中西進）の成果を基に、現代人にとって、言葉を表現の手段にした芸術の世界、すなわち文学は、人間の想像力のあり方にいったいどのような価値観をもち、どのような役割を果たしているのか、また、果たしていくべきか、を主題に討議した（テーマ「現代における人間と文学」、実施期間：1991（平成3）年11月25日～29日）。

第6回国際研究集会は、共同研究「日本人の自然観」（代表者：伊東俊太郎）と文部省科学研究費補助金による重点領域研究「文明と環境」との合同で「環境危機の時代における自然と人類」というテーマを掲げて開催された。この研究集会では、環境危機と人類の存続に関する諸問題について、人類学、歴史学、生態学、地球科学、考古学、経済学、工学、哲学および関連するあらゆる学問分野に視野を拡げて討議され、自然と人類が共存し得る新たな文明のパラダイム創造への第一歩を探ろうとした（実施時期：1992（平成4）年9月28日～10月3日）。

また、当年度には特別企画として「技術移転国際シンポジウム」も開催された（実施期間：1992年11月3日～7日）。これは、ヴァスコ・ダ・ガマがヨーロッパとアジアを結ぶ東洋航路を開拓して500年になることを記念して関係各国の研究グループによる共同プロジェクトであったが、1992年度は日本の担当年度にあたっており、日本の研究機関として日文研が主宰することになったものである。技術の分野における移転と内発的発展の関係について、ヨーロッパにおける産業革命の開始期から、日本の殖産興業政策の確立期までの約100年間を対象に討議した。

第7回国際研究集会は、直接的な下地となる共同研究はなかったものの、日本文化研究には欠かせない「日本文化と宗教」という総合テーマの下に、「宗教と世俗化」という副題を設けて開催された。宗教は、どの文化圏においても民族や文化の活動に対して重要な役割を果たしてきた。その宗教が、「近代化」の過程で社会や国家の歴史的な発展や変化に応じて「世俗化」の現象をさまざまな形で示してきたことに焦点を当て、討議を通じて、これらの諸問題を神道、仏教、儒教、キリスト教などの具体的な事例を取り上げて明らかにし、理論的な見通しの提示をめざした（実施期間：1993（平成5）年10月12日～16日）。